
銀の弾丸なんてない ~ 紅月編

祿 左右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の弾丸なんてない 紅月編

【Nコード】

N21520

【作者名】

裱 左右

【あらすじ】

ぼくが雑用としてバイトしている事務所では、ぼくだけが普通の人間だった。巫月事務所は、人外、怪物を人間の都合の言いよう処理する『狩人』を生業としている。その中で、ぼくが出来ることなんてたかが知れていて……。

更新速度が最近、かなり低速です。確認に来てくださる方には、毎日土下座したいくらいの心境ですが、どうか気長にお待ちください。

日常の裏地（前書き）

出血など、残酷描写わりと多数出てきます。
戦闘シーンはそんなに今後出てこない予定。

日常の裏地

……それは幾織と重ねられた日常の裏地。
幾度となく続けられる夜と狩りの物語。
よくある日常の一欠片。

「いい加減、飽き飽きだ」

彼はそう毒気づきながらも、深夜の町を走る。

魔術によって強化された肉体を行使したその走りは、走ると言うよりも駆けるに近く、駆けるより飛ぶに近い。その速度は常人を遙かに超える。

高速で走れば走るほどに薄手のコート、というよりもマントに近いそれは、激しくなびき、まるで疾風が吹き続けているかのような様を見せていた。

だが、それでもなお彼の目の前には、疾駆する影。

そう、彼はその影を追う狩人だった。

しかして、彼が未だにその目標に追いつけないというこの事實は、その目標も同様に普通の人間を超えた『何か』であることを意味している。

その『何か』の速度は予め立てられた予測よりも僅かに速く、追い手である狩人にとって、少々面倒な事態だった。もっとも、事態は既に少々面倒な事態から、少々面倒な失態に変化しつつあったが、

狩人にとっての救いは、事前に張られた結界によって、周囲に自分達以外の人影が見えないということである。

結界の範囲内ならば一般人に被害が及ぶことも、事件に気付かれることもない。

だが、それももうすぐ……彼の計算と記憶が正しければ、30秒後にはその有効範囲を超える。

ちっ、と狩人は舌打ちした。

(これ以上手間をかけさせてくれるなよ、出来損ない。)

速度を上げても影を見失う可能性と、残り時間が迫ることに焦る。さらに言えばどこまでいっても人間でしかない肉体を持つ彼が、これ以上の時間を走ることは危険でしかなく、死の重圧がさらに彼の心に押し掛かり始めていた。

万一、この速度で無様にも転倒するなり、身体制御、魔術制御双方への集中を少しでも欠くようなことがあれば、衝撃によって問答無用で五体がバラバラになるだろう。

選択肢が頭の中にちらついた、それも己の危険性を高める選択肢と、さらに彼を影は引き離す。

それを確認する寸前に、魔剣をするり、と彼は引き抜いた。影の速度を増すことを予期したためか、それとも単なる焦りのためかは彼自身にもわからない。

引き抜かれたのは、日本刀の姿をした魔剣……ちしおゆりざき血汐閑咲。

僅かな月明かりと、断続的に浴びる街頭の光により、鋭利に輝く刀身は、鍛え上げられた巧みなる刀匠の技と魂、そして数百万数十万もの魔術の結晶。

それを持って、自らに身体に眠る、魔術を呼び起こす。

禍々しき、我が血統。呪われし凶血。狩られし魔血。

魔が封じられた鮮血により、魔を、異なる理を呼ぶ。

即ち、鮮血魔術。

「……なんて、格好付けてみたり」

と、ここまですべて俺の脳内思考。

よつするに、格好付け。

ここまでミスったら、格好を気にしても無駄なような気もするけどさ、そこは男の性というものだよな。

んー、どこでもいつでも格好付けたいんだよ、俺は。

緊張感なく、そんなどうでもいいことを考えながらも、俺の速度と肉体を制御する魔術には一点の乱れはない。もつとも乱れがあれば考える以前に俺は肉塊ミンチへと変わってただろう。

というか、そんなことを考える暇があるのなら決着をつけるべきだ、と思わないでもない。

ふ、とわざとらしく笑い（無論、俺はそれが格好いいと思っている）、手の甲を僅かに出血する程度に傷を付けた。

出血の量は問題ではなく、魔剣に血液が付着することによって、魔術的に繋がりを得たことが重要だ。

それによって、描く。

為したい魔術、その式を。そして、構築する。

源は魔血解放、果は鮮血沸騰。目的が明確ならば、その力によって働く存在も、呼び起こされる結果も、能動的、受動的、瞬間的に働いてくれる。

それは一瞬で幾重にも紡がれる式。願い。想い。呪い。

そして、解く。今我が力の全てを統べ、その全てを……。

「解放しやがれ！」

途端に全身に燃えるような熱さを感じ、赤い霧、蒸気が身体からほとぼしる。

目の前が一気に赤く染まる。同時に言いようのないほどに高まる高揚感。

その自らの身体の高ぶりに任せ、俺は飛翔んだ。

その衝動的な感情に全てを委ねた。

何かを察し振り返る影。

そいつの瞳に写ったのは、死神の鎌のように冷たく輝く刃だった。

*

時間帯は健全な青少年はあまり外を出歩かないであろう、深夜。

今宵も紅く染まる月夜は美しく、熱い身体に風は心地良い。

そう、月は紅く空に映える。

だが、それは自分だけに見える光景、魔術による狂的覚醒作用トランスによるもの。

魔術は自らを、強制的に極度の興奮状態へと 覚醒させることにより、常人ではありえないほどの集中力を得るによって始めて発動させるもの。俺には、その興奮作用が視覚に強く影響するタイプの人間だった。

つまり、月が紅く染まるのは、俺の中だけの出来事。

紅く、全ての視界が染まり、その刃を、身体を、獲物を、そのすべてが、勿論身も心すらも鮮やかに彩る。それは俺にとって、甘美に酔いしれることの出来る光景。

危ういほどに、いや、一時期は正気を失うほどにその世界に狂喜せずにはいられなかつ

たものだ。

今では、残念なことに。心の底から残念なことに、鍛え上げられている精神は自らを律し、その情熱を制御してしまえる。

もはや、その紅い世界へと心躍らせることは難しい。

確かにそれでも魔術を行使することには、一種の麻薬的快楽を覚えることには変わりないし、今でさえその紅い世界には思いを馳せなくなるものだ。

だがそれも、連日連夜の繰り返しとなっては感じ飽きてしまう快楽、見飽きてしまう光景にしか過ぎない。

同じ、刺激の繰り返しは飽いてしまう。

……乾いてしまう。

それを癒すには、さらに強い刺激でなくばならないのだ。

そんなくだらない思考を反芻していく中で、自らを興奮から冷ましていく。

思考によつて、感情を鎮静させるのは癖であり、習慣であり、必要な儀式だ。

時間をかけ、徐々に身体と頭が冷え、紅い月の色が白く輝くように見え始めた頃。

ようやく俺は一見して日本刀のようなソレを鞘に収め、自身の姿を省みる。

日本刀片手に暗緑色のコートを身に纏い、コートの下は学制服（返り血付き）と言う、怪しいことこの上ない深夜徘徊常習犯の高校生がそこにいた。

どう考えても、ろくな大人に成れそうもない。

「しっかりと健康的に生きていきたいもんだなあ……」

「やっぱ、職バイトを変えるしかないものかね？」

このままじゃ俺の人生の目標。「70まで生きよう。とりあえず」
が達成できないかもしれない。

この70と言う数字にまったく意味はないけどな。

と、ようやく俺は自分の思考の回路が、いつものような適当でく
だけたものになったのを自覚する。

これが、本来の人前での俺、いつもの俺、と呼ばれる姿だ。

どっちが素なのか、とはよく聞かれるが、そんなものも決まっ
ていない。

どうあっても自分は自分だ。性格と言うか、その場の雰囲気とか
ノリで人間は変わるものだろう。

……って、元に戻ると、いきなり疲労感が来るんだよな。

身体が鉛、とは行かなくても、ビールケースぐらいにはなった気
がする重量感。

きつすぎるだろ、明らかに。寿命が縮みそうだよ、このバイト。

……出来ればやめたいな。

「でもよ、ほら、払いはいいわけよ。他のバイトと比べればな。で
も、命がけだつて考えると。3、4万のために死ねるか？」

無理。そんなの無理。

命は一度賭けたら、払い戻しは利かないんだぞ？

ほぼオールリスク、極一部リターンだろ。割に合わないだろ。

……しかし、金は欲しい訳で。

切実な問題だ、生活は自分で支えないと生きていけない。

しかも、俺には金だけじゃなく、やらねばならないさらに切実な理由がある。

まったく、どうしたもんかね。

「なあ、アンタ。どう思う?」

俺はそう足元に転がっている首に話しかけた。
返事がないので、つま先で小突く。

「やつぱ、それでも他の職探した方がいいかな」

「キサマ、ふざけるなよ? 人間風情が」

ようやく首は返事をした。

自分で返事を強制しつつ、感心する。

すごいな、俺だったら返答なんかしようとする覚えねえよ。

……首と胴を切り離されたらな。

「俺はかなり本気なんだけど? 人間風情というけどさ、化け物と比べたらよっぽど生きていくことに努力が必要だと思わないか。だったら、こつ……ねぎらいの気持ちとか生まれてくるんじゃない?」

首は牙をむき出しにして笑う。

「ふん、阿呆もここまで来ると見事なものだ」

「……ほぼ初対面の相手にひでえこと言うな」

そういうのは言われなれてるけどな。
言われても、断固として認めないが。

「あ、そついや体の方はどこにあんの？ 探すのめんどいんだけど」

実は首と胴はそれぞれ慣性の法則に従い。その出していた速度によつて宙を舞い、どこか飛んでしまつていた。

首がここにあるのは、わざわざ自分で斬り飛ばした首を自分でキヤッチなんて、ちよつと一人でバッターとピッチャーを同時にやつたみたいないない技を披露したからであつて。

そつでない胴体はどこへ行つたのか見当もつかなかった。

「つが、よくしゃべれるよな、それで。肺も横隔膜もないのに」

生命の不思議発見。

いや、生きてるのは知らんけど。

そんな状況にも関わらず、首はなぜか俺をヤル気（殺る気？）マシマンにらみつける。

「……貴様がどうしようが、我らが人間風情に殺されるなどありえん」

未だに自分に敗北が訪れる、もしくは、とつくに訪れているとは思つていないらしい。

調子こいてんな、コイツ。

首の分際で。

「……我らに敗北はありえない。なぜなら我らは生きてないからだ」
「不死者。非生命体^{ノ・ライフ}。魔術仕掛けのガラクタ。つまりはそついうことなんだろつ？ 生きているの定義は知らないがな」

知らなくても、残念には思わないけど。

というか、白けているこの空気に気付け、首。

首は首しかないのにも関わらず、まだ自分の勝利を疑わない。
首の分際で。

首はにやり、と歯を見せて笑う。

「なら、わかってるのだろう。穢れた魔術師よ」
「なにを？」

いや、本気でなにを？
むしろ、お前がわかれ、むしろ気付け。

「ふん、阿呆にはわからんか？それはな……」
「いいから勿体ぶんなよ」
「……我らに逆らった人間は」

首が不敵に笑みを浮かべる。

「死ぬしかない、と言うことだ！」

振り向きざまに、烈火の炎を纏う魔剣を振りかざし。
背後から、ご苦労にも奇襲しようとして来た首なしの身体に、刃それ
をお見舞いした。

そう、こいつの身体は、背後から慎重に忍び寄り俺を殺そうとしていたのだった。
焼かれ、燃え、斬られ、無残にも燃えるゴミから燃えたゴミになる物体。

そのまま、身体を一回転させ、刀を鞘にしまう寸前に、刃の炎を消す。

……ちよっと火を消すタイミングを外して手が痛んだ。

でも、俺は痛くない風を装う。
だって、格好悪いじゃん？

涙目の状態で目線を下ろすと、開いた口がふさがらない様子の首。
さっきまでのモヤモヤが若干スッキリした。

「で、なにが？」

帰ってくるのは沈黙。

「俺が独り言を言ってるみたいじゃん。返事しろよ」

「キッ」

「き？」

「キサマ！ 人間の分際で！」

首がなんか叫びだした。

「……キーキーわめくな、うつとうしい。男だろ。いいだろ身体が
燃えたぐらい。俺だって、微妙に熱い思いしてんだからよ」

つか、本当に熱かった。いやマジで。

……水ぶくれ出来てんじゃね？

と、途端に静かになる首。

いきなり冷静に戻りだした。なにそれ、一瞬^{プチ}プチ切れ？プチ切れ？

「つか、一人百面相？ いや、首しかないんだから、出来ることが
表情^{それくらい}変えるしかないのはわかるけどさ。周りから見ると、マジでう
つざいよ？」

「……だが、全身を焼き尽くされ、灰になろうとも。いくら刃で細

切れにされようとも。首だけと成り果てようが、我らが死すこと決してない。身体の再生を待ち、必ずキサマを喰らい尽くしてくれるぞ！」

「いや、人のはなし聞けよ」

……というか、まあ、そうなのだ。コイツ、魔術だけで生きてる（？）ようなものなので、魔術が解けるまで死なない。解くのは、ちよいと面倒な手順が必要だし、この場じゃ出来ないので事実上ここでは殺せない。

あと考えられる方法は、コイツを作った術者に解かせるか、そいつを殺すぐらいのものだ。

決して直接的な物理的手段じゃ殺せない。

それが魔術仕掛け機械である不死者の一種、ノーライフ非生命体と言う存在。

「確かに俺には殺せないんだよな」

「ようやく理解したか、そうともキサマに勝ち目などない、なんだつ、何をするっ離せ！」

俺はその首のやや長めの髪の毛を右手で掴み、持ち上げる。

なんか髪の毛がやけに汚らしい気がするが、他に持つところもない。下手に持つと噛みつかれそうだしな。

で、携帯を左手で出してぽちぽちつと。

……なんか左手じゃ使いづらい。つか、火傷？ うちにくい。通話ボタンを押して……お、早いな。待ち構えてたか。

「あ、ハミ？ 今どの辺」

「ハミ？ 今どの辺……じゃないですよ、なんでさっさと仕留めないんですかあ」

ハミがちょっと上手いモノマネを披露しつつ答えた。

っていつか、今の「ハミ、今どの辺」は本気で俺に似てたと思う。

「たまにすごいな、お前」

「なにを褒めてるんですかあ！ いま、トオくんのバイクで追いつきますからあ……ん？なんかうるさくないですかあ」

「いや、バイクの音じゃね。と言うか、よく俺の声聞こえるな、エンジン音で聞こえないだろ？」

「いや、ハミの場合は意外と平気ですう。じゃなくて、なんか聞こえますよあ？」

「あ？」

ふと、見てみると、首がまたキーキーわめいていた。

「のんきに仲間に連絡か、小僧！何人来ても同じことだぞ。いい加減、この手を離せ！」

どうやら再生が始まっているようで、大分首が長くなって来ている。このままじゃ、名称を『首』から、『首から鎖骨』に変更する必要性が出てきそつだ。

……どおりでなんか重たいと思った。

「クククツ、もうすぐだ。もうすぐキサマの命運も尽きっ」

膝を曲げ、腕を振り上げ、一気に首をアスファルトに叩きつける。

ぐひえっ、と聞こえて静かになった。

「これで大丈夫」

「ぜんぜん大丈夫じゃないですよあ！あんまり汚しちゃ駄目ですからねえ！」

なんか、電話の向こう側から怒られた。

いや、そんな間延びした声で怒られても。

「でも、うるさいんだろ？仕方ないじゃん」

「もお、他人事だと思って……汚いじゃないですかあ」

「そう言われてもな」

だいたい元から汚いと思うぞ、この『首から鎖骨』は。

「……これ、頭洗ってなさそうだしな」

「つて、なに食欲失くすようなコトいつてるんですかあ！」

「いけね、言っちゃった」

ま、見たらわかることだしな。

それでも、ハミは「もお」と一見、いや一聞するとあんまり怖くない感じで怒る。

「そのまま大人しく持ってて下さいよお？地面にたたきつけるなんてしないで」

「わかってるって……」

つて、おい。

なんで俺がなにをしたのかわかるんだ？

……まさか俺が見えてるのか？

そう思い、振り向く。

バイクの音がどこからか聞こえてきた。

遠くにライトをつけたバイクが走ってくるのが見える。

だが、肉眼で確認できる距離じゃない。

俺のように魔術で強化してたら別だが。

「……なあ、お前、視力いくつ？」

「いいから、大人しく持つてて下さいねえ？」

ようやく俺は気付く、ああ見えてるんじゃないんだった。

まあ、ご愁傷様だな。

携帯から聞こえる嬉しそうな声。

「そうじゃないとお、腕ごと食べちゃうかも知れないですからあ

ハミは無邪気に宣告するだろう。

それは死刑宣告と言うよりも、ちょっとした礼儀だ。

その寸前で意識を取り戻した首が眩く。

「なんだアレは……アレは……」

バイクから伸びる漆黒のモノ。

獲物を求めて、迫り来る触手のように、漆黒は迫る。

……実際、あまり触手と変わらないだろう。

彼女にとってはこれは処刑ではなく、日常。

宣告の前に首に言うておく。

「……死ねたらよかったのに、な。自称不死」

つまり、彼女の宣告は。

「いただきます」

と、ただそれだけのことだった。

*

ぼくはバイクで、必死に赤霧咲斗先輩を追うことだけに集中しようとしていた。

それが出来ないのは、生きたまま（？）生首が咀嚼される音が、ぼくの携帯電話から聞こえてきているのだろぅことが、予想できるからだ。

とは言っても、ぼくは幸運にも、きちんとヘルメットを着用していたので、例えどんなにその音が大きくても、携帯が音量どんなに大音量でも、ぼくの耳に届くことはない。

だけど、その音が鳴っているのはわかる。

なぜなら、ぼくの背中にしがみついて同乗する人物、ハミがしっかりと抱きつきながらも、わざわざぼくの身体にぴったりと頬を当てるようにして、もごもごと口を動かすようにしてそのことを親切にも伝えてきたからだ。

実際に口の中に何か入っているわけではないので、本来なら口を動かす必要はないのだけど、親切なハミは、ぼくにわかるようにわざわざ声のいらぬ実況中継してくれている。

……一応言っておくけど、ぼくはそんなこと望んでない。

むしろ、嫌がっている。

もちろん、それはハミも知っている。

ああ……つまり、ようするにいやがらせだ。

延々と咀嚼がなされているのを、背中に字を書くよりもわかりやすく伝えてくる。

身体に伝わる動作だけで、状況を想像できてしまっぼくにすれば、その場になくてよかったと思わざるを得ない。

万一、現場にいたらどんな衝撃映像を見せられたか。
いや、その場にいたら、目を逸らして、耳を塞げばいいだけなので、むしろ現場にいた方が良かったような。

次第に、咀嚼する物体も細かくなって来たのだろう。だんだん動きが小さくなってきた。

実際に口に入っている訳でもないのにご苦労なことだ。

そして、彼女の咀嚼が完全に止まった頃、赤霧先輩の所に着いたバイクを止め、ヘルメットを両手で外す。

「先輩、おつかれさまで……」

何かを指差す先輩。

ぼくの真後ろ？

その方向へと顔を向ける。

そこには大きく口を開けている、アップされたハミの顔……とバイクの真後ろにそびえる黒い何か。

同世代の女の子、それも至近距離の顔にドキドキするよりも、その黒い物体の方へ自然と意識がいく。

なぜなら、ハミが口を開けているのと同じように、黒い物体が大きく全身を見開いていたからだ。

その見開いた黒い物体の中に垣間見えるのは、赤黒く、ところどころ白く、ぐちゃぐちゃでドロドロとした『もの』。気のせいかもしれないが、目玉が二つ、それと人間の舌らしきものがその中に見える。

もし、咀嚼された後の生首、なんてそんなものがあるとしたらこんな感じだろう。

いや、もう、ホントにそんな感じだろう。

そして、ハミがゆっくり口を閉じると、黒い物体もゆっくり全身を閉じ。

ハミがぼくの肩に顎を乗せると、黒い物体もぼくのバイクに僅かに身体を寄せ。

ハミがなにかを飲み込むような動作を見せると、黒い物体もなにかを飲み込むような動作を見せた。

にっこり笑ってハミは言った。

「ごちそうさま」

ぼくもにっこり笑う。

「ハミ？」

「なにい？」

「わざと目玉と、舌。形残したね」

「うん……がんばっちゃった」

てへ、と言う感じでハミは言った。

……うん。

全然、可愛くないよ。本気で。

それを見て、赤霧先輩は頷いた。

「まあ、あれだ。なにこともなくてよかった、よかった」

「どこがですか！」

「いやいや、一時は逃がすんじゃないかねえかとひやひやしたけどな。まあ、あともう少し、遠野がバイクの運転上手けりゃ、余裕で確保出来たんだが」

一応言っておく、遠野はぼくだ。

それと、ぼくのバイクの運転技術に関して言えば、2人乗りが精一杯とだけ言っておく。そこまで一般より劣ることはない……はずだ。

別に不当な発言を受けた仕返しではないが、一応、赤霧先輩に一言。

「そもそも発端は先輩が出し抜かれたせいですけどね、先輩の油断さえなければ仕留めるのもだいぶ近場だったと思いますよ」

「ああ？ そんなもん、俺が仕留めたからいいんだよ」

そうわるびれずに先輩は言い、帽子を被りなおす。

この学生服に暗緑色のコートをほおり、同じく暗緑色の帽子を被った人物、赤霧咲斗先輩（こんなんでも年上で先輩なのだ）は魔術師でありながら、日本刀を扱う凄腕の狩人だ。ただし、魔術師としては3流らしい。

しかも、この人、仕留めようとする獲物に口数が多くなるタイプの人間で、今回の非生命体ノライフを逃がしたのは「冥土の土産に教えてやるう」なんて余裕ぶつて口走ったからだったりする。

なぜかこの人は仕事で可能な限り全力でふざけるんだよな。

そのうちそれが原因で殺されるんじゃないか、と思わなくもないけど、その性格で修羅場を潜り抜け、今こうして生きていることに、むしろ実力を感じさせる結果になっていると云うばかばかしさ。

そう、実力はあるけど阿呆、いや、もといアホなのだ。

「お前、なんか失礼なこと考えてるだろ」

何気に鋭いな、この人。いや、よく考えたら先輩に関して言えば、だいたいいつも本人に言えないことを考えているので、そう言われ

ればだいたい当たる。

と、赤霧先輩との会話に、ハミがぼくに同意を示した。

……ただし、かなり言葉口調を崩して、だ。

「でもお、トオくんの言うとおりですよ。サクさんならあ、もつと早く仕留めてれたんじゃないですかあ？ ハミの食事が遅くなっちゃいましたよあ」

「別にいいだろ、そんなぐらい。最終的には食べたんだし」

ハミは赤霧先輩をサクさんと呼ぶ。そして、ぼく以外の人前では、なぜかかなりアホっぽい口調で話すのだった。

「なに言ってるんですかあ、就寝の2時間前に食事したら太っちゃうんですよ」

「いいじゃん、太っても。今日日、多少ポチャっとしてるほうが可愛い」

「駄目ですう、別にサクさんの好みになりたくありませんからあ」
「それ、何気にひどっ。……じゃあ、いつその後2時間起きてればどうよ？」

「睡眠不足はあ、お肌の敵ですよあ？」

ちなみにハミの方はぼくの同級生だ。こうしてみると、緊張感のないまのび口調と会話の内容と合わさって、さっきまでグロイ食事風景を見せてくれた人物と同一人物とは思えない。

実はその言葉遣いは彼女本来のものではないんだけど、このしゃべり方はその場の空気を常に柔らかいもの、を通り越して間の抜けたものへと作り変える。

それでも彼女はさつき見たとおり、化け物だろうが、不死者だろうが、食べる能力者だ。難しく言うと捕食、それもきっちり消化して栄養にする。あ、栄養にするのは食べるんだから当たり前か？

じやなきや、食べると言わないのか？

まあ、そこはおいといて、そう食べるのだ。恐ろしいことに。

相手が悪魔だろうが、悪霊だろうが、食人鬼だろうが、吸血鬼だろうが、一口だ。信心深い人間には未だに怖れられる彼らも、八三に遭遇すれば（それも不幸にも空腹時だとすれば）、彼らは彼女の口の中でグロテスクな液体と化すことになるだろう。さらに言えば、その成果が、わざわざ、ぼくの目に見せられることになりかねない。

まあ、八三が空腹じゃないって言うのも、実際の所なかなかない話だから、遭遇もなにも八三の方からこうしてそういった獲物に寄っていくわけで、一応相方のぼくは必然的にそれにお付き合いすることになる。

赤霧先輩と八三、こうして二人揃えば剣呑物騒極まりない人達な訳だ。

ただ……。

「もう、だいたいもうここどこお？ 歩いて帰る距離じゃないじゃないですかあ。もお、どこまで走れば先輩つてば気が済むんですう？ サクさんもしかしてダイエット中なのお？」

「ああ、ダイエットはスポーティなのが一番だろ？つかさ、結構大変なんだぞ。人間の身体で高速で走るのは。どれくらい難しいかお前わかるか？」

「さあ？ どれくらいですかあ？」

「綱渡りしている状態で、1輪車に乗るぐらいは難しい」

「へえ、すごいですねえ。日光猿軍団ですねえ」

「だろう？ 中国雑技団だろう？その状態で敵を斬るってなったらどんだけ難しいんだ？ ……あー、難しすぎて、もう例えねえぐらいだな」

「あ、そういうことってありますよねえ」

なんだろう、こうして見るとその恐ろしさが全く伝わってこない。なんか、アホだなこの会話とか思ってしまう。
むしろ、逆にそれが恐ろしい。

そんな会話を聞きつつも、ハミから戻ってきた携帯で、所長に業務完了のメールをうつ。

所長と言うのは、ぼく達の雇い主で……あんまり登場人物が一人に出てくると、憶えるのが大変なので紹介は後回しにしておく。

と、先輩とハミの方へと目を向けると、話が見当違いの方向に飛びすぎて、ハミは怒りを忘れたらしく、嬉々として、食事の感想に入った。なぜか、ぼくの方を見て。

「まあ、贅沢は言わないけどお、味薄い気がしない？サクさんが身体焼いちゃうから、食べられなかったし、物足りないよお」

「いや、あれだけ美味しそうに食べてたじゃない」

「というか、ぼくに振られても困る。今忙しいし。味なんか知らないし。」

「確かにい、味はそのものよかつたんだけどお」

「ならいいじゃん」

「でもお、薄いしい」

「なら、調味料足せよ」

「感触とかがあ……」

「そこは詳しくは聞きたくないから」

むく、と納得いかなそうなハミ。

本当にぼくはそんなグロ談義いらないし、興味ない。

ようやく、うち終わった報告メールを所長に出した。というか、

「こういうのは本来、先輩の仕事じゃないだろうか？

ぼく達の会話を聞いてか、赤霧先輩が言った。

「ま、にしてもハミのあれは何度見てもすごいな。ホントに」

あれは、もちろん食事^{あれ}のことだ。

ハミはぼくに向かって腕を組み、そこまでの胸を張った。

「生き物の食事風景と言うのはあ、元々壮絶な（すごい）んですよ」

「なんで、そんな自慢気なの！？」

……別に褒めてないぞ。

「つか、生きたまま（？）食われたんだよな、今の」

「え〜、まあ〜、本人達曰く、決して死なないんそうなんでえ、食べられてる間もお、意識はあつたんじゃないですかあ？ とりあえず、完全消化されるまでは意識はあるんじゃないですかねえ」

「……マジでひどい死に方だな、俺はそんな死に方だけはしたくない」

ぼくは赤霧先輩の言葉に頷く。

「……確かにそうですね」

こればかりは同意せざるを得ない。

すると、ハミはなにやら、とボソツと呟いた。

「違いますよお、死んだじゃなくて生き続けるんですよお」

……ハミの血肉として。
そっかー、生き続けるんだ。なるほどなあ。
じゃあ、言い換えよう。
そんな生き方したくない。

そこで、携帯の着メロが鳴り、所長から返信に気付いた。
元からで入っていたオルゴール調のメロディが鳴り響く。
曲名は……なんだっけ？
……そう、確か、カノン、だ。

「うわ、地味だね。なにか着歌にすれば？」

ハミに間延びしない声で、つまり素で突っ込まれた。しかも余計なお世話だ。

返信の内容は短文でそっけない。ぼくはそれを読み上げる。

「了解、結界解除。帰宅可」

「あ、なに？ 帰っていいんだ」

先輩がコートを羽織り直しつつ、言った。

「あゝ、じゃあゝ、すぐに帰って寝たいからあ、……まっすぐハミの家に送ってくれる？」

「最初からそのつもりだよ」

時間は11時半、さすがに女の子を放り出しておける時間じゃない。
い。

いつもなら、赤霧先輩と一緒に置いて帰ろうと思っけど（思うだけだ、本当に帰るなんて命知らずなことはいしない）

「なあ、遠野」

先輩が真剣な顔をしてぼくに言った。

ああ、きつとまたアホなこと言い出すんだなあ。とぼくは思った。

「なんか失礼なこと思ってるよな？ お前？」

「そんなことはいいいからなんですか、先輩」

しづしづ向き直る先輩。

余程、アホな大事な用らしい。

先輩は言った。

「バイク乗せて」

「駄目です」

思ったよりたいしたことじゃなくて、拍子抜けした。これくらい予想の範囲内だ。いや、これくらいなら逆に範囲外か？

「そお、駄目なんですう、ここはハミの指定席ですう」

「……別に指定じゃないよ」

というか、ハミは黙ってて欲しい。会話がややこしくなる。

赤霧先輩は舌打ちした。

「仕方ねえな。じゃ、バイク貸して」

「なおさら嫌ですよ。それだと、ぼくどうやって帰るんですか」

「歩けばいいんじゃない？」

「アンタが歩け！」

ついつい取り乱してしまった。

この人は本気で当たり前のようにこういうことを言ってくるからやだ。」

「……と言うか、走って帰ればいいじゃないですか。走ってきたんだし」

「馬鹿か！　しくじったら死ぬんだぞ、金ももらえねえのに出来るか！」

「……じゃあ、魔術使わないで普通に走ればどうですか？」

「お前、ここから徒歩ってどんだけかかると思ってたんだよ。うっかり帰るまでに日の出が見えるわ！」

どう考えてもそこまで時間かかんないよ、……たぶん。

「じゃあ、もうわかったよ！なら……バイクちょうだい」

「悪化してますよ、それ」

ぼくは極めて冷静に突っ込んだ。

「なら、最初は歩いて、途中からタクシー乗ればいいじゃないですか。結界も消えて車も通り始めるだろうし。それに元はと言えば先輩のせいですから、きっちり責任とって帰って下さい」

赤霧先輩は不服そうな目でコツチを見る。どうあっても、バイクに乗って帰りたいらしい。

ぼくはため息をついた。

「じゃあ、先輩。聞きますけど、バイクの免許あるんですか？」

「は？　お前、なに言ってるの？知らないの？」

「え？」

ぼくは考え込む。

そんな堂々と言われても、先輩がバイクの免許を持っている、と話した記憶はない。

「ああ、知らねえんだ」

「……免許、持ってるんですか」

「は？ 違げえよ。免許、持ってなくてもバイクは走れんだよ？」

ああ、なるほど。

ぼくはヘルメットを被り始めた。

「いや、ちよつと待てつて。俺の話聞いてつて」

「歩いて帰つてください」

「な、あれだろ。お前、俺の腕前知らねえんだろ？」

「……腕前ですか」

「お前そんなに運転上手くないじゃん、二人乗りなんだから危ないぞ？運動神経いい俺の方が安全だつて」

「余計なお世話です」

ぼくが断固折れようとしなないので感じたのか、今度はハミを目標に説得する赤霧先輩。

「なあ、ハミ。俺の運転の方がいいだろ？ 遠野じゃ不安じゃね？」

「ん〜、でもお、サクさん。運転荒そうだよ？ 確かにトオくんも、たまにけっこうわりと頻繁に危なっかしいところあるけど」

ハミ、文句言うなら下りて欲しい。と言つかいつそ遠まわしに言わないで、はつきりと下手だと言え。

「わかつてねえな。俺の運転が荒い？ 今まで一度も事故を起こし

たことがないのが自慢なんだぜ」

「へえ、じゃあ、基本、安全運転なんですねえ」
「当たり前だ」

いはる赤霧先輩。

それに感心しているハミを無視して、ぼくは先輩に聞いた。

「……ちなみに、バイクに乗り始めてどれくらいですか？」

「は？ お前ばっかじゃね？ 免許ない奴は運転しちやいけねえだろ？」

「ここでのたれ死ね！」

ぼくはハミを乗せてバイクを走らせた。

日常の裏地（後書き）

意見・感想・誤字・質問などがあればお願いします。

一応言いますが、あくまで主人公は遠野くんですよ？

ちなみに銀の弾丸なんてない、つてのは一応自分で考えたんですが、検索してみるとコンピュータ関連の用語で存在するようですね。意味合いとしては、最高最善の解決手段なんてありえない、つてことらしひです。

いつも始まりは日常から(前書き)

戦闘シーンはあまりありません、基本的に会話シーンばかりです。なぜかっていうと、主人公は戦わないので。

いつも始まりは日常から

朝のいつもの風景。

駅に向かい、目を刺す朝の光に苛立ちを覚えながら歩く。

そこにあるのは日常。

その日常の中で、ゆっくりと腐るのを待つように。それでいて、足早に、生き急ぐようにして過ぎていく人々。

その中の一部となって、時間とともに進む。

ダイアルを見れば、乗るはずの電車はとうに過ぎ。遅刻だな、とそう確認した。

いつもどおりの朝だった。

そう、その日はいつものように始まった。

設置されているベンチに腰掛け、なにを見てもなくただ前方へと視線が向く。

その視線は線路を挟んだ向かい側のホームを通るが、特になにに意識が向くわけでもない。

ただ、前を見ているだけ。

そのまま眺めていると。

気を抜いたわけなのに、ため息が出た。

疲れているということだろうか。

時間を待つだけで、疲れるのか。

人の中を過ごすだけで、疲れるのか。

別にどちらでもいい話だ。

あまりになにもないと、自然に視線はなにかに注目しようとする。なにもなくとも、それが日常の景色でしかなくとも、何か注視できるものを無意識のうちに探そうとする。

目に留まったのは、偶然向かいのホームにいた男。

年は自分と同じくらいだろう、どこかの学校、おそらくは高校の、制服を着ている。

特に、制服というものに思い入れはなかったので、そのまま目線を外した。

……この時間なら、あそこにいるヤツももしかしたら遅刻なのかもしれない。

それも、どうでもいい話だ。

『まもなく電車が入ってきます、足下の黄色い線より……』

そう女性のアナウンスが聞こえた。

自分の乗る方面の電車ではないので、興味はなかった。

……なかった。

なかったはずだったのだが、向かい側の男がまたなんとなく気になつてしまった。

別になにがと言うわけでもない。

なんとなくだった。

どこからどう見ても、日常の風景の一部。

それが気になった。

いざ、見てみれば、何が気になるというのでもない。

どこにでもいるような学生だ。

そこに妙な部分があるとすれば、男の顔に浮かんでいるのは笑顔

以外のなものでもないということぐらいだろう。

朝からにこにここと、と言う形容詞のつくような表情をしているなんて珍しい、というだけだ。
それだけだ。

ホームに電車が入ってくる。

男はこつちを見て。

確かにこつちを見て。

何か口を動かした。

……聞き取れない。

瞬間。

……。

形容しがたい音。ないかが潰れるのとも違う、殴られるのとも違う、現実の光景事態を形容するしかないような音。

そのまま、電車が目の前を流れる。

ブレーキの音が響く。

それに悲鳴が追従する。

それはちよつとしたオーケストラの前奏のようだった。これからなにか、派手で壮大な曲が演奏されるかのような、そんな予感をさせるような。

そんなことを感じながら、ふと、頬を拳でこすると、真っ赤な何かが付着している。

それを見て、俺の口からなにかがこみあげる。

口に手を当てるも、それはもはや自分自身に押さえきれぬものではなく。

そして……。

……。
……あくびが出た。
……ため息混じりの、あくびだった。

*

ぼく達の世界はひどくごちゃごちゃしているらしく、肌や人種の問題よりも隔絶した生き物同士の関係っていうのがあるらしい。

ぼくはどちらかと言えば現実主義者な人間で、神様も悪魔も天使も鬼も妖怪も幽霊も宇宙人も……その辺の存在は一切信じていなかった。いや、今でもそんなに信じていない。

強いて言えば、UFOは本来の意味として、『未確認の飛行物体』ってことなんだから、宇宙人の乗り物じゃない意味でなら、そりゃありえるだろうな、と思うぐらいだ。

それも日常的にたくさん『確認』できるだろう。未確認の飛行物体なんて、ぼくらにとってはたくさんある。ただ確認してみたら実は人工衛星だった、とか言うだけで。

でも、考えてほしい。そんなものを信じるとか、信じないとか言うのはおかしくないだろうか？

例えば、もし誰かから「科学の存在を信じる？」とか「猫の存在を信じる？」などと質問されたら、違和感を覚えるはず。

実際にあるものに、信じるも信じないもない。

仮にないものなら……やっぱり信じるも信じないもない。

現実問題として実際にあるものはあるし、いる。

科学や猫、人間だってこの世に存在する。信じるとか信じないとかの問題じゃないのだ。

……まあ、人間や猫は存在を認められても、信じるには値しない

存在と言われればそうかもしれないけど。

だから、ぼくがこんなことをしているのは、正直、自分でも信じられないことだ。

例にならうなら、ぼくは「現実を信じるか？」って感じた。

もちろん、その答えはNOである。

まあ、それでも間違いなく、こんなバイトをぼくはしている。それは現実だ。

さて、肝心な話そんなぼくのバイトがどんなバイトなのか、それは言葉にするのは難しい。

それでも、ない知恵を絞ってわかりやすく言えば、そう、その隔絶した生き物同士の関係の……いざこざや問題を解決・処理するってこと。

わかりにくければ、そう、あれと同じだ。

スズメバチの駆除。人里に下りてきた猿を山に返す。人を噛んだ犬を保健所に送る。熊を射殺する。人の社会に、人間に害を為したものを、人間の都合のいいように処理する。

実際には、彼らの方に保護団体みたいなものとかがあつて、その権利がどうか、命がどうか……時には権力と言う力関係が関わって複雑な様相を見せているけど、それはぼくには関係ない。

ただバイトそのものは今言ったように剣呑なものであるけど、ぼく個人の業務内容は、基本的にはただの雑用にしか過ぎない。

バイトの事務所でゴミ捨てたり、掃除したりと地味なものだ。他には、死体の処理とかを業者に連絡したり、ハミを現場にバイクで送ったり、現場の報告係とか……その他諸々、地味なものだ。その他諸々の方が頻度が多すぎて、説明に困るほど雑多ではあるけど、とにかく地味なのだ。

時間帯は基本的には夕方から。ただし、これは学校へ行っているからという都合上のもので、休日なんかは朝から働くこともある。時間だけなら、そこまで長くはないし（昨日はいつもよりずっと長くてほしい8時間の労働だったけど）別に毎日バイトをしているわけじゃない。まあ、その密度は半端じゃなけど。

外で行う仕事は、基本的に今回のような狩りよりも、その獲物を調査したり、探し出して追い立てる作業が多い。といえば聞こえがいいけど、ぼくがするのはバイクの運転と聞き込みのようなものだ。あと、そうだな、地図とにらめっこしたりする。

戦闘以外の支援、情報から雑処理その他すべて、ぼくが出来る限りすることになっている。

忙しい時には忙しいが、暇な時はとことん暇なのがぼくのバイトだ。給料は狩り1回につき、1万5千円〜2万円ぐらい。事務所の雑用だと、時間給で最低賃金になる。

……もっともこれは、ぼくの場合だけで、実際に戦う先輩とハミはもっと金額が上だろう。

個人的な観点で悪いけども、同い年の同級生、しかも女の子よりも低金額（この点には実は文句はない、年齢とか性別とかは気にならない）その低い収入も月によって幅が広く、全然安定したバイト先とは言えない。

それでもあえて金額を平均するなら、コンビニのアルバイトをみっちりやった時の金額を倍にしたくらいになるだろうか。

ただそれも、きちんと仕事が入ればだ。実際、いつ仕事があるかわからないので、とりあえず毎日事務所には行かなくてはならなかったりする。連絡だけして行かないでもいいけど、行動が遅いと急な仕事に出れない時があるから、お金と仕事が欲しいなら、顔だけは出しておかないといけない。

……あとなんだろう？

あ、その上、たまに怪我をする。もしかしたら、ちよこつと死んじゃうこともあるかもしれないという可能性もないわけではない。

……冷静に考えたら厄介な職場だ。

それでも、特にバイトに不満があるわけでもないのだ。

ここまで、言っておいてまたなんだけど、ね？

どこに不満があるかはそのうちおいおいわかるだろうから、割愛しておく。

バイトにおけるそれ以外の問題とえば、うちの学校は表向きバイトは禁止なので、ちよつと骨折とかなんとかなったりしたら、まづかつたりする。

そりゃ、いくらでもいい訳はきくのかもしれないんだけど、そんな頻繁に怪我なんてことになったら、言い訳することにつらさを感じる。

実際のところバイトぐらい、先生方も普通は見てみぬフリしてくれるけど。

……さすがにこんなヤクザな商売、学生がやってたら問題だと思っ。

常識を疑われる内容でもあるしね。

よつするにその程度の理由と、常識的判断というので、ぼくは人にこのバイトを言えないず、それがぼくにとってバイトの問題と言える。

まあ、言う相手なんてほとんどいないんだけども。

その数少ない相手、これは言う必要のない相手でもあるのだが、よくバイトで組むことになるハミはぼくにとって、友人と呼ぶのも近しい相手だった。

休み時間や授業中にしゃべるくらいに。

授業中に一緒にいるとしゃべる、と言うのは、なかなかの親しさを判断する一つの基準にある。とぼくはそう考えている。これは日常の中で周囲の様子が目に入る中で、得た結論の一つだ。

本来、私語が禁じられている時間なのにも関わらず、しゃべりたくなる相手、というのは希少なものだと思う。

ここで一つ、私語が禁じられていると本人が感じているか、知っているかは重要な点だ、もしもそういうことを知らない、感じていないのなら、死んだ方がいい。社会的に。

それか、誰か教えてあげるべきだろう。友達が。それが出来ないのなら、友達ではない。

ただ、ここまで言うておいてなんだが、あえてこのぼくの人間関係における友達の判断基準が周囲を観察して得た結論ではないことは言うておきたい。

なにかを観察するほどぼくはそこまで暇でも悪趣味でもない、ぼくはそれが悪いことだとは言わないが、悪食と同じであまりいい印象を与えないものだと判断している。

そう、悪食と同じだ。

悪食……と話に出ればハミのことを紹介しなければならない。

ハミといえば、悪食と暴食。

悪食と暴食、と言えばハミ。

……それぐらいの存在なのだ。

まあ、そこまで言うておきながらハミは女の子だ。見た目には悪食も暴食も彼女には相応しくないように思うだろう。

むしろ美麗で可憐、が相応しいくらいだ。ごめん、それはいい過ぎだ。

よくいるくらいには美少女だ、に留めておこう。テレビでよく見る程度の美少女だと。

そんなハミはぼくの同僚だ。それも、初めてぼくが会った非日常現実に存在する非現実だ。彼女を夢で見たらそれは悪夢だと断定できるほどの。

まあ、単純にハミが非常識なまでに常識に欠けた人間性の持ち主だから、って言うのもあるけど。

ハミを紹介するとしたら、ぼくは一言こついうだろう。

ハミはそれはもう、悪食だ。と。

それがなんであろうが食べてしまっほども。

いや、むしろ悪食と評する以上は、なんでも食べること自体がどうとと言うよりは、美味しそうだと判断する基準が人並み外れていることか、逸脱していることが悪食と判断される所以なのだろう。

まあ、あれでも本人曰く、なんでも美味しい訳ではなく、きちんと好みがあるそうなのだが。

ああ、確かにハミは好き嫌いは多い。

……と言うか、あんだけ食べておいて好き嫌いを言えば作った人にも、食べられる食材にも怒られると思うんだけど、それは別にいい。

好き嫌いは食べるものを選別してる、と見れば食べたものもある意味で評価してるってことだろうし、物事に評価を下すことは無関心よりも好ましく、生産的だ。また、そもそも今回は彼女の話ではないからそこにこだわらるべきでもない。

今回の話は……誰、と言うべきか、なに、と言うべきか。

とにかく別のモノの話、なのだ。

なんだろう、あえて言えば。

なんの話だったのか、誰の話だったのか。
むしろ、本当はいつたいなにをしたいのか、と言っような。
……そう言ったモノ、いやコトのお話だ。

日常とを背中合わせに別つモノ

1 .

「こんな生き方でいいのかなあ」

ぼくはそう呟いた。

よく考えたら、いや、考えなくても病的なセリフ出た。

でも、自分でもそんなセリフだとは自覚していたので、それを気を遣った上での小声だったのだが、レタスハムサンドを食べていたハミは耳ざとく反応してしまった。

「もお、トオくんは気にしいだなあ。もっと、大らかに生きた方がいいように？」

「……なんだよ、その気にしって」

ちなみに、ぼくは学校で今は昼休み、ではなく、普通に午前の授業中である。

つまり、ぼく達は不真面目なことに授業中におしゃべりなんかしているのだった。

ハミがなんでサンドイッチ食ってるかって？

ぼくが知るか。たぶん、お腹空いてるからじゃない？

先生は怒らないのか？ もちろん、見て見ぬフリだよ？

うちは校則はゆるくないけど、先生と生徒自体がゆるかったのである。ゆるいと言ったくせに、他にこんなふざけたことをしている

奴は誰一人としていないことには突っ込んではいけない。

……あー、単純にハミがしてることに、関わりたがる人物が存在しない。と、まあ、そういう説があることも否定できないんだけど。

ぼくは少し周りに気を遣って、小声で話す。

「実際さ、不健康な生活には違いはないと思うんだよ。バイトもヤクザ的だしさ」

将来性はないし、明日さえ訪れるかわからないし。まあ、それで一生生きていくつもりはないけど。

「んー、そう言われてもなあ、ハミ、食事ついでにお金貰ってるだけだし」

「……確かに食事の予定がない仕事はしないね。ハミは」

「ごはん食べなかつたら死んじゃうでしょ？ 危険があってもしないんじゃないかなあ」

「そう考えたら生きるために働いてることになるね」

「フツ〜にごはん食べてるだけじゃ、ハミ、やってけないしさあ」

「ああ、お前の場合は普通じゃないモノも食べないと、だしな。そっか、ハミはある意味、きちんと目的とか必要性があって仕事してるんだな」

「そうだねえ、ハミ、ごはんのためにがんばってるんだよ〜、きつとお」

そう言って、ハミは新しくカツサンドの袋を開け始めた。

ハミの頭の中には食べ物のことにしかないのだろうか？

その姿には、せめて隠して食べようかな、とか、今授業中なんだよなあ、とか言った気持ちは少なくともなさそうだ。もしかしたら、授業というものがなにかわかっていないのかもしれない。

にしても、……よく食べるな。

「あのさ」

「なに」

「さつきから思ってたんだけど」

「だから、なにい？」

「そんな、今、食べててさ。お腹膨れない？」

「え〜？」

ハミの視線が左右に動く。

「あ、ダイエットのこと？ いいんだよ別にい、ハミ、結構動いてるしい。それに、人間の行動の中で最もエネルギーを消費するのは、食事と消化なんだよお」

「うん、そんなことは聞いてないよね？」

「じゃあ、なにい？」

「例えば、今日、夜、食事あるかもしれないだろ？」

「そっだねえ」

「食べられなくなったりするかもしれないでしょ？ 大丈夫なの？」

「……あのねえ、女の子には別腹と言う、もう一つの消化器官があるんだよお？ これくらい平気だってばあ」

真面目な顔で語られた。

ぼくはそんな器官が女性にあるとは、不勉強のため知らなかったの。

「へえ、そっか」

と、頷くだけにしておいた。

……ああ、なんてアホな会話なんだろう？

正直、いつものことなのでどうでもいい、と言えはばどうでもいいのかもしれない。だけど、なかなかどうして、「まつ、いいか」と割り切れないのが、ぼくという人間なのだ。

これは、ぼくの根が真面目ということなのだろうか？

「あゝ、このカツ、筋があるなあ……もう買わないことにしよう。よし、次は……フルーツサンドだあ」

……いや、あまりにも、ハミが自由気ままにやりすぎてるから、ぼくの中にある、なけなしの常識というものが拒絶反応をおこしているんだろう。

決して、ぼくが真面目なわけではない、と思う。

「今日もトオくんはあ、バイト行くのお？」

「行くけど？」

「ふゝん、まあ、それはあちょうどいいかもねえ」

「なにがさ？」

「いやあ、べつにい。買い出しとかもお、あるしい……さあ？」

「まあ、そろそろ事務所の冷蔵庫も空だろうしな」

事務所の食料管理はぼくに一任されている。寝泊まりする人も少なくなないので、結構こまめに見ておかないといけない

……たまに、冷蔵庫の中に誰が持ち込んだのかわからない、正体不明のなにかとか、あきらかに食べれる期間を超過した物体Xとかがあるからね。

「うんうん、やっぱりねえ、こまめに買っておいとくれないとさあ困るよあ」

「別にぼくはお前のために買ってわけじゃないけどな」

「ツンデレえ？」

「違う」

確かに食料の減る大半の要因はお前が食うからで、これから新しく買う分もお前がほとんど空にするのだろう。

だが、そもそも事務所の食料はお前のものではない。

……そろそろ真面目にノートをとろうかと黒板が目に入るたびに思うが、無駄という結論に至る。

たぶん、無意味だろう。

ぼくの場合。

「ハミはどうするんだ？バイト行くのか」

「行かないよお、だってごはんないもん」

「ああ、冷蔵庫は空だけだな」

「それだけじゃなくて、お食事自体がないからあ」

このハミのお食事は特別な食事、つまりは化け物を食う予定を指している。

「確かに今のところは連絡ないけど、そうとは限らないんじゃないか」

「そうだよお、そうに決まってるもん」

「へえ」

このハミの勘はだいたい当たる。

おそらく狩猟動物の勘と言うべきか、その異様に高い的中率の理由はそんなところだろう。

餌がないところには、赴く理由はない、ということだ。

野生の勘でも、女の勘でもないということには留意していただきたい。

「もしもトオくんが来てって言うならあ、ハミ、行ってもいいんだけどお」

「別にいいよ、来なくても」

「まあ、トオくんに付き合つとあ、帰り遅くなつちやうもんねえ」

「人聞きの悪いこと言うな」

「夜遅くなるもんねえ」

「おい」

「そのままあ、『山中に置いていくぞ』なんて脅されたらあ……従うしかないもんねえ」

「……………」

無視しよう、無視。

そう言つて脅したことがないわけではないが、それはハミがふざけたからであつて、他意ははない。人から後ろ指さされることはしてないのだ。

と言うか遅くなるのは、お前がはしゃぎまわるからだろつが。

などとアホな会話で、午前中の授業は終わった。
授業は終わったが、受けてはいない。
こんなんで大丈夫なんだろうか、ぼくの人生は。

*

お昼のチャイムが鳴ると、その途端に。

「んや、行つてくるよお」

ハミはそうなんとも発音しがたい挨拶をして、はりきつて購入へと走つていった。

……まだ食べるんかい、とはなるべく突っ込まないでおこつ。ま

た、知性の欠片のない会話になるから。

ぼくは自分でお弁当を持参しているので、それを机の上に広げる。……と言っても、中身はチャーハンだけなんだけど。俗に黄金チヤーハンっていうらしい、でも、ようするに具はタマゴだけってことだったり。

出来るなら肉ぐらい入れたいなあ、最近野菜は高いし。

んー、ご飯があるだけいいのかなあ、同じスーパーでも違うレジを何度も回り続ければ、卵だけはなんとかなるし。なんとかして卵冷凍できないかな。いや、いつそ米を食うのをやめるか？ 意外と高くつくしな。

などと、自分の昼食について未来のない検討していると。

「……遠野くん」

と、突然、誰かが話しかけてきた。

それに反応して、お弁当（と呼べるかは疑問）から顔をあげると女の子が立っていた……その黒髪は肩できっちり切り揃えてられており、また顔立ちは整っていて一般に可愛いと言われる容貌だろう、ただその目はややきつく鋭い。

おそらくは、「一応、可愛いんだけどねえ」と言われてあまり男子受けしないタイプだろう。と、そんな余計なことを考えた。そう考えている間も、その目はやはり鋭く、ぼくを見つめ続ける。だが、その目は鋭くとも冷たくはなかった。

それでもそう言う目で見られると、特に何もしていないはずなのに、なにか悪いことでもしたかと不安になる。

ぼくは小心者だった。

とにかく思い出そうとする。この娘は同じ中学でもあった……確

か、そう。

「大神さん……だよね？ なにかな？」

クラスメートの大神アスカ……だった。

彼女とはあまり話した記憶がない。ふとしたときに会話ぐらいはするけど、それだけだ。

ぼくはあまり話したことがない人に話しかけられると、なんといつか、どう対応をしたらいいのかわからなくて困ってしまう。

ぼくが彼女に対して知っているのは、家がお金持ちだとか、ぼくよりもよっぽど真面目だとか、そういうことくらいだ。

大神さんは、ふんっ、という感じで鼻を鳴らす。

「なになに、じゃないと思うけど？ 授業中すぐくっするさいくて、勉強に集中できなくて困ってるんだけど」

「……え、うん。……ごめん」

言われたのは思いがけず、正当なクレームだった。

「だいたいなにをしに学校に来てるの？ 毎日毎日おしゃべりして授業はおしゃべりの時間じゃないんだけど」

「……うん、そうだね」

「別に真面目に授業を受けろ、って言ってるわけじゃない。それはあなたの勝手だしね。寝ててもなにしてもいいから、授業に出てる以上は、邪魔にならないようにだけしてくれる？」

「ああ、……うん、これから気をつけるようにするよ」

ぼくはそう返す。

……確かに迷惑だよな。

大神さんは少々ばつが悪そうな態度になった。

「……まあ、わかってくれれば別にいいんだけど」

どうしたんだろう？

……ぼくがあまりにもすんなり話を聞き入れたから、拍子抜けした。といった所だろうか？

んー、普通はやっぱり反発するのかなあ。

でも、大神さんが正しい、と思ったし。

なぜか、居心地が悪そうに大神さんはまだ、ぼくの前に居る。未だにそこから立ち去ろうとはしない。

ぼくは大神さんに声をかけた。

「大神さん」

「ん？」

「その、わざわざ、ありがとね？」

一瞬、大神さんは驚いたような顔をして、それから、ますます顔をしかめた。

うーん、言わない方がよかつたろうか？

でも、こういう時、なんて言ったらいいのかわからないんだよな。

「あの」

大神さんが、言いつらそうに一言。

彼女はわりと、はっきり言うイメージなんだが。

「どうかした？」

「もう一つだけ、いい？」

「どうやら、まだなにかあるらしい。」

「どちらかと言えば、これが本題なのだろうか？」

「なになにか」

「ちょっと場所変えたいんだけど」

「……ここで言えばいいんじゃない？」

「いいから」

強引に廊下の奥に連れて行かれる。

強引に、と言っても手を引つ張られた訳ではない。彼女が勝手に歩いて行くので、仕方なく、と言うか空気に飲まれてついて行ってしまったのだ。

強引な雰囲気というか、なんというか。

ぼくが押しに弱いだけ、とも言おう。

「いきなりこんな話をして、悪いとは思っただけど」

「うん、……なになにか」

「正直、自分でもこれはおせっかいだと思っただけから、聞きたくなければ聞かなくてもいいから。でも、話だけさせて」

「……うん」

そう、ぼくは返事をした。

「ただど大神さんにはどうやら、まだなにかためらいがあるらしい。そこから、一息、二息おいて、さらに数秒時間をかけて、そこからようやく話し始めた。」

「あの、あなたが誰と付き合いおうが、それは勝手だと思っただけ、あまり軋呑とは関わらない方がいいと思っただけ」

「きしの？」

「……軋呑ハミのこと」

「ああ、ハミね」

名字で呼ばないものだから、すっかりフルネームを忘れてたよ。

「軋呑には色々とよくない噂があるのは知ってる？」

「……んー」

ハミが他の人に距離をとられてるのは知ってるけど、そういう理由があるのか？

てつきり、大喰らいとか、しゃべり方とか、そういう奇行が目立つてのことかと思っていたけど。……彼女を遠巻きに見ながら、小声で囁きあう生徒はしょっちゅういたし。

うん、ぼくも、出来ることならそうしたかったね。

それはともかくとして、まあ、実際のところ、別に噂を聞いたこととはない。

「知らないな」

「……そう。遠野くん、そういうの嫌いそうだしね」

「いや、そんな……嫌いってことはないと思うよ」

「そう？ 意外ね」

別に他人の噂ぐらいしてもいいと、ぼくは思っている。そんなぼくがその噂を知らない ことに、もし理由があるとすれば。

「あの、ほら。だいたいぼくはさ……」

「なに？」

「あまり人と会話らしい会話しないから」

「……………」

「考えてみれば、噂をする友達もないしね」

「……………」

ハミが居なかったら、ぼくは石像みたいなものだ。

学校にいる間丸一日、食事以外に口を開くことはないかもしれない。
い。

って言うか、中学の頃、実際に基本そうだったし。

ん……あれ、なぜ大神さんが黙っちゃったぞ？ ていうか、固
まってるない？

……おい。

動かない。

「大神さん……その、どうかした？」

「え？」

ようやく大神さんが動き出す。

「……あの、……なんて言うか、……軋呑が援助交際してるとか、
あまりよくない人たちと関わってるとか、……そういう噂があるに
はある……のね？」

なんか、今、話の内容とは別の意味で気を遣われた気がする。

ぼくなんかまずいこと言ったか？

「夜に一人で歩いてるところを見かけられることも少なくないらし
いし、柄の悪い男の人のバイクと一緒に乗ってたとかっていう話も
あるし」

ああ、それ、たぶん、バイト。って言うか、後半部分のバイクの
くだりは、半分ぼくだな。それが柄の悪い人になってるのは……赤
霧先輩のせいだな、たぶん。

「それさ、あくまで噂だよな?」

「うん。証拠がある訳じゃないし、適当に誰かが言っただけのデマカセもあると思う。でも、……さっきの会話とか」

「さっきの会話?」

「あの、さっきそれっぽいこといつてたでしょう? ……気付いてると思うけど、クラス中それで噂してたし」

「それっぽいこと……」

そんなこと、まるで気付かなかった。というか、どんな会話したっけ? さっき。

ん、さっきの会話の内容。

(い) (そう言われてもなあ、ハミ、食事ついでにお金貰ってるだけだし)

あ?

(い) (ごはん食べなかつたら死んじゃうでしょ? 危険があってもするもんじゃないかなあ)

おお。

確かに、援助交際の内容とかに聞こえなくもない。

さらに言えば、授業中ぼくは声を小さくしてるから周りには聞こえづらいだろうけど、ハミはいつも普段の声でしゃべってるから、ハミの声だけはきちんとみんなに聞こえてるだろう。

だとしたら、こんなふうに会話が毎日聞こえているわけ。

そりゃ、噂するよなあ……。

なにも知らない人から見たら、ハミはそういうことしかねない人

に見えるだろうし。

ぼく自身は、援助交際程度じゃハミには普通すぎて、逆にありえないなんて思ってしまうけど。

っていうか、あんなのと交際したら、比喻じゃなくて逆にバリバリと食べられるとってしまう。それも頭から生きたまま。

「あ、あれは……」

「実際がどうかは重要じゃない。問題は彼女がそう思われていて、遠野くん、あなたが親しいってこと」

「ぼくが？」

「あなたは、他のクラスメイトと交流が少ないでしょう？」

「まあ、確かにね」

親しいどころか、ほぼ皆無だ。

「学校って、そういう人が目立つ人と一緒にいると、なおさら噂の対象になるものだから。会話の内容も内容だし、あなたがそういうことと直接関わりあるとも思われている……みたい」

そう、そこまで言って、彼女は言葉を濁した。
……なるほど。

確かに、必然的によくは思われないよなあ。

とりあえず、話はわかったけど……。

「大神さん……でもさ？」

「でも？」

「うん、大神さんの話はわかった。……でも、どうしてそれをぼくに？」

「……」

「その、ね。別にぼくがどう思われても、大神さんはなんともない

……よね

ぼくが大神さんだったら、普通にほうっておく……と思う。自分には関係ないし、大神さんがこうしてぼくと話す行動自体を、悪く思う人も少なくないかもしれない。

そういう可能性がわからない人には、ぼくには思えないけど。

「それは……」

「それは？」

一瞬、目を泳がせて、大神さんは言った。

「危ない、と思ったから」

危ない？

どういうことだろう。

「実は……前に失踪事件があつたのは知ってる？」

「……ああ」

それは知っているどころの話じゃない。

この街で起きた大量失踪事件。

その人数は計30人を超え……失踪者に特に共通点はないと言われている。

ただ、失踪者の衣類が現場に残されていた、という一点を除いて。

まあ、失踪と言うよりは、消失の方がまだ近いか。

なぜか、まともにニュースにこそほとんどならなかったが、人間の関係って言うものはどこかで必ず繋がっているものだ。30人以上の人間が消えれば、知り合いの誰かが面識しているぐらいは普通

にある。いくらまともにも日常的に話し相手の、いや、まともな話し相手もないほくでも、知らないはずのない事件だった。……しかし。

「でも、それがなんの関係があるの？」

「その時の事件の一つに、10人くらい人の服とかが、まとめて廃ビルに残されたことがあったでしょう？」

「……ああ、あったね」

「その時のビルでね、見たの」

「……なにを？」

「軋呑を」

もちろん報道される前に、ね。と大神さんは続けた。

ああ……それは、衝撃的だったろう。

つまり、大神さんよれば、偶然、その廃ビルの前を通った時に、ビルから外を見下ろすハミを目撃した。その時は不審に思ったものの、別にわざわざビルに入ってまで注意する気もなく、そのまま通り過ぎた。しかし、ニュースを知った後から気付いたのだ。あの自分の目撃したビルで事件が起こったのだと。

そう、あの廃ビル集団喪失の件だけは、ある雑誌に取り上げられたのだ。ただし、眉唾と言う意味でまともじゃないタイプの雑誌な訳だけだ。

ただそれでも、……驚くにも恐れるにも値する。

「それはビックリしたんだろうね」

「だからって彼女が事件に関係あると決まったわけじゃない。でも、その頃彼女は」

「ああ、確かに……事件のあった時期、ハミは登校してこなかったね」

少なくとも、それは間違いのない事実だ。

それはハミを警戒してもおかしくない。

考えてみれば、大神さんの性格なら、授業中うるさいならハミにその場で直接注意してもおかしくないくらいだ。

いや、後から注意するにしても、小声で聞こえないように話しているほうがよしも、普通におしゃべりして食事までしてかしているハミのほうがよっぽど一言言ってやりたい相手だろう。

でも、それよりも大神さんは、……ぼくが、そのことと関係しているのかどうか知れたかった、のだろうか。だからこそ、ハミの居ない時にぼくに声をかけた。

それなら、なんとなく辻褄が合うような気がする……かな。

「……まあ、なるほどね、だね」

「だから、なにがあったかは知らないけど、遠野くんが軋呑と関わるようになったのは最近でしょう？ それなら、手遅れになる前に……」

「もしかしたら、たぶんもう手遅れかもね」

「え？」

大神さんはぼくの顔を凝視した。

ぼくはとりあえず笑って、言う。

「なんか心配してくれたみたいで、……えと、その、どうもありがとう。……でも、どうでもいいんだ。そういうのは「どうでもいい？」

「そう。ハミはさ、もうぼくが知ってることで、すべてなんだよ。

えーと、なんて言ったらいいかな。難しいな、説明するのは……ま

あ、そういうことを別にしてもね。これからどんなことが発覚しても、もうそんなの関係ないんだよ」

「……………」
「とにかく、そういうことなんだ」

いろいろと言いつらいことだらけだけど、これは、そういうことなんだと、思う。

ぼくが知らなかったとしても、知っていたとしても、もう関係ない。

ハミは……とにかく迷惑な奴だ。それがぼくにとってすべて、なんだ。

そう、どこまで言っても、迷惑な奴なんだ。

「……………」
「そう」

大神さんはため息をついた。

「なら、わたしに言うことはないから。悪かったわね、余計なこと言ってる」

「いや、心配して言ってくれたんでしょ？」

大神さんは首を左右に振ってから歩いていった。

最後に、そうなのかな、と小さく呟いたのが聞こえた。

変わらず、なにかに腹を立てているような、なにかに緊張しているかのようなその目の印象だけを残し、大神さんは去っていく。

ぼくはそれを見送って、教室に戻りチャーハンを食べ始める。

そういえば、大神さんは教室でごはん、食べないんだな。

……女子って、みんなクラスの中に自分のグループを作って食事するものだと思うってたけど。

まあ、いいか。他のクラスで食べるのかもしれないし。

ぼくには関係ないからね。

「トオくん」

どこか嬉しそうにハミが教室に入ってきた。

「だいぶ時間がかかったもんだね」

「まあねえ、……ちょっと混んでたからかなあ」

そう言つて、正面の机を動かして、ぼくの机とくつつける。

「だいぶ買ったね」

「うん。もしかしたらあ、放課後にも食べるかもしれないしい」

机の上にハミが並べていくのは、コロネ、チョコドーナツ、シュガードーナツ、クリームサンド、プリンパン……。

「甘い物だらけだね」

見てて、だいぶ気持ち悪くなった。

「それはそうだよあ、頭使ったらお腹すくしい」

いや、きみ、授業中、おしゃべりしてただけだから。ノートすらとってなかったから。

「ところでえ、トオくん」

「パンならいらないよ」

「そうじゃなくてえ、ハミ、だいぶ時間かかったと思っただけだよ」

「まあ、そうだね」

10分どころじゃないかもしれない。

お昼休みは1時間あるわけだけど、おしゃべりでもなんでもしたら、すぐに終わってしまう程度の長さだ。

「なんなら早く食べ始めた方がいいと思うよ？お昼休みの時間もつたいないし」

「うん、食べるよお。トオくんもお、早く食べた方がいいんじゃない？だってえ、全然、チャーハン減ってないよお？」

それはもちろん、大神さんと話していたからだ。

「ああ、そうだね、ちよつと急いで食べようかな」

「そうだねえ、ちよつと早く食べた方がいいかもお。いつもなら、食べ終わってる量なのに」

「……少しばおつとしてたのがよくなかったかな。ちよつと眠くてさ」

「ああ、確かに、授業中眠そうだったねえ。……でも、食べ遅れたのはその理由なの？」

……なるほど、さつきからそれが気になっているわけか。

「見てたね？」

にへら、とハミは表情を崩す。

「……うん。まあねえ」

「さつさとそう言ってくれたら話が早かったのに」

「それはごつちのセリフでもあるよお？」

「そう言われてもちよつと言いづらい話題だったからね」

「どんなあ？」

「言いづらいから、言わない」

「言いづらいことってなに？」

「ハミの話でもあるよ、でも内容は言わない。……大神さんのことでもあるしね」

そうなる とぼくだけの問題じゃないから、とぼくはハミに言った。それを聞いて、ハミは目を開いたまま動きが数秒止まった。

「はつきり、言うね？」

「まあ、ね」

むう、とハミがうなる。

「トオくんはそういうところはいいと思うんだけどお。もう少し、こつハミに気を遣うと言うかあ、そういうのはあ？」

「……気を遣う、ねえ」

気を遣った結果これなんだけど。

隠したり、嘘を吐くのは誠実じゃない。公正でもない。

……狡賢いことは出来るならばは極力したくない。

「ぼくは隠しごとは嫌いだけど、嘘も嫌いなんだ。ごめんね？」

「うーん、でもさあ、嘘ついて追求されて、もつとお、隠してひねって、こいつ、さつきからなんだ？ とか、なんでそんなことを知ってる？とか疑ったり戸惑ったりしてくれてもいいと思うんだあ」

なんだ、それ。

なにが言いたいのかわからないが、刑事ドラマの見過ぎか？

「……いいよ、めんどくさいし。そうだったら、なにかいいことあ

るの？」

「イラついて、追い込まれていって、疑心暗鬼に取り付かれたあげく、日常的に凶器を持って路上を歩いている。……そんなトオくん見ていく楽しみが生まれる？」

「いらねえよ！ そんな薄暗いサスペンス！」

最終的にホラーな結末を迎える自分が容易に想像できるよ。このメンツなら。

疑心暗鬼になって正常な判断が出来なくなり、自暴自棄で金属バットかなにかを持って暴れまわった拳句、赤霧先輩に斬り殺されるか、ハミに喰い殺される自分がよ！

……もしくは病院の一室で「助けてくれえ！」と叫んで謎の死を遂げる自分の最期が容易に想像できます。

「んー、トオくんなら、いい感じで周囲と孤立してるからちょうどいいんだけどなあ」

なににちょうどいいのかは聞かない。断固として聞かない。

「トオくんの鳴く頃に？」

「なんだ、その縁起の悪そうなフレーズは!？」

ぼくをどうしたいんだ、お前は？

それはそれとして、置いといて、とハミは言葉を続ける。いや、置くなよ。捨てるよ、無くせよ

「……でもおさあ。なにを大神さんと話してたのお？」

「内容はもう知ってるだろ？ 無駄なこと聞くなよ」

どうせ、聞き耳立ててたんだろうし。

耳、とは限らないのがハミだけど、さ。

「最初から最後までじゃないもん」

「……最後に聞けば十分だよ」

ふうん、とイチゴオレを飲み始めるハミ。

「そんなに気になるのか？」

「気になるよお　？そりゃさあ」

「気にするなよ。今さらなにがあったって、変わらないから」

「それは……ん〜……それとお、これとはあ、べつだから？」

そうですか。

そう言われても、ぼくはしゃべる気は最初からないので、なんと
言われても他人との会話の内容について聞かれて答える気はない。

口が堅いつもりはないけど、軽いつもりもない。他の人と話した
内容は、基本的に雑談であっても、個人的なことに関しては話さな
いつもりだ。

今回の内容は、その点では当てはまるように思う。

「いいじゃん、もう聞かれてるんだしい」

「……それとこれとは、別だから」

「ちよつとお、パクくないですよ」

むっと膨れるハミをみて、なんとなく言い直す。

こう、間延びした感じで。

「……それとお、これとはあ、べつだからあ」

「ハミ、そんな言い方してないし！」

いや、してるよね。

ふーん、だ。と、ハミはそっぽを向いた。

「べつにいいもん。じゃあ、ハミの方もちゃんと言ってあげないからあ」

「……え？ なにかあったっけ？」

「あれえ、聞いてなかったのお？」

ハミは薄く形ばかりの笑みを浮かべる。

「ちょっと早く食べた方がいいかも、ってハミ、言ったよね？」

その時、窓に一瞬だけ影がさし。鈍い音がして……。

「え？」

しばらくして悲鳴が上がった。

窓から覗くと、血だまりの中に女の子が一人。足と腕がありえない方向に曲げて倒れていた。

なんとなくその女の子が。

大神アスカに見えた。

いつも始まりは日常から（後書き）

こんな感じでゆったりと話は進んでいきます、どうか長くお付き合い
ください。

って、読んでくれる方いるんだろうか？

いつも行くのはバイト先

2 .

ぼくは事務所へと急ぐ。

バイト先である事務所は、わりと町から外れている場所にある。ぼくの暮らしている町自体地方なので、その場所にあるのは住宅街と個人商店くらいだ。その中でも周囲の建物に紛れに紛れ込み、一見なんなのかその外見からは判断がつかないような地味な2階建て建物が事務所だ。

巫月個別調査事務所。

ハンター 狩人などまるで関係ないようなその名称の上に、看板などの自己主張は全くないその事務所は、何も知らない客が訪ねてくることはまずない。

ここは一階はまるまる車庫兼物置に使われており、事務所自体へは外に付いている階段から二階へ登らねば行くことができない。その階段と言うのが、今にも崩れ落ちそうなもので、これがより客を遠ざける原因になっていると思う。

ぼくは錆びた階段を、ギシギシ鳴らしながら駆け上がった。

不意にその階段は揺れて、ぼくは足を止める。胸がドクンドクンとその鼓動を伝えてくる。

……ぼくは初心者なのだった。

そうして、なんとかぼくは扉の前まで来た。

……ふと、扉を目の前にし、なんとなく落ち着いてから、静かに

開けた方がよさそうだと判断。

ゆっくりとノブに手をかける。

先月、鍵をドアごと変えたばかりの扉はすんなりと開いた。

「あつ、おはようございます、所長」

おはようと言っても、時間は昼過ぎだ。

巫月所長はなにやら帳簿のようなものをつけていたが、ぼくの挨拶に顔を上げた。

所長、と言っても、その見た目はかなり若い。20代、だろうか。ぼくよりも、すこしだけ、年上。少なくとも、ぼくにはそう見える。

「ああ、遠野か。おはよう、今日はいつもよりはやいね」

巫月所長は持っていた帳簿を閉じる。

「……ん？ ハミはどうした？」

「……ああ、ハミは今日は食事に取りつけなさそうだから、やめておくそうです」

「相変わらず、いい勘してる奴だ」

「じゃあ、今日は狩りはないんですか？」

「ああ、ない」

見てみると、赤霧先輩がソファーにコートをかぶり寝ているようだった。

眠っているかどうかは、こちらに顔が向いていないので知りようがない。

「一応、仕事はあるのだが」

「なんです?」

なんとなく、その仕事がお金にならない気がした。もしくは、かなり面倒な仕事なんだろう。

赤霧先輩はお金が入るならなんでもするが、基本がめんどくさがりなので、それなりに労働に対し、収入が見込めないなら仕事はない。

この人が今寝てるってことは、夜に狩りがあるか、もしくはそういうことだ。

赤霧先輩は仕事は嫌いだけど、狩りは楽しみでもあるから、狩りには必ず参加する。終わるたびに「こんな仕事はやめたい」と言っ
てはいるけどね。

「……いや、そういうわけじゃなくてね。ただ、今は動けないと言
うだけで」

「動けない……ですか?」

「状況の把握に時間がかかる。そのためにキミに動いてもらっても
いいんだけどね」

どうもぼく程度の頭じゃよくわからない事情があるらしい。

「なにか問題でもあるんですか」

「すこし。問題という言い方には状況と視点によるだろうけど」

そう言っつて、所長は新しく別の帳簿を取り出し、めくり始めた。

「とりあえず、コーヒーでも淹れてもらえる?」

「わかりました」

流し台は部屋についているので、そこにあるコーヒーメーカーを

使って、いつものように淹れ始める。

お茶やコーヒーを入れるのは、ここではぼくの仕事で、いつもみんな（みんなと言うのはその時、たまたま事務所にいた人）の分のコーヒーを準備する。それは人によっては紅茶を用意することもあるし、緑茶、コーラの時もある。

その時々で、ぼくは用意するものを人に合わせて別々に準備するのが、ここでの雑用の一つだ。

ちなみにハミはコーヒーと炭酸が飲めないということになってるので、オレンジジュースを用意したりする。ただし、果汁100%のジュース以外のものでないとキレられるので注意しておかないといけない。

「あ、所長、豆切れてますね」

「なら仕方ない、紅茶にしてくれ。インスタントなんて飲めたものじゃないから」

「……後で買い出し行ってきますよ」

「そうしてくれると助かる」

そうそう、買出しもぼくの仕事だった。

所長は自分で日常品の買い出しをしない。ネットオークションや通販なんかで買い物をすることもあるが、ネットで注文したものを直接、業者にここ運ばせることはまずないし、許可もしない。

ので、誰かが直接買出しに行かないとものがなくなる。そうなるとたまたま誰かが、空腹のあまりに暴れだすので日頃から気をつけないといけない。

もちろん、ハミのことだ。ハミのことだけじゃないのが残念だけだ。

「所长、そういえば昨日の非生命体^{ノーライフ}。あれ以降、情報は掴めました？」

「狩っても狩っても出てくるそうで、昨日はぼくが駆り出されたけど、いつもは毎夜赤霧先輩だけで行っているらしい。最近よくそのことで先輩がぼやくのでうるさい。」

「ちなみに、殺せない非生命体をどう始末しているかと言うと、先輩が狩ってなんとかして持ってきたのを、後からハミが食べて片付けている。」

「……事務所で。ぼくの目の前で、だ。」

「所长はため息をついた。」

「出所は最初からわかっているのだけど、ね」

「そう、なんですか？」

「ああ、あんな悪趣味なものを作るのは……元はと言えば奴しかないだろう。いや、最終的には、というべきか」

「悪趣味ですか」

「ああ、あんな人間じみた非生命体^{ノーライフ}はね」

「……よくわからない言い回しだ。」

「でも、奴と言うことは犯人はわかっているのだろう。」

「それなら話は早いじゃないですか」

「残念だが、その出所がどこにいるのかがわからないんだ」

「……そうですか」

「その出所とやらの居場所がわかれば、ハミももっと食事になりつくれるだろうけどな。」

「ハミ、食事がないと怒りっぽくなるから。今日も機嫌がいいとは

言いがたかったけど。

はたから見ている分には、一見機嫌は常によさそうに見えるのがハミという人物だけど、結構わかりやすいぐらいに今日はイライラしていた。

さて、話も一つ置いたし……そろそろ本題に入るか。

「あの、所長。……もう知っているとは思いますが」

「なんだ？」

「うちの高校でちょっとした事件があったんですよ」

「事件？」

「ええ、女の子が一人飛び降りたんです」

「へえ」

所長はいったんその手を止めた。

「それは事故か？」

「あれ、知らなかったんですか？」

「今日のことだからな、と言うのもあるが学校というのは、外部からではその中のごことは見えづらいものなんだ。知りたかったら、直接に情報の糸を紡ぐしかない」

「……へえ。ああ、もしかしてだからぼくを雇ってるんですか？」

所長はクスクスと笑った。

「キミ達はその点で言えば、全く向いてないだろう？ もともとうちにいる連中は全員、他人に興味を向けて生活してるような奴らじゃないからな。そういうことは最初から、期待してないよ。まあ、キミは……相手によるんだらうけど」

別に言葉を返す理由が見えたらなかったので、所長には沈黙で答

えておいた。

……紅茶を淹れるのには、少なくともぼくの場合は時間がかからない。

トレーに淹れた紅茶を載せて運ぶ。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう」

所長はカップを手取る。

香りをかいで、満足そうに微笑んだ。

「むしろ、こちらの方がまだ雇う理由になるだろう。他の連中には任せられないからな」

「そんなに他の人と違わないと思いますけど」

紅茶やコーヒーの淹れ方はここに来てから知ったもので、特別、ぼくが技術を持っていることはない。

「なら、咲斗やハミにやらせてみるか？」

「いえ、それは結構です」

咲斗は前に説明したとおり、赤霧先輩のことだ。

あの二人なんて、見なくてもどうなるかわかる。

「前はそんなにこだわらなかつたんだが、知人にこういうのが得意な奴がいてね。それ以来、少しばかり良いものでないと飲めなくなつてしまつた」

「少しばかりですか」

「ああ。確かに、キミの淹れるものに不満がないわけでもない。正直美味しいとも言いが、それでもこれはこれで味わいはあるも

のだよ」

「……誰が淹れても茶葉は同じですからね？」

所長は肩をすくめる。

もう一つ淹れた紅茶を見て、赤霧先輩にあげようかと思ったけど、前回淹れたら「は？ 紅茶？ そんなもん飲めるか！」とか言われたので、やめておく。

香りは嫌いじゃないらしいけど、その甘そうな香りのイメージが苦みのある味と合わないと言うのが気に入らないらしい。わりと神経質だ。って言うか、変だ。それが偏だ。……意味は適当だ。

ぼくはとりあえずその辺にあった椅子（やけに高そうな）に座り、トレーを膝の上に乗せて、紅茶を飲み始めた。

「ところで、さっきの話の続きはどうなったのかな」

「続き……ですか？」

「飛び降りの話だよ」

「……ああ」

自分から話を振っておいて忘れる所だった。

「飛び降りたのは、樋口カナ。ぼくと同じ一年生です。自殺か事故までかはわかりません」

そう、大神アスカではなかった。

ただ、なんとなく似ていたように見えたので見間違えたただけだ。

あの距離からなら髪型も近いように見えたとし、身長や体型にもそれほど差はないだろう。

ただ……それよりも。

「で、どこから飛び降りたんだ？」

「……学校の4階から、だそうですね」

「4階の窓から？」

「ええ、そうらしいです」

「4階のどこから、かな」

「そこが問題なんですよねえ……実はよくわからないんです」

「……それはどういう、いやその前に窓の鍵はどうなっているんだ？」

「普通の学校の窓と同じですよ、レバー式って言ってますか？ 簡単に内側から開けられます。もっとも他の学校の鍵をしつかりとは見たことないですけど」

「目撃者はいないわけだな？」

「ええ、彼女が飛び降りた瞬間や、窓を開けた瞬間を見た人はいませんでした」

「誰一人として？」

「はい……ただ落ちていく瞬間は見えたかもしれません」

「誰がだね」

「ぼくです」

と、断言した後、ぼくは自信なさそうに、たぶん、と付け加えた。本当に自信はない。

「どづいつことだ？」

「ハミと食事している時にですね。と言っても普通の食事ですよ？ その時に影が落ちていく瞬間を見たような気がします」

「曖昧だね。いったい、キミはどこにいたんだ」

そう、そこが問題なのだ。

「飛び降りがあった校舎の、そこにある一年生の教室です。4階で

すよ」

「それはおかしい。同じ4階から飛び降りた人間の影をどうして、見ることが出来る？」

そう、実はぼくのいた教室の隣で飛び降りがあったのでは、とのことだった。

同じ階から飛び降りた人間の落ちる瞬間を見れるはずがない、でも、ぼくは確かにその影を見た……ような気がする。

「……曖昧な物言いだな」

「すみません」

「他にその影を見た人物は？」

「んー、うちの教室で残っていた人間で4分の1ぐらいですか。全員が見たわけではないようです、一人ひとり詳しく話を聞いたわけではないですが」

クラスではその後、見ただとか見てないとかで大騒ぎになった。おかげでぼくの食事は中断。ハミはその後我関せずで食べてたけど。

もっともこの件は、客観的にありえないことだったので、入ってきた教員が鳥の影か、もしくは目の錯覚と言うことでまとめた。いや、実際にはうやむやになったと言うところ。だろうか、納得いかなくても納得するしかないのが現実だ。

「屋上から飛び降りたのでは？」

「……樋口カナは自分の教室に居たんだそうです、もちろん学年が同じなので4階ですね。これは樋口カナと同じクラスにいた全員が証言していますね」

「言っていることが辻褄が合わないぞ、同じ場所にいた居た全員が居たと言っているのに、飛び降り自体は目撃していないことになる」

「ええ、そうとう見計らってやったのか。それとも屋上で行われたのか」

「それとも、そのクラスの連中が全員嘘を吐いているか」

「普通に考えればそうなりますけどね、その場に偶然教員が居たそうです。担任の教員ではないんですけど……ちょっと考えづらいかな」

「……その教師が嘘を吐いている可能性は？」

「その場にいた方が責任を問われるんじゃないでしょうか。クラスに居たと嘘を吐くぐらいなら、正直に見ていないと言った方がいいと思います」

「そうだな、得はしない、か。では、屋上の鍵はどうなっているんだ？」

「……もちろんいつも掛かってますけど、特別な鍵ではないし。たぶん、慣れてればヘアピンで開けられるんじゃないですかね」

そうは言うものの試してはいない。

憶測中の憶測だ。実際はピッキングの道具がいるのかもしれない。それくらいなら、合い鍵を用意した方が早いだろうけど。

「事件の後、屋上の鍵はどうなっていた？」

「……わかりません。屋上から飛び降りたものだと持ってたので、あとから情報を確認して驚いたんですよ。わかっていたらすぐに確かめに行っただんですが」

「いまいち様相がつかめないな」

その通りだった。

そんな話聞かされて、わかる方がおかしい。

ぼく自身、理解できない。

「そう言えばハミはその飛び降りた女子を見たのか？」

「……ハミの角度からだと思えないんですよ」

向かい合わせにぼくらは座っていた。

当然、ぼくから見えるものは、ハミからは基本的に見えづらくなる。

「ハミはそのことについてなにか言っていたか？」

「そりゃ、なにかは言っていましたけど」

「なんと言っていた？」

「ハミに聞いてください……ぼくの口からは言えません」

ぼくがそういうと、所長は宙に視線を遊ばせた。

カップを机の上において、おかわり、と一言。

ぼくはポットに淹れておいた分を、注ぎに所長の机に向かう。

「遠野」

「なんです」

「なにか他に知ってるな？」

「……別に知ってるって訳じゃ」

「なら、なにを気にしている？その情報を私から貰う気だったんだろっつ」

「……そういうわけじゃないですよ。なにもないなら、それでいいです」

そう言っつて、ぼくは机にお弁当を広げる。

もちろん、それは今日残ったチャーハンだ。

あんなことがあったせいで、食べるタイミングを逃してしまったのだった。

いやいや、おなか空いたおなか空いた。

「キミ自身はどう思っているんだ」

事件について。

それがわかるなら、ぼくも迷ったりはしてない。

「……記憶に自信はないですが、飛び降りの影を見たのはぼくだけじゃないです」

「そうらしいな」

「となると、見間違いであれなんであれ、そういう風に見えるモノがあったのは事実でしょう、ね。なにかはわかりませんが」

「それで？」

「実際に落下したのは樋口カナだとすると、隣のクラスの証言は嘘になります。嘘だとするとなんならありえるのか。教師までもがそう証言する理由はなにか」

それはおそらく。

「いじめ、か、殺人か。そのクラスにいた者全員が、その場にいた教師も含めて行ったというのだったら、納得できますね」

先生も殺人者よりは、不監督で責任を追及された方がマシと思うかもしれない。

いじめの結果、樋口カナは屋上から飛び降りた。

集団リンチによる結果の殺人でもいい。

全員がそれを隠そうとした。

これならどうだろう。

「だめだな」

「だめ、ですか？」

「いじめを隠すのはわかるが、屋上から飛び降りたからのを隠して

「どうなるんだ」

あ……そうか、あまり関係ないな。

屋上での事実を隠して、教室で飛び降りがあったと証言させてるわけだから。

「教室から飛び降りたことを、ないしは、教室から落としたのを隠すのだったらまだありそうだがな。それでも、何もしてないのに勝手に飛び降りたと証言すればいいと私は思うが」

「そう、ですよね」

さらに言えば、現場が教室となれば、むしろ、なおさらそこに問題があったと思われかねない。

そうすることにメリットはないのだ。

「……屋上からの飛び降りを隠す理由ですか」

思いつかない。

殺人だったら？

……なんで、屋上にいた犯人だけをかばうんだよ。意味わからん。自殺だったら？

……だから、屋上から飛び降りたからのを隠してどうなるんだ？理屈の通らない、普通ならあり得ない事態。

所長はわずかに目を細め言った。

「もしかしたら、我々の出番かもな」

おお、もしかして。

「仕事ですか？」

「ま、無料ではやらないけどな」

じゃあ、一生調べませんねきつと。

やつても誰もお金なんか払ってくれないだろうし、だいたいこんなところにお金を持ったまともな人が依頼なんかしないだろうし。

ぼくはすっかり固くなったチャーハンを食べることにした。

「それは、今日のキミの昼食かな」

「そうですよ」

「前は、焼きそばだけ、だったね」

「ですね」

「それも、具なし焼きそばだったね。のっているのは青のりだけと言っ」

「よく憶えていますね」

「……いつも個人的なお弁当だね、キミは」

余計なお世話だ。

「あんまり準備に手間を掛けたくないんですよ」

「……へえ、自分で用意してたのか」

「まあ、独り暮らしですからね」

高校生にしては珍しいらしいけど、ぼくにとってはそれが標準だ。人から独りで寂しくないかと時々聞かれるが、ぼくにとってはそれが当たり前であり、日常だ。さらに言えば周囲の家族と一緒に暮らしている人の話を聞くと、むしろ自分が恵まれているようにすら感じてしかたがないように思う。

そもそも、なんでも自分で始めるのは早いほうがいいと思うんだけどな。独り暮らしは一般的に見て最終的にする人も少なくないも

のだろうし。

……アパートの家賃は親持ちなのが情けないけど。

「キミは洗濯や掃除も出来るみたいだし、それでいいんだろうな」
「誰でも出来ますよ、それくらいは」

面倒そうだとか、すごいと思うのはやったことがないからか、やり方を知らないからだと思うな。たぶん。

確かになにに関してでも、全く才能を持ってない分野がある人はいるけどさ。ヘタながらでも、その才能が零に近くても、なにも出来ないと言うことはないと思う。

失敗なら失敗と言う結果は出せるように、その失敗にも差はあるように、まったく出来ないということはないと思うのだ。

「やり方を知らない、か。知ることが出来るのが才能という考え方もあるが」

「ああ、そういうのとは違いますよ。あと好きになれたこと自体が才能だとか、そういう人もいますけど、それは才能で苦労したことのない人のセリフです」

好きでも知識として知っていても、上手くなれないことはありますよね。逆に嫌いで今まで知識として知らなくても、なんとなく上手くやれてしまう人もいます。結局、人がどれだけうまくできるかって言うのは全部才能なんですよ。

でも、そんな些細なことよりぼくが言いたいのは、上手いとまでいなくてもヘタなりに出来るものもあるってだけです」

才能がないものでも、普通の人間レベルにはなれる。
そちらのほうがより重要な事実だ。

「それがキミにとっての家事だと？」

「まあ、ぼくはそう思いますけど」

もしくは、日頃からのする必要なことの予定を立てていることが重要、とも思う。それが出来れば、何一つ家事で苦勞はしない。出来ないことは、出来るようになるための情報を集めたり、時間をとればいい。

でも、それはなんでもそうだろうし、たまごチャーハン食ってる奴が偉そうに言うセリフでもない。

「キミはそれでいて、自分が……」

「はい？」

「いや、なんでもないよ」

なんだ？

そんな風にやめられると気になるじゃないか。

「ただ、キミは嫌味な人間だと思われるんだろうと思って、ね」

「……それは」

どうだろうか。

ぼくはよくわからないけど。

「所長もそういうところはいい勝負じゃないですか？」

そうぼくが言うと、所長はどこか寂しげに笑った。

身に覚えはあるらしい。

だからこそ、ぼくにそう言ったのだろうけど。

いつも行くのはバイト先（後書き）

ようやくバイト先の上司、巫月所長が登場。

でも、この人物が事件に直接関わることはほとんどないんです。

いつも買い出しをするぼく

3 .

結局、仕事らしい仕事は事務所にはなく、ぼくは近所に買い出しに行くことにした。

コーヒー豆以外は、その辺のコンビニやドラッグストアでなんとかなるのだが、豆の銘柄やらなにやらに所長はこだわる。

それはたいていの場合、きちんとした場所にしか本来ないようなブランドなのだが、幸い、今ではとある喫茶店のマスターと知り合いになったおかげで、その方から豆を分けてもらう（当然、お金は払う）ことが出来るようになった。

今日の買い出しはそれほど苦労はなさそうだなによりだ。

……時々、とんでもないものをお使いさせられるから困るんだけどね。

買い出しにはバイクに乗りたいものの、所長はお使いに関してガソリン代は出してくれない。いや、言えば出してくれんだろうけど、言いつらい。

……ので節約して徒歩か、自転車でがんばるのが基本だった。

まあ、広くても基本的に町内だしね。

あくまで基本的には、ね。

……。

……頑張ろう。

出来る限り。

まあ、あれだよ、頑張れば頑張るほどにお給料になっていくと思えば。

時間給だけど！

その、時間計算もかなりアバウトだけど！

……とりあえず、荷物の軽いコーヒー豆調達の方から先に済ませ
ておいたので、その近くにあったスーパーで買い物をする
ことにした。

入ってまず、店内を見回す。

「えーと、なに買っただっけ？」

メモは基本的にとらないので、自分の脳内からいちいち記憶を探
ることにしている。

確か、買うものはまずは適当に食料、それに先輩用にそれこそ適
当な飲み物。

先輩の場合、ぼくがなにを用意しても文句言うからな。もう、コ
ーラでもなんでも渡しておけばいいだろう。あと、お菓子とか、か
な。滅多にこないけど来客用のと、あとみんなで食べる分でもあれ
ば。ああ、洗剤が安かったら買い足しておくか。それと、それと、
うん、お醤油とみそ……も今度安かった時にまとめ買いするとして、
今日は魚が安いから買って行って、作ったやつを家に持って帰って
おかずにしようかな。あと、歯磨き粉と新しい歯ブラシだろ、いや、
使い捨てでいいか？先輩用に塩入の奴を買い置きして……それに
……。

「なにをブツブツ独りで言ってるの？」

「え？」

あれ。

あんまり友達のいないぼくに話しかけるなんて誰だ？
つて。

またしても、大神アスカだった。

今日はよく、縁のある日だ。

「えーと、どうかした？ なにか用？」
「なにか用、とは冷たいんじゃないの？」

そう、大神さんは言っただけほえむ。

違和感。

どこか、不自然に明るいんだけど、なにかが暗く重たい。
そんなほえみ。

「大神さんって」

「なに？」

「そんな表情する人だっけ」

え？

そう、大神さんは聞き返す。

それは普通に考えれば自然だけど、やはりぼくはそれすらも不自然な気がしてならない。

「それってつまり、わたしが笑ってるとおかしいってこと？」

「いや、そういうことではなく」

なにかおかしい、のか。

改めてみて見ると間違いなく、その顔はぼくの知る大神アスカに
違いない。

むしろ、前に話した時よりも生き生きとじていて愛嬌があるというか、素直に可愛いとも思う。

だけど。

いや、でも。

「……うん、おかしくはないよ。そういう表情の方がいい、と思う」「そう?」

「ああ、大神さんだったらその方がもてると思うし」「本当に? ……良かった」

会話していて感じる、ざらざらした感触が常に口の中にあるような、異物感。異質な感じ。

でも、ぼくは彼女のことをあまり知らない。

だから、ぼくが知らない面があっても仕方がない。それに違和感を感じるのもおかしい話だ。

「遠野は、買い物?」

大神さんは柔らかく話す。

「ああ、うん」

「家の手伝い?」

「いや、バイト。それに今、一人暮らししてるからさ、ついでに自分のも」

「一人暮らし? ……へー、そうなんだ。いつから?」

「一昨年の冬にね、他の家族は新しく出来た家に引っ越しちゃってさ、ぼくだけ古いアパートにいるんだ」

「一昨年って……そっか、中学の頃からだったんだ」

「そう、その頃からだいたい……」

やっぱり、違う。

これは、この人は違う。

人間がこんなに違う表情をするはずがない。

同じ人間なら、ここまで。

仕草だけじゃない、雰囲気だけでもない。

目が違う。

だけど、それでも。

クラスメートがクラスメートでない、なんてことがあっていいはずがない。

そうは思っても疑問は口をつく。

「君は、本当に大神さんなのかな」

「……それはどういう意味？」

同じ姿形をしているだけの、別のモノに見えるのは。

気のせいであるべきだ。

たまたま、そう、大神さんの気分がいい、とかそういうものであるべきだ。

「わたしは、大神アスカ。それ以外の誰でもないと思うけど」

「……まあ、そうだよね」

「そう、わたしは大神アスカ。他の誰かに見える？」

「見えないよ、ただいつもと感じが違う気がしたから」

「……いつもと違う、ね」

大神さんはわざとらしく首を傾げ、笑う。

その仕草はハミによく似ていた。

「遠野はいつもの方がいいの？」

「いや、別にそういうわけじゃ……」

「だよ、いやでしょ？ あんな」

目つきも口も悪い女なんて。

「っ！」

そいつは……。

にこやかに、それがなんでもない当たり前のように。
そう言った。

「いったい、君はだれなんだ。なぜ、大神さんの姿をしている」

「大神アスカが大神アスカの姿をして、いったいなんの問題がある
っているの」

「君が大神アスカだって？」

「そう」

「……ぼくは嘘は嫌いだ」

「嘘じゃないよ、じゃあ遠野はわたしの……」

彼女の目はぼくの目を射貫く。

「あなたが大神アスカの何を知っている、っていの？」

それも、真っ直ぐに。

「……それは」

「そう、知らないよね。遠野はわたしに興味ないしね」

「そんなことは……」

「そんなことはない、とでも？ 遠野、自分で嘘は嫌いだって言ったのに、それなのに自分で言うのはフェアじゃないと思うんだけど」

彼女は、その言葉の内容とはうらはらに、その雰囲気 Kitsusa にもあきまですことはしない。

あくまで、優しい落ち着いた声のトーン。

それは彼女のイメージとはかけ離れたものだが、その言葉の内容はまさにその通りだった。

ぼくは彼女から、目をそらす。

「ああ、……ごめん」

「遠野にとつて、しょせんわたしは、ただのクラスメイト。へたをすれば知人未満の関係」

そう、俺にとつてクラスメイトと言うのは、知ってすらいない、いてもいなくてもどうでもいい存在。

「……否定はしないよ」

「……それなのにわたしを理解できるはずないでしょ」

「ああ、確かにそうだ」

「それでも……別にわたしを理解しろ、って言ってるわけじゃないけど。それはあなたの勝手だし、ね。とにかく知ったような口は叩かないでくれる？」

ぼくは頷くことでそれに同意した。

同意せざるをえなかった。

それは言いにくるめられたわけでも、気圧されたわけでも、ましてや身に危険を感じたからではない。彼女の正体が、大神アスカであると信じたわけですらない。彼女に対する違和感、それどころか、本人ではありえないという、その確信と実感はなくなりはない。

それでも、ぼくがそれに同意してしまわざるを得ないのは、彼女の言うことに事実だったから、というだけではなく。

彼女が本気でそれを言っていたからだ。

「あなたが大神アスカのなにを知っている」

それは間違いなく、本気だった。

ぼくは嘘は嫌い、だ。

だからこそ、ぼくは嘘を知る。違う、嘘を知るからこそ、ぼくはそれを嫌悪する。

その中で間違いなく感じたのだ。

この言葉は間違いなく、この目の前の存在こと(もの)の一真実であり、この彼女自身の本気ものだろう、と。

そして、それは本当に大神アスカの本音ですらあるのかもしれないなかった。

本気であるからこそ、嘘がないからこそ、ぼくも偽りのない同意を返すしかない。

言いたくない言葉を言わず、それでいて言葉を濁さず、ぼくが嘘をつかずにあるには、無言で最期に頷くしかぼくにはなかった。

「わかってくれれば、別にいいから。あまり気にしないでくれる？」

「ああ、わかった」

言いたいことはわかった。

「でも、遠野も忙しそうだしね。わたし、そろそろ邪魔だろうから行くね」

「……帰るの？」

「まあ、そんなところ。遠野もバイトもいいけど、さっさと帰った

方がいいんじゃないの？」

「……そうしたいんだけどね」

それは心の底から同意だ。

働くのは、そこまで好きではない。

この場合は特に。……やりがいもないし。

まあ、自分のための買物もしていてなんだけど。

「それじゃあ、またそのうち」

「ああ」

そのうち、ね。

本当なら、また明日、だろうに。

学校の授業が中止にならなければだけど。

彼女はスーパーの出口へと歩き出す。

が、その足は数歩歩いたところで止まった。

「そうそう、忘れてた」

なにかを思い出したかのように、そう言い。

彼女は言った。

「軋香ハミ、には近づかないで」

彼女がまるでどうでもいふことのように、その口にするのと同時に。

その目に、ドロリと薄黒いものが揺れた。
気がした。

背筋に寒気が走る。

……つまり。

「君はそれを言いに来たの？」

ぼくがそう聞く、と。

彼女は、さあ、どうかな、と小さくつぶやいて。
再び歩き出したのだった。

その、彼女を見送る視界の端に。

黒い影が蠢いた見えたように思うのは。

おそらく、気のせい。

……そう思う方が精神衛生上にはいいのだろう。

そんなことよりも、今は。

ぼくは携帯を取り出す。

かける先は……。

「……ああ、ハミか？」

*

「えっとお、つまりい？」

「最近、周囲が変わったことはないかって聞いてるんだよ」

ぼくはその後すぐにハミに電話した。

携帯電話は可能な限り持ち歩きたくないが、こういう時に必要に

なるから手離せない。

「べつにい、って言うかあ、最近はいっつも夜一緒じゃん。変わったことがあったら、気付くでしょ〜」

「それは確かにそうだけど……」

昼間の飛び降り直前とか、コイツの発言の意味ありげなことを言っていたこともあるし。

なにかぼくの気付いていないことを感じてるのかな、とか普通は思っただろう。

……それに、いや、その前にさ。

「あのさ、こんな堂々といつも夜一緒って人聞きの悪いことを素で話すなよ」

「なんでえ？ って言うか、どこがあ」

「どこがって、そりゃ小学生じゃないんだからさ。そういう関係だと思われろ」

「そういう関係ってどんな関係？」

「……お前、わかっててわざとぼくに聞いているな」

「えへへ……」

えへへ、じゃねえよ。

なにをぼくに言わせたいんだよ、お前は。

……だから、変な噂されるんだぞ。

「そう言われてもあ、ハミ、気にならないしい」

「お前は気にならなくてもな」

「じゃあ、なに……」

「遠野は気にしてるの?」

……………。

あー。

そう普通に言われると、なあ。
んー、いや別に。

「……………正直、気にならないかな」

所詮は噂だし、相手はハミだ。今さら迷惑もなにもない。と言っ
か、今さら迷惑しかないから、それが十や百や千増えたところで微
小な数字でしかない。

……………別に噂をすること自体が悪いとは思わないしな。

そう言つと、受話器の向こう側から笑い声が聞こえた。

「だよねえ〜」

んふふ、と笑ういつものへらへらした声。

いや、なに楽しんでるんだよ。

「そういうことじゃなくてだな、周囲からの評価が悪くなってるん
だぞ」

「ハミはあ、周りの人間なんか、どうでもいいからねえ」

「お前はよくてもな、ぼくはそうはいかないんだよ」

「……………だから、遠野は気にするの? 周囲の評価なんて
「するよ」

そう言つと、驚きと失望の入り混じつたような表情でハミがぼくを見た。

……ような気がした。あくまで、気がしただ。
実際に目の前にいない人間の表情なんてわからない。

いや、それでも、なんて顔してるんだ。とぼくが見た時に思うような表情をハミがしたのだとそう思った。

……ぼくに呆れたのだろうか。

でも、そんなもの、気にする決まってるだろ。
だってさ。

「なんで、お前が悪く言われないとならないんだ？おかしいだろ」

「……………」

「お前、悪いことしてないだろ」

そつだ、ハミが実際になにをしたって訳でもないのに、なんでも知らないような奴らに、いい加減にいいように言われないうけないんだ。

そりゃ、気にするに決まってる。

「……………」

ハミの返事がない。

「おい、ハミ？」

どうしたんだ？

なにか、変なことでも言ったか。

「もしかして、遠野さ」

「あ？」

「ハミの」と心配してるの？」

心配？

ぼくが。

そんなわけないだろ。

「なんで、ぼくがお前の心配なんかするんだよ」

「そうだよねえ……」

なにを言い出すかと思えば。

別に、心配……ではない。

そもそも、そこまで余裕のある生活は送ってないぞ。

人を気にしたり、心配が出来るほどは。

とりあえず、と言った風にハミは「まあ、憶えてはおくよ」と、返答した。

ああ、ぜひそうしてくれ。

「で、ただそれだけなの？」

「いや、で、と言われても」

別に周囲に異変がないなら、どうしようもないと言うか。

ぼくがハミに言えるのは。

「せいぜい、身の回りに注意してくれとしか言えないな」

「身の回り？」

「そう、気をつけてくれればそれでいい、かな」

ハミならなにかあっても、そうそう危険はないと思っけど。

それも、どうなるかわからないしな。

ただ、ハミは周囲の獲物や天敵に対する感覚だけは半端じゃないから、日頃から気をつけてもらえばわかる、と思うしかない。ぼくがいても足手まといだしね。

「ふうん」

「……なんだ、どうかしたか？」

「やっぱり、トオくん心配してるんじゃない」

ハミのぼくへの呼び方がトオくんに戻る。

ふざけた、くだけた呼び方。

「……うるさいな、用件はそれだけだよ」

ハミのからかう声が聞こえそうな気がして、ぼくは一方的に電話を切った。

後でうるさく言われそうだが、どうせも今日は会わない相手だ。明日、キレられるぐらいは別にいい。

今はそれよりも。

「所長に、話した方がよさそう……なのかなあ」

なんて、話した方がいいかはわからないけど。

とにかくぼくは、事務所に行く。

……とはあえてせず、買い物をしつかりと済ませることにした。ぼくの晩ご飯のおかずも密にかかっているわけだしな。

買物せずに帰ったら、バイトの時間計算に下方修正がかかりそうだし。

なによりもぼくは、まず、日常を大切にしている人間だった。

いつもコーヒーを淹れるぼく

5 .

以前、のこと。

つい、先日にも、赤霧先輩がその刀の錆にした、というよりは炭にした非生命体^{ノライイフ}。

それが、そのほぼ人間と見分けのつかないほどの精巧さを活かしてか、一般人とすり替えられていたことがあった。

ある日、突然、すこしづつ、隣人が人から人でないモノへと変わっていく。

そんなことが実際に起きていたのだ。

その件での、非生命体^{ノライイフ}は少なくともこの町ではほとんど撲滅されたものだったが、思い返してみると、すり替えられた人物の周囲は誰もそのことに気付かず、それが本人だと思ひ込むと言う、おそろしい事態が発生していた。

その人物の家族や恋人ですら、本人だと思っていた。

人が変わったように。

そう思われた場合がなかったわけではない。偽物は所詮は偽物だ、本物とは違う。その差異に気付く人間、奇妙に思う人間は皆無ではなかった。

だが、誰もすり替わった非生命体を偽物だとは思わなかったのだ。そう、隣人がすり替えられた、と思う人間なんて常識的にありえない。もしそんなことを言えば、頭がおかしいと思われるだけだろう。

当然ながら、人が変わったように、はあくまで、ように、であって実際に変わっていることを意味しないのだから。

それが『常識』である。

多少、様子がいつもとは違うようには思っても、調子が悪いだとか、気分が悪いのだろう、とか、もともとそういうものだとか、だからなに？ と無関心でいられたりとか……結局、周囲の人々は日常の中で生き続ける。

もちろん、ばれにくい対象。家族とは疎遠気味の人間、独り暮らしの人間、周囲とは孤立しがちの人間、社会の枠からはみ出た人間など、そういう対象から優先的にすり替えが行われたことが、よりばれにくさを作ったのだ、と言われれば反論する気はない。

それでも、だ。

気付かないのである。

友達が友達でないぐらい、恋人が恋人でないぐらい、息子が息子でないぐらい、娘が娘でないぐらい、父親が父親でないぐらい、母親が母親でないぐらい、兄弟が兄弟でないぐらい、祖父母が祖父母でないぐらいでは、人間はまったくその異質さに無関心でいられるのだ。

なぜなら、日常の方が現実的で、退屈で、普遍で、安心出来るが故に魅力的であるから。なにせ、同じことを繰り返すだけで生きていけるのだ。成長しなくていい。努力しなくていい。日常ではレールの上に乗るまでが努力の賜なのだ。他にそれ以上のなにを望むのだろう。

神話にある天国や楽園とは、つまり、そういうものだ。

争いも変化も、なにごともなく単調で、それが幸せ。

異常事態や新しい毎日など人間は望まないし、そのためになら、

周囲の人間の異変などいくらでも忙殺できるのだろう。
見て見ぬフリではなく、見て見ていなくできるのだ。
現実という、退屈な楽園に人間は住んでいたいから。他人を犠牲
にして無関心でいられる。

とまあ、色々言ったけど、つまり、ぼくが言いたいのはこうであ
る。

また、再び、入れ替わりが行われているのではないか、と言っ
とだ。

大神アスカだけでなく、ひそかに何人もすり替えが。再び。

「なるほど、その可能性はないわけじゃないな」

そう、巫月所長がコーヒーを飲みながら言った。

もちろんそれは、ぼくが買ってきた豆で淹れたものだ。

ではその豆でコーヒーを誰が淹れたのか？

もちろんぼくだ。

ちなみに、所長は猫舌で甘党なので、それとなくひっそり適温に
したものを用意し、こっそりと砂糖を多めにスプーンで四杯ほど入
れた。クリームは好みでないそうなので、もちろん付けてはいな
い。

ここで機嫌をそこねると困ったことになるからな。かなり、気を
遣うのである。

「確かに、ハミと先輩の活躍でだいぶ一掃されましたけどね。出所
がなくなつたわけではないんでしょう？」

「ああ、否定はしない。現実問題として連日狩りを行ってるしな。
全く、居なくなつたわけではないんだらう」

「だったら、考えられないこともないと思いますよ」

だったら、あれは大神アスカの偽物だ。と言う結論が容易に出せる。

その方がぼくはすっきりしていいな。
だが、しかし所長は。

「……その可能性は低いな」

そう言った。

顔が苦々しそうなのは、本当に苦いからかどうかはわからない。

「なぜです？」

「まず、もし非生命体なんて餌が目の前にあつたら、まずハミが黙つてはいないだろう」

「まあ、確かに昼間のうちにごちそうさまでしょうけど」

あまり、食欲を制限できないのがハミなのである。

飢えたライオンが餌の臭いをかぎ分けられないことなんて、ありえない。

「なら、下校後にすり替えられたんだったらどうでしょう？」

「仮にそうだとして、キミに接触させてなんの得があるんだ。襲うわけでもなく、な」

「……それはそうですね」

確かに事務所の中でも、普通の人間にしか過ぎないぼくはある意味狙い目には違いない。

だが、かといって、狙ってもどうしようもない。

ぼくを殺しても、事務所にはダメージはない。だって普通の人間だし。

ぼくと入れ替わるつもりだったとしても、入れ替わったところで、八三や赤霧先輩、ましてや所長は騙せないし、人質だとしてもそんな価値はない、だろう。そんなものに惑わされ面子でもないし。

「だいたい、その偽物らしきものとは話したんだろう」

「ええ、だいぶ違和感がありましたけど」

「その内容を聞くと、より一層可能性は低いと思うがな。別に本人と直接面識があるわけではないが、偽物にしてはずいぶん本人らしいじゃないか」

「どこがです？」

「持ち出す会話の内容が、だよ」

「確かに、本人しか知り得ない情報があるのは間違いなさそうですけど。でも、不完全ながらも記憶の複製でもすれば、大して本人を知りもしないぼくには……」

「そこじゃない」

ぼくは首をかしげる。

いや、ぼく自身は相手が、演技でなく本気で話している感触は受けたのは間違いないけど。

……本人でない感触も間違いなくあったわけで。

ぼくがそう言っても、所長は首を振った。

「いいか、そんな感情の混じった会話を本人以外にするとと思うか。むしろ、キミになぜその話をするか、と考えたら本人以外にあり得ないだろう」

「……どういう意味です？」

「偽物が本人となりきるためにそんな会話を選ぶ必要はないということだ。その感情も異性に向ける感情、同性に向ける感情。怒りと羨望……さらにそれに加わるモノ。非常にわかりやすい」

「……意味がわかりませんよ」

確かに、不自然に感情的ではあったけど。

なにか、堅いものを無理矢理押しつぶしたかのような。

あえて、黒をより黒いモノで塗りつぶすようにして隠しているよ
うな。

間違いなく、そういう感じはあったけど。

「そこまでわかっっていて、なぜわからないなんてキミが言うのか。
私にはさっぱりわからないな」

なぜだろう、なんか馬鹿にされている気がする。

とにかく、この人が言いたいのは。

「つまり、要約すると偽物がぼくにわからない話を選ぶ時点で偽物
としての役割をはたしていないって言いたいわけですか」

偽物がぼくを騙すなら、ぼくを騙すためにぼくに理解しやすい話
をして引き込むだろう。

そう言いたいのだろう、と頭をぎりぎりまで回転させて考えた。

「まあ、おおよそそうなるな」

「……納得できませんけど」

「そう言われても私は困るだけだ、それよりもお茶うけになにか用
意してくれないか」

「あっ、俺も俺も」

そう言いながら、赤霧先輩がソファから起きた。

まだ寝てたんだ、アンタ。

「なんだよ、その目は」

「別に。働いてほしいなあ、と思って」

「……仕事なんかねえよ」

「なら事務所の掃除でもすればいいじゃないですか」

「はあ？　なんで俺が」

「バイトって言うのは、自分の仕事を自分で見つけるのも、その料金のうちに含まれてるんですよ」

「うるせえな、黙って茶菓子用意しとけや」

今にでも刀を振り回しそうな殺意のその寸前辺りの眼で、赤霧先輩はぼくを見た。

ああ、絶対にぼくの言うことは聞かないだろう、とは思ってたよ。仕方なく、先輩を職業欄がニートの男……の父親、でも見るような目つきで一瞥してから、お菓子を用意することにした。飲み物は……ああ、さつき買ったコーラでいいよね。

その視線からなにかを感じたのか、先輩はぼくに向かって口を開いた。

「お前、いい加減、俺のこと嘗めてるだろ。キレるぞ、しまいにや」
「舐めてませんよ」

そう言っつて、まずはコーラをグラスに入れて差し出した。

中に入っている氷が、音を立てて鳴る。

……ぼくは先輩をどちらかと言えば嘗めてるんじゃないかと、フツツに呆れてるんですよ。

赤霧先輩のことだから、こんなことを言えばキレる、と言うか本気で斬らんばかりにブチキレルんだろうけど、そんなことでいちいち怖がってたら相手なんか出来ない。

なんで、バイト先でいちいちビクビクしてなきゃいけないんだよ。せいぜい、まあキレられても瞬殺されるぐらいだろうし。

グラスを受け取った先輩は、コーラをなんの文句も言わずに飲んで、その眉間にしわを寄せた。
で、結局いつものように口を開く。

「なんだこれ、ダイエットコーラだろ」

「ええ、そうですけど」

なにか問題でも？

信じられないものでも発見したかのように先輩はぼくに言った。

「は？ ダイエットコーラなんてコーラじゃねえぞ、お前」

「……安かったんですよ」

「ば、お前、馬鹿だろ。全然、味違うだろうが。こんな物買う奴どこにいるんだよ」

「たいして味なんて変わりませんよ、コーラはコーラですから」

なにを飲んでも、文句のうるさい人だな。

自分で買って来いよ、お金だつて出してないんだし。

「あー、もうありえねえ、ホントにありえねえ」

そういつつも飲む赤霧先輩。

差し出された物には、必ず手を付け。手を付けた物にはきちんと最後まで食すのが赤霧咲斗という人間だった。

良く言えば、律儀。

悪く言えば、意地汚い。

……個人的には残すよりよっぽどいい気もするけど、うん、素直にそう褒めたくはないな。

そんな感じで赤霧先輩を適当に相手をしながら、お茶づけにお菓子を用意する。

それを見て、所長はぼくに言った。

「最近は大いぶキミも慣れて来たな」

それは、先輩の扱いに的の意味ですか。

「この場にハミが居ても、キミなら同時に対応出来るだろう?」「
「勘弁してください」

可能だけど、したくない。

出来るからこそ、どれだけの面倒くさいかわかってしまう。

「ぼくだって、出来ればまともな人間の相手だけしたいんですよ」
「そりゃ、どういう意味だ!」

後ろのソファから聞こえてきた声は無視した。

意味なんか自分で気づけよ、わざわざアホな会話にぼくを参加させるな阿呆め。

「いい加減、お前も失礼を通り越して、無礼ってるよな? おい?」
「なにも言っていないですよ、ぼく」

考えてるだけだ。

態度にそれが出てても仕方がないだろう、ぼくは嘘も隠しごとも嫌いだ。可能ならなるべくオープンに生きていきたい。

……出来れば死なない程度に。

お茶づけをテーブルに置くと、所長が先輩と対面するようにしてソファに座りだした。

本格的に休憩するらしい。

「それはそれだが、一つ話をしたい」

「……どれがどれなんですか」

ぼくのセリフを無視して、所長は続けた。

「今日、飛び降りがあった話をしたじゃないか」

「……ええ、まあ」

確かにそんな話はした、今は頭の中もそれどころじゃないけど。
正直、大神さんとハミの方が気になる。

「その件なんだが、少し気になることがある」

「気になることですか？」

「自殺が連続して起きているんだよ」

「……連続？」

自殺なんて、どこにでもあるじゃないか。

本当によくある話だし、年間何人の人間が自殺で死んでると思っ
てるんだ？

「どの辺で連続しているんですか。連続って言う以上は共通性があ
るんでしょう」

「……ああ、その通り。もちろん共通性はある、この連続自殺は同
じ中学校を卒業した生徒で起きているんだ。それも連鎖するように
ね」

連続自殺って、そんな連続殺人みたいな語呂で言われてもな。

「だいたいそうは言っても、自殺なんて他からの影響で起きるものだと思いますけど」

有名な歌手が、あるビルで飛び降りて死んでから、同じビルで相次いで飛び降りがあった。なんて言うのも、聞いたことがある。

それが、怪談のように語られることもあるが、おそらくその人たちはその歌手のファンだったのだろう。近しく思う人間か、親しく思う人間が死ねば人間は自然と死に近くなる、ひいては自ら死を選びやすくなるものだ。

乱暴に言えば根本的に、人間は死にたがりで、死にたくて死にたくて仕方がないと言える。少しのきっかけがあれば、隙あらば自殺しようとするもの。

そのことを防ぐ意味合いで、葬式を遺族が執り行う風習は出来た、という心理的見方も出来る。葬式を執り行うと言う役割を与えて死から気を逸らし、かつ、お坊さんや他の親族が様子を見に来るきっかけを作り監視する。昔からそう対処が巧妙に考えられ、システム化されるほど、なんらかのきっかけで人が自殺をするなんてのは当たり前だった。

特に、日本では人前で涙を流し、悲しみを表現することを避ける傾向にある。それは見ようによつては美德ではなく愚かと言ってもいいことだろう。

人間は泣くことで感情を発散する。ほら、泣いたらすっきりした、と言う言葉を聞かないだろうか？

泣くことはそのものは、実際ストレスを発散させる行為だ。よつて、むしろ本人の立ち直りを早くし、その悲しみという感情を発散させ、忘れる。

だが、それをしない人が多い。それが出来ないために、集団よりも個人として動くことの多い現代では特に、いったん死に近しく関

心を持った人間は、なんらかのきっかけで死を選ぶ確率は少ないのかもしれない。

あらかじめ、死にたい、と心のどこかで思っていた人間が、偶然知り合いが死んだことでその引き金となった、となっても別に不思議なことではないのだ。

「キミは相変わらずなんとも言えない見方をするんだな」

「そうですね、間違ってますかね」

「それはずるいいい方だ、とも思うがな。人間の死への願望の存在、即ちタナトスと言う見方もあるしな。人間は死にたがり、と言う見解は間違いではないよ。だが、私が連鎖していると言ったのは、キミのような意味で言っているわけではないんだ」

ぼくの言った意味とは違う？

当然ながら、ぼくは疑問を持った。

「それはどういふことですか？」

……そう聞きそうになるのをまずは抑える。

まだ、聴くには早い。

ぼくはあごに手を添える。

……ぼくの言った意味。

それは他の影響を受け、きっかけとなっただけの複数の人間の自殺。

そういう意味合い。

一方、所長が言ったのは連鎖的に起こる連続自殺。

この間に他の意味が成立するとしたら……。

「さすがに話は早そうだな」

所長はぼくの目を見てそう言った。

赤霧先輩はまるで自分は関係ないかのようにひたすらコーラとお菓手に手を付けていたが、その視線はぼくの視線と交差する形でぼくに向けられている。

ぼくは二人に頷いて、口を開いた。

「つまり、所長が言った連続自殺と言う言葉の裏には、連続殺人のように、この現象が能動的な原因によって連続している、関連しているモノである。その証拠ないし、そう見いだしうる共通項があった……ということを示している訳ですね。そう、例えば……犯人がいる、とか」

「事件ではなく、私の意図の方を読むか……あまり褒められないが、その能力は評価したいな」

「あまり褒めんなよ、巫月。この場合は褒めても視点のひねくれ方が増すだけだつて」

所長を呼び捨てにし、余計な言葉を付ける、赤霧先輩。
うるさいな、ほっとけ。

所長はぼくらの顔を見比べて表情を崩した。

「二人とも、人のことはよく見えるんだな」

「余計なお世話だ（です）！」

ふふつ、と所長はさらに笑いを重ねた。

その上で、コーヒーを口に含ませその喉を濡らし、すつとぼくらへと向き直る。

その途端、雰囲気がだらけたためるま湯のような空気から、凍るよう

な冷水へと引き締まる。

赤霧先輩の目にも、真剣さが多少は加味された。

仕事の前の、狩人の目、その二歩手前と言ったところだろうか。所長はぼくらに話をし始めた。

「とにかく、キミの言つとおりだよ……この件には共通項がある」

キミの学校の女子生徒と関係あるかは知らないが、と一言前置きした。

そう、実はこの事件そのものの始まりは一ヶ月前に遡る。

6 .

この事件は川岸淳という、男子生徒から始まった。

彼の死が全ての、きっかけだった。

それを除けばある意味で、遠野の見解も所長の言にも間違いはない。

彼の死から全ては始まり、全ては終わった。

死という名の終わりだ。

始まりは、混沌と言う始まりだった。

今まで、発生しなかった始まりが、今まで発生するものへと変わってしまった。

現実から、非現実へと。

日常から、非日常へと。

それは、意志を持たない影……だった。

俺にとって、それはなんの意味も持たない。

刀を通して伝わる物こそ、刃を透して見える物こそが全てだ。

だが、しかし。

熱の伝わらない幻と。

肉眼にすら透さない想いに。

意味を見いだす人間も世にはいるのだろう。

人はそれを、幻想と。

もしくは幻の影、幻影と呼ぶ。

儚い、人の夢だ。

……樋口カナは死にたいと思った

7 .

樋口カナは死にたい、と思った。

それは樋口カナには好きな人がいて。

その彼が自殺したからだった。

わかりやすい、理由だった。

自分でも、ばかばかしいと思った。

男一人、死んだからって自分も死ぬなんて、所詮は自己満足。一時の感情、恋愛という名前の動物のような本能に従うだけだ。

そう理屈っぽく自嘲しながらも。

……それでもいいと樋口カナは思った。

……樋口カナが、ようするに私が。こんな風に死を望むのは。

彼を見てしまったからだだった。

目の前で、包丁で胸を引き裂いた彼を。

彼は笑っていた。

その、後ろの彼も笑っていた。

「もうすぐオレは死ぬんだってさ」

そう、笑っていた。

彼から呼び出されて、学校をサボってその自宅に行った私が見た

のは。

……そんな光景だった。

好きな人が逆手で包丁を持って、自分自身に向け、高らかに笑う。
悪夢のような光景だった。

「ほら、見えるかカナ。オレ、包丁で裂かれて死ぬんだぜ？ 笑っ
ちやうよな？」

カナは小学校の頃に話したことないか、苦しい死に方だけはした
くないってな、「冗談交じりでき。交通事故で死ぬぐらいは想像した
けどさ、こんな笑える死に方するとは思わなかったわ」

「冗談でしょ？」

私はそう言った。

「ばかばかしい、そうじゃないのなんてわかりきってるのに。
彼に死ぬ理由はあるんだから。」

「そうだよ、オレは死にたかったんだ。なあ、カナ、なんでオレだ
け生きてるんだよ？」

オレだけ。

オレだけ、だってさ。

まるでこの世に自分しかいないみたいに。
私も傍に、こんなに近くにいるのに。

「オレは、オレは汚れてるんだ。そんなオレを……必要と違ってく
れてたのに、あいつは死んじまったんだ」

あいつ。

憎くて仕方がない。

あいつ……はもう死んでいる。

なのに、未だに彼の心をわしづかみにして、そのまま連れ去ってしまった。

彼の傷は私じゃ癒すどころか、触れることすら許されなかった。

憎い。

不条理で。

不平等だ。

私にもチャンスがあってもいいじゃない。

なんで、アイツだけ？

でも、もうそのアイツも死んでいる。

どうしようもない。憎んでも、殺せない。アイツは殺せない。

彼は止められない。殺しても、彼は私のものにはならない。

……ばかばかしいでしょ、死んでも彼は好きなんだって。

違うか。

……その人が死んだら、もう自分には価値がないんだって。

生きていても、意味がないんだって。

そんなことをさんざん私にノロケて、そのあげく、彼は……。

「オレは汚れてるんだ、この血も、中身も、腐ってるんだ。臭いんだよ、生臭い、どろどろしてて、気持ちが悪い。どこまでも、這い回ってるんだよ。この血が」

彼は自分自身を呪ってた。

自分の血さえ、嫌ってた。

それから逃れるために。

彼はその胸を……。
引き裂いた。

辺りに塗れる赤い色を憎んで、その色の中に倒れ込んだ。
それが身体の中から這い出ていくことを喜んで、その色にその身を染めた。

その後ろに彼は、立っていた。

その倒れる自分の姿を見下ろして……。
自分の傍らに立って。
こう呟いた。

「ああ、これがオレの望みか」

嬉しそうに、でも寂しそうに彼は言った。
同じように、胸から血を吹き出して。
ようやく、彼は私を見て。
すまなそうな顔で、倒れていった。

倒れた彼の口だけが動いて。

「ごめんな」

と、呟いたように見えた。
樋口カナは生きていても仕方がないと思った。
好きな人が死んだのに、自分が生きていても仕方がない。
そう思った。

いつもと少し違ういつもの学校

8 .

所長がある見解述べて、ぼく達にあつたのは沈黙だった。

それを五分ほど長引かせて、赤霧先輩は思い出したように言う。

「ああ、そういや、うちの学校にも死んだ奴いたなあ」

今更だった。

実は赤霧先輩は先輩と呼んではいるものの、実際は他の学校の生徒である。ともかく他校の情報が手に入るならそれもいい。

なので、一応聞いておく。

「誰ですか、それ？」

「知らねえよ、そんなの。興味ねえよ」

……だと思った。

この人はそうだろうな。

「……でも、自分の学校のことですよね」

「そうだ、つまりたまたま同じ学校に通ってるだけの他人の話だ。他人に興味はねえよ、その末路にも噂にもな」

本当に情報収集には不適切で不適當な人間ばかり揃ってるんだなあ。

「で、巫月。この件にはどういう対応で行くんだ。金にはならねえ

「だろ？」

「そうだな、一銭にもならないな」

「俺は刀で斬れないモノには興味ないし、な」

「……刀で斬れないモノね。まあ、ハミは食べられない話なら、興味は持てないだろう。」

他のメンバーを探しても、おそらくは似たようなものだ。

所長は頷いた。

「私はこの件には関わらない、あとは個人の自由だよ」

「……そうですか」

ぼくはそれを聞いてから、とりあえず魚の煮付けでも作ることにした。

所長の晩ご飯のおかずと、密かにぼくの晩ご飯のおかずになるように。

*

翌日、学校じゃ全校集会が開かれて、その後普通に授業があった。

意外に早く葬儀は開かれることになり、今日の放課後に樋口カナと同じクラスは代表者が出席し、あとは親しい人間のみのお席となった。遺族への迷惑を考慮し、全員が行くと言ったことはないらしい。

それでも、同学年全体の中でも、それぞれ面識のあるヤツは出づもりらしく、うちのクラスからも、耳に入る限り結構な人数が出ることになったようだ。

それとは別に、どのクラスでもショックだとかで寝込んでいる生徒は少なくないようだ。

なんとも細い神経をしているものだ、とそう思う。自分より、神経の細い人間がいることには驚きを禁じ得なかった。

学校の授業の合間にすら、その雰囲気は教室を支配し続ける。

同級生が、……人が死ぬって高校生にとってこんなに重いことだったのか。

相変わらず、サンドイッチやらなにやらを食べているハミにぼくは話しかけた。

「あのさ、樋口力ナって」

「んー」

「結構、友達が多かったんだな」

葬儀に対する参加者だけでなく、学校全体、と言うより学年全体に包まれた雰囲気を感じていった。おそらく、他の学年だともう少し明るく授業をしているのだろう……ひどく言えば、娯楽の一種になっているだろう。この学年ではありとあらゆるクラスでここで通夜でも行われているかと言う様相だった。

「……多いからあ、友達っていうんだと思うよあ？」

「は？」

「だってえ、ダチ。だも〜ん」

「……そうですか」

達はまあ、確かに複数形の意味だろうけどさ。たぶん。

……そんなことを言いたかったんじゃないんだけどな、ぼくは。

と思うと、珍しく小声でハミは言った。

「でもさ、中身が伴っているかは別だよ」

「なにが」

「別に。葬儀に行く連中でどれだけの人間が、樋口カナがなにに苦しんでいたかを理解しているのかな、と思っただよ」

「そりゃどついう意味だよ」

「所詮、友達なんてそんなもんでこと。数え切れないほどいるからこそその友達、複数形。」

「だとしたら、友達なんて数え切れないほどの人間のうちの一人つてことにしかならない。それを理解して付き合える人間がどれだけいるのかな、って」

「人間にとつて、友達なんて全員がその他大勢ってことか？」

「そうだよ。その証拠にほら、一人くらいいなくても生きていける。だいたいさ、本当に相手のことを理解して助けようって言うのが友達なら、この世の自殺する人間は全員友達がいなくてことにならるじゃないの？」

「でも、実際に彼女は死んだ。自称友達はいっぱいいるけど」

「……………大切に思ってくれてる友達がいても自殺するかも、だろ？」

「そうだね、相手を大切に思っていると本人は思っただけで、相手のことを理解はしない自称友達なんて腐るほどいるしね」

「……………お前」

「人が死のうとしてるのに、その苦しみを理解も出来ない、助けることもない。それが友達なんだよ。たまたま一番近くにいた赤の他人」

「……………」

「そうじゃなくてもさ、本当に樋口カナがかげがえのない友達なら、自分も後を追って死ねばいいんだよ。かけがえのない、ならね。でも実際は換えが聞くでしょ？」

かけがえのない存在なら、いなくなれば生きてはいけないう。
ハミはそう言う。

ぼくはその言葉に答えられず、それから逃げるように言う。

「……お前、とことん人間不信なんだな」

「違うよ、知ってるだけ。百人の人間に百人分の愛情と友情与えられる人間なんていないってことをさ。人間一人が持てるのはその人一人分の友情と愛情だけ。万人を愛せる人なんてだからいない。……人間だけじゃなくカミサマにも」

「……そうかもな」

それはずいぶん寂しい話だとは思っけど。

……でも、たぶん事実なんだろう。常に友達同士で助け合いつていのが行われてるなら、皆無つてことはなくてもそうそう死人なんてでないだろう、今回みたく。

その真相が殺人だろうが自殺だろうが、だ。

「でも、私は思っんだ。本当に大事なモノは護るもんだつて」

「……確かにそうあるべきだな、人ひとり護るなんて難しいにもほどがあるけど」

「それはそうだよ、だいたい二人も三人も救えたらスーパーマンでしょ。少なくとも私には無理」

まあ、ぼくにも無理だ。

「だから私は……たった一つがあればいい、そう思っ」

「だち、と言う複数ではなく。」

「たった一つの護りたいもの。かけがえのないもの。」

そんなものはぼくにはないから、ぼくにはその八三の言葉と真剣なその眼差しがまぶしすぎた。

「……へえ、お前って意外と情熱的だったんだな」

ぼくがそう茶化して言うと八三はニヤツと笑って、いつものトーンで言った。

「八三はあ、百の食べ物にい、百の愛情と食欲を与えられるからねえ」

「やっぱり食べ物の話かよ」

「……まあ、そんな感じの話だったよねえ？」

そんな話した記憶はねえよ、って言うか、本当に朝からよく食うヤツだよな。

……なんか見てると幸せそうで、たまに羨ましくなるな。

「って、そういや、あれからなんか変わったことあった？」

「あれからあ？変わったことあ？」

「いや、電話したじゃん」

「……あー、まだ言ってたんだあ」

「おい、昨日の今日だぞ？」

もし、それでぼくが忘れてるとか、もうどうでもいいなんて風に意見が変わってたらいい加減にもほどがあるだろうが。

「なんにもないよお、あつたら話してるってえ」

「……それに関しては信用してないから」

なんかあっても一人で黙々と食べて終わりそうなんだよ。

ハミがわざとらしく泣きそうな顔をする。

「うう、信用されてないんだあ、ハミ。ちょっと傷つくなあ」

「傷ついてないで反省してろよ」

ぼくにじゃなくて、この場合本人に問題があるだろう。

……ハミと話すよりは、大神さんに真意を問いただせばいいんだろうけど、その本人が今日はいないし。

そう、なぜか今日は大神さんは学校を休んでいた。

……樋口カナの件なのか、純粹に体調を崩してなにかはわからないけど。

ハミは会話の内容に関してはそうそう本音を話してくることって多くないから、なんか信用できないんだよな、てか、さっきまであんなやりとりをしておいて、次の瞬間にはなんか普通に食ってるし。

でもまあ、それは別にいいか。

話は変わるけどぼくは、人が生きていく上でなにか執着できるモノがあると言うことは、とても素晴らしいことなんじゃないか、とは思っている。

それはおそらく生きているこの世界への執着になる。

それは言ってみれば、充実した生活への繋り、生きる上での活力、原動力になるんじゃないだろうか。

で……まあこのように言うまでもなく、ハミは食べることにすくなく執着しているわけで。

だけど、それで全部チャラになるわけではないと言うか、ハミの場合その欲求を優先にして、全てをないがしろにしそうなイメージがあるのが問題だよな。食欲を理由に、会話の中で嘘を吐く理由にすらなり得るくらいだし。

……でも、もしモノへの執着が生への欲求になるんだとすれば。もしかしたら、自殺（？）した彼女には、樋口カナにはそれがなかったということなんだろうか。

いや、なにか違うような気もする。

もしかしたら、ハミと同じように全てをないがしろにしてしまうような、欲求、衝動があったのかもしれない。

まあ……確証がある訳じゃないけど。

それでも、なにか、ぼくの見えていないモノが、まだどこかにある。そんな気がするのだ。

なにが起きたのかわかってても、それがなぜ起きたのかわからなければ理解したと言えない。

ぼくは探偵じゃない、事件の犯人がわかったから追い詰めて終わり。と言うことが目的なんじゃない。

「なあに？」

突然、ハミがぼく尋ねる。

……なんだ？

「いやさあ、さっきからトオくん、ハミのこと見てるからあ」

「……見てたかな」

ぼくは意識はしていなかったけど。

「見てた」

そう、ハミが断言する以上はそうなのだろう。

ぼくは仕方なく、場をしのぐために先ほどまで考えていたことの一部をハミに話し始める。

「いや、ハミはさ、そうやって食べ物食べてる時って幸せなの？」

「……なに、いきなり」

「いや、なんとなくだけだよ」

「んー、たぶん。幸せだと思うよ、満たされてるって感じはする……
…よお」

そう、か。

まあ、ぼくだって美味しいものを食べている時はそうかもしれないけど。

「それってどう、幸せなことなのかな？ いいことだと思う？」

「なんかあ、変な質問するねえ」

「うん、ちよっと妙な考えことにはまってさ」

「楽しいのお？ それえ。すぐくめんどくさそうだけどお。まあいかあ……ハミとしてはさあ、どちらかと言えばよくないのかなって思う」

「へえ……？ ……そうなんだ」

これは意外だ。

ハミも授業中とかに食事をしていてよくない、みたいな考えがあったってことだろうか。

「たぶん、トオくんが考えてるのはあ、また……別のことだよお」

「別のこと？」

「うん、ハミはあ、食べてると幸せ……だけどお。それもちよっとの間でさあ……すぐお腹が空いちゃうんだあ」

「その食欲は本気で謎に値するな」

栄養はどこに行ってるんだ？
頭と身体の発育には供給されていないと思うけど。

「でも、結局さあ、食べても完全には満たされないわけでしょう？
延々と満たそうとすんだけど、また満たされなくなる。なんか意味
はないことを延々とやってる気がするんだよねえ」

「でも、人間が生きてるなんてそんなもんだろ」

「まあねえ、でもさあ、もっと満たされる方法があるのかなあ、と
は思うよお」

「なに、それ？」

「……それは内緒だねえ」

そうですか。

手がかりになりそうなら、ならなそうなら。

……まあ、ならないな。

普通の人とハミを比較するのが間違ってるのかもなあ。

なんとか情報を集めるのだとしても、その方向性がわからないと
どうしようもない。

現場百回……にしても、日中に普通に立ち入ったところでああ。

……いや、現場か。

その方がつとり早いかな。

「あのだ、ハミ」

「んー？ なあにい？」

「ハミに探して欲しいモノがあるんだけど」

「……なにを？」

「なにをって言うか……あつてはならないもの」

きよとん、としたようにハミは首を傾げる。

まずはこれで、とっかかりは出来るだろう……けど。

ぼくはそのこと自体にはどうでもいいと思ってて。

世の中の大半の問題は問題そのものを発見するよりも、どうそれと接していくかの方がよほど問題なわけで。

どうしたものかなあ。

ぼくが人と関わることを避けていることの理由の一つが、その人と関わる以上、その人間を理解できなければ意味がない、と想っているからでもあった。

でも、まったく持ってそんなことは面倒くさいわけで。

本当にどうしたらいいんだろうか。

……私は私を殺したいと思った

樋口カナはどうでもよくなって、ただその場にいた。

あらゆることに無関心だった。

だれが目の前にこようと。

だれが目の前にいようと。

だれがなにを言おうと。

だれが　なにを思おうと。

どうでもよかった。

彼のいない世界に興味はなかった。

ただ、樋口カナはそこにいた。

必死にだれかがずっと話かけていたようだったけど、どうでもよかった。

うつとうしくはなかった。

話を聞こうとか、聞きたくないとかそんなことすら思わなかったから。

いようがいまいがどうでもいい。

……彼以外は。

そうして、彼の葬式を終えた頃、樋口カナにはあるうつすらとある人物が見え始めていた。

どこかで見えたことあるような顔の、いつも日常的に見ていたような顔の女。

悲しそうで寂しそうで、自分はまるで孤独だと言わんばかりのそ

の顔が。

樋口カナはなぜか気に入らなかった。
まるで自分が被害者で、この世で一番不幸な存在だと思い込んで
いるようなその顔が。

それは自分だった。

もう一人の自分がそこにいた。

なにを言うでもなく。

なにかを伝えようとする意志もなく。

樋口カナは樋口カナを見ていた。

「アイツ……」

気に入らない。

あれはいつたい何様なんだ。

なんのつもりでここにいるんだ？

だれにも興味はなかったけど、それだけには憎悪をもてた。

私は私を殺したいと思った。

そして、きつと。

そいつもそう思っているんだろうと思った。

私も私を殺したいんだろうと思った。

彼と同じだ。

私もそうなるんだろうと思った。

……俺がここで眠る理由

9 .

俺は事務所に入るなり、速攻でソファーに寝そべった。

頭からコートをかぶり、安っぽい蛍光灯の光が当たらないようにする。

この事務所のソファーは、金を掛けているのかやけにふかふかしていて寝心地がよかった。

「……赤霧、お前はここに寝に来ているのか？」

巫月が特に興味もなさそうな声で言った。

俺はより深くコートをかぶる。

「……んだよ、悪いかよ」

「いや、問題はない。ただ自分の家があるだろうと思っただけだ」

「最近、うるさくて眠れねえんだよ」

「うるさい？」

……俺は巫月の言葉を無視する。

自分の部屋が安らぎからほど遠い場所になっているのは正直、俺からすれば笑えない話だった。

落ち着けるのはここにいる間ぐらいだ。……今のうちに寝ておくしかない。

なのに、巫月は関係なく俺に話しかける。

「うるさい……ね。誰か来ているのか」

無視する。

頼むから……寝かせてくれ。

「お前のマンションは防音設備もよかつたからな、隣人の騒音ではないだろう？」

引き続き無視する。

「環境に問題でもあつたか？」

「……」

「……プライベートの話なら突つ込みはしないが」

「……」

「……確かお前は巳鏡とは仲がよかったはずだが、あれはうるさいという……」

「うるせえよ！ むしろ、アンタがうるせえよ！ つか、俺は巳鏡とは仲良くない！」

つい起き上がって巫月を怒鳴りつけてしまった自分に気付く。

……なんでこんなにくだらなことを気にするんだ、コイツは。

「別に……お前に関係ないだろ」

「まあ、な。ただ体調を崩す要因があるんだつたら放っておけないだろう」

「……アンタは俺の母親か？」

「……一応の保護者には違いないが？」

……その通りだった。

俺がこうしてある程度の自由が保証されているのも、巫月が保証者としていてくれるからだ。……獵犬を扱う狩人として。

「いいのか悪いのか、年齢もさほど離れていないしな。相談ぐらいならのれるだろう?」

「余計な氣い回してんじゃねえよ」

そう言つて、俺はコートをかぶり直して横になる。

俺は金さえあれば、一人でも生きていけるつもりだ。

その自由が保証されていれば、と言う誇れない前提が必要になるのが情けないことこの上ないが。

「……赤霧」

「なんだよ」

「自由になりたいか?」

なにを言い出すんだ、コイツ。

「……そりゃ……そうだろ」

「……そのためにはある程度の実績がなければならぬ。協会に対し貢献すること、相応の期間を過ごし、自身を社会の中で安全に生活出来る存在だと示す必要が」

「わかつてるよ、何度目の説明だ?」

ここに来る前にも、来たときにも説明された。

いつかは自由になれる、巫月がそう言ったから俺はここにいる。そつでなきや、とうに死ぬ氣、いや……殺されてやる氣だった。

「……私は」

ひどくいづらそうな、切れの悪い調子で巫月は続けようとする。

「もし、お前が……」

そこまで言っておいて巫月は……。

「……いや、余計なことを言ったという自覚はある。忘れてくれ」

そうして言葉を切った。

コイツ、またろくでもないこと考えてやがるな。

俺はその様子からそう感じ取る。

「……巫月」

「……なんだ？」

「恨んでねえし、後悔もしてねえよ」

そのまま言葉は途切れる。

パタン、と本かなにかを置くような音がし。

「……そうか」と、そう小さな声で返答があった。

俺はコートをより一層深くかぶり直し、顔を隠す。

アホだ、こいつ。

もし、俺がそんな風に思ってるんだったら。

……事務所を寢床になんてしてねえだろうが。

誰も彼も、気を遣い過ぎなんだよ。

……ここは。

いつもいつもよりおかしい

10 .

「ねえ、今日も事務所に行くのぉ？」

ハミがそう聞いてきた。

ぼくは頷く。

「ああ、行くつもりはあるよ」

「……真面目だねえ」

「うるさいな」

……昨日と変わらなくても。

それでもやれることはやっておきたい。

「ハミ」

「なあに？」

「昨日の件はさ、今までの事件と関係あると思うか？」

「……どうだろねえ、関係なくもないかもしれないけどお、でも、もしそこまで深い繋がりがあるなら、昨日のうちに呼び出ししかかっているんじゃないかなあ？」

……巫月さんだってバカじゃないしさあ

「まあ、確かに」

「どうせ、たいしたことないと思うよお？ ハミとしては、また食事が出来ればいいけどねえ」

「……ハミはそうだろうね」

「うん、だいたいハミは困らないよお、今さらなにが起ころうとお……」

そこまでハミは言って、ぼくの手元を覗き込む。
ハミは新しいカレーパンを開けながら言った。

「で、ねえ、さっきからあ、いつたいなにを読んでののお？」
「なにつて……」

ぼくは自分の手元を返してみせる。
その表紙がよく見えるように。

「……別に、詩集だよ」
「……詩い？」
「……詩」

なんか、今ひどい顔してみられたような気がする。

「なんかあ、大量に本が机に載ってるけどさあ、これはあ？」

ジャンルと言う視点で見ると、内容はバラバラに積み込まれてい
た。

『近代の超常現象』の解説や、世界各地の古い伝承を集めたもの。
『すぐに使えるわかりやすい心理学』や心霊現象などの怪談特集
もの。

有名な著作者の小説も何冊か混じっていた。

「……これから読むんだよ」
「全部う？」

「まあね」

「……本読むの、趣味だったけ？」

「3分以上活字を読むと正直吐き気がする」

「うわあ、……なんでそれで読んでいるのかあ、ハミ、わかんないよ
お」

ぼくも本気でよくわかんないよ。
どついう気分でこれ書いたんだ、作者。

恥ずかしくないのか？後世の人間にそれも何万程度じゃきかない
人数に読まれるんだぞ？

息子どころか、自作の詩を孫の孫にすら読まれるんだぞ。……理
解できん。

ぼくだったら自分の子供にすら読ませたくないな。こついうのは
とにかく、あらゆる意味ですごい神経の持ち主だったに違いない。

その割に、……どうでもいいことで悩んでるよな。なにこいつら、
今朝の夢の内容ぐらいでいちいち一喜一憂しているんだ？

「読んでて……楽しい？」

「……その質問に答えるよりはおもしろいよ。」

「うわあ……ひどっ」

いや、その質問する神経の方がひどいから。

って言うか、楽しいかわかんないから読むんじゃないのか、普通
は？

……ぼくは違うけど。

慣れない作業に諦めずに読み進めるが、ピンと来るものはなにも
出て来ない。

「お昼ご飯食べないのお？ 昼休み終わっちゃうよお？」

「……昨日、食べたからいい」

「意味わかんないよ！」

今それどころじゃない。

「……なんかあ、今日のいつもよりトオくん変だよあ？　すごい意味わかんないしい、いつも意味わかんないけどあ」

「……ひどいことを言われたが、今はそれどころじゃない。と自分に言い聞かせる。」

「そういえばあ、さっきの……トオくんの頼みだけだよ」

「……うん」

「日中は無理かもあ。他の人の気配が多すぎるしい」

「……放課後なら？」

「……それは出来るけどあ、たぶん、場所も変わっていないだろうしい」

「頼むよ」

ぼくがそう言ってもハミは納得していないようだった。

「あのさあ、今更そんなの見つけてどうすんのお？」

「……どうするって」

「たぶん、もう保たないよあ。あれからもうちょうど一日過ぎるわけだし」

「……なら、今日がぎりぎりってことか」

急がないとな。

そうぼくが言つと、眉間にしわをハミは寄せた。

「だからさあ、どうすんのお？　助ける気なお？」

「……別にそう言っ訳じゃ……」

「もしそうならさあ、そんなの意味ないから。もう手遅れだし」
「わかってるよ、だから今出来ることをするんだ」
「……なにも出来ないよ」

そんなことを言われる筋合いはない。

ぼくはノートを広げて、なにかを書き写す。

書き写しては書き換えて、書き消して、また書き写す。

……最悪、授業中にもやればいいか。

おしゃべりしてるよりはいくらか有意義だろう。

「だからあ、なにしてるのさあ？」

「……悪あがき」

「意味わかんないけどお」

「ぼくは初デートの時は、プランをきちんと練るタイプでさ」

「……えっ、したことあんの？」

「一度もない」

「……そこまで思いつきり断言する人もお、なかなかいないと思うよおっ。」

好きな子の手を握るところか、話したこともない。と言っても過言ではない。

……格好悪いから、言わないけど。

ふと思いついて話す。

「ハミはさ」

「……なにさあ」

「どんな状況なら自殺するっ？」

「そもそもしない」

……ですよね。

ハミはしないよね。

「強いて言うならあ、食べるものなくなったらするかなあ？」

「それ、必然的に死ぬしね」

参考にはならなかった。

突然、ハミはぼくの耳元に顔を寄せる。

「え？ あ？ ……な、なんだよ」

「……いや、ここでキスするつもりはないけど」

「そんな期待はしてない！」

って言うか、ここでってなんだ。ここでって。

「そついうのが好みなら考えるけど？」

「そついうのがなにを指すかはわからないが、ぼくに妙な性癖はない！」

たぶん。

……今のところ。

ハミは耳元で小さな声で語る。

「遠野、死ぬ理由なんて人それぞれだよ」

耳が息に当たって、じゃなく、耳に息が当たってくすぐりたい。

「そんなものに絶対的な答えなんかない」

「え、うん……まあ、正論だな」

なぜかな。なんか、頭が回らないんだけど。

やけに息が当たってるぞ、おい。つか、わざと当ててない？ ねえ？

うわ、なんかカレーの臭いがする！ それとなんかいい匂いと混じってるよ！？ そこは統一してよ！？

「……遠野がなにを考えてるのか、私は知らないけどさ」

「……ああ」

本当に？

本当は、今現在お見通し気がするんだけど！？

「冷静になりなよ、……遠野」

「……ぼくは今現在進行形で冷静です」

「ふうん？」

「……本当に！」

「まあ、いいけどさあ、いい？ 遠野」

「……」
「本人に聞くしかないことを考えるなんて、時間の無駄だよ」

本人に聞くしかない。

それは……。

「そう、だな」

「でしょ？」

ぱくつ。

……。

ハミは元のように椅子に座り直し、コーヒー牛乳を飲み始めた。

……ぱく？

「って、おい、今のなに!？」

なにかに今、耳を挟まれたぞ。なんか……暖かいなにかに!？

「……なにつて……なんだろ、味見？」

「するな！ 無断で、こんなところで、しかもいきなり！」

「時と場所を選べばいいいの？」

「じゃなくて！」

「する前に合図は必要ってこと？ ……案外、乙女だよ、遠野つて」

「違う！」

そうなんだけど、違う！

違うとなんか言い切れないけど、違う！

「でも、……なんかあ、そういうところが逆に悪くないっていうか

あ……」

「くそっ、もういいよ!！」

なんか……未だにドキドキするんですが。

……こんなだから変な噂されるんだ！

ぼくが悪いのか？ ぼくのディフェンスが悪いのか？

でも、まあ、実際の所。

「……ハミの言うことも一理あるんだよな」

「人前でのプレイに関して？」

「お前はさっきまでぼくにどんな話してたんだよ!？」

そんなディープな話はしてない！ 少なくともぼくは！

「……そうじゃなくて、実際に死んだ理由なんて本人に聞くしかない……んだよな」

生きてる人間がなに言っただって、それは予測でしかない。

「そつだよお、だいたいさあ……」

ハミは言う。

本当の意味での自殺なんて、理由なんかないんだから。

そつ、何でもないことのように、ハミは言った。

「……そりゃ、どついう意味だよ」

「……さあ、ねえ」

にやにやとした顔で、ハミはぼくを見た。

……。

……ハミ。

そつやって意味ありげな科白で、意味もなくぼくを惑わすのは、いい加減やめてくれ。

……私は私に殺されるに違いない

11.

私は学校に通うようになった。

どうせ、そのうち死ぬのだ。

いつもつきまといっているそいつは、いつか私を殺すだろう。
私の望みを叶えてくれるだろう。

彼を彼が殺したように。

私も私に殺されるに違いない。

それはすこしだけ、嬉しさと誇らしさがあった。

私は学校に行った。

なにも変わらない日々がそこにあった。

彼を失っても、続いていく世界があった。

私は世界を憎悪した。

それでも、私は学校に行った。

世界はひどくうるさく。

耳障りで。

目障りで。

世界に対する意識を取り戻せば、取り戻すほどに。
認識を持てば持つほどに。

醜くて、鈍感で、無関心で。

そのくせ、小うるさくて、耳をよくて、余計なことばかりしてくる。

もう邪魔はしないで。

私に構わないで。

「こんな世界なくなればいい」

……私はそれでも学校に行った。
その背後に私自身を引き連れて。

いつも同じことを想う

12 .

ぼくは教室に足を踏み入れる。
慎重にゆっくりと。

まるで、水面に波が立たないようにするよう
ぼくは物音も立てずに一歩、一歩と進んだ。

時間は放課後。

校舎からはほとんど他の生徒の気配はしない。
残っているのは、ぼくと……。

次第にうつすらと目の前に現れる気配。

それはまずは影として、次第に形が見えるようになり、目をこらしていくうちにそれは女の子だとわかった。いや、もともとわかっ
てはいた。

ハミに調べてもらい、その存在がまだいることを確認し、他の余
計な気配がないこの時間を見計らってぼくは来た。

彼女に会うために、彼女の気配を他の気配が隠してしまわないよ
うに。

ぼくとハミの隣の教室、つまり、彼女自身のクラスで。

「やっぱり、まだ残ってたんだね」

ぼくは彼女に話しかける。

こうして話すのはおそらく初めてだろうか。

「……遠野くん、ね」

それは、ぼくが大神アスカと見間違えた人物。

そう、ぼくは樋口カナと会いにここに来た。

「……ぼくのことを知ってたの？」

「まあ、ね。こうして話すのはたぶん初めてだけど」

「そう、だよな」

あまり顔は広くないつもりなんだけど。

なんかまずい噂広まってるのかな、やっぱり。

「で、その遠野くんが私になんの用？」

「いやね、なんでこんな時間になってまで残っているのかなって」

ほら、とぼくは窓へ視線を促す。

真っ赤な光が窓から差し込む光景がそこにあった。

「もう、放課後だよ」

「……そうね」

彼女の瞳をのぞき込む。

そこには光はなく。

その目は夕暮れの赤い光を映すことはない。

死者の目……というものなのだろうか。

「なんかこの教室に用事でもあるの？ ……樋口さん」
「……………」

ぼくは彼女に笑いかける。

「……………ねえ、こつという話があるんだけど、知ってる？」

彼女の瞳はぼくを見た。

その瞳にぼくは映らない。

だが、言葉は聞こえている。

きつと、ぼくには彼女を本当の意味では理解できないだろう。
だから、ぼくは ……

静かな声で紡ぎ始めた。

「誰もが眠る静かな夜、私の恋人はかつて此処に住んでいた」

彼女はぼくをいったい何事か、と。

そんな顔で見る。

ぼくはもう一度、笑いかける。

「あの人はもうこの街にはいないけど、この家はまだ此処に残っている」

彼女の瞳はぼくを映さない。

だけど、彼女のその目は大きく見開かれる。

「私はここからその家を見上げる」

彼女は痛みを知っている。

「この手が大きく震えて、鈍く重い痛みが私を襲う」

「その姿を見て私の心臓は激しく鳴った」

それはぼくの知らない痛み。

僕の知らない 傷。

「私の家の中に住まう影」

「月が照らすその影はいつかの私」

「私を見下ろす私の姿」

「ああ 貴方はもう一人の私 その青ざめた顔」

「そう 貴方は去りし日の私」

「二度とは戻れない日の私」

「幾夜 此処に悩み佇んでいたのだろう」

「私は幾度となく同じことを繰り返す」

「そして……同じことを想うだろう」

彼女はいつかしか、自身の痛みをその詩に重ね合わせていた。

痛みや傷を持つ人は、それに触れるたびに思わずにはいられなくなる。

たぶん、それが人間の弱さだ。

ぼくは …。

「永久にそこで悩み続けるのも美しいのかもね？」

そう彼女に語りかける。

もうその影を見上げてくれる人はいなくなったけど。
彼女の場合は見下ろした、いや、見限ったわけだけど。

彼女ははつとしたようにぼくを見、口を開いた。

「……そうでもない、よ」

「そう……そうだね。いいことばかりじゃない、かもね」

樋口さんがそう言うならそうなのだろう。

想い続けることは美しい。

残留する想いは不変かもしれない。

だが、変らない想いを抱き続けるのは。

治らない傷を持ち続けるのは、きつと、とても。

……つらいことなのだ、とそう思う。

「女の子ってさ」

「……うん？」

「さっさと終わったことはアルバム燃やして忘れて、ああ、自分のいい経験になった……そう一方的に勝手なこと言っただけで忘れるもんだと……ぼく、思ってたんだ」

「……それ、たぶん大正解」

「そうかな」

ぼくは樋口さん見てたらわかんなくなっちゃたよ。

樋口さんは笑いながら話す。儂げな笑顔。

「女ってさ、基本忘れるんだよ、たぶん。自分が生きてくのに都合

が悪いことは」

「……うん、それはなんとなくぼくも思ってた」

「それを女子に面と向かって言う？　でも、ま、実際なんだかんだ女友達でおしゃべりして、昔の暴露話なんかの格好のネタになってきつと最後には楽しくやれちゃうんだ」

そう、つらそうに話すから。

ぼくは思った。

「それが許せなかったの？」

「……………」

彼女から返答はない。

その代わりに、彼女は問いを返した。

「さっきの……や」

「……うん」

「さっきのは……なに？　遠野くんが考えたの？」

「いや、違うよ」

ぼくは詩人じゃない。

そうだとしても、自作の詩を人前で発表できるほど厚顔な人間じゃない。

「ハインリヒ・ハイネって言うドイツの詩人がいてさ、その詩をばくなりに解釈して、まあ、訳してみた」

「へえ、そんなことが出来るんだ」

「いや、あれですよ。ぼくはドイツ語なんて読めませんよ？」

「……わかってる、苦手教科は英語なんですよ」

「誰がそんなことを!？」

「なんだ違つもの？」

いや、事実だけど。

つか、事実だからこそ広めるなよ！

「でも、あれだね。男子つてみんなそういうの知ってるの？」

「……いや、そういうわけじゃないと思うよ。ぼくなんか、昨日今日に知っただけだし」

詩なんて普段読みません。

同年代の男子代表で赤霧先輩もアウトだろう。

あの人が詩とかなんとか読んでたら、正直鼻で笑ってしまう。うん、笑った拳げ句、思いつき見下してしまう。

「ふうん……そういうものなの？」

「うん、詩なんて興味ない人が大半じゃないのかな」

「そう……なんだ」

どこか深く、地面の下を覗き込むように床を見下ろした後、彼女は言った。

「私の好きな人はさ、そういうの書いてた」

「へえ、変ってるね」

「そう？」

「うん、ぼくには無理だな」

そういうのって、成人してから見たら悶絶しそうだ。

若いうちの恥を搔くっていいのはいい経験だとしても、可能なら形には残したくない。

「……なんていうのかな、楽器とか演奏する人でさ」

「へえ、格好いいね」

「うん、バカみたいだけど、まあ、格好よかった」

「ぼくは、……そういうの出来ないから羨ましい、かな」

「あー……でも、うん。ウジウジしたヤツでさ。なんかもうソイツ見るたびに、苛ついて苛ついて、もう気持ち悪いつたらなくて。すつごく前のこと常に後悔してんの」

「へえー……」

なんだろう、なぜかぼくが責められているような気分になるんだ
けど。

「えーと、それはもう済んじゃってどうしようもないことばかり？」

「そう、そんなんで生きるだの死ぬだの、幸せだの不幸だのって騒いでんの。どう思う？」

「どう思うって……」

たぶんその人とぼく、同類だと思う。

ぼくは女々しい人間だった。

「……そういう人って、周りの人のこと見えてなかったりするかもね」

「え？」

彼女の表情に理解の二文字が浮かんでなさそうなので、ぼくはもう少し、言葉を付け足す。

「いや、周りを見る余裕がなさそうってこと」

あれ？ だからぼく、他人に興味が持てないのか？

自分で言っていて、納得しそうになった。

「……んー、まあそういうところはあったかもね」

「ああ、やっぱり?」

「うん、周りの想いとか全部ないがしろにしてさ。騒ぐだけ騒いで迷惑掛けっぱなし」

「……じゃあ、ぼくもそうなんだろうな。きっと。」

うん、みんなごめん。

「……そんなんで、たぶん私の気持ちなんか気付かなかったと思うよ」

「え?」

「アイツ、私にいる時、ずっと自分の好きな女の話してたから」

「あ、ああ、そうなんだ」

「……ひどい話だ。」

てか、付き合ってる訳じゃなかったんだ。

「でも、好きだったんだ」

「うん、今となってはなんでか、わかんないけどね」

「今は好きじゃないの?」

「……たぶん好きだよ。でも、アイツと付き合っても幸せにはならなかったと思う」

「……うん」

「誰かと付き合って幸せになるってさ。一人でもそれなりに幸せに生きて行けそうなヤツを選ばないと無理だと思っただよね、自分もそれぐらい強くなきゃ無理と思うしさ」

「どういうこと?」

「……誰かと付き合っても、ホントは人間一人ぼっちってこと」

……なんか難しいこと言うな。

「なに、遠野は誰かと付き合ったことないの？」

「……ないけど」

「……へえ、そっか」

「なんでさ」

「いや、ちょっと意外。もうそういう相手いるのかなと思って」

「そう言う相手？」

「うん、婚約者のな」

「いつの時代だよ！」

「いやいや、そういうことじゃなくて。と樋口さんは焦ったように言う。」

「……本気の科白だったのか。」

「なんか、そういう雰囲気だからさ」

「雰囲気？」

「話してから思ったんだけどね、私さ、男女間で友情はない、と思ってるの」

「……いきなりなんだ。」

「彼はさ、私のこと親友だとかほざいてたけど、そんなのバカみたいな話でさ。実際、私はそう思ってなかったし」

「……うん、まあ、そうだよな」

「でも、アンタはさ、向こうがどう思ってるようがそういうの真っ先に無視できるんだろうな、って思って」

無視する？ ……相手の想いを？

んー、そういうことは今まで考えたこともない話だった。
どうだろうか、……そう言われたらそんな気もするけど。よくわからない。

「……でも、それと婚約者とどういう関係が？」

「もう、最初からそう言う相手が決まってるんなら、そういう人もありえるのかなあって思って。男って基本、手を出せる相手には出すもんだと思うからさ。出さないのなんて、他の女に完全に目が行ってるか、相当魅力がない時ぐらいでしょ？」

「……それに関しては否定しないけど。でも、残念ながらぼくには好きな相手はいないよ」

本当に残念なことに今も昔も。

だから、好きな人の手を握ったこともなければ、いつさい話したこともない。

もし、そういう相手がいたら今より多少人生楽しくなるのだろうか。好きな人がいる人を見て、そうだとはいまったく思えないのだけど。

「……そっか、じゃあ」

「うん」

「ま、もうこの話は私には関係ないけど」
「なんだそれ」

ひどい話の切り方だった。

女の子って、みんなこうなのだろうか。

ハミもこんな感じの一方的な切り方する気がする。

「それはともかくさ、彼もアンタみたいな感じだったら良かったのかな。それとも、今よりキツかったのかな？」

まあ、どつちにしろ死んじやってたと思うけど。
そう、彼女は冗談めかす。
死ぬほど笑えない冗談だ。

「もしかしたらただけどさ、恋が上手く行く相手だったら好きにならなかつたかもね」

ぼくはなんとなくそう思った。

上手くいかない相手だから、恋しくなる。

「……かもね」

彼女もなんとなくなのか、頷いた。

「……結局似たもの同士だったのかな」

「なにが？」

「彼さ、好きな女が死んだらしいのよね。私はその女と直接会ったことは……まああるにはあるけどさ、話したことは何度かしかなかったから、いまいちアレだけど」

「へえ……」

それは、何とも言い難い話だな。

本当に、何とも言い難い。

「彼ひどく落ち込んでさ、元気なくって。私、これでも必死になつて彼の所通つたんだよ？でも、まるで効果なくて」

「……うん」

「しばらくそうしてたら、勝手にふっきれたって言って学校通い始めて」

「学校に？」

「うん、で、私も複雑な心境ながら、一応安心してただけどいきなり電話来てさ、家に来てくれないかって」

そしたら……。

そこまで話していた彼女の顔が一気に歪む。

「死んじゃった」

「死んだ？」

「うん、自殺」

痛そうに彼女は胸を押さえる。

まるでそこになにかが刺さっているかのように顔を歪ませ、胸にその爪痕が残るんじゃないかというほどに抑え付けている。

……彼女はもしかしたら覚えているのかもしれない。

人でなく、残留する記憶として、消えることのない記録として、決して色あせずにその時の想いを持っているのかもしれない。

だとしたら。

ぼくはなんて残酷なことをしているんだろう。

「ねえ、私、後追い自殺ってことになるの？」

「さあ、どうだろう」

そういった話をぼくは聞いていなかった。

だから、ぼくは正直に言った。

「……君とは仲良くなかったしね、わからないよ。正直な話興味もなかったし」

嘘は嫌いだし、ごまかしも嫌だ。出来るなら吐きたくはない。
彼女は複雑な顔をして見せた。

「まあ、そう……だよな」

意外にも納得する彼女。

気分を害した様子はなさそうだったが、何とも言えない表情で言葉が続けた。

「……私さ、なんかさ。もし、後追い自殺だと思われてるんだっ
たら嫌、かな」

「嫌？」

「私は、彼のために死ぬんじゃないの。私は私が嫌になったから死
んだの」

「そっか……ならばくがそれを伝えておくよ」

「……誰に？」

「一番わかってくれそうな人に」

「……んー、まあ、じゃあ ……それでいいや」

彼女の姿がどこか薄くなったように感じる。

もう日も落ち、あたりは暗くなり始めていた。

ぼくは彼女に出来るだけ、優しく語りかける。

「そろそろ、帰らないといけないね」

「え……ああ、そうだ。もうこんな時間」

「うん、そう。実はもうこんな時間なんだ」

「なんだろ、最近さ、時間の感覚がなくなって」

「ぼくは、よく曜日感覚を失う」

「……なにそれ」

呆れたような、でも、楽しそうな笑い声。
その存在は限りなく遠くなり、もはや目の前にいるのかどうかも
定かではない。

「そういえば、さっきの詩を」

「うん？」

「題名、なんて言うの？」

「題名……そんなのが気になる？」

「彼がさ、そういうの好きだったからさ」

なるほどね、そうぼくは頷いて。

言葉を続けた。

「詩の題名はね、『影法師』……またの名を」

ドッペルゲンガー。

「ドッペル……ゲンガー？」

「そう、その意味を『二重に出歩く者』。つまり、もう一人の私」

「もう一人の私……」

「君は見たことある？」

「私……は？」

僅かに見える樋口さんの顔は、なにかを見ようとするように目を
細めていた。

それは近くもあり遠くもある記憶。それを……。

「……あ……る」

掴んだ。

「……あるよ」

「本当に？」

「うん、見てた」

「見てた？」

「ずっと、見てた。ああそうだ。私は……」

「君は？」

「私がもう一人の私だった」

「え？」

ぼくは彼女を見る。

彼女は笑った。

「ホント、駄目だな。私の周りの人ってみんなお節介だ、余計なことを気付かせてくれる」

「……そりゃ悪かったよ」

正直、余計なことしてるような自覚はあった。

「ううん、私もたぶんそうだったんだ。でも、ごめん。ああ、遠野くんに言ってるわけじゃなくて……そう謝っというて欲しいの」

「誰に？」

「あのね、でも……ううん、それよりも苦しんできてると思う」

「だからなにが？」

「私が私自身を見るようになったのはね、彼を見たからなの」

「……見た？」

彼女は頷く。

その声は最後に耳元で囁かれたような、いや耳の奥から響いたような気がした。

ドッペルゲンガー……と。

いつも臆病なのはぼく

13 .

「この事件の自殺者はその以前にほぼ全員がこう証言している」

コーヒーを飲み、一息おくようにして所長は言った。

「もう一人の自分を見た、と」

「それはつまり……ドツペルゲンガーですか」

「ドツペルゲンガー？　なんだそれ」

赤霧先輩は眉にしわを寄せて聞いた。その仕草は凄んでいるように見えなくもない。

ぼくはいつものように呆れる。

「……先輩、魔術師なのにそんなことも知らないんですか」

「俺はまともに魔術を修めている訳じゃねえんだよ……それに、今回の話はあんまり魔術の領分ではなさそうだし、な」

そう言って、コーラを一気のみする先輩。

空のグラスをぼくに向けて先輩が差し出したのを確認するが、ぼくは先輩の目の前にボトルを置くことで対応する。……わざと大きく音を立てて置いてやった。

それぐらい自分でつげ。

巫月所長はその様子を見て苦笑しながら、赤霧先輩の科白に同意

を示した。

「……そうだな、赤霧の言うとおり魔術の領分から外れている部分もあるかもしれない。私は魔術の専門家ではないのでなんとも言えんがな」

じゃあ、所長の専門ってなんなんですか。

とは、聞けずに話は進む。聞いたら話が横道に逸れかねないし。

「ドッペルゲンガーというのは、ありえない状態で目撃されるもう一人の自分のことだよ。言葉そのものを直訳すれば『二重に出歩く者』と言うのが一般的な解釈だろうか。」

特にドッペルの言葉の意味には悪しき存在を意味する部分があつてね、悪霊的なものだと思えることも出来る」

「悪霊？ もう一人の悪い自分と言うことですか？」

「その『悪い』は人間から見た定義だろうだがな、今いる自分と言う人間にとっては都合の悪い自分、人が切り捨てられたもう一つの可能性なのかもしれない」

「可能性……」

「そう、人間の霊的な部分は陰と陽、光と影、善と悪、と言った複数の二つ以上の概念に分かれるといった解釈がよくなされている」

ああ、そういうのはなんとなくわかる。

あれだろう、天使の自分と悪魔の自分が語りかけてくるみたいな図がよく漫画かなにかであったりする。ああいった感覚なのだろう。

「そうなると人間の悪の部分がドッペルゲンガー、だと？」

「そう解釈出来ると言うだけだ。そもそも、このドッペルゲンガーと言う言葉自体はドイツ語なのだが、こういったモノの記録や伝承は実は世界各地にある。」

それも最近の目撃例すらあるほどだ。……この現象の定義はこうだ、一つ目がもう一人の自分自身を自分が目撃してしまうこと。

もしくは第三者がもう一人の自分を目撃することを指す。この時、自分自身を見た者は死ぬ、と言う話も付属することがある。

よく勘違いされるのだが、この時目撃されるもう一人の自分は必ずしも自分と同じ姿形をしているモノとは限らない。自分よりも老いていたたり、逆に若い場合もある。それどころか、自分とはまるでかけ離れた姿であることも少なくない。それでも、人は見たときに確信するそうだ。

これは自分自身だ、とね。

その本人の認識そのものには善も悪もない。ただ自分自身と言う実感のみがある。その現象に恐怖を覚える例がないわけでもないがね」

自分と同じ顔すらしてない相手を自分と思う。

なんとも奇妙な話に思うけど。

でも実際、自分自身を鏡で見たとき、こんな顔してたっけと思うことなんかざらだもんな。精神的に疲れている時なんか特に。

……よく鏡の前で自分を見失います。

「一般にこの現象はオカルトだと解釈されるが、これは医学では自己像幻視と言われる現象でね、なんでも脳の側頭葉と頭頂葉の境界領域に異常があると、自分の身体の外に自己が存在すると錯覚する場合があるらしい」

「自分の身体の外に自分が？」

「そう、自分の身体が自分でないような錯覚を覚えたことはないか？ それがあるように、さらに進んで自分の身体でない場所が身体のように思うことがある。と言うことだ」

「……なんかイメージしがたいんですが」

「私が彼なのか、彼が私なのか。私はどれなのか、どこにいるのか……遠野は胡蝶の夢を知らないのか？」

「……胡蝶の夢？ 電気羊の夢を見るか、ですか？」

なんか思いついた単語を言っただけで、馬鹿を見るような目で見られた。

「まあ、それはいいでしょう。とにかくその脳の異常によってドッペルゲンガーを見た者は死ぬ、と考えれば科学的にこの現象に一応の説明は付けられるかな。」

病気だからドッペルゲンガーを見、病気だから死ぬ、とね。また精神的な病を原因とすると言う説もある。

この現象の後によくみられるのが、原因不明の病、もしくは事故自殺と言った形での死。いずれも、今のような医学的な裏付けがあれば簡単に納得できる程度のモノだよ。

……と言っても、ドッペルゲンガーは第三者からの観測も可能な場合もあるから、これだけでは説明は付かない。

私が思うに、いくつかそれぞれことなる現象をまとめてドッペルゲンガーとしてしまっているんだろう。だからこそ混乱が生まれているのではないかな。

自己のドッペルゲンガーを目撃した人物は、そうだな、有名な人物だとゲーテ、日本だと芥川龍之介がそうだと言われる。またドッペルゲンガーと言う存在自体が文学や詩の題材として、古くから使われているものでもある。哲学や芸術と言った部分には意外と縁深いものなんだよ。」

「えーと、……それってつまりどういうことですか」

「詳しくはよくわからないと言っただ」

……ここまで話しておいてそれですか。

ぶっちゃけ、話し長すぎて途中から聞いてなかったよ。

「……なんだよ、巫月らしくねえな。そんな話で終わりかよ」

「一応、他の解釈としては、『魂や精神体の分離現象』などの観点も考えられるが、どうにもすつきりしなくてね。結局、幽体離脱の延長線上のようなモノと言うことになる。」

ただし、本人が覚醒している状態での幽体離脱はあまり現実的でない。それも、本人の肉体が別の活動しているという状態だね。そんなことを出来る人間は見たことがないし、それがなら特別な訓練も行っていない人間がそんなことをするなんて言うのもおかしい。そんなものが外部からの要因なく自然発生するとは考えられない」

「いや、だからお前自身はどう思ってたんだよ」

「……まず、自己の分身を作るといっのは術者にとってはよくある話だろう？」

「ああ、まあ、魔術師の使い魔なんかまさにそれだよな」

所長の言葉を肯定する赤霧先輩。

なんだよ、それ。まずぼくにその言葉の意味を説明してください。

「……ぼくはそういうの正直よくわかりませんが、そうになると赤霧先輩が言ったこととは違って、本当は魔術関係あることになるんじゃないですか？」

「そんなもん、ドッペルゲンガーとは別だろうが。使い魔は主人と命や魂、もしくはその一部を共有する。陰陽道における式もまた役割としては近いモノだが、この場合ただの人間の話だろ」

……ただの人間。まあ一般人の話と言えばそれはそうだけだよ。

「でも、所長は関係があると思ってるんですよ？」

「ああ、一般人にそんなことはありえない。ならば、そうでないなら話は別だろう。」

似て非なる分身、使いこなせなければ牙をむく従者。リスクと共に使役されるモノ。ドッペルゲンガーを表出させた事例の中に、言者によるものがある。なんでも同時に複数の場所で説法を始めたらしい。アレがそうだった存在なのだとすれば……」

「はっ、誰がそんな面倒なことを。いちいち素人にそんなことを施すって、どんな重いリスクを背負えばこなせるのか検討もつかねえよ。つか、ありとあらゆる術はその秘匿性が重要だろうが、公然と人前で使うための術なんてありえねえよ。集団催眠ならわかるがな」

「……そこで私が考えたのは先の話だ」

「先の？」

「人間の今生きている中で、切り捨てた不要だと判断し封印した部分を表出させる。あつてはならないもう一つの可能性、自分」

「……シャドウか」

あの、なんか、ぼく話から置いて行かれてるような。
なんなんだよ、シャドウって。普通に直訳すれば影……だよな？
ぼくは赤霧先輩に聞いた。

「ああ？ …… ようするによ、お前、もしも今の今までずっと子供の頃から自分がきちんと勉強してきてたら、もっと頭よくなったんじゃないか、とか思わねえか？」

「そりゃ、まあ、思いますけど」

「でも、お前は別の道を歩んできた」

「……そうですね」

「歩まれなかった道、なることのなかった自分、それがシャドウ。お前の人生の影の部分だよ」

……つまり、パラレルワールドの自分みたいなものだろうか。

Ifの自分と言うこと、もしもあの時自分がああしていたなら。

という過程。

確かに、そこにはもう一人の自分があるのかもしれない。もっと上手く人生生きていたのかもしれない自分、と言う人間が。

「……まあ、単純に抑圧されてきた自分の欲望や願いを指すこともあるがな」

「自分の欲望をシャドウって言うんですか？」

「ああ、欲望に限ったことじゃねえけどそれも可能性の一つだろ。もしも、その欲望が満たせたなら……っーな」

「……それも魔術用語なんですか？」

「いや、心理学かなんかだったんじゃないか？」

なんで先輩がそんなの知ってるんだよ。

ぼくの視線に気付いたのか赤霧先輩は面倒そうに話を続ける。

「……魔術ってのは学問であるのと同時に、己の内面と常に向き合うモノでもあるんだ。

魔術は行使する、つまり火を出して燃やしたりなんて言うこと自体は、本来どうでもいいことなんだよ。己自身を高め、真理に近づく到達するために研究を死ぬまで続ける、求道者のような、いや、殉教者達のためにあるみたいな世界だった方が正しいか」

へえ、なんか赤霧先輩とは対極にある世界の話だな。

宗教的というか、お坊さんのする修行みたいだ。

「うるせえな、おい」

「……ぼく、なにも言ってますんよ」

「目がつせえんだよ！」

ひどい言われようだ。

「じゃあ、あれですか。先輩もその真理への到達って言うのを目指しているんですか？」

「いや、俺には無理だからな。ありゃ生まれで決まるんだ。それでも目指すかどうかは自由だけだな、俺は無駄はしない主義だ」

「……へえ」

無駄に自信ありげな先輩が無理だなんて、どんな過酷な目標なんだ？

要するに世の中、才能が全てってことなのか。

「で、巫月はその可能性の表出と、魔術などによる外部からの影響の双方を原因として考えてるわけだな」

「あくまで私個人がその可能性があると思っただけだ、根拠はない」

所長はどうも自分の持論にすらしっくり来ていないようだ。

ぼくは所長に尋ねる。

「それって可能なんですかね？ ぼくからしたら、どっちにしろあり得ない事態に思うんですが」

「さあ……可能かどうかと言われれば、普通は無理だろうな。普通と言う概念が通じる事態かは不明だが。とにかく確かなのはドツペルゲンガーと呼ばれる現象が確かに発生していると言うことだ」

「確たる証拠もなく目撃証言だけ、ですけどね」

「話を聞いていなかったのか？ この現象は目撃があることを言うんだよ」

「……なるほど」

ぼくは自分の分のコーヒーを飲み干す。

所長の分と一緒に淹れたものの、タイミングがなくそのまま放っていたのだ。

かなり温くなっていたそれは、一気飲みする分には悪くなかった。

もう一人の自分。

ドツペルゲンガー。

それは、ぼくが所長に相談したことの全てのことに対する答えになっていた。

複数の問いに対する、たった一つ解。

本人は関係あるかわからないなどと嘯いていたが、おそらく所長はそのつもりでこの話を始めたに違いない。

でも、だとすると……。

これから続く沈黙の中で、ぼくはつまらないことばかり考えていた。

それはたぶん、迷い　というものだろう。

できること、やれることはわかってる。

それなのに実行するのに、考えるための時間と未来への保証を望むのはそれは要するに。

……ぼくが臆病者ということなのだろう。

いつもなぜいつもだったのか

13 .

樋口カナがどこかへ……おそらくは『別に天国でもないところ』
へと帰って行くのを見送っている。

廊下から、誰かが入ってきた。

そして、第一声。

「ハミはあ、ただの邪魔だったかなあ」

「……そんなことはないよ」

……うん、正直存在を忘れてた、とは本人には言えない。

「いる意味なかったよね？」

「まあ、……確かに出番はなかったけど」

「ただのデバガメ？ハミ、デバガメ？」

デバガメ？

出歯のカメ？

……なにそれ。

「いや、ハミの言ってる意味がよくわからないんだけど」

「なんか、異様に仲良さげだったし」

「いや、初対面だから」

ふん、とハミは何度も頷く。

「……じゃあ初対面の相手に詩を朗読したの？」
「悪かったな！」

ぼくだって恥ずかしかったんだよ、ホントは！

……とまあ、実はもしもの時のために、ハミにはこうして待機してもらっていたのだった。

危険かもしれない相手の前へ、丸腰、無防備で行くほどぼくもお人好しではない。

……それも悲しい話だけど。

「でもお、あれはなんだったのお？ 結局う、樋口カナの幽霊ってことお？」

「あれを発見したのはハミの方だったろうが」

「……いるのは始めからわかってたけど、なにかは知らないよ」

うん、だよな。

君は他人に興味持てない人ナンバーワンだもんね。

「そうだったって、ハミはこの事件の真相には気付いてるだろう？」

「どこから飛び降りがあったかあ、ってことお？」

「そう」

「そりゃねえ、この校内においてえ。ハミが知らないことなんてそうそうないよあ」

ただし、それも知ろうと思えば、の話らしい。

コイツ、その気になれば不可能犯罪をいくらでも量産できる能力の持ち主だからな。

……ある意味で既にしているけど。

「トオくんがあ、大神アスカとの会話についてえ。……ゼーんぶ話してくれたら、私も話していいけど?」

「後半、素に戻ってる」

「いいじゃん、二人きりなんだし」

「……なにがあっても、言わないものは言わない。これは人と関わる上でのマナーだよ」

「変なところ真面目なんだから」

真面目って言うな。

誠実といえ、誠実と。

「でも、遠野。わかっちゃったんでしょ、いつたいあの日なにが起きていたのか」

「そんな大層な話でもないけどね」

人ひとり死んだのに大層な話でもない。

そう、口走った自分に嫌悪感を感じたが、事実、大層な話ではないとそう思っていた。

「ハミはさ、大事な人が死んだらどうする?」

「……なに、それ?」

「死にたいと思う?」

「だからそれ、関係あんの?」

ハミの言葉には怒りが混じる。

ハミにとつてはばかばかしい質問なのか、それともそれだけ大事な質問なのか。

ぼくにはわからない。

ただぼくは正直に「うん、ある」とだけ、答えた。

「……………」

「今回の話そう言う事件」

「……………そういうの、よくわかんないけど。そう思うかも……………しんない」

「そっか、正直、ぼくもよくわかんないんだ。そう思うのだったけどじゃなくて、大事な人が死ぬってこと自体がさ？」

ハミの表情からはなぜか、感情が読み取れなかった。声だけが怒りを示す。

「で、それとなにが……………」

「うん。でさ、死にたいと思ったとするじゃない？」

「……………」

「その後、なにかの間違いでそれがなくなったらどうする？」

「……………は？」

「なくなったのになくならない、それが可能性なんだよね」

選ばなかった可能性が影として残るように、ぼくの中と外には何かが残る。

たぶん、それを記憶って言って、それを見て出てくるモノが気持ちなんだろう。

「……………あのさ、私になに質問したか憶えてる？」

「わかってるよ、要するにさ樋口カナは」

そう、樋口カナは。

屋上から飛び降りた。

そういうことだった。

*

学校に通っていて。

そのうち、気付くようになった。

一人だけ、違った。

他の同級生はおそろおそろ話しかけてきて、へんな距離があるのに。

気持ちの悪い気遣いをしてくるのに。

この娘だけは、ずっと最初からいつも傍にいて。

いつも当たり前のように話しかけてきた。

私は訊いた。

「なんで、いつもいるの？」

「え？」

「なんで傍にいるの？」

その娘は当たり前前のように言った。

「カナが電話してくれたんじゃない」

「なにが？」

「……一番最初に」

「そうだ。」

「思い出した。」

「私は、だれかに。」

「彼が死んだのを見ながらも。」

「呆然としながらも。」

ケータイで連絡していた。

でも、だれに？

「私を呼んでくれたでしょう」

私が。

私が？

そんなはずはない。

「それにさ」

そんなことがあつていいはずがない。

「そんなことがなかったとしても」

私は他のだれもがどうでもよくて。

そんな、私は世界を憎んでいたはずだ。

「そばにいたよ」

だから。

それはあつてはいけないんだ。

「だって、私たち」

もつ。

「私たち、友達だから」

……ああ。
やっぱり、そうなんだ。
そのときに、気付いてしまったのだ。

私の視界の端で佇む、私は。
にじんで、目の前が歪んでいるその先にいる私は。
すぐそこにいる私は。
きつと……。

完全に、そうなんだ、と。
私は自覚してしまった。

*

「樋口カナはさ、気付いちやっただよ」
「なにを？」

「好きな人が死んだら自分も死にたいって思う。ぼくはよくわからないけど、それが自然なこと。でもさ、もしもそれだけじゃなくなつたら？」

「……私にわかるように言ってくれろ？」
「うん、ハミは好きな人が死んだら、自分も死にたいって思うんだよね」

「まあ、ね。多分だけど、ね」
「でもさ、死のう死のうって思っているうちに、もしも傍にすごく優しくしてくれる人がいて、それが自分をとてもわかってくれる人だったとしたら、こう思ってしまうかもしれないよね」

そう、それはひどい話だった。
あつてはならないこと、だった。

「……生きていたって」

「……………」

「全ては可能性だったんだよ、不変の感情なんてこの世にない。少なくとも、生きている限りは。彼女は生きていたからそう思ってしまった」

「……なにそれ？」

「生きていたい、とはちょっと違うかもしれない。学校にいたって思ったのかもしれないし、卒業まで一緒に過ごしたいって思ったのかもしれない。

少しでもここにいたって思ったのかも。とにかく、彼女はここに未練を作ってしまった」

「だから、幽霊に？」

「まあ、そういうようなことかな」

「……なにそれ、好きな人が死んだくせになに言ってるの。意味わかんない！」

「……ハミ」

「好きなんですよ、好きだったんですよ。それが本当の気持ちだったんなら、さつさと死ねばよかったじゃない、なに？未練っておかしいでしょ？本当に好きなら……」

「……だから、彼女は死を選んだんだ」

人間の感情は気持ちは不変じゃない。

恋愛感情なんて、結局は一時のものでしかない。

でも、彼女はそれが許せなかった。

「……好きだった気持ちを嘘にする自分が許せなかったんだよ」

彼女は、他の自殺者と同様に、もう一人の自分が見えていた。

ドッペルゲンガー、つまり悪霊たる二重身が見えていた。

二重身の存在は、それを見た人間に死をもたらす。
彼女の話と総合して推測は確信となった。

彼女はそのことを、自分の好きだった相手の死の時に学んだんだ。

「だから、嬉しかったろうね。死ねるってさ」

「……だから、トオクんの言ってる意味がわかんないって」

「それで彼女は自分が死ぬのを待つことになったんだ、とても楽しみにね。でも、なぜか彼女の二重身はすぐには彼女を殺さなかった」
「……………」

「それがなぜかはぼくはわからない、何かが他の人とは違ったのかもしれない。とにかく二重身は彼女を殺さなかった。それが意図せず死までの猶予期間になったんだ」

その猶予期間が悲劇を招いた。

死を見つめながら、過ごしていく穏やかな日常。

周囲に奇異の目に晒されることもあったろう、けど、彼女の言を借りれば、お節介な人間が彼女の周りにいた。

「その人物は、彼女を、彼女の気持ちを変えてしまったんだよ」

その人が誰かは知らない。

けど、その人はきつと優しく暖かくて。

でも、鈍感な人間だったんだろう。

「ハミはさ、ずっと一緒に過ごしたい人っている？暖かさをくれる人」

「……………よくわからないよ」

「ぼくも。なんかそういうのもよくわからない、でも、そういうものがあつたら幸せな気持ちになれるのかもと思っ」

「……………」

彼女も、そう思ったんだろう。
そう思ってしまったんだろう。
だから、彼女は飛び降りた。

人と触れると暖かい。人のぬくもりはそれを教えてくれる。
でも、教えた当の本人は知らないだろう。

そのぬくもりを知ったときから、触れられない部分の冷たさがより際立つことに。暖かさから離れたときの、凍えるような寒ささえも。

たぶん、肌のぬくもりは伝えられるけど、感じている寒さは伝えられないから。どれだけ言葉を重ねれば、自分が寒い思いをしているって、人は伝えられるって言うんだろう。

そんなのは無理な話だ、だから人は凍える。それに耐える。
……中には凍え死ぬ人さえいる。

「……じゃあさ、隣のクラスの目撃情報はなに？」

「ハミはさっきの彼女を幽霊だと言ったね、でも違うんだ」

「どういうこと？」

「さっきの彼女は、本人が死ぬ前からいた。ハミも言っていたよね、いたのは事件が起きた時点から……最初から知っていたって」

「まあね、美味しそうじゃなかったから放っておいたけど……って、あれが幽霊じゃないなら答えは……」

そうつまり彼女は。

二重身の方の彼女。

「教室でクラスメートと教員に目撃されていたのは、二重身の彼女だったんだよ。本物の樋口カナよりも気薄なもう一人の彼女」

だから、辻褃の合わない証言が発生した。

本人が教室にいたのに、屋上から飛び降りた影が映った理由。それは、本人がもう一人いたと言うだけのことだった。

「たぶんきつとね、樋口カナが自殺を決意したのはそれだったと思うよ」

「……なにがさ？」

「自分の二重身がさ、毎日教室に行つて授業を一緒に受けてる。自分が屋上に行つて、死ぬチャンスを与えてもそうしてる」

だから、彼女は知つた。

自分で死ぬしかないんだつて。

だから、彼女は決意した。

自分の存在はとも許せるものじゃない、殺さなきゃ、と。

本当は死にたいだけじゃないんだつて、自分には生きていたい気持ちもあるんだつて、不幸なことにそう気付いてしまったから。

「人間が生きていられるのはね、ハミ。自分がどれだけ恥知らずで好き勝手に気分で物事をコロコロ都合良く解釈しているような生き物なのか、それを知らずにいられるからなんだよ、それに気付けば死ぬしかない。殺すしかない。だつてそんな生き物、存在するつてだけで気分が悪いだろ？」

自分が友達や恋人が死んでも、当たり前のように生きていける。

人間はそんな自分に気付きたくないから、助けてやれたんじゃないかって悔やむ。悔やんでいると言うことを言い訳にして、自分を許してる。

ああ、ぼくはすごく悲しんです。平気なんかじゃないんだ。別に平然と生きてるわけじゃないんだ。って。

こんなに悲しんでいるんだから、自分は最低な人間なんかじゃない。
い。

……だから、生きていていいんだって。傲慢にもそう思う。

「以上が、樋口カナの飛び降りにおける大層でもなんでもないことの真相……だよ」

死にたいなら死ねばいい。

生きたいなら生きればいい。

そう言う人はいる。

でも、そう考えること自体許されない人もいる。許さない人もいる。
る。

死にたくても、生きていくしかない人もいる。

生きたいけど、死ぬしかない人もいる。

彼女が、樋口カナが間違っていたのかどうかは、ぼくにはどうしようもなくわからない。

とりあえずわかるのは、彼女にとっての生きたいと言う気持ちと死にたいと言う気持ちはイコールで繋がっていたと言う事実と

……彼女が生きていてくれたら、今のぼくは嬉しかったらうと言う、そんな矛盾した答えだけだった。

いつも終わりは非日常から

14 .

この事件は川岸淳という、男子生徒から始まった。それは嘘ではない。

彼の死が全ての、きっかけだった。

それを除けばある意味で、遠野の見解も所長の言にも間違いはない。

彼の死から全ては始まり、全ては終わった。

それは死という名の終わりだ。

始まりは、混沌と言う名の始まりだった。

だが、問題は誰が川岸淳という男子生徒の死の始まりへと選んだのか。

これを仕組んだのが誰なのか、と言うことだ。

俺にとって、形のないものはなんの意味も持たない。

刀を通して伝わる物こそ、刃を透して見える物こそが全てだからだ。

人の心にはそんな確かさなどない。

すぐに揺れ動き、また不変などありえず、劣化し色褪せる。

ならば、いつそ刹那に価値を求めればいい。

一瞬の手応え、喜び、満たされているという実感。

生に対する飢えを満たすモノ、それも結局は永久でないのは間違

いない。

……だが、それでも。

俺はそれを求めずにはいられないし、それがそういうモノだと知
っている。

結局の所、人は他者にありもしない永遠を求めるか、自己の生に
零の瞬間と言う欲望を見いだすしか出来ないのだから。
ならば、俺は後者の生き方を望む。

他者に期待し裏切られ、また他者に相対する自分に期待し裏切ら
れる。それを繰り返すよりは余程、高きへと望めるモノだと思っ
た。

熱の伝わらない幻と。

肉眼にすら透さない想いに。

意味を見いだす人間は世になにを求めるのだろう。

人はそれを、幻想と。

もしくは幻の影、幻影と呼ぶ。

儚い、人の夢だ。

そうわかっていくくせに、人はいつたいなにをしているのだろう。
裏切られるとわかっていいるから儚いんだろうに。

人間は自分達で儚いとそう名付けている癖に、諦めようとしな

俺はそれを横目で見るように歩く。

だが、視界に入れどそんなことは関係ない。

もう、そんなこととは関係なく俺の次の獲物は決まっているから
だ。

それはこれを始めた何者か。

ソイツなら……もう少し、この乾きを癒してくれるのかもしいな
い。

ただそれまでは、情眼を貪っていよう。

猟犬として、獣として狩に出るその日まで。

いつか、野に解き放たれるその日まで。

15 .

ぼくらは学校を出て、校門の前で立ち止まった。
ハミがぼくに聞く。

「で、今日も事務所寄るの?」

「うん……新しい情報も手に入ったしね」

「へえ、伝えに行くの?」

「うん」

「意味ないよ、そんなの。どうせどこからも依頼もないし、だいた
いお金入らないんだから誰も動かないよ」

それは確かにその通りだ、昨日もそうだったし。

「……だけど、それでも行くよ。知った以上は言うのが義務だから
さ」

「義務って言い訳を使うの?自分から知った癖に今さら義務もなん
もないよね」

「まあね、それは確かにそうんだけどさ、放ってはおけないじゃ
ない」

「……遠野はさ」

「ん？」

「嘘は嫌いだとか、隠し事は嫌いだとか、誤魔化しはしたくないとか言う癖に、嘘つきだし本音は隠すし言い訳して誤魔化してばかりだよ」

ハミはそう呟くように言う。

それが不満なのではなく、ただ事実を述べただけと言うかのよう

に。確かに、ぼくはずっと嘘をついたり誤魔化したりばかりしている。それはもちろん今回だけに限ったものではないんだけど。

ぼくはそれから真正面から答えない。

「……そうじゃない人間はあまりいないよ、ハミ。だいたい人間は大方そんなものだろ？」

そうじゃない人間も世の中には残念ながらいる。

全く嘘をつかない人間なんていない、なんて言うのは嘘だ。誤魔化さない人間はいない、なんて言うのはそれ自体が誤魔化しだ。

人間はそんなことをしなくても生きていける、ひどく残酷なこと

に。でも、ぼくは……。

「ぼくは普通の人間なんだよ、ハミ。有難いことにね。普通人間は弱いし嘘をつくし誤魔化すし、言い訳するんだよ。しかも、普通の人間はそれが普通だと思っているんだ。だからぼくは普通の人間なんだよ」

だから、嘘をついていい、とまで言わない。普通の人間にはそれが許されるとは言わない。

「それでも、ぼくは嘘が嫌いだ。憎んですらいる。だから言つよ、
眞実、ぼくはこのままにはしておきたくないんだ。……この幸福な^{ハッピー}
結末^{エンド}なんてありえない戯^{ひま}けた悲喜劇を」

「意味わかんないよ、馬鹿」

「ごめん、ぼくもよくわかんないで言ってる」

「……このお節介」

「知ってるよ、ついでに鈍感で無神経なんだから」

「……胸張って言つな、自己中。いつそ死んじゃえ」

ひどいこと言つな、と思っただけどその通りだからなにも言い返せ
なかった。

鈍感さと無神経さは生きていくのに必要な能力だろうけど、それ
を恥じる程度の神経は残しておきたい。

ハミにこんな窮屈でみじめな想いをさせてるのは、完全にぼくの
自己中心的な行動によるものだから。

「……私には行かないから」

「うん、わかってるよ」

ハミは自分から事務所には行きたがらない。

「だからぼくが行く」

だから、ハミに仕事があるときはぼくが伝える、ぼくが連れて行
く、ぼくが一緒に行く。

ぼくが事務所にいるのはたぶん、結局の所、その程度の理由なん
だと思う。

ハミがいるから、ぼくが事務所との仲介をする。

ぼくの存在意義はその程度のものなんだろう。ぼくが不満なのは、ぼくの存在意義がその程度のもだからだ。

ハミはぼくを見る、ひどく冷めた目で。

「そう、じゃあ勝手にすれば」

そうハミは言い放ち、歩いて行った。

ぼくはその背中に「また明日」と声をかける。

……なんか随分とハミ機嫌悪いな。

今日は特に悪いけど、最近基本的に機嫌悪いことが多いかな。

心当たり……は一応ないんだけど。

単純にぼくのことを嫌いなのもかもしれない。ほら、行動がいちいち気に入らないとか、なんかなよよとしてムカツクとか。

……さすがにそうだったら傷つくなあ。

でも、そんなことを気にしていても仕方ないので。

とりあえず、ぼくは。まあ、ハミは放っておいて事務所に向かうことにした。

心配じゃなかったわけじゃない。

気にしていなかったわけでもない。

でも、ぼくはハミを放っておくことにした。

それがぼくのハミへの付き合い方というものだったから。

*

遠くから二人を見る影。

背後に手を回して、後ろでに手を組み、ソレは二人を見ていた。その口元は笑みを形作るも、緩めていると言うよりは歪んでいる、そんな印象だった。

……歪んだ笑み。

笑みを浮かべる口元とは裏腹に、目には喜びよりも、深い闇色の憎しみと刃のような狂気が宿っていた。

「駄目だなあ、遠野は。せつかくわたしが二回も忠告したのに……」

より深く、笑みを形づくる。

より深く、歪ませる。

「軋呑ハミに近づくなんて」

なのにその姿はどこか希薄だった。

本当に目の前に存在するのかと、目撃者がいればそう目を凝らしただろう。

ヘタをすれば目に入っても、気が付くことすらないかもしれない。だが、間違いなくソレはそこにいた。

「これはちよつと、罰を与えないと駄目かな。だって、わたしの」と無視しすぎだもん。遠野は、さ」

手をゆっくりと前に出す。

次第にその手は変貌し。ゆっくりと……。

「ああ、もちろん。あの女も生かしてはおかないけど」

かぎ爪のように長く鋭い爪と。

獣のように毛深くごつごつした腕へと。

その……姿を変えた。

「駄目だよ、軋呑。遠野はわたしがずっと……」

手の先を、その鋭い爪の切っ先をそつと舌で舐める。

自然と舌の肉はうっすらと裂け、その傷口からは血液が滴る。真っ赤なソレは爪へ、手の甲と伝わりその獣の腕に染みていく。

「目を付けていたんだから」

その舌は爪に付着した血を拭い、喉はそれを味わうように飲み込んだ。

舌が傷ついても、どれだけ深い傷を作っても、ソレは爪をなめ回す。

獲物の血を味わうまでの、僅かな一時の慰みとして。

いつも終わりは非日常から（後書き）

『幸福な結末なんてない』と言うのは、『銀の弾丸なんてない』と私にとってほぼ同義な類義語です。同時にこの物語、悲喜劇のようなものテーマでもあります。だから、なに？なんですかね。

……私は私の願いを叶え(てい)た

16 .

「あなたがいなければ、気が付かなかったのに」

そうなら、私はずっと気付かずに。

この日常を憎んで、それでもここで生きていけたのに。
でも、私は気付いてしまったのだ。

私は死にたくない。

友達と笑っていたいし。

両親とは喧嘩しても、暮らしていたいし。

まだ、やりたいことも夢もあるし。

なによりも。

この娘と一緒に居たいんだって。

あれは私だった。

私の望みを叶える。

私の望みを実行する。

私自身に間違いはなかった。

きっと今頃私は、昼休みを自分の教室で過ごしているに違いない。
楽しく過ごしているに違いない。

その望みを叶えてくれるに違いない。

そう、あたしは彼のそばに行くことじゃなくて、同じように逝く

ことじゃなくて。

当たり前前の日常の方を望んでいた、そこで生きていたかった。

私なんか死んでしまえ。

私の幸せを願う私なんか、死んでしまえ。

「私はアンタを許さない」

私は向き直り。

町を見下ろす。

私が生きたかった、町。

行きたかった、日常。

背後から聞こえる、彼女の声。

叫ぶように、制止する声。

私は振り向いて、最後に言った。

「アスカ」

彼女のその姿はなぜか、一生懸命で。

……なぜか、にじんでいて。

どこかで見えたことがあって。

でも、決定的に間違っていて。

懐かしかったけど。

「ありがとね」

なによりも嬉しかった。

彼もこんな気分だったのだろうか。

私は世界に背中を向けて。

そう、今まで自分が在った『日常』という世界に背を向けて。

その作り物の舞台から、飛び降りた。

プロローグ

彼女は呟いた。

……まるで凍えているかのような、寂しそうな目で。

「あなたがいなければ、気が付かなかったのに」

それがどういう意味なのか、私にはわからない。

ねえ、それはなに？

つまり、私のせいでこうなっているってことなの？

私のせいでああなたは死のうとしているの？

私はあなたにいったい何をしたの？

私を恨んでいる、そういうことなの？

……ねえ、私がいなければよかったの？

……ねえ、私は傍にいなければよかったの？

……ねえ、本当は私のことずっと邪魔だと思ってたの？

たくさん疑問が頭を巡る。

たくさん後悔が世界を揺らす。

そう、私はこの結末を知っている。

私はこのあと、何が起るか、それを知っている。

私は彼女に向けて、一步を踏み出そうとする。

でも、足が動かない。

あの時、私は動かせなかったから。

だから、どんなに頑張っても足は動かない。

彼女は言う、一切の虚構を含まない声で。

「私はアンタを許さない」

そうして私に決別するかのように背を向ける。
おそらくその目が見つめるのは、自分がずっと暮らしてきたこの
町。

ただその目が、どんな風にこの町を映し、どんな想いを抱いてそ
こに立っているのか、私にはわかりようもない。

それでも、私は。

……なにか、彼女に声をかけようとして。私は口を開く。
だけど、声が出ない。

喉は震えたまま、なにも意味のある音を出せずにいる。
なをを言ったらいいかわからない。

どうしたら、声が出せるのかもわからない。
伸ばそうとした指先が震える。

呼吸が出来ない。

息苦しい。

それでも、なにかを言おうとして。

ヒュ……と小さな音が喉の奥から聞こえ、また呼吸がままならな
くなる。

(なにか言わなきゃ)

その気持ちだけが、私の中で反響し続ける。

なをを言ったらいいのか、その言つべき言葉は私の中からは出て
こなかった。

その理由は今ならわかる。だって、私は……。

結局、私が考えていたのは。

その時、一步を踏み込もうと僅かに彼女の重心が傾いた。それに気付いて、頭の中が真っ白になった私は『何か』を叫ぶ。反射的に『何か』を叫ぶ。それに気付いたのか、彼女はゆっくりと振り向いた。

「アスカ」

涙目で彼女は私へ振り返る。その表情には決意と、笑顔。溢れんばかりの感謝と喜び。私が今までで見た中で、最高の笑顔がそこにあった。きつと彼女の、本当の笑顔がそこにあった。

止められない。

止められはしない。

私は手を伸ばせない、だってそんな顔をされたら。

まるで、私が……。

彼女は謳う。

「ありがとね」

そう、どこか嬉しそうに。

まるで、自ら心の底から望んでそうするかのように。

力強く一步を踏み出し、そのままの笑顔でゆっくり崩れ落ちていく。

そして彼女は、樋口カナは学校という舞台から。

世界という、現実という、日常という、小さな小さな舞台から。

奈落の底へと、飛び降りた。

私は思わず、飛び起きた。

そこは私の部屋、ベッドの上、見慣れた世界。
夢なのはずっと気付いている。

繰り返し繰り返し、あの瞬間を見ては目覚めている。

もうそれが何回目かなんてわからない。

数えることに意味なんか無い。

だって、私は同じことを同じように繰り返しているんだから。

あの時に何度戻っても、私は彼女を止めることなんか出来ない。

何度、チャンスを貰ったって私は何も出来ない。

あれは紛れもなく現実で、間違いなく夢。そして、どうしようもないくらいに真実。

何度も、何度も私は私の罪深さを知る。

自分の浅ましさを、愚かさ知る。

もし、私があとほんの少し優しく、ほんの少し誠実で、ほんの少し思いやりがあって、ほんの少し自分に対して厳しくあれたら、きつと何か違ったはずなのに。

そう、なにかがほんの少し違っただけで、彼女に声が届いたはずなのに。

何度繰り返ししても、同じ結果になるのは……。

そんな結果になるのは……。

きつと、それが 私の罪深さなんだ。

私は決して、彼女に許されることはない。

報告という名の雑談

それはきつとくだらないもの。

世界には、何もかもを解決してくれるものなんてないから。

世界には、みんなを困らせる殺して褒められるような都合のいい怪物や、悪党以外のみんなを救ってくれる正義の英雄とか、ありとあらゆる闇を打ち破ってくれる光の剣、誰もを恐怖に落とす醜く恐ろしい化け物を殺す銀の弾丸、そんなものなんてないから。

好きな人も、嫌いな人も、親友も、見知らぬ人も、みんなが幸せなってくれる。

そんな都合のいい結末はないから。

みんな何かを願い、苦しむ。

何一つ叶わなくて、叶ったところで世界は何一つ変わらなくて。

だから、みんな悩む、考える。

どうやったら幸せになれるのか。

だから、みんな放棄する、閉じこもる。

なんでこんなにも自分は不幸なのか。

ぼくは思う。

どんなに悩みも、もしもその悩んでしまう理由、原因というものを言葉にしてしまうことが出来てしまったら。

それは誰もが認めるような、きつとくだらないもの。

でも、ぼくはきつとそれを笑えないのだ。

その理由はきつと。

それはきつと、くだらないもの。

事態はまだその全貌どころか、爪の先すらも見せていない。

手を伸ばせと叫ぶモノ

1 .

「それでキミはいつたい私にどうしろと？」

巫月所長はぼくにそう聞いた。

ぼくは困った顔で首を左右に振る。

「いえ、ただ報告しただけですよ」

樋口カナの事件の真相と、結末。

そして、この事件の行き先がどんなものになるのか、それを考える材料を所長に提供しただけだ。

ぼくにとってはそれ以上でもなければそれ以下でもないし、それ以上の効果があるとまでは期待していない。

「なぜ、連続自殺が起こるのか。……その要因はおそらく二重身にあるんでしょう」

二重身が自殺者の共通点になっていることと、今回の件の真相からしてそう判断できる。

あれはなんらかの形で、本人に死をもたらすモノだ。

「……事件の共通項に原因を求めるのは、わかりやすい思考の帰結だが少々危険でもあるな。自身の二重身を目撃した者が自殺すると？」

「……さらに言えば、自分の二重身を目撃した人間は、自分以外の

「二重身をその前に見ています」

つまり、他の人間の二重身を見ることが、二重身発生の条件ではないか、ぼくはそう考えたわけだ。

ただの目撃者でしかなかった人間が、次の瞬間自身もその事件の中心人物となる。自分と同じうり二つの二重身を出現させる形で。

……それは見るだけで感染していく超常現象、自分で考えておいておいて「まるでウィルスみたいだなあ」という他人事のような感想を持ってしまった。

所長がぼくの言葉を聞いて、どうでもよさそうに言う。

「……そんなホラー映画があつたな、元は小説だつたが」

「ええ、ぼくは好きじゃなかつたですけど」

ぼくからすると、まずたかが見た人間が死ぬ程度のことは怖さに値しないし、あの程度の規模の事件なら個人でどうにか出来る範囲だ。

……多少の犠牲はあるだろうけど、それは重要じゃない。

ちなみに原作はぼくは読んでない、所長は後のシリーズ全部読んでそうだけど、ぼくからすればあれはホラーにはならない。

「だが、君の意見は樋口カナに関してはそうだったと言うことにはかならない。だが、他の人はどうだろうか？」

「……それは」

「さらに言わせて貰うと、今回の場合の目撃者は相当な数になる。少なくとも樋口カナのクラスメートはほぼ全員だろう。全校生徒の中にも数多くいるのかもしれない。その全員が自殺すると？」

「……可能性はないわけではないでしょう？」

「その通り、可能性は零ではない。まあ、それ以前に君なんか直接会って会話までしてるんだ。その場合、君自身がただでは済まないだろうけどな」
「ぞっとしませんね」

ぼくは言葉の上でだけ、そう呟いた。
ぼくが犠牲になる、それはその程度の問題でたいしたことではない。問題はさらに感染が広がる可能性だ。
なんらかの手を打たないと、多くの被害が出る可能性がある。

「よく考える、目撃した人間全てに感染するとなると被害者が少なすぎる」

「どういう意味です？」

「そもそも今回多くの第三者が二重身を目撃したわけだが、今までにそんなことがなかったとなぜ言えるんだ？」

「何を言ってるんですか、今回が初めてでしょう。もしそんなこと今までにあつたら二重身を見たと今頃大勢の人間が大騒ぎしてますよ」

「いや、ならない」

「なぜですか？」

「今回がそうだろう、騒ぎになってない」

何を言ってるんだ、この人は今まで話を聞いていなかったのか？

「騒ぎにならなってますよ、学校中ね」

「ああ、そうだな。だが、目撃者は二重身を本物だと思っている。二重身を見たと言う騒ぎにはならない。ただ、何時自殺したのかわからないと言われているだけだ」

「……………」

確かに、その通りだ。

異形の化け物が現れた訳ではないのだ、同じ容貌の人間が動き回

っているだけで何の騒ぎになるっているんだらう。

人間とまったく別の存在である非生命体ノーマイフが入れ替わっても、誰も事実気づかないんだぞ。ほとんど本人に近い二重身が出たからってどうなる？

「……なら感染する要因に適性が存在する、とかはどうでしょう。特定の素質がある人間しかかからない」

「それはありえるな、そもそも二重身自体が特殊な事例だ。世界各地で見られるものの、そう簡単に起こることじゃない。古来より、霊的存在に触れた者はその影響を受けるものとされている」

それはつまり……。

「呪い、とかですかね？」

「それが一番わかりやすいか？接触と言うなら、触れるだけで病や怪我を治す地蔵や泉とかもあるんだが。……現れ方が違うだけで呪いには違いないか」

病を治すのが呪い、よくわからない考え方だ。

ぼくの表情から何を読み取ったのか、所長は言う。

「……いいか、遠野。魔術や霊には善も悪もない、あるとすれば意思と意図だけだ。それがなにかに害をもたらそうが利益をもたらそうが、それはそれを受けるものの立場から見た意見でしかないんだよ」

相変わらず、所長の話はつかみ所がない。普通の人からすれば訳がわからないだらう。

だが、うわべだけでも読み取ってみれば、所長の言っていることはよくからすればそれはどちらでもいい話のように思う。

確かに害や利益。つまり、損得というものはその人の勝手な価値観で判断されるものだ。だから事象に善も悪も存在しない、というのならそうなのだろう。

台風が人間の文化にどんな被害をもたらそうが、台風が悪と言う事実には必ずしもなり得ない。それはあくまで人間の一方的、都合見解でしかないからだ。

それが、ミサイルに変わってもミサイル自体に善も悪もない。使う人間に悪意があるだけだ。もしくは、自分の国を護りたいと言う善意があるだけなのかもしれない。

それは理屈としてはわかる、でも実際に被害を受ける方としてはどっちでもいい話だ。どっちにしる納得いかないのだから。

「ぼくにとつて、いや、普通の人間にとつてはそんなことどうでもいいんですよ。生活していく上で何の意味もないことですから」

「普通の人間？ キミが？」

「当たり前です」

ぼくはあくまで、普通の人間の範疇だ。

所長は釈然としない様子だったが、すぐに思い直したのか、

「ああ、もつとわかりやすい例があるな。吸血鬼の血の接吻を受けたものは吸血鬼になる、あれこそそのものだろう。あとは、身近な例で言えばそれこそウィルスだよ、感染症なんて呪いの性質そのままだしな。いや、逆か？ 病や毒が呪いの原型の場合すらあるからな」

所長の話を聞いて思う、この話は長くなりそうだと。

なんとか、話の修正を試してみる。ぼくは別にわかりやすい例を

聞きたいわけではない。

「それよりも感染の仕方が二重身の目撃なら、可能性はもう一つありますよ」

「なんだ？」

「潜伏感染の存在です。これなら個人差があってもおかしくないでしょう？」

そう、この事態をウイルスのようなもの、とそう考えた時自然とその考えはこの答えへと繋がっていく。

潜伏期間という、身体に潜むウイルスが表立っての活動をしない時期。

「潜伏期間ね、確かに効果が現れるまで時間のかかる魔術はあるがな。それはともかく、感染効率から言えば二重身の出現は早ければ早いほど感染が広がるのでは？」

「いえ、それは違いますよ。他の二重身との接触から感染するんだったら、その本人が生きているうちは非効率的です。いずれ死ぬんですから」

「つまり、感染させた方の人間が死ぬまでの潜伏期間であって、その感染させた方の人間が死んでから発症すると？」

「ええ、長めに時期をとっている可能性はありますから、潜伏期間はおおよそ一週間ぐらいでしょうか。それで、発症から一週間以内で死ぬる、とか？」

「その数字予測はかなり根拠が気薄だな」

「まあ、根が適当ですから」

そもそもぼくはオカルトに関して、専門家でもなんでもない。はずれていても恥じる必要も、責任を感じる言われもないのだ。

「潜伏期間という考え方はともかく、確かに発現まで時間がかかる可能性は低くない。魔術としても現象としてもかなり大がかりなものだしな。何者かがこの事態を魔術によって引き起こしているとしたら、一応の説明にならないこともない。ただ……」

「ただ？」

「発想が飛躍しすぎだ」

「まあ、そうですね」

「さらに被害者が今後多くなるということと、キミが危険だと言う可能性を補強するものであると言うことを理解しての発言にしては軽すぎる」

「……ですね」

自覚がないわけではない、が気にしてもいない。それがぼくだ。所長は呆れたように、しかしどこか楽しそうに口を開いた。

「遠野、キミはずいぶんと私をこの事件に関わらせたいらしいな」

「別にそう言う訳じゃ……」

「……私は基本的に誰かの依頼でない限り動かない。なんの対価もなしに動かない。なぜだかわかるか？」

「なぜ、って」

金にならないのなら、働かないのが普通じゃないだろうか。

人はなんらかの形で対価が無ければ動かない。ボランティアなんて、感謝と自己満足と言う対価のために働いているようなものだ。

まあ、ぼくからすれば金と時間に余裕のある奴の贅沢な遊びに見えるけど。

「……またなんとも言い難いようなことを考えているんだろうな、キミは」

「別に普通のことだと思いますけど？」

「それはともかく」

ともかくつてなんだ。

「キミがなにを考えているか知らないが、私が動かない理由はたった一つだ」

所長の目に若干の寂しさが宿るのをぼくは見た。

「 制約だ」

……少なくともぼくはそう感じた。だが、ぼくはその言葉の意味を知らない。

言葉そのものの語意は知っていたとしても、それがどんな重みを持つのか、それは知りようのないことだ。

ぼくは所長に聞き返す。

「 制約ですか?」

「 ああ、強すぎる力は対象に必要な以上の影響を及ぼす。私がへたに関われば、本来は助かったはずの人間を消しさり、成長するはずだった経験をなくし、個々の結末を最悪なものにしかねない」

「 ……はあ?」

「 病に薬を与える時、その症状にあったものにするべきだ。意味もなく強すぎる薬を与えたり、痛んでもいない臓器を摘出する必要はない。私の力は人間一人ひとりの物語に関わるには少し強力すぎる」

「 ぼくはなんにしても解決は早いほうがいいと思いますけど? 腐りが完全に全身に回る前に病んだ患部は切り落とすべきでしょう。」

そう言つて様子を見ている間にどんなひどいことになるかわかりませんよ?」

「 ……少々過激で身勝手な発言だ。と言いたいところだが、キミの場合自分自身がその切り落とされる腕の側だったとしても同じことを顔色変えずに言っただろうな」

「当たり前のことを言わないで下さい」

誰だって最悪の事態になる前に手をうちたいと思うだろう。
それが普通だ、とぼくは思う。

だいたい自分が他の何かを犠牲にしてまで生き延びる価値がある
と知っている人間がどれだけいるっていうんだろう。

……見る限り、そうそう自信過剰な人間はいないように見えるけど。

まあ、普通はそれでも自分が犠牲になるのは嫌がるんだろうけどね、自分にそれほどの価値がないと思っっているくせに。

「一応、聞いておきたいんだがキミは『他人を傷つけるなら、まず自分が傷つけられる覚悟を持って』と考えているか？」

「いいえ、それは馬鹿の科白ですよ」

「……ならいいんだが」

それは自分の都合や理屈を他人に押しつけているに過ぎない、それは愚かな幼い子供のすることだろう。他人に都合や理屈を押しつけるのは根本的に甘えだ。

どれだけ規模を変えて考えても、それは同じ。

罵倒される覚悟があるなら、人を罵倒していいはずがない。

殺される覚悟があるなら、人を殺していいはずがない。

「なるほど、規模をどれだけ変えても根本は同じか」

「ぼくはそう思いますね」

「……物理学的な話になるとそうはいかないんだけどね、人間程度の力なら関係のない話か。小さすぎる力と大きすぎる力は同一には働かない、だが私達が遭遇する程度なら同じようなものだ」

……人間程度ってアンタ。

「キミにわかりやすく話そうか、キミは西遊記を知っているかな」
「そりゃ、まあ」

三蔵法師が三人（？）の供を連れ、天竺までお経の書かれた経文を取りに行く話だ。中国に仏教が伝わるまでの話を、ファンタジー仕立てで描かれた物語と言い換えてもいい。

道中、三蔵法師一行は妖怪退治などをして人々を救い、多くの試練を乗り越えて長い旅の末、経文を持ち帰る。このストーリーは今あるマンガや小説などの様々な物語の原型として今なお存在している。ドラマなどとしての放送も何度かあったくらいにメジャーな話だ。

「ちなみに三蔵法師は実在の人物なのだが……まあ、それくらいは知っているね」

「ええ、たぶん常識と言ってもいいじゃないですか」

「さらに話すと中国ではこちらの話は比較すると人気がないそうだし……比較すると、ですか？」

「ああ、本場では後半の物語である三蔵法師一行が旅をする話よりも、前半での齊天大聖の反抗の物語の方が有名らしい」

「前半？」

「登場人物で言えば齊天大聖よりも、それを名乗る際に戦う^{ナクタク}哪吒^{イシ}の方が人気が高いように思う。私見だが」

すみません、それなんの話ですか。

「とりあえず、その西遊記を例に出してみよう。彼らの物語は壮大で冒険心をくすぐられるものだが悲劇がなかったわけではない、そもそも彼らが通りかかる前に妖怪に食われてしまった多くの犠牲者

とも言える人々が物語の裏には常にいたわけだ」

それはそうだろう、でなければ三蔵一行が戦う必要もない。

悪事を妖怪が働くからこそ、妖怪退治が正義として行えるのだから。

ならその妖怪を供、実質配下に付けている三蔵はいつたいなんなんだ、とは思わなくもない。

「まあ、退治を頼まれた妖怪でも猪八戒は例外だが。あれは別に悪事を働いていた訳ではない、人間の勝手な都合で始末されそうになったと言い換えてもいいくらいだからな」

「……よくわからないんですけど西遊記好きなんですな」

「さて、ではここでもし三蔵一行を超える存在がいたらどうなっていたか」

「……はあ？」

「それはどんな妖怪すらも消し飛ばし、ありとあらゆる困難を物理的に排除し、ありとあらゆる悲劇をも破壊し尽くし、この世に存在する残酷な矛盾だらけの出来事すら飲み込み解決出来るような存在……そんな怪物がもし物語にいたしたらどうなる？」

「そんなもの決まっているじゃないですか」

考えるまでもなく物語が成り立たない。

誰も犠牲にならず、戦いも起きず、試練など存在せず、何事もない旅路を三蔵一行は行くことになる。

成長することも、徳を積むこともなく、人々の歓迎と笑顔を見て回るのだ。

「でも、現実になんかことがあるとしたら、その方がいいとは思わないか。悲劇などない方がいい。困難な試練などない方がいい、と」

「……それは」

ぼくはその言葉に頷けない。

悲劇などない方がいい、普通はそう思う。

仮に悲劇がない方がいいのだとして、本当にそうなのだとして、誰も死なない、誰も悲しまない、みんなが笑顔で生きられる世界があったとして。

「さて、話を戻そう。その物語を現実の人の人生に置き換えよう。現実にかき起る事件とは全て、人間の人生の一片にしか過ぎないわけだから」

「人生にですか」

「そう、想像するといい。これから今後起きる全ての怪事件は全てなくなる、被害者も加害者もその想いも。背負ってきた理不尽な境遇すら、存在丸ごと全てだ」

「っ!?!?」

鳥肌が立った。

全身が拒否をした。

完全なる、不幸がない世界。

それに対し、想像するだけでぼくの全身が拒否反応を示した。

そんなもの、あつてはいけない。それはこの世にあつてはいけない。

「そういうことなんだよ、強すぎる力は全てを破壊する。破壊したと言う事実自体を誰にも知らせないほどに。つまり、破壊したと言う事実すら破壊するわけだ」

悲劇など初めからないことになる。

だが、悲劇というのは今突然現れる訳じゃない、その前にその原因と成るような環境や過去、人物がいて初めて成り立つ。

では、成功や幸福というものはどうだろう？

同じだ、何一つ変わらない。どれも人生における出来事に過ぎず、それを主観的な価値観で呼び方を変えているだけだ。どれか一つでも欠けたら、それはその人の人生でも何でもなくなってしまう。

……物語が物語でなくなってしまう。

「物事が解決するにはね、要因が必要なんだよ。人間は原因があるから結果がある、と認識している生き物だ。故にそこに至るまでの不幸な出来事すら含めた道筋が不可欠なんだ。それを無くせば、事件は解決ではなく消失することになる」

それでも、ぼくは思う。

それでもいいから、人間は悲劇を回避したいと思うのだろう。例え、全てが壊れてしまってもいいから。

自分の一番大事なものがその悲劇でなくなるくらいなら、その方がいいと思えるんだろう。

「確かに救える被害者を救わずにいることになる、と言う考え方は一理ある。だが、それは常識の範疇での話だ、これから起きてしまう殺人事件があったとしてね、それを事前にことが起きる前に無くすのなら、なにに原因があるにしろ、その原因が犯人の思考にしろ、被害者の振る舞いにしろ、環境そのものにしろ、全てを作り替えてしまつか、なくしてしまうのが最も簡単で早くて確実に絶対なんだよ」

この人はそれが自分に可能なんだと、いいたいのか。

そんなそれこそ、カミサマみたいなこと。

「いや、これはあくまで例え、だ。私の力はそこまで反則でも理不

尽でもないよ、ただキミが言ったとおりなら規模が多少変わっても本質は変わらない、そういうことだ」

「だからこそ、の制約ですか」

「そうだ、求められたとき、求められた分の最低限の力を持って働く。その分の対価を要求することで調整を図る」

「なんだか、上手く誤魔化されている気分なんですけど」

「そうか？」

「ええ、なんかスケールのでかすぎる御伽話を聞いているような…」

もしくは詭弁そのものを聞いている気分だ。

「気持ちはわからなくもないよ、私もそうだった」

懐かしむように所長は言う。

「でも、今はこう思う。全てを解決してくれるものなんてありはしないが、あるとしたら間違いなくない方がいいのだと。無償でしてしまえば、誰もがそれを頼る。頼らなくてもいざとなれば無償で頼れるものが在ると知ってしまうだけでその人間に影響を及ぼす」

「その理屈はわかりますけどね」

さつき言われたことよりはよっぽどね。

強すぎる力どうこうよりは、必要以上に頼られないように自らは動かないとか、報酬を要求するとか言ったほうが、ぼくにとってはわかりやすい。

人間は便利だと思えば、何にだって頼るものだから。

ただし、都合のいい間だけのことだけだ。

食事とくらしの唐殺（前書き）

ヤンデレレvsヤンデレはこの小説のテーマです。
いや、嘘です。いや、嘘でもないんですけど。

食事という名の虐殺

2 .

軋呑ハミは自らの背後に立つモノ（・・・）に話しかけた。

「ハミになんのようななあ、『すとーかー』さん？」

それは気配も足音もなく、ただそこに立っていた。
突然、そこに現れたかのように。

「へえ、気づいていたんだ」

その声に驚きの色はない、あるのは侮蔑と怒り。さらに添えられるのは重々しい何か

それは大神アスカだった。どう見てもそれ以外の何者でもなかった。
た。

いつも校内で見るような姿、とは言い難い。だがソレは大神アスカだった。

例え、その愉しそうに歪めた口の端から、真っ赤な液体を一筋垂れ流していたとしても。

例え、その右腕が獣のような毛深いゴツゴツした異形となり、その爪が剣のように鋭い凶器となろうとも。

例え、その瞳がドロドロとした漆黒なかに比喻ではなく、現実に染まっていたとしても。

ソレは見る者全て（・・・）にとって、間違いなく大神アスカだった。

軋呑ハミはその目を射抜くように見る、それは目というよりもまるでただの黒い二つ穴のようだった。

「気づかないわけないよお。ハミの身近に起こるありとあらゆることとでえ、ハミにわからないことなんてほとんどないんだからさあ」

「……へえ、たいした自信ね」

「まあでもお、誰だって気付くと思うよお、こんなに犬臭いんだもんねえ」

「犬、ね。……なら、わたしが何を言いたいかも理解してるんでしよう?」

「そりゃねえ……『すとーかー』さんの言いたいことなんてそう多くはないよねえ」

その言葉を聞いた大神アスカは眉間にしわを寄せ、軋呑ハミを睨みつける。

殺意と憎しみを叩きつけるかのように。

「これは最後の警告よ、遠野に近づくのをやめなさい」

「まあ、……そんなことだろうねえ」

「貴女がいるせいで、彼は周囲からもよく思われず立場を悪くしている。……彼は孤立はしていても誰かから疎まれたり、中傷されるような対象では決してなかったのに!」

「だろうねえ、それはハミも自覚してるよお」

「彼自身も迷惑しているわ、絶対に!」

「うん、確実に……そうだねえ」

軋呑ハミは穏やかに笑う。

余裕を見せつけるかのように、あるのは溢れんばかりの自信と優越感。

大神アスカの形をした何かは、それに苛立ちを隠さない。

「だったら、さっさと彼から離れなさい！ 彼は……」
「それはあ、トオくんに直接言ったらあ？」
「っ！」

そこで、初めて大神アスカの形をした何かは口を噤んだ。
言葉を返し、損こなつた。

「ああ。言つたんだもんね、それも2回も。ふふっ、それも無視されちゃつてえ、2回目なんか忠告してすぐその相手に電話なんかしてるんだからあ、ムカツクよねえ？」

「……くっ」

「トオくんが迷惑に思つてるのは知つてるよあ？ でもあ、じゃあ、なんでトオくんは自分からハミから離れないんだろっかねえ」

「……それは彼が！」

「優しいからあ？ そんなこと本気で思つてるう？」

「……」

「彼は冷たくて残酷だよあ、どうでもいい人間は『別に死んでもいい』くらいにどうでもいいしい、それ以外の人間でもあ、自分に関係ない事柄に関してなら『別に殺されていい』くらいにどうでもいい」

それは軋呑ハミにとって、本気の言葉だった。

軋呑ハミから見た、遠野と言う人物像そのものだった。

「まるで彼を最低の人間みたいに言うのね、貴方は「
「いいやあ、彼はフツの人間だよあ」

軋呑ハミは当たり前前のことを当然のように言う。

「フツーにこだわる彼はあ、どこまでもフツーの人間だよお？フツ
ーの人間はフツーであるということに拘わらない、って言う本質的
な事実^ニに気付いていない天然さんだけだよ、まあ八三的にはあ、ソ
レは魅力なんだけどねえ」

普通の人間は自らを、ありとあらゆる意味で特別にしたがる。他
とは違う人生を歩んでいる人間である、他とは違う才能がある、自
分は誰かから特別な一人だと思われている、そんな思いを現実に
したい欲求がある。

もしそうでないのなら、普通の人間でいたい、なりたいたいと言う人
間がいるとすれば、それは単純に潜在的に自らを普通でないと思っ
ているからに他ならない。

「でもねえ、『人と違うのがイヤ』だとか『フツーでありたい』な
んて少数派^{マイノリティ}ではあるけど、結局はまともな人間の発想なんだよねえ。
そう考えていくと、ちよつと度が外れているだけで、彼はフツ
ーの人間だよお。

他者に無関心で活動には無気力な彼、自立精神旺盛に見えるのは
他者から干渉されたくないからに過ぎないし。人と関わりたがら
ないのは責任と言う重みに耐え切れないからだし。活動に無気力な
は敗北や失敗を知りたくないからだし。本音をあまり言わないのは
人に自分を知られるのが怖いからだし？

どれもあ、フツ
ーの人間なら誰しも持つてる弱さだよねえ、その
度合いは別にしただけだよさあ」

「……まるで、自分が一番彼を知ってるかのように言うのね」

「そうだよお、八三はトオくんを一番よく知ってる。……誰よりも」

それを聞いて大神アス力である何かは、歯を強く噛み締めた。
だが、気付かない。

八三の雰囲気^ニが徐々に変わりつつあることに。

「だから、遠野は本当は私を恐れてる。いや、遠野は自分を知ろうとする人間全てを恐れてる。彼は繊細すぎる、もろすぎる。だからもう傷つきたくない。責任の重みを知っているのは彼が責任感が強すぎるから。彼は虚言を嫌うけどそれは彼自身が嘘や偽りに傷つけられたから」

「なにを知ったような口を！」

「彼は人間ってものにだいぶ絶望してて、人間を人間としてまともに視ることさえまなってないけど」

軋呑ハミはその口の内側だけで呟く。

人外を人外として認識することすらまならないけど、と。

それを無言の間として、言葉を紡ぎ出す。

「それでも彼がこの世界にいるのは、……世界に未練があるから。それでも彼が私といてくれるのは私に、私自身に……」

その続きを彼女が紡ごうとした時、大神アスカは飛び掛った。

瞬く間にその距離を詰め、獣のような腕を振るい、剣のようなその爪の切っ先で軋呑ハミを切り裂こうとした。

だが、それは叶わない。

大神アスカである何かは腕を振るおうとしたその刹那に気づいた。それは人間的な判断力ではなく、その性質ゆえの獣のようなその本能で知った。

目の前にいるのはヒトではなく、獣と呼ぶことすらおこがましい化け物、いやそれすらをも蹂躪し一方的にその命を略奪できる絶対的な捕食者である、と。

彼女は知性ではなく、獣としての本能にてそれを知った。

故に、彼女は生き延びる。

その右腕を代償として。

「　　っ!?!?」

それは影。

それに属する存在であるはずの彼女自身が恐れた、影。

当然ならば自らの延長線上、同類であるはずのソレは、今、恐れるべき天敵でしかなかった。

そう、軋呑ハミの影はその身体を伸ばすかのようにして、大神アスカの身体へと凄まじい速度で伸びていく。

そして、自らの後ろ飛びのこうと身体を反らした大神アスカの獣のような右腕を、その肩の肉ごと貪り?ぎ取っていった。

「　　くはっ」

鮮血を辺りに撒き散らしながらも、大神アスカは地面に着地する。とつさに左腕で、食われた右腕のその断面を抑えるがその出血はその勢いを落とすことはない。全身が血に染まっていく。

「ふうん、生まれたばかりにしてはいい動きするんだねえ。』すと
「かー』如きのくせに」

軋呑ハミはその笑顔を崩さない。

自らの圧倒的優位を知っているからこそ。

「ああ、安心していいよお、アンタなんか食べる気ないからさあ。今のはただの味見い。いいでしょ、すこしくらい」

「……貴女、何者なの？」

大神アスカは自らの身体の震えを抑えつつ、軋呑ハミに問う。いつでもその場から逃げられるように、いつ……軋呑ハミの周囲に表出した蛇のような影達に襲われても、すぐに動き出せるように。

「なにつて、ただの女の子だよお？」

くすくすくす、と無邪気に悪意の欠片もなく軋呑ハミは笑う。

大神アスカは知る、目の前にいる存在は悪意なく、害意も決意すらもなく、ただの戯れでいつでも自分を殺せるのだ、と。

「ハミはあ、トオくと違ってあなたがどうなるうが『知ったことじゃない』の。例え、知ってしまったとしても『知ったことじゃない』のね？むしろ、彼が気にしてるのが腹立たしいくらい。だから、その点では私はあなたの同じだよ？」

「貴女は……」

「だから死んで？ いいでしょ、それぐらいなら」

食べる内には入らないし。

次の瞬間、大神アスカの全身を寒気が駆け抜けた。

軋呑ハミの影は分化して、大神アスカへと迫る。迫り来る影は8本。それは槍のように、大神アスカを貫こうとその切っ先を向け、空を駆け抜ける。

……このままでは逃げ切れない。

そう判断した大神アスカは自らの傷口に指を突き刺し、奥深くを
探る。

「……おいで」

辺りの獣の臭いが強さを増す。

軋呑八ミはその変化を感知した。

その腕の傷口から次から次へ生まれ出る、鮮血を身に纏い生まれ出るのは犬。無数の犬の群がほんの僅かの間に何十匹と生み出され、大神アスカの周囲を埋めていく。その全てが軋呑八ミをかみ殺そうと牙を剥いた。

「へえ、かなり人間離れしてるじゃない！」

軋呑八ミは8本の槍はさらに細かく枝分かれさせ、確実に群を仕留めていく。

圧倒的なまでなその力は相手が何であろうと、相手がどれだけいようと覆されることはない。

ありとあらゆる怪物の天敵、絶対の捕食者である『軋呑八ミ』にとって力の大きさなどたいした意味を持たない。戦いとは同じ次元に存在するモノ同士で成り立つものなのだから。

次々と生み出された犬が討たれていく中、大神アスカは群に言葉に出さずに命じる。

それと同時に、1カ所に集まっていた犬達が散開し始めた。

「ふうん、バラバラに撒いて注意を分散させようって？無駄だと思っけど」

あくまで軋呑八ミは大神アスカを狙う。頭を潰せば残りの犬に脅威などない。

なにより、軋呑八ミが死んでほしいのは大神アスカだけなのだから。

一定の距離をとって家屋の屋根へと飛び移り続け、逃げ回る大神

アス力を影で追撃する。

「私はね、トオくと違って『どうでもよくない』の。死んでくれないなら『殺したい』程度に『どうでもよくない』の、よ」

殺すと決めた以上は、確実に殺したい。

だが、広く散開した犬達は1カ所に固まらずに、多方向から軋呑ハミを襲い始めた。

「ああ、なるほどね。あくまでそういつつもりなんだ。……だよなえ、気持ちわかるよ、私にも」

私があなたに死んでほしいように、あなたも私を殺したいんだもんね。

軋呑ハミは自らの獲物に妙な共感と喜びを覚えていた。

彼女にとって殺したい、と思うことはその程度のことだった。彼女にとって、『殺す』と言うことは、殺すまでのその過程に楽しみや好奇心、そんな不要な感情を抱ける程度のことだった。

子供や猫が、虫を遊びながら殺すように。

だから彼女は気付かない、あることに。

軋呑ハミは同時に多方向から襲い来る犬達を、影を操りいともたやすく討つ。その軋呑ハミ自身の動きはあくまで素人を超えるものではない、彼女はあくまで一介の女子高生に過ぎず、そこには鍛え抜かれた技や経験などは一切存在しない。

だが、それは相手も同じ。敵は獣にしか過ぎない。鍛え抜かれた技や経験などは存在しない、本能のまま牙を突き立てるだけの獣。

ならば、同じく本能のまま獲物を喰らい破るモノが喰らい合えば、そこにあるのは力の差のみ。否、次元の差のみ。蟻の群が象を仕留

めることなどありえない。

糸を繰るかのように影を操り、舞うかのように獣を貫く。
その影と影との間を縫うようにして、大神アスカは現れた。
軋呑ハミが自らの周囲の犬に意識を向けている間に、大神アスカの姿をしたモノは現れた。

「調子に乗るなっ、化け物！」

失った右腕の代わりに、左腕を獣の姿に変え再び軋呑ハミへと爪を振るう。

それは吸い込まれるように、軋呑ハミへの首筋へと……。

「調子に乗る？ ……違うよ」

その腕は1ミリの隙間もなく、しかし、軋呑ハミの首に触れることもなく止まった。

「あなたに噛みつかれたぐらいたいしたことじゃない、せいぜい痛くて泣き喚くくらいなの。わかる？」

大神アスカの姿をしたモノはまったく身動きがとれなかった。なぜならその全身には、10を超える影が地面とを縫い止めるかのように突き刺さっていたのだから。軋呑ハミはその姿を舐めるかのように見る、自ら仕留めた獲物を鑑賞するように。

「結構、良い足してるね。ちょっと羨ましいかな」

その左足にはその靴を貫くようにして1本、その太股を貫くように2本突き刺さっていた。影を伝い流れ出る血。

「綺麗な足に血って映えるもんだねえ」

それを見て、軋呑ハミは綺麗ね、と微笑む。

その目には忌々しげな表情をした獲物が映っていた。

「……やっぱり貴女が」

「ん？」

「廃ビルの大量失踪事件、貴女がやったのね？」

「そうだよ」

軋呑ハミは当然のように言った、なにを今さら言っているのか、
とでも言うように。

当たり前でしょう、と言うように。

「気付いていたんでしょう？ 怪しいと思うだけじゃなくて、
実際私がやったんだと思ってたんでしょう？ それともじゃないのに、
トオくんにあんなこと言ったの？」

ん？ と軋呑ハミは不思議そうに尋ねる。

返答はない。

「まあ、いいか。いいよね、もうどうでも」

軋呑ハミは玩具に飽きたと言わんばかり、つまらなそうに呟いた。

「いいよ、死んでも」

大神アスカを庇うかのように飛び出す、4匹の犬。

軋呑ハミは呆れたような、同時に、微笑ましいものを見たかのよ

うな表情を浮かべる。

「無駄だった」

さらに表出してきた影は、庇うように飛び出してきた犬達ごと貫いて、獲物にとどめを刺した。

それと同時に痙攣する身体。

それを機嫌良さそうに、眺める軋呑ハミ。

……その表情が一気に困惑するよつに曇る。

「……ん？」

違和感。

そう、これはあえて言葉にするのなら。

「空っぽ……中身が、ない？」

貫いていた、獲物が全て消えていく。

跡形もなく、血の跡すら消えていく。

残るのは、最初に腕をもぎ取ったときの血の跡。

その後を視線が追う。どこまでも、遠くへと向かっていく血の跡。

そして思い出す、先ほど戦った獲物は途中から、その右肩から出血などしていなかったことに。

「ああ、そういうこと」

軋呑ハミはようやくここで気付いた。

自分が獲物を逃がしたらしい、と言っことに。

*

一匹の犬が林の中へと現れる。

その犬には、前足が一本だけない。そう、右の前足が。

犬は全身を震わせるとその姿形を変えていった、肉が盛り上がり、皮がその色を変え、骨格がその姿を変えるためにバキバキと音を立てる。10秒と立たずに皮は服となり、その身体は完全に人へと形を変えた。

その人物　大神アスカ、はそのまま地面に倒れ込んだ。

服が汚れても構わない、もう既に全身が血で汚れているのだから。

「なんなの、アレは……」

化け物、だった。

間違はなく、それ以外の形容など出来なかった。

どう考えても殺せる気がしない。

なぜあんなのと、遠野が普通に一緒にいられるのかまったく理解が出来なかった。

なぜあんなのを、遠野が「迷惑な奴だ」と笑って傍に置いているのかまったく理解出来なかった。いや、理解したくなかった。

それ以上に理解できないのは、自分が感じているのが軋呑ハミという化け物に対する恐怖よりも、自分が遠野の隣にいないということと、アレがその位置いると言っことの怒りだった。

アレが狂っているのなら。

私もたいがい狂っている。

大神アスカはそう思う。

そんなことを言っている場合でも、考えている場合でもない、そう理解できるのにそのことを考えずにはいられない。

なぜ、あんな奴が遠野の隣にいるんだ、と。

もはや、それ以外に自分を支配しているモノは存在しなかった。

アレをなんとかしなければならぬ。

幸いにも、アレにもつけ込む手はある。

自分に知らぬことは何もないなどと嘯いていたが、実際、あの場で思いついただけのつまらぬ手に引つかかった。

どんな手を使っているのかは知らないが、確かにアレは周囲で起こっていることを把握する能力があるらしい。

だが、その肝心な注意力は常に周囲全域に向いているわけではない。

そんな能力があっても、あくまで使うのは一個人にしか過ぎない。簡単な誘導にも引つかかるし、いくらその能力の範囲内でも注意が向いていないのならこうして、逃げることも出来る。

大神アスカは犬を生み出すときに自らをその中に紛れ込ませ、そして犬達を散開させたときにそのまま逃走したただそれだけのことだった。だが、囷としてダミーとしての自分と犬の大半を戦わせ、さらに散開する際に他にも逃げ出すよう一部の犬に命じてもあった。例え、逃げたのがばれたとしても、逃げた他の犬のうちどれが自分なのか、相手が気付いた頃には把握しようはない。

何より、アレ自身には機動力などさしてないようだった。

臭いからアレがたいしてあの場合から動いていないことはわかる。

今後、アレに自分から近づく距離をとれば、足の速い分対応は出来る。

大神アスカは再び、自らの傷口に左手を突っ込む。

「うっ……くっ……」

何かを探るかのように、指を動かし……。
掴む。

「 ああっ！」

そして、なにか引き抜いた。

引っ張り上げるようにして、傷口から生えてくるのは新たな右腕。

「はあ、はあ、はあ……」

左手で触るようにして、右腕の状態を確かめる。手を開き、握る。その動作を繰り返し、反応の遅れと自らの命じた動きとの差異を確認する。

許容範囲、だ。違和感はあるが、時間が必要な事柄だろう。動かしながら、すこしづつ最適化していくしかない。

ただ、どちらにしても。

「全力で動くには時間が必要な、少しまた力を集めなきゃ」

でも、それもたいした時間は必要ないだろう、そう大神アスカである何かは考える。

今は昔と違って人間も多い。ひどいくらいに、だ。

そのくせ、念は強く重い。表に出せぬ、思いのなんて多いことか。

その上、この街はなぜか思いの1つ1つが強い。現実に力を持ち、

形になるほどに。

恐らくは何者かの意思と意図がそこにある、そう考えざるを得ない。

それほどにこの街の思いに与えられた力は、強い。

思い、が形になる街。

「奇妙ではあるけど、わたしには関係ないね」

でも、不思議だ。

なぜ、わたしはこんなにも遠野を思うのだろう。

確かに大神アスカは遠野を思っただけで、だれどこまで狂おしいほどに慕っていたわけではない。自分は確かに大神アスカから生まれ、自分は確かに大神アスカであるわけだけど、なぜこの気持ち強く自分を支配するのだろう。

もしかしたら、この思いは。

わたしだけの、ものなのかもしれない。

「そうだったらいいのに」

憎しみでしか動けないはずの、わたしの……。

思いだったら、いいのに。

そう思いながらも、大神アスカは犬達を解き放つ。

自らの望みを叶えるために。

食事という名の虐殺（後書き）

作者の中では、カニバリズムデレというのは一つのカテゴリーなんです。が、どつなんでしょう？ ヤンデレとは違つんですよ、ヤンデレとは。

眩きといひ名の独り言

3 .

なんとなく、ぼくは眩いた。

「どうも最近、最後の一线ぎりぎりで生きている気がするなあ」

所長は少し考えるそぶりを見せて、ぼくの独り言にわざわざ返答してくれる。

「……特にここ一月、キミが最前線に直接立っていた記憶はないが」
「？」

「ええ、まあ、そうなんですけどね」

あくまで雑用、ないしは後方支援要員としてしか狩りの時には動いていない。もしもぼくが直接戦うような時があるとすれば、それはもううちが負けているってことだ。

まあ、ぼくの場合戦うって言うか、逃げるか黙って食われてやるくらいしか出来ないんだけど。

ああ。割合、危ない連中との交渉やら取引には頻繁に矢面に出てるか。今のところ、怪我一つ負ったことはないけど。

でもなぜかな、あちこちで死亡と言う不吉な響きの言葉から始まるなにかを、順調に立てている気がするの。

……気のせいにしておこう。

「所長。そろそろ、ぼく帰ろうかと思うんですけど」

「ああ、いいぞ。ご苦労だったな」

「ご苦労って、掃除と買出しぐらいしかしてませんけどね」

調理は自分の晩飯にもなっているの、ぼくの中ではノーカウ
ン
トだ。

ぼくは上着を羽織ながら、事務所内を見渡す。

つい少し前に、赤霧先輩がなぜか唐突に黙ったまま出て行った
の、あとはぼくと所長しかない。ぼくが帰れば所長は一人。

「……本当に大丈夫です？」

「当たり前だ、子供じゃないんだぞ」

「お米は研がなきゃいけないですよ、水を入れなきゃならない
んですよ？」

「……キミは私をなんだと思っているんだ？」

機械オンチ、もしくは世間知らず。

炊飯器を一目で壊したことをぼくは忘れていない、個人的には
通販とネットオークションを所長が利用出来ることが驚きだ。

「キミは忘れているのか、キミが来る前にも私はきちんと生活して
いたことを」

きちんと、ね。ここの地区のゴミだしの曜日も知らなかったくせ
に。

「じゃあ聞きますけど、お茶とコーヒー淹れられます？」

「出来ないはずあるかつ！」

「あ、ティーパックはなしですよ？」

「私の評価はそこまで低いのか!？」

オーブン機能が付いた電子レンジを三日目で壊したことをぼくは忘れない。壊すぐらいならぼくにくれればよかったのに。

あれ、専用の容器を使えば煮物だって作れるんだよ？ 炊飯器だって、パンや飲茶が作れる優れものだったのに！

「……なにを怒っているのかは知らないが、ここにあるものは私の私的な財源で買ったものだからな。あくまで、事務所ではなく個人のものだ。そもそも事務所自体……」

「いやまあ、所長が通販好きなのは知ってますけど」
「誰もそんな話はしてない」

通販番組の商品紹介でなにを見ても、「それは得だな」しか言わないんだもんな。珍しく買った家電製品もそういう理由で買ったものだと思われる。

所長が事務所になぜか直接届けさせない主義なので、ぼくの家に搬送さればくが事務所まで運び込むと言う、疲れる経緯を経たのだが。

「でもいいですよ、べつに。メーカー保障で無料修理・交換だったのに『壊れるからもう置かない』と言ったことも、べつにいいですよ」

「怒ってるよな？ なにに怒ってるのかはわからないんだが？」

「怒ってませんよ、調理器具使うのは所長じゃなくてぼくなのに、なんて思ってますから。使う気ないなら最初から買つなよ、期待させんな。とか思ってますから」

「嘘は嫌いだと言っていたその口でなにを言ってるんだね、キミは！？」

「嘘じゃないですから……怒ってるんじゃないで、怨んでるだけですから」

「それはどう違うんだ！」

「字が違いますよ。それはそうと怒と怨って微妙に字が似てますよね？」

「微妙に会話にならない!？」

会話にならないのはこつちだよ、まったく。

さすがに捨てるよう言った時には我慢できずに、修理と交換するようメーカー側に即座に連絡し、事務所に置くようにたつぷりと心を込めて説得したけども。本当にこの人は物の大切さを判っていない。

ああ、他に不満と言えば……。

「個人的にはもうちょいキッチンを広くして欲しかったのですが」

「会話にならないかと思えば、いきなり改築要求か」

「あと、欲を言えば蒸気で汚れを落とすワイパーが欲しいですね。二つほど」

「確実に一つは自宅に置く気だね？」

「やっぱりぼくがお米を研いで、タイマーセットしておきますから」

「話の変わり身が早すぎる!？」

「ご飯はちゃんと食べてくださいよ、『ああ忘れてた』なんて言わないように」

「……善処しよう」

この間、丸々、作ったおかずと炊いたご飯が残ってたときは本気で切れかけたからな。炊かれたご飯が保温のせいで悲しいくらいに固くなっていた光景は涙なしでは語れないよ？

世の中には食べたくても食べられない人がいるんだから、食べ物に粗末にしないで頂きたいですね。

具体的には目の前に、ぼく言う人がいるんだから。

「あー、あとですね。味噌汁なんですけど、インスタントのを買っ

ておきました」

不満そうに「えー」とぼやく、巫月所長。

「袋が三種類入ってしまって、具と味噌が分かれています。具はネギとワカメですね」

「……ネギはどうすればいい」

「とって置いてください、たぶん誰かが使いますから。余った場合、ぼくが戻してチャーハンの具にでも使います」

そう、実は巫月所長。ネギが嫌いでした。

なので、きちんと分けて食べられる味噌汁の素を買ってきた訳で。つて言うか、意外と子供みたいな好みと言うか、嫌いな野菜が多かったりする。代表例はピーマンとシメジ。キノコ汁はアウトです、食べません。

「となると実はワカメのみになるわけか」

「それは仕方ないでしょう」

汁物に入れる具のことを、所長は『実』と呼ぶ。まあ、不満があるのなら好き嫌いを直せばいい。少なくともネギとお麩くらいは増やせる。

「いつそ、キミが毎朝作りにきてくれればいいと思うんだが？」

「ぼくは所長の嫁かなんかですか」

学校に行く前に朝食を作って食べてから行けと。どういう高校生活だよ、なぜかすごく不健全な気がする。ついでに昼食の分でも作らされるのか、いやお弁当を作って欲しいといわれる気がする。

……単純にぼくが所長の母親っぽい気がしてきた。

「……キミが私の嫁か。……じゃ、それでいいから作ってこないか」

「すごく妥協された感があるんですが」

めちやくちや失礼だ。

その苦渋の選択みたいな顔をやめて欲しい。

「キミの作った味噌汁が毎日飲みたい」

「センスの古いプロポーズ見たくなってますが」

「正直、あまり美味しくはないんだが」

「本気で妥協されてた!？」

「いや、やはり毎日勘弁して欲しい」

「しかも、一方的にキャンセルされた!？」

次の瞬間には楽しそうに笑い出した所長を見て、自分がかかわれていたことを知る。

……さすが所長、攻撃を受けてから反撃に移るまでの間隔が短いな。

と、変な感心の仕方をしてしまった。

「まあ、でもあれですよ。その案を本気で採用する場合、ぼくは泊まった方が早そうですね」

「……確かに、だが珍しいことでもないだろう」

「そうなんですけどね」

泊まりがけで仕事をすることも実際ある。

夜間に動くことが多いわけだし、頻繁ではないけど少なくともはないのだ。

「というより、そもそもわざわざここで夕食を作って持って帰るよりはここで食べたほうが早くないか」
「そうなんですよね」

でも、それをすると完全に自分がここで住み始める気がする。夕飯食べて片付けた後、帰ること面倒なこと面倒なこと。

いや、別に泊まりでいいじゃないんだけどね、家賃や光熱費と言う生活上の一番の問題点が消えるし。

だが、なぜかな。それをすると生存上の一番の問題点が悪化する気がする。

「って言うかそれ、二十四時間臨戦態勢ですよ、勤務時間二十四時間ですか？」

常に職場にいる生活って……。

いや、泊り込みの仕事だって世の中には数多くあるわけだけど。

「まあ、手当ぐらい出せると思うが？」

「とてもものすごくかなり惹かれますね」

でも、止めておこう。その方がいいとぼくの本能が言っている。

たぶん、今以上に死亡から始まる立てちゃいけないなにかを、乱立する羽目になる。特にハミがそれでいい顔するとは思えない。必ず面倒なことになると断言できる。

……やめておこう。少なくとも、今は。

今後はわからないけども。

「んじゃ、まあ、ぼく帰るんで。戸締り気をつけてくださいね」

「なにもここには入ってこないよ、でも、ありがとう。……キミも

気をつけてな」

「ええ、じゃまた」

そう返答して、ぼくは事務所を出る。

気をつけて、たつてながいると言っわけでもあるまいし。

最近、この辺も前と比べれば平和なものだろう、確かに色々あるけど。

……こちら側にも、向こう側にもきちんと元締めみたいのがいるわけだしな。そうそうトラブルなんて、突如として舞い込んで来るわけがない。

なんてぼくはこの時、思っていたわけ。

自分が今、対面しているトラブルでさえ現実を侵食する怪異だと言つても、所詮はただのドツペルゲンガー。見た人間を殺すだけのものにしか過ぎない、そう考えていたわけで。

少なくとも、もう一人の自分、二重身を見ることになるまでは危険なんてそうそう訪れることはない、とそう根拠もなく確信していた。

そんな保証は誰もしてくれなかったのに。

ぼくはそんなことを考えるよりも、薄暗い中、軋むぼろぼろの階段を降りていくのに必死だった。

*

自分は今のところ安全だ。

例え、その線の上ぎりぎりだったとしても、自分は安全ラインの内側にいる。

その考えが間違いだと知るのに、たいして時間は要らなかった。

事務所から離れて、五分も必要としなかった。

なにかを見たわけでも、聞いたわけでもない。なにかに襲われた

わけでもない。

街中に充満する獣の臭い、唐突にぼくはそれを感じた。どこまで歩いてもまとわり付いてくる、その臭い。

異臭からぼくは異常を知った。

ただ、どこにいても獣の臭いがする。ただそれだけのことでぼくは自分が日常から切り離された状況にあるとなぜか実感してしまっただ。

ぼくは夜の道を歩く。

あちこちに街灯があるといても、影が、なにかが潜むことの出来る闇が消えてなくなるわけではない。

ゴミ箱の影、止めてあるある車の影、建物と建物の隙間、むしろ、明かりがあるが故に、その影は強調される。その存在感が明確となる。

影は影でしかないはずなのに、影の本体である物体そのものよりも、光があるが故に強調される。

影は光があるが故に、闇であるのにもかかわらず明確となる。影と言う、物体としてありもしないものがその存在を主張し始める。

ぼくが感じ始めたのはまずはそこからだった。

あくまで、そこが先だった。

気が付くといつのまにか いた。

荒い息遣い。

今か今かと、急ぎ立てる双眸。

その牙を突きたて、肉を食み生き血を啜らんとする獣。

そこらじゅうの影と言う影に奴らは潜んでいた。

それは……犬。

何の変哲もない、日常見ることがなんら不可思議でない存在。

それが、自分の行く先々、潜むことの出来る隙間、あらゆる至る所の影と言う影に、ぼくが向かおうとする場所に先んじて現れていた。

「おいおいおい」

ありえないわけではない。

一つ一つを見れば、野犬が街の中で見かけることは多くはないが、ありえないことではない。影に隠れるかのようにいることも、稀にはそう、あるのだろう。

だが、この数はなんだ。

日常の中にありえそうな出来事が、数を重ねるだけで異常になる。そりゃ、怪談にはありがちだけどね。実際、なってみるとろくなもんじゃない。

犬、はそれ自体が凶器だ。その辺の人間にナイフを持たせるよりも、十分すぎるほど脅威になりえる。

常に凶器のその切っ先を、背中に向けられている。

そんな感覚。

抵抗？ ばかばかしい。

ぼくと言う人間は、ぼくと言う個人は、たかだか犬畜生が一匹二匹いるだけで殺せる程度の命だ。十数匹いれば、過剰すぎるほどの戦力だ。

こいつらが襲い掛かってくれば、ぼくはいつでも死ぬる。

実際にぼくのような状況で、こうして住宅街の中にある公園に差し掛かれれば、「そんな馬鹿な死に様はありえない」などと、そんな日常と言う妄想にしがみつける余裕は消し飛ぶ。昼間は子供達が無邪気に遊んでいるようなその空間で、ブランコや象の造形をしたすべり台などの遊具に並ぶかのように、辺り一面に奴らがいた。

十、二十、三十、無数に存在する影。

その四足にて這う影すべてが、光る二つの目を獲物である自分に向けている。

唸るでもなく、威嚇するでもなく。

その荒い息遣いのまま、ただ自分を見つめる。その視線を感じながら、歩き続ける。

可能なら、すぐにでも走り出したい。叫びながら逃げ出したい。

だが、そんなことは愚の骨頂だ。獣相手に走って逃げ出すなんて、追いかけてきてくれ と言うようなものだろう。足はどう考えても向こうのほうが早い。

だが、ぼくはそんな状況でも恐怖心に捕らわれ、その心のままに叫びだす……なんてことはない。

理由は簡単なことだ、恐怖心に捕らわれることが怖いからだ。

闇を恐れること、死を恐れること、そんな恐怖よりもそれに捕らわれてしまい身動きできずにいることのほうが怖い。叫びだしてそのまま逃げ出してしまっほうが怖い。

そう、ぼくは 臆病な人間なのだった。

だからこそ、ぼくは勇気を振り絞るのではなく、恐怖心で恐怖心を振り切る。

想像して欲しい、自分が恐怖心に捕らわれ、その心のままに行動してしまっ姿を。

この世にあるなによりも、恐ろしいとは思わないだろうか。

それに比べれば、生きたまま犬の群れに食い殺されることなどた
いした恐怖じゃない。

より強い恐怖を知ること、それに満たないものに対して耐性を
得る。人間は、最悪を知っていれば、「こんな目にあうくらいなら
と痛みを伴う死を恐れずに生きることが出来る。

この世で一番の恐怖は、恐怖に捕らわれてしまうことだ。あとは
たいしたことはない。

ただ死ぬか、狂うか、取り返しが付かないだけだ。

結果を知るところには事実上、死んでいる。別にたいしたことでは
ない。

だから、今、ぼくの背後にぴたりとついてくる獣がいたとしても
それはただ命を脅かしてくるだけ、怖いだけだ。

決して、抗えない恐怖ではない。

その数が増えようが、同じ。

刃物を向けられていたのが、拳銃に、機関銃に、大砲に、ミサイ
ルに、順に変わったところで結果は同じだ。

刃物でぼくは十分死ぬる、それが拳銃に変わろうがなにに変わろ
うが、同じ死ぬならその恐怖は大して変わらない。

刃物より拳銃のほうが恐ろしい？

機関銃や大砲のほうが怖い？

なにを馬鹿なことを、人間は素手で殴られる程度で死ぬるんだ。
打ち所が悪かったなんて、馬鹿な理由で。

そうは言ってもぼくは、臆病なので。

後ろに今、どれだけの犬がぴたりと背後を付いてきているのかな
どと、確かめることは出来なかった。

背後になにがいるか確認するのはそれは恐怖心ではなく、勇気や好奇心などと言ったぼくには不要な成分の領分なのだから。
なんとなく、ぼくは呟いた。

「どうも最近、最後の線ぎりぎりできている気がするなあ」

返答はない。

そりゃそうだ、これは独り言なんだから。

ぼくに出来るのは、音を立てないよう転ばないように、慎重に静かに歩みを止めずにいることぐらいだった。

送り犬という名の送り狼（前書き）

なんだろう、遠野くんが巫月所長ルートを確立しつつあるような？
さらに一層、ドロドロしてきます。

送り犬という名の送り狼

4 .

毎日のように母は父を罵った。

気が付くと、それがわたしの家の日常風景だった。

「またあの女の所でしょう、わたしにはわかってるんですからねっ
！」

「違うと言っているだろう！ …… きみはなぜ僕が信じられないん
だ」

父は仕事が生き甲斐だ、というような人物でとても真面目な人だった。それでいて、人当たりがよくとても気遣いの出来る人で、上司だけでなく部下をも立てることの出来る人物として、多くの人に信頼されていた。

少なくとも、わたしの目にはそう映った。

家にはたくさんの方が来た、仕事に関わる人が大半だったが、そのほとんどが父を友人として慕っていたように思う。年齢や所属、と言った立場に関わらず。上司に当たる人ですら、部下というよりは幾分年の離れた友人のように接していた。

それは今考えてみればすごいことだな、とそう思える。でも、当時のわたしにはそれが当たり前だった。

でもそれが問題だった。たくさんの方が来ていた、その中には男の人もいれば、女の人もいた。それはわたしにとって当たり前のことだったが、母にとってはそうではなかった。

……母はその中の一人と、父が浮気をしているのだと思っていた。そう思うようになったきっかけはわからない。

その女性は父の部下であり、大学の恩師の娘にも当たる人で、仕事の面では父の優秀な補佐を務めていた。同時に、女であるわたしから見ても綺麗な人だった。

父は色々な人から相談を受けるような人柄であったので、当然、その女性からも相談を受けていた。

この時、彼女が父をどう思っていたのかは子供過ぎたわたしにはわからない。

少なくとも、父にはそんなつもりはなかった。

……なかった。

母が一方的な嫉妬をするが故に、父は彼女の相談を母がいない場所でするようになった。

わたしは知っていた、父は嫉妬深い母といえることが大きな負担に、苦しみになっていたことを。

わたしは……それがなにを意味するかを理解していなかった、ただなにも感じずにそれを見ていた。それがどんな未来を生むのかわたしには想像なんてできなかった。

だって、それはわたしにとって日常だった。だれもそれが問題だなんて言わなかったから。

未来なんて想像できるはずもない、未来を想像するのは未来があると経験から知っているから出来ること。過去が存在しない、幼い子供には出来るはずもない。

なによりも、わたしにとってそんな家庭が当たり前だったんだから。^{ら。}

なにも壊れるものなんてないと、そう思ってた。

なにかが壊れた過去なんて……なかったんだから。

*

「それは『送り犬』だね、間違いない」

携帯の向こう側から聞こえてきたのは、そんな自信満々な巫月所長の声。

ぼくはその声を聞いて、どこか安心していた。

「……送り犬ですか」

脱力しそうになる自分を抑えて、なんとか声を絞り出す。

ぼくは自分のアパートに帰ってからも、未だその周囲を犬達が囲んでいるような気配を

感じていた、それらにどう対応するべきか、巫月所長に伺いを立てるためにこうして連絡したのだった。

送り犬、まったく聞いたことがないな。妖怪か、なにかだろうか。

「聞き覚えがない、ね。まあそうだろうな、なら『送り狼』はどうかな」

「ああ、それならわかりますよ。女の子を親切そうに家まで送り届けておきながら、ちょっと口では言えないような企みしてる人のことですよね？」

「……もうすこし、なんだ。……他の言い回しはなかったのかね？」

「なにか変なところでも？」

「いや、いい。さらにその言葉にはもう一つ意味があって、主には山道などで食らう隙を伺いながら付けねらう狼のことを言った」

なるほど、山中ではないにしろ、アレはそういうものだろう。ぼくがいくわした、いや、今なお監視している獣の群れは。

「でも、あれですよ。送り『犬』であつて狼じゃないですから」

「まあ、聞け。送り犬自体、地方によつては単純に狼とも呼ばれる時には山犬と呼ばれることもあつた」

「山犬ですか、それつて確か野生化したペットの犬ですよね？ もしくは野犬全般をそう呼ぶ……んじやなかつたですか？」

「元は違つ、それは後の人間の解釈だよ。元は別のものを指す」

「つまり、実在する犬の種類だつてことですか」

「いや、もういない、既に滅びているよ。山犬とは、本来は日本狼を指すものだからね。本当は別物だとする説もあるんだが、今回はややこしくなるからはぶかせてもらおう」

「それ、ようするに自分に都合よく情報を編集しようとしてませんか？」

「失礼だな、そうでない可能性を示唆する材料を並べる時間が惜しいだけだ。どうしても気になるなら自分で調べるといい」

「……気が向いたらそうします」

永久に気が向かない自信がぼくにはある。

いいじゃん、日常使わないよ？ そんな知識。

「日本狼が既に絶滅したことは当然知っているね？ そのせいで生態系が崩れてしまつたんだがそれはまあいい。重要なはその習性だよ」

「習性？」

「ああ、日本狼には自分のテリトリーに入つたものを監視する習性がある。また、特に自分より確実に弱い子供や女性、老人を襲う。

家畜を襲う際にも、当然ながら弱つた対象を狙う。これは、日本狼に限つたことではないけどね」

「襲う隙があるものを襲うのは、狩猟を行う動物にとって当然のことだと？」

「そう、要するに送り犬の性質は日本狼そのままなんだよ。原型に

なっているどころじゃない。他には、旅人を護つてくれるとか、家まで見送られた後に草鞋を片方投げてよこすと山に帰ると言われるが……」

「あつ、それ。……スニーカーでいいですかね？」

「後から付けられたこじ付けだろう、と私は思う」

「……………」

「自分の身に着けていたものを、身代わりとして使うのはありがちな話だね。効果はあるよ、素養のある人間がきちんと作法にのつとれば。才能皆無のキミには無理だけど。ちなみに草履だけじゃなく、塩や食べ物の場合もある。」

動物が塩を舐めることは珍しくないし、塩は魔除けの意味もあるから付け加えられた流れはわかるね。それがわかるだけに、ただのこじつけ感が一層強い。あと、食べ物で気をそらすのはわかるが、逆効果だろうな。どう考えても餌がもらえると癖になるだろう？

人間に対する狼の恐怖心もなくなり舐められる、一層被害は最終的に増すことが予測される」

「ぼくにどうしろと！」

「……使い込んだ私物でもくれてやれ、多少はマシになるんじゃないか？ 帰らないだろうし、味を占めること間違いなしだが」

「所長はぼくをどうしたいんだ！？」

もしかして、ぼくを殺したいんじゃないだろうか。……なんかしたかな、身に覚えはないと思う、思いたい、思おう、思わずにはいられない。

「うう、まるでストーリーカーにでも悩まされているみたいですよ。まさか、ぼくがこんな目に遭うなんて」

「『ストーリーカー』ね、言い得て妙だな。二重に出歩くもの、との符号を考えると二重身も、自分自身と言う名のストーリーカーのようなものだと考えられるじゃないか。自分自身から人は決して逃げられない

「いわけだが……なんだか笑えるね？」

「笑えねえよ！」

「つまり、キミはあれかな。『ストーカー』に『スニーカー』をく
れてやるうとしたのか。……ずいぶんと身体を張ってるなキミは」
「相手を喜ばせようとした訳じゃない！」

この人、ぼくを徹底的になぶるつもりなのか？

ぼくもかなり性格が悪いことを自負しているけれど、サディスト
じゃないことだけは胸を張りたい。心の底から。

「ん、でも、所長。所長の言からすると、送り犬の正体は日本狼っ
てことですよな？」

「ああ、そうだ」

「でも、今現実には妖怪だかなんだか知りませんが、こうしてぼくの
住んでいるアパートを包囲してますよ？ 間違いなく存在している
んです」

「現実には、ね。おそらく、キミ以外の人間には一切脅威はないどこ
るか、認識することすら一部を除いて不可能だろうがな。それを現
実に存在する、と言っているものかな？ あくまで今のところは、
になってしまふのが問題なのだけど、ね」

「それって……どういうことです」

「そうだな、おんぶお化けの正体は知っているか」

「……山に捨てられた小判でしたっけ？」

「絵本で読んだのか？ 微笑ましい限りだが、オバリヨン、おいが
かり、その正体は時に狐やら狸やら神の試しになるわけだけだね。
あれは科学的に説明するとなにになるんだろうね？」

「科学的について……今そういう事態ですか？」

今はどう考えても科学的にも現実的にも、説明の利くような状況
じゃない。

だが、ぼくの言葉を巫月所長は無視し、話を続けた。

「いいか。考えるんだ、その現象だけを切り離して考える、突然身体がなにかが重く押し掛かったかのように重くなり、身体に力が入らなくなり動けなくなる。ひどい時にはその重みに耐え切れなくなり、徐々に呼吸が出来なくなり、死んでいく。これはなんだ？」

「……なんだ、って言われても」

とりあえず、ぼくは所長に付き合ってみる。現状、差し迫った危機はなさそうなのは間違いないのだ。外にいる連中がドアや窓を破ろうとしない限りは。

とにかく、そういう状況で考えられるのは……。

「病気とか、なにかの発作ですかね？」

「そうだな、それもある。そして怪異の舞台となることの多い山中でなら、ガスが考えられる」

「ガス？」

「そう、ガスだよ。手足のしびれ、全身の重さ、呼吸困難、死。ちよつとしたくぼみがあれば日本各地ありえる話だ。なにせ、火山の上に国があるようなものだしね。」

病気やらなにやら、そんな目に見えないようなもの、当時の人間がどう感じたか、説明の付かない事態を自分にどう納得させるか。理解するのはそう難しくないだろう？」

確かにありえない話ではないだろうけど。

「それが今とどう繋がるんです？」

「結局ね、怪異なんてものはその大半が存在しないんだ。だってそうだろう、元になったものはもう滅びてすらいる。キミだけが見えて感じているだけなのかもしれない」

「でも、実際にいますし。ぼくらはそれらと何度も戦ってきています」

「そうだね、我々は怪物や怪異と対峙する立場にある。だけど、覚えていてほしい。元々はそんなものはいなかった、人間が作り出してしまったという可能性があることをね」

「……それはいつたい？」

「キミが対峙したことがあるのは、そうだな。『非生命体』、『食屍鬼』、『喰人鬼』、『二重身』、『悪霊』。あとは異能者に魔術師、……他うちの所員ぐらいかな」

「そうですね」

自信はないがだいたいはそんなものだろう、細かく言い出せばきりがないけど。

「で、それに人間が関わっていないものは？」

「……ないですね」

例外があるとすれば、最初から人間じゃない異種族と呼ぶべき存在くらいだ。それも戦ったことなど今のところない。

「そう、根本的にそうなんだよ。断言してもいい、人間さえいなければこの世の大半の怪異や妖怪は存在しない。存在しないものに力はない。後に残るのは自然現象と異種族、一部の神くらいだ。元々が人間から始まっているんだよ」

「……つまり今のこの状況は人為的なモノだと？」

「その通りだ、人間が作った器によって起きている事態だ。送り犬など、この世に存在し得ないのだからな」

根本的な解決にはならないけど、状況は把握した。

そして、おおよその事態の予測も出来た。自分がだいぶ落ち着い

たのを感じる。

身を守るくらいなら、どうにか出来る程度の事態だと、そう冷静に認識できる。隙さえ見せなければ、十分に生き残ることが出来る。恐怖に飲み込まれずにいられる。

現状を把握するというだけで、人間はだいぶ理性的になれるのだ。

「……にしても所長は頼りになりますね、有難いですよ」

もし、所長に連絡が繋がらなかったら、朝までガタガタ震えながらお祈りしてるぐらいしか出来なかったかもしれない。ああ、夕飯を食べるくらいは出来たか。

「まあ、そこまで言うてくれるなら、もうすこし夕飯のおかずはマシなものにしてくれないか？ 今日の煮付けは美味い不味い以前に味が薄すぎる」

「いきなり駄目だし!？」

「あと、『携帯電話が嫌いだ、可能なら解約したい』と常々キミは言っていたが、失くすと死ぬことになるということを自覚したほうがいい」

「さらに駄目だし!？」

……おかずまだ食べてないのに、美味しくないことが判明した。

味見したときはそこそこ大丈夫だったのにな、味見したときと味が違うのはなんだろう、タイミングが悪いのかな。

でも、まあ、携帯電話が嫌いなのは仕方がないだろう、とぼくは思う。四六時中不特定多数の人間に拘束されている気分になるのだ。いつ誰から連絡が来るのかわからない状況、って言うのはどうもリラックスできない。

「って言うか、携帯ないとぼく死ぬんですか？」

「キミが外部との連絡なしに生延びることは不可能だと思え、キミ自身はなんら特別な力も戦闘・生存技術も持たないただの人なのだから」

それは自覚していたことだ。

ぼくのいる場所はぼくにとって危険すぎる。ぼくが関わるものも、普通の人間であるぼくには分不相応なぐらいに強烈な出来事ばかりだ。

「……それは仕方ないですよええ。まあ、このバイトを続けている間は、ですからね」

ずっとこの仕事で生きていくわけじゃない。

そのうち、どっかに進学でも就職でもするだろうし。

「いや、もう辞めたところで手遅れだろう。キミはこちら側に関わりすぎた、キミが何をしようとした事態に巻き込まれ続けることになる」

「……聞いてませんよ、それ」

「『怪物と戦う者は、その戦いで自らも怪物になることのないように気をつけなくてはならない。キミが深淵を覗く時、深淵もまたキミを覗いているのだ』だよ？」

ニーチエを知らないのかね、キミは。一度でも非日常に触れてしまえば、それに触れたものも非日常の一部となる。既にキミはそれ以外の人間からしてみれば、十分に非日常であり非現実だよ。キミがそこに存在しているという時点で、周囲を危険にさらしているということを知ったまえ」

「このタイミングでそれですか？」

そういう重要そうな話は、もっといいタイミングがあると思うん

だが。

これ、かなり衝撃的な話だよ？ 自分も怪物となんら変わらない、
って言われるのはさ。

「私とて好きで言っているんじゃない、ただキミは自分がどんな場
所に立っているのかと言う自覚が足りなさ過ぎる。キミはいつ死ん
でもおかしくないんだ」

「自覚はありませんけど、覚悟はしてますよ。初めてこちら側に踏
み込もうとしたその瞬間からね」

「そんなつまらない覚悟はするな！」

「……自分が死ぬ気はないですよ、そうならないようにと所長が努
力して下さっていることは知ってます。……本気で感謝してるんで
すからね？」

臆病者のぼくがこの街を平然と歩けるのはそのためだ。

無防備のまま所長はぼくをお使いに出している訳じゃない、だか
らぼくがそうそう死ぬことはない。それだけの用意はされている。

問題はぼく自身に生存力と戦闘力が皆無と言う一点くらいだ。

「それに言ってるでしょう、ぼくは普通の人間なんだって。ぼくは
自分が普通の人間であるためにならどんな努力も惜しみませんよ、
その覚悟です」

逆に言えば、そのためなら自らが死ぬことも厭わないってことを
所長は理解している。

だからこそ、所長は怒っているわけなのだが。

「……最悪の場合はまた連絡しろ」

「連絡ってその時には手遅れでは？ 声ぐらいしか届きませんよ？」

「それで十分だ、たいていはな」

「声さえ届けば、距離など容易に無視できるとそういうのだろうか？
どんな反則だよ、この人。」

「でも、あれじゃないです？ こういうのって怪奇現象に巻き込ま
れている間、電話がなぜか掛からないってパターンじゃないですか
？」

「そのときはあれだな」

「……あれですか？」

「潔く、行いが悪かったと諦めろ」

「いきなりそれですか!？」

「いやいやいや、今ぼくのことをすごく心配していた風味だったじ
やないですか!？」

「もうすこし、労りつてものを……」

ふと、窓を見た。

その正体の糸口に触れて、犬の群れに気が向いたこと。完全に安
心ききつて、自分が安全ラインの内側に入ったと確信したからこそ、
現在の状況を再び把握しようとしたから。心理的にはそういうこと
なんだろう。

だからぼくは、気がついた。

なぜか、ぼくは今まで気がついていなかった、ということに。

「うわっ」

「どうした! 遠野、なにがあつた!？」

「……いえ、なんでもありません」

「いいから言え。なにがあつた？」

「……窓に張り付いていただけですよ」

「なにがだ？」

「……女の子が」

ある学校の制服を着た女の子だった。

ただ人間じゃないことはわかる。眼球のあるはずの部分がただのくぼみであるかのように、深い闇に覆われているから。

伽藍どうの二つの穴がなんの感情も訴えることなく、ぼくを見つめるようにして窓に張り付いていたのだ。

「『女の子が窓に張り付いていただけ』ね、それが『なんでもないと。意外に余裕があるんじゃないのか？』」

「口だけですよ」

「今もいるのか？」

「いますね」

まるでぼくの声が聞こえていないかのようだ、こつして目の前で自分のことを話されているはずなのに、なんら反応がない。

ピクリとも動きはしない。

瞬き、をすることはすらない。目などなくただ穴が空いているだけなのだから。

「まったく動かないんで、まるでそういう作り物のオブジェがあるだけみたいな気分ですよ。良い気分ではないですけどね」

「本当に余裕があるものだ」

「口だけですって」

「まったく、あちこちで女に声をかけているからそんな目に遭うんだ。今度はどこの女だ？」

「やめて下さい！　まるでぼくがそういうことを、いつもしている

みたいじゃないですか!」

「違うとでも?」

違うよ、違う。断じて違う。

確かに今日もほぼ初対面の女の子に声をかけたけど、実質死人だから!

「死んでいようが生きていまいが女には違いなidarou?」

「それはそうですね、じゃなくて、いつもいつも声をかけてる訳じゃないということが言いたいのであつて……」

その次の瞬間だった、冷水のような声で目を覚めさせられたのは。

「……それで?」

所長は問うたのだった、今までにないほどの強い口調で。

ぼくはその問いの意味を……既に知っている。

「それで、とは?」

「なぜ最初から言おうとしなかった、もし強く触れられないのなら隠そう、そう思ったからか? 出来れば言いたくなかったと?」

「所長、ぼくは……」

見透かされているどころじゃない、この人。最初から全てを知っている。

「わかっているぞ、遠野。その女、いやその『女の子』は誰だ?」

「……所長、ぼくはどうしたらいいんですか?」

「一切、この事件に関わるな。その家から出るな、送り犬は家に侵入してくることは基本的にはない、だが怪異の中には家人に招かれ

ることで侵入を果たすモノもいる。絶対にソレを自分から入れるな」
「……自分から入れるなんて」

ありえない、そう続けようとする言葉を遮り所長は言葉を連ねる。

「いいか、遠野。他人の住んでいる家というのは、それ自体が結界だ。人間であるキミとて、他者の家には入りづらいだろう？ 本来、結界とはそういうものだ。文化的、社会的礼儀、習慣、しきたりから発生したモノだ。それを最大限に活かせ」

「はあ、結界って言ったって……」

「いいから気を抜くな！ いいか。不用意に電話にも出るな。電話はありとあらゆる魔術を通しうる最大級の媒体だ。これは空間と空間を繋ぐ『魔法』だ、魔術なんて目じゃない。どんなに強固な結界を作り上げようが、術者は対象と電話が繋がれば十分に呪殺し侵入を果たせる。悪霊や式神、使い魔を容易に送れるんだぞ？ これは現存するいかなる魔術よりも、簡単に強力だ」

「……電話ってそこまで凄いですか」

逆に言えば、電話さえ繋がれば巫月所長は力を発揮できると言うことか。

なるほど、自信満々に声さえ届けばどうにでもなると言うわけだ。例え、ぼくが外部から閉じ込められた場所にいたとしても、巫月所長に電話さえ繋がればたやすく状況を打破できるわけだ。

「これはいいことを聞きました」

「っ遠野!？」

「これはちよつと状況を上方修正ですね、ありがとございます。所長、お陰でだいぶ動ける目処が立ちました」

「ふざけるな、そんなつもりで言ったんじゃない」

「では、所長。また明日」

「なっ……」

ぼくは通話を切り、マナーモードへと変える。電源を落としてもいいけど、それだといざって言う時に繋がらないからな。

所長も甘いよな、電話が繋がることの効果を、その意味をあえてぼくに言わなかったのはこうなることを予測したからだろうに。あの人、結構正確に相手のことを把握してるからな。

でも、言わずにはいられなかった。

ぼくが所長以外の誰かからの電話に出してしまう可能性どこるか、誰かに電話をかけてしまう可能性すらあると察知してしまったから。

本当に頭の回転が速い、だけど、ぼくの危険性を天秤にかけたときに冷静な判断力を失ってしまった。ぼくは魔術やオカルトにはほとんど知識を持たないけれど、その知識が自分の安全のために利用できるものだと言う程度には把握しているし、応用も出来る程度には理解もある。

現実起こっているならそれを現実とし、たやすく常識を捨てられる。それが現実主義者だ。フツウの人間の順応性だ。ソレが出来ないのは極端な常識主義者だろう。

「でも、どちらにしたって……」

夜に動くのは危険過ぎるな。どうあっても、向こう側の支配域フィールドだ。とりあえず、朝までがたがた震えてますかね。夕飯でも食べなが

ら。

たいして長い時間でもない。巫月所長の様子からして家の中にさえいれば、眠っても問題なさそうだしね。

ぼくは臆病者だ、でも安全性を保証されてまで怖がるのは臆病者でなく、現実をみていないだけだろう。

ぼくはぼくを見つめる、その女の子を見る。

「なるべく早く行かないと拙そうだしね」

朝まで体力を温存しておこう、ぼくはそう心に決めた。

その右腕が血で真っ赤に染まっていたから。

真っ赤な手跡の付いた窓を、その血が滴り落ちるその光景を見て、状況が確実に悪化していることをぼくは知ったのだから。

獵犬という名の狩人（前書き）

登場人物を増やすタイミングって悩みます。

獵犬という名の狩人

5 .

カナに会ったのは、中学生にあがってから。

当時のわたしはレンズの分厚い眼鏡をかけ、今ほどあまり外見には気を遣ってなかった。最低限の身だしなみは一般的な礼儀として行っていたけど。人に不快感を与えず、かつ、規則を守れているなら問題はないとそう思っていた。

少なくとも、わたし自身はそう思っていた。

友達はそのほど多くはなかった、男子からは生意気だと思われるいたようだし、女子からはとっつきにくそうにされていた。

小学校のころからそんな感じだったので、客観的に見てかなり変わり者だったろうと思う。

少なくとも、年齢にあった性格ではなかった。

それでも、なぜかわたしと交友を持つとする幾ばくかの寛大な人たちが存在したことは幸いだっただと言える。例えそれが、どんな理由でわたしと一緒にいたんだとしても。

中学にあがって、すぐの頃にはクラスに友達と言えるような人はいなかった。残念なことに、小学校からの友達と同じクラスに振り分けられることはなかったのだ。

わたしは基本的に自分から、用事もなく誰かに声をかける性格ではなかった。とはいっても、孤立したいわけではなかった。ただ仲良く話したいということが、わたしにとってきちんとした用事にな

りえなかったのだ。少なくとも、この時には。

……今でも、なんの用事もなしに人に話しかけるのは苦手であるけれど。

そういう自分を振り返り、少し孤立し気味だったわたしに話しかけたカナは、とても変わり者だったと思う。端的に言えばお節介だつたろう。

「アンタさ、お堅い格好してるよね」

教室で一人でいたら突然そう声を掛けられた。

今、考えても変と言うかお節介と言うか、実質初対面の相手にしては失礼だと思う。

その言葉に戸惑ったわたしは、平静を保とうとして少しきつめに返した。それはわたしの癖のようなものだった。

「別に貴女に関係ないと思うけど？ それに誰にも迷惑掛けてるわけじゃないしね」

「ま、それはそうなんだけど。もったいないなって思って」

それに対して、平然となんでもないように返すカナにわたしは啞然とする。

「……もったいない？」

「そ、ほら、アンタそこそこ可愛いだからさ」

「そこそこ……」

「なに、不満なの？ でも、自分が絶世の美女だと思つたら勘違いにもほどがあると思うよ？」

「……それは思つてないけど」

「なら努力してみる？ 絶世とはいかなくても、人生に絶望しない

程度には、そうね、素直に可愛いつて言われるくらいにはなれると思うよ。なんかお堅いオーラが出てるからみんな近寄りたいたいんだよね、たぶん。人間、性格は変えようないんだから、最低でも見た目だけでも何とかしないとさ」

「はあ……」

わたしは自分が結構、物言いがキツイ人間だと思っていた。気に入らないことがあれば、はっきり言いたくなる性格なのだが、面倒なことにそのくせ思ったことを人に言うのが苦手なのだ。気負いすぎて、気合を必要以上に入れないと口が回らない。

言おうとすると必要以上に、言葉がキツクなってしまう。

でも、カナはそれ以前に……素直にズケズケ言い過ぎだと思う。気負いなんてまったくなさそうだった。悪意が全くないことも伝わるのが救いと言うか、たちが悪いと言うかなんというか。

「なにより目つき悪いのが、近寄りがたさを強調してるよね……メガネの度あってないんじゃないの？　ちょうどいいからコンタクトに変えたら？　みんな、メガネかけてる相手の顔ってよくわからないみたいでさ、眉毛整えてるのも、顔が整ってるのもわからないみたいで。ま、目が馬鹿なんだと思うんだけど」

「いや、その、目つきが悪いのは元からだから」

「あ、今はそうでもないか。なに、人と話そうとするとき、緊張するほう？　緊張すると相手を睨んじゃうとかそういうこと？　そ、ふうん、話をしていると、って言うより意識すると目がきつくなっちゃうんだ」

「え……」

「ん？　あ、今きつくなつた。うあ、やっぱり。……なんだ、可愛いところあるじゃん」

「……や……その」

カナはわたしと違って、とても友達の多い娘だった。それこそ男女関係なく。

父とはまったく違ったタイプの性格なのに、どこか父と同じものをわたしは感じていた。誰にでも分け隔てなく相手の気持ちで大事にしても、それなのに自分の心を一方的に犠牲にすることがない。わたしにはそう見えていた。

父とカナ。

父はわたしにとって当たり前前の姿だったけど、それであると同時に幼かった頃のわたしにとっては、いずれ自分になる姿であり、この頃のわたしにとっては自分が本来あるべきと思っていた姿だった。もちろん、それは実現できなかったわけだけだ。

カナを父に重ね合せていた、と言うのは正確ではないのかもしれない。わたしは父やカナになりたかった。父のようになったわたしをカナの中に見ていた。カナをわたしのように見ていた。

おそらくはそういうことだったのかもしれない。わたしにとって、カナは理想で完璧な生き方だった。

……完璧なんてそんな人はいるはずがないのに。

今考えてみれば、わたしはカナにとって重荷だったんじゃないだろうか。

母が父にとって、そうなっていたように。

*

西の空が明るくなり始めたのを確認したばかりは、ようやく行動を始めることにした。

正直、どこか眠気と疲れが残っていて、万全であるとは言いが仕方がないことだろう。

いくら家の中での安全を保証されたと言っても（よく考えたらされてない）、そこで本当に爆睡できるほどにはぼくの神経は太くなかったのだ、だいたい眠りは浅く、何度も目を覚ましては、気味の悪いオブジェのようなものに眺められる自分を再確認していた。そんな状況で、万全さを自らに求めるのは酷だ。

気味の悪いオブジェって女の子に使う科白じゃないけど、そこは勘弁して欲しい。まごうことなきぼくの本音なのだから。こういう状況になって、文句の一つでも言わないほうがおかしい。

見るたびに奇妙に感じたのは、少しでも視線をはずすとその途端に、彼女がどこにいたのかわからなくなってしまうことだった。一瞬前まで見ていた動かない対象を見失うと言う、ありえないはずの体験。

なんとこのだろうか、目の前にはつきりといえるはずなのに、その存在感がどこか希薄なのだ。見ているときですら、それが本当に目の前にあるのかを疑うときすらある。

それなのに、その本来の原型とはかけ離れかけているソレを、ぼくは間違いなく、彼女だと確信してしまう。

どう考えても、それはぼくらが二重身と呼んできたモノに間違いなかった。

どんなに姿がかけ離れていても、それを本人だと思う、その原則に従えば、それは間違いなく、その人物の二重身だと言えた。

ただ、なんだろうか。

どこかでなにかを決定的なまでに、致命的なまでに、絶対的なま

で。

ぼくはなにかを間違えている。勘違いしてしまっている、そんな気がする。

ぼくが勘違いして生きているのは、今に始まったことではないんだけど。

それでも眠りが浅かったことが完全にマイナスだったわけではない。お陰で、日が昇るに連れて、二重身がその姿を消していく光景を見ることが出来た。二重身にも活動しやすい時間と言うのものがあのかもしれなかった。

単純に考えれば、日暮れ、つまり逢ヶ魔時から力を増し始め、夜明けとも力を失う。と言ったところだろうか。それが一番、怪異としては標準的スタンダードなところだろう。

決めつけてしまうのはよくないが、否定する理由はないように思う。

振り返ってみると、樋口カナの二重身はその存在自体が消えかけていて、他の気配によって打ち消されることすらあるほどの状態だった。まともに話も出来るか疑わしいほどに。

ぼくとしても本人に話を聞けるかどうかは賭けだったのだが、周囲に余計な気配がないと言うだけでなく、夕暮れ時を迎えて二重身としての力を僅かに取り戻せた、と言う側面が実はあったのかもしれない。

花火が最後の一瞬だけ激しく光るような、そんな切ないものではあったけど。

対して、夜明けの光は基本的に、人外の怪物にとっては忌避の対象とされている。実際、夜明けとともに、急速に送り犬の気配が消えていった。この時間帯を狙い怪物達に勝負を挑むことは『狩人』でも少なくともいらしい。

ただし、夜明けのその寸前が最も、闇が濃くなる刻であるとも言われる、と巫月所長からレクチャーを受けたことがあるので、一概に夜明けを待つて勝負を挑むと言うわけにも行かない場合もあるようだ。

まあ、ぼくの場合、そこまでぎりぎりの戦いがしたいわけではない。目的が達成出来ればいいのであって、命を賭けた死闘に心を躍らせる阿呆ではないのだ。可能なら十分に日が昇ってから行動したいくらいだ。

いや、その選択も不可能ではない。むしろ、そちらが最善手だろう、とは思う。

それでもぼくは、時間が遅かったがために彼女を、大神アスカを助けられなかったと言う結末を迎えたくはない。一刻も早く、彼女を助けたい。

そう思い、ぼくは自分の家の扉を開け、飛び出そうと。

「やつほー、……おっほー」

……開けられてしまった。

しかも、いきなり挨拶されてしまった。緊張感なく。

「って言うか、あなたが来るんですか」

カジュアルな動きやすい服装に身を包んだ彼女は、いつものようにその上から白衣を羽織り、いつものようにとびっきりの笑顔で、いつものようにその鋭く輝くほどに白い犬歯を見せ、魅せるようにして……ぼくの目の前に現れた。

「当たり前だよー、車持ってるの、実質『猟犬』じゃうちぐらいのもんだからねっ」

そう言って、彼女はぼくの肩をバシバシと叩く。

「いやー、久しぶりだね。遠野っち。2週間ぶりかな？」

「たった2週間ですよ、キツキさん。前は『遠野っち』じゃなくて『とーの様』呼ばわりだったと思いましたが」

彼女は名を有卦ゆづけキツキ。

うちの事務所の最後の戦闘要員だ。彼女は自らを『狩人』ではなく『獵犬』と呼ぶ。

自身を『狩人』と自称する赤霧先輩も、そして、ぼくの最もパートナーとして組むことの多い捕食者である軋呑ハミも、本来は『狩人』ではなく『獵犬』と呼ばれる立場にあるらしい。だが、他称ではなく、自らを堂々と『獵犬』と言い切るのは彼女以外に他に知らない。

自らが、狩人に使われる犬である、と言い切るのは彼女をにおいて他にない。

そう、実際にはうちの事務所にいる狩人は、正式には二人のみ、巫月所長とぼくだけなのだ。言うまでもなく、ぼくの方は形ばかりの狩人であるわけだけだ。

「にしても、なぜキツキさんがここに？」

どうやって鍵を？　なんて今さらなことは聞かない。彼女には、そんなもの一切通用しないのだ。一度、侵入を許してしまえば、いつでも中に入ることが出来るその性質故に。

「いやさっ、うちってば本当は別のバイトだったんだけど、いきなり電話で『しよちよー』に頼まれてさ。仕方なく、しぶしぶ泣く

泣く無断欠勤なのさっ」

「そこは連絡して休んでください」

キツキさんは、事務所の仕事中は巫月所長を、しよちよーと怪しい発音で呼ぶ。仕事の時間外だと、下の名前でちゃんづけにする。公私をきっちり分けて働いていると言えるのかどうかは、それぞれの判断に任せたい。

「かつたいなあー、遠野つちは。そんなんだから彼女ができないんだぞっ」

「余計なお世話ですよ、連絡を入れるのは社会常識です」

「かつたるいなあー、社会つてのは。しよちよーの事務所ぐらいのテンションでいけよー、『働きたいときにおいで』ぐらいの器量の深さを見せようぜ」

「それじゃ色々と生活が成り立たなくなりますから。従業員の気分であちこちの店が閉店したらいやでしょう、……特にガソリンスタンド、が」

「かつらいなあー、遠野つち。どう考えても冗談だよ、うちが本気でそんなこというわけないでしょ？」

「もしかして、無駄に最初の一言目の科白、あわせようとしてません？」

「……かつ……思いつかないや。そんなことはどうだっていいんだよ！ 遠野つち！」

いきなり切れだした、キツキさん。

もう、うざったいなあー！

「しよちよー、言つてたぜ。遠野つち。すげー焦った感じでいきなり、開口一番、『遠野が危ない、頼むキツキ。助けに行ってくれ！』だつてさ。愛されてるねー、遠野つち」

「……いくらぼくでも夜に行動する愚は侵さないですよ」

「またまたー。必要ならするでしょ、絶対にそれが必要だつて判断すればさっ」

「さすがに成功する確率にもよりますけどね」

信用もなんもあつたもんじゃないな、いや、あの電話の切り方だと仕方ないのか。あれから何度も電話来てたっばいしな。完全に無視をしたけど。

絶対に後で怒られるな、それはもう確実に、だ。

「それにしたつてキツキさんもよくそれを了承しましたね、……いっつもなら断るでしょうに」

「本来ならそうなんだけどねっ。遠野つちの危機つて聞いたからね、行きたくないのはやまやまだけど、まあー、なかなかそこそこときばき即座に大急ぎで来たわけだよ」

「それは有難いんですけど、キツキさんもあれですよ。……迷いはなかつたんですか？」

「まーね、うちつてば義理堅いからさっ。ヒトが好いつて奴かもねっ」

「……言うのは無料ただですから、止めませんし突っ込みませんけどね」「むむむっ、なに気に遠野つちは毒舌だねっ。つてよくよくしみじみ考えるといつもかなっ？」

有卦キツキは事務所でもかなり例外的な存在だ。

うちが事務所では保有している所員、ぼく以外はほぼすべて獵犬と呼ばれる立場にあるが、その中で実は熱心にうちの事務所で働く人材はほとんどいない。正確には働ける人材がないのが正しい。

うちの事務所で働くことの出来る人材は、社会に適應できることが多いので、わざわざ危険を犯してまでうちで働くことは出来る限

りしない。あくまで最低限の義務を果たすためだ。

赤霧先輩は他のことができない、ハミはしなければ飢え死にする、そういった特別な理由があるからこそ、頻繁に仕事を請け負っている。

中には、社会復帰までのリハビリ混じりで仕事する人もいるんだけど、それは短期間での話。誰も可能ならうちの事務所で働きたい、そう思っている。人間の社会で普通に生きていきたい、そう願っている。

その辺の事情はおいおいわかってくるだろうから、今は詳しくは述べることはしないけども、有卦キツキは中でも例外的だ。彼女は本来、人間の社会で生きていけるような存在ではない。それでも、出来る限り人間の社会で訳あって留まるうとしている

それも一時の仮宿だけだねっ、なんて明るく言うところがキツキさんらしいのだけど、その上でうちで働きたくない、と堂々と公言していながら、こうして時々気まぐれのように現れるようなそんな掴み所がないヒトなのだ。

まあ、こうして現れる理由が、本当に単に義理堅いだけの、おヒト好的な理由なのかもしれないけれど。

……ん、まてよ。

「そうなるとキツキさん、ぼくの家に来るの遅くないですか？」

ざっと6時間ちよいほど……もしぼくが所長に電話して、あの後そのまま行動していたら普通にもう手遅れだろう。

「ん？ なにを言ってるんだ、遠野っち。うちはずっとここにいたよっ。」

「はあ？」

「だから、連絡を受けてからすぐにここに来て。ざっと6時間くらい、ずっと待機してたよ？」

「……なんだって？ ようするにあれか、一晩中寝ずの番をしていたと？」

「寝ずの番……はおかしいかなっ、うち、本来夜寝ないし。今はじっちゃんとおばちゃんに合わせるからアレだけどっ。アレでアレだけどっ！」

「阿呆かっ！」

ぼくがそう怒鳴ると、キツキさんは「ひあっ」と可愛らしい悲鳴を上げた。ちよっとドキッとしたのは、なぜか感じた背徳感と共になかったことにしておく。

「……なに？ びっくりしたじゃん？」

そう不満そうに、言うキツキさん。まるで自分に問題はないといたそうだ。

「びっくりしたのはこっちですよ。いきなり、セクハラされた女の子みたいな声を出して！」

「……じゃなく、一晩中ここにいたって、なんでぼくに声をかけないんですか!？」

「えー、そこはしよちょーの指示。家に居るよー、ってメールしてさ。じゃ、家を出ようとしてたら止めてくれて言われて」

「それどころじゃないでしょう？ どうして、ぼくに言っただけに避難しなかったんですか!？」

「避難？ ……なにから？」

「なに、って……」

なんだろう、明らかに。

あり得ないほどの認識の差がある。

まるで、なに一つ、昨晚危険などなかったかのように。

「ああ。送り犬、って奴？　うちが来た頃には、なにもいなかったからさ。そういう感じで、しよちよーには報告したけど？」

「……6時間待機させられたことには、不満どころか疑問も疲労もないわけですね」

「いやあ、ほんとほさ。もう寝る時間なんだけどね。って言うか、『本来は』みたいな？」

「ああ、もう夜明けですからね」

つまりなにか、所長の言ったとおり、ぼく以外にはまったく認識されてなかったって言うのか……あの異常事態が。

「それでキツキさんはこれからどうするんです？」

「そうだねっ、遠野っちを止めるって役目は果たしたけど、これで帰ったら意味ないからねっ。遠野っちを車に連れ込んで拉致ってー、しよちよの前に引きずってー、思いつきりしよちよーに、やりたいことをぶちまけてもらおっかなーって」

「ぼくはなにをされるんだ!？」

そんなわけはないはずなのに、これからすぐくひどいことをされそうな気分させられたよ。これも一種の才能って言えるんだろうか。

「ま、これは決定事項ってことで。遠野っちには逃がす気は一切……」

……

「どうぞ」

「どうぞ、って言われても、連れてくからね！」

「いや、だから。いいですよ、連れてって下さい」

「……え」

「車に乗ればいいんですか？」

「そうだけど……えー、なんか、な」

半端じゃないくらい不満そうにされた。

いいじゃん、思い通りにいったんだから。

「ただ一カ所寄って貰いたい場所があるんですけど」

不思議そうな顔で首をぐぐぐ……と傾けるキツキさん。

「なにー、コンビ二？」

「じゃなくてですね、……頼み、お願いに近いですけど」

「うん、言ってみなよ。言うだけはただだよ？」

「……ならお言葉に甘えて」

さて、どうなるか。

断られたら、どんな手を使ってでも逃げ出してみせる。そう決
て。

ぼくは許されたとおり、言ってみることにした。

「女の子を一人、その安全を確保したい。……出来れば事務所に保
護したいんですよ」

どうなるかは、巫月所長に会わせてからですけど。と最後に添え
て。

ぼくは言った。

返答は如何に？ とぼくはそれを待とうと。

「いいよ」

「え？」

「いいよ」

待つまでもなく、返答が来た。

即断、と言うよりは、ぼくが科白を言い終わる前から返答を決めていたかのように。キツキさんは口を開くタイミングを測っていたようだった。

「女の子を護りたい、ね。いいんじゃないの？ ……ちょっとリスキーだけどっ」

キツキさんはそう、犬歯をむき出しにして笑った。

まったく、野性味を感じない明るいほのぼのとした表情で。

獵犬という名の狩人（後書き）

現在、巫月事務所の最後の戦闘要員です。他にまともに戦える人はいません。

彼女の詳細に関してはおいおい……まあ、説明するまでもなさそうなんですけど。

背景という名の存在感（前書き）

基本的にだらだら話すだけ、ってのが遠野くんなんです。
……どんなときでも。

背景という名の存在感

6 .

はじめはただの背景だった。

興味や関心がなかった、意識してなかった。そんな言葉じゃ彼という人物を表現できない、その存在を表記できない。そう、背景と言うのは彼にぴつたりな言葉だろう。

決して彼はその他大勢^{エキストラ}じゃなかった。それなのに、中央で照明を浴びる 主役でもなかった。

誰もが彼を認識するのに、それが意識まで昇らない。

孤立していることは間違いないのに、その事実が一切優越感や劣等感、嫌悪感と関わりがない。

日常、班での活動や掃除、体育の体操や試合、行われる様々な行事、学校生活の中で誰かと関らないことはありえない、その中ではなんらかの印象を持たざるを得ない。自分と合う性格でないのなら、関わりたくないそう思うものだ。少しでも気になれば、少なからず仲良くなってしまうものだ。

彼にはそれがない。

彼は、遠野という人物はそんなありえない存在だった。

出会いそのものは中学あがってすぐあったが、それは出会いと言うほどのものでもなく、すれ違いですらなく、彼を背景とした舞台へと偶然わたしがいただけと言うのが正しいのだろう。

いや、もしくはそれ以前なのかもしれない。彼を背景とした舞台を眺める機会があったというだけなのが、わたしという存在だったのかもしれない。

一年生の頃は同じクラスでなかったために、わたしも彼を認識は出来ても、関わりうとするどころか意識することすら出来なかった。わたしは彼が一年近くもの間、なにをしていたのかろくに知らない。

それでも、わかる。見るまでもなく、わたしには理解できる。

遠野は一年もの間、なにもしていなかったのだと。

誰とも最低限の会話しかせず、なにひとつ問題を起こさず、誰からも褒められることなく、誰にも注目されず活躍せず、その上できちんとクラスメイトとしての義務を果たし、それを楽にも苦にもせず、それを普通として生きてきたのだろう。

それでも、同じクラスになる前に、二年にあがろうとする前に、わたしは彼を意識した。それはカナをきっかけにして、彼と同じクラスの女の子と友達になったからだった。

彼を意識した理由はたいしたものじゃなく、それなのに驚くべきことだった。言っている意味がわからないだろうか、いや、聞けば彼を知っている誰もが驚く、彼を認識している誰もが耳を疑う。

その女の子は、彼を、なんと遠野を……好きだと言ったのだから。

彼女自身がそれを他の誰にも言えないと、カナと共に居たわたしたちだけに、相談をしたことがこのきっかけだった。

なにが問題とえば、なにもかも、だろう。

彼女は彼と必死になって接点をもとうとしたのだけど、それがまったく出来なかった。

話しかける勇気がなかったわけではない、彼女はとても活発な女の子で男子や女子関係なく話すことが出来た。カナほどではないけど。

ことあるごとに話をかけ、同じ班や係などの接点をえたのにもかわらず、なにも……その関係は変わらなかったのだ。彼女の性格

や容姿に問題があった訳じゃない、それは自信を持って断言できる、同じように遠野にも問題はない。それ以外の全てが問題だった。

彼は彼女を認識はしても意識しなかった。なんというのか、遠野は人間一人ひとりがないをしたとしても記憶には残しても、印象に残さない。そう言えばいいのだろうか。

だけど、それはわたしたちも同じだった。わたしたちその他大勢エキストラにとって彼が背景であったように、彼にとってもわたしたちはそれ以上にもいかにもなり得なかった。記憶には残っても、印象には彼は残らない。

カナですら、どうすることも出来なかった。わたしはなにを言っているのかわからなかった。だって、あんな存在をどうして愛せるのか、好きになれるのか、恋が出来るのかまったくわからなかった。

……今ならすこしはわかる、すこしだけ。彼女自身なぜ自分がそうなのか、ほとんどよくわかっていないようだったけど。

ああ、こういう言い方も出来るのかもしれない。彼は誰の意識にものぼらないのではなく、むしろ彼が誰もを自らの意識にあげていない。あげてもそれは僅かな一瞬でしかない。遠野は印象が残らない存在なのではなく、印象を残さない存在なのだ、と。

印象という印象をなんらかの手段で刈り取ってしまうような、存在なのだ。

わたしはこの相談を受けて初めて、思った。彼はいったいどんなひとなのか、と。

不運にもなにかの間違いで印象を残されてしまった女の子を、そのどつしようもない恋をわたしが知って、彼を意識にあげた頃に、印象を残してしまった頃にわたしは二年生になった。そして、わたしは……。

*

ぼくは助手席でキツキさんの車に揺られていた。

時折、ぼくはバックミラーへと視線を移し、なんとなく妙な気分だ狭い車内でキツキさんとどうでもいい話で談笑する。すこしでも気を紛らわすために。

ぼくはあまり車には乗る機会がないしだけでなく、そもそも車があまり好きではないのだ。

でも、キツキさんは車を運転するのが好きらしく、移動の時はいつも車だ。その能力からいけばまるで必要ないものなだけで、いろいろなバイトで必死に頑張っつて溜めたお金で、わざわざ買ったこの中古車をキツキさんはとても大事にしている。そう言った意味でも、キツキさんはかなり変わっている例外的な存在だと思う。

ちなみに免許はある、それも偽造ではない、本物である……ただしきちんと法的な手続き手順をとっていない本物の免許、と言っつややこしい注釈がつくが。

「で、遠野うち。なんか護身用の武器は持ってきたの？」
「いいえ、特に」

いくつかの防護用の呪具は常に所持しているが、武器らしい武器は一切持っていない。これはいつでももそうだ。

「さっきまでひどい目にあつたつて言つのに？」

ぼくが送り犬にずっと包囲されていたことを説明したとき、キツキさんはぴんと来ていないようだったが、一応は納得してくれた。

ぼくにしか認識できなかったことに関しては、それが事実ならば、と言う仮定の上で「遠野っち、そりゃ、ほとんど取り憑かれてるよ。うなもんだよ?」とそう不吉な言葉を残してくれた。

「フツーさ、怖い目にあつたら武器を持って安心感を得ようとすんじゃないのかな。ま、うちはならないけど」

「武器と言われてもなにをしようが、ぼくには扱いきれませんから。銃器はぼくライセンス持ってないんで、規定違反ですしね」

狩人はライセンスさえあれば、狩りを目的とした上でなら規定された銃の携帯・使用が許可される。

ただし、堂々と目に見えるように身につければ銃刀法違反で捕まってしまう。すぐに使える状態で所持していると言うことは、剥き身の刃物を手に持ったまま歩いているのと変わらない、と判断されるからだ。

有事以外で所持する場合には、とっさには使えない状態で持ち歩く必要がある。

さらに所持している銃器には監督義務があり、他者に使用させない、厳重な保管をせねばならない。などの規定が数多く存在する。違反、事故、盗難があった場合の罰はかなり重い。不用意に事件を起こした場合は、狩人全体の信用問題になるため、同じ狩人から殺される危険すら発生する。

完全に規則に則るのなら、銃を使用するたびに許可書を提出し、使用後はどの弾丸をどこでどのようにどれくらい使用したのか、と言う事後報告書を書かなければならない。

現実的にはそういった規則を守っている仕事にならないため、どこの事務所も少なからず違反をしている。それが表沙汰にならぬようにと言うのが暗黙の了解だった。現実に即した適度な緩さと厳

しさを併せ持つのが、裏で生きる人間の法というものなのだろう。

まあ、社会で働く上ではそれがどこでも当たり前だろう、規則はある程度は破られる。清濁併せ持つて、飲み下すように生きるしかない。一般社会との唯一の違いは、せいぜい罰則が死と言うだけの話にしか過ぎない。

それはぼくだって理解している、でもそれ以前にぼくは凶器を持つこと自体が不満だった。

「あまり好きじゃないんですよ、ああいうものは。性に合わないんですよね、たぶん」

「性にねー、遠野つちらしーちゃ、まつ、らしーけどっ」

「……甘いと思います?」

「いや、全然っ。手を汚すのが嫌って言うわけでもないみたいだしねっ。手より大事なものを平然と汚してるし? 覚悟があるならいいよ、別にっ」

「手より大事なもの?」

言っていることがよくつかめない、手はそもそも大事じゃないだろうし、僕に関して言えば特別大事なものなんて特にない。

それに手や身体が汚れたなら洗えばいい、衣服が汚れたら取り替えればいい、ただそれだけの話だろう。大騒ぎするようなことじゃないはずだ。

「世の中、殺しはしてもいいけど、自分が善人だの悪党だのはつきりしてなくちゃ嫌っていう人多いからさっ。どうもそう言うの駄目だね、うちはっ。手を汚さないって決めた時点で悪党なのにさっ」

「……はあ?」

「そうだっ、武器つてものが嫌ならいくつか、しょちよーが遠野っちでも使用できる呪具を用意してなかつたけ?」

「武器が嫌なんじゃないですけどね、使うときもありますし。呪具なら防護用のなら使ってますよ、前もって準備をしておけば有事に自動的に発動する奴はだいたい」

「他のは？」

「能動的に発動させる奴は駄目ですね、あの名前がわからないんですけど楯みたいなのですか？ みんなわかってないみたいですけど、楯も戦いのための道具、武器ですよ。間接的に相手を殺すための道具ですから」

自分の剣が相手に届くまでの時間を稼ぐための武器、弾幕と同じだ。

まあ、本当に巫月所長からもらった防護用の呪具には、相手を消し飛ばすほどのものも存在するので、あそこまでいくと武器以外のなにもものでもないと思う。

「ふうん。あ、じゃあそれは？」

「あれ、ですか」

「そう、ほらあの小刀……『生太刀』だっけ？ あれの複製品は？」

「キツキさん、ぼくに刀が扱えるとも思ってるんですか？ 果物ナイフですら危ういですよ」

生太刀……使い手の『生存確率そのもの』を引き上げると言う能力を持つ、殺すためではなく生かすための刀。殺戮のための凶器ではない、刃を持つ殺人器具を生存と言う一点に特化させた護身具にして護神具。

それと同じ素材で作られ、同じ形状を模した複製品をぼくは巫月所長から、一振り預けられている。本体より性能は数段劣るが、それでも複製対象である本体自体の能力が高かったために、かなり強力な一品に仕上がっている。とは巫月所長の談。

巫月所長から預けられた呪具の中でも、最も強力な呪具の一つだ。

最も……という言葉が複数の呪具に使わざるを得ないのは、言葉の上では矛盾してしまうがそれぞれの方向性が違うから仕方がない。とりあえず、巫月所長の話に聞く限りでは、強力だと判断した。

判断したのだ。

そう、ぼくはその生太刀を一度も使用したことがない。

自ら抜いたことすら、ない。

「ふうん、まつ、いいけどさっ。通り犬ぐらいなら、うちと勝負にならないだろうし。遠野うち一人くらいなら余裕で護れちゃうよーだ」

「ぼくが言うのもなんですが、まあいい、で済ませるキツキさんは大物だとは思いますよ」

仲間がろくに戦わないと言う意思を表明した上で、自分が護るなんてどんだけ心が広いんだと言う話だ。

単純に自らの力を信じている故に、と判断することも出来なくはない。

しかし、そうは言うが、キツキさんは日中はその能力を制限される。キツキさんは強い、それは間違いないのではあるが、あまりに日中と夜の戦力差は大きすぎる。今なら、いくつかの手を打てば、ぼくが呪具を扱っただけでも十分にキツキさんを殺してしまえるだろう。

対して、敵は圧倒的なまでに複数。相手も日中は能力を制限されるとしても不利であることは間違い……いや、まてよ。

送り犬は山犬、二ホンオオカミに近い性質を持つとされる。狼は夜行性か？ いや、その面は強いのもしれないが、昼間に動くことがないと言い切れるのか？

もしかしたら、ぼくが思っているほどには能力が制限されていない可能性もあるわけだ。キツキさんは夜とは比較することが馬鹿馬鹿しいほどに、能力に差が出るタイプだ。逆に、あまり影響を受けないタイプの怪異があってもおかしくはない。不利なんてレベルで済むのだろうか。

「大丈夫だよ、遠野っち。そんなに不安そうな顔しないの。敵の本拠地に行くんだって言うんだったら、そこそこあれこれうちも考えるけどさっ。今回は女の子を保護するだけでしょ？」

「ええ、まあ。……確かにそうですね」

「相手はただの犬コロだし。百いても勝てるどころか一方的になぶり殺しにできる自信があるよ」

「……さすがにそれはやめて欲しいですね」

「画的にあまり情操教育よろしくないのは間違いない。そんな光景みたら、絶対に夢でうなされる自信が僕にはある。そう、ぼくは結構繊細なのだった。」

「それに勝てないならさっ、戦わなきゃいいじゃん！……いざとなれば逃げればいいんだって、ねっ？」

「……それはそう、ですね」

確かに戦って勝つことが目的ではない。そもそも戦いに勝つだけでなにかが解決するのなら、ぼくらは必要ない。巫月所長一人いれば全部済んでしまうことだ。

どこかの映画のように、悪党を殺すだけでハッピーエンドになるのなら、この世に不幸な人間なんていない。

悪事を行うのは、多くは名もなき一般市民。善意で人を傷つける考えなしの善人達の中にははびこり、悪意と嘘で人々を騙そう

とする悪魔は、実に間抜けな手口で利益を出そうとする無能者しか過ぎない。

ぼくらにとって、本当に敵と為る、憎むべき相手は、仕事であることを抜いたとしてもそういった者達ばかりだ。彼らのせいで、ぼくらは怪物を怪物呼ばわりし、あまつさえ殺さねばならない。

無知が罪とまではぼくは言わない、ただ人を他人から与えられた価値観や常識を疑わないことは悪いことだ、と断言してしまいたくなるくらいに周囲の大切な人達を傷つける。

詐欺という悪事と言うのなら、自分が騙されることで、どれだけの人の迷惑になるか、そのだまし取られたお金でどんな悪事が行われるか、騙された結果誰が犠牲になるのか、『罪がない』人々はあまりにも無責任だ。

ぼくに出来ることは、憎むしかない悪党を裁くことでも憎むべき善人なんかを助けることでもない。

逃げ出してよいのだ、ぼくは相手を殺すためにここにいるんじゃない。

「にしても送り犬って奇妙だねっ。こんな所に出てくるなんて、おかしいなんて言うレベルじゃないねっ。まー、遠野っちの話の聞く限りでは、そう言う疑問以前なのかもだけどっ、本来はそういうものではないはずだからねっ」

「……ああ、対象以外に認知されない。って、部分ですか」

「そう。あれはそういう妖怪ではないはずだからねっ、明らかに別の何かが混在して成り立っているよねっ」

「確かに……狼としての習性や本能を元にしたもの、と考えると、最終的にはぼくを喰らうことが目的、となるわけですが改めてそう言われれば不思議ですね」

隙をうかがう、と言つがぼくなど隙だらけの存在だ。隙しかないと言つてもいい。

「知らないかもしれないですけど、ぼくは小学生にすら喧嘩で負けたことがあるんですよ」

「……生きてて恥ずかしくないの?」

若干引いた雰囲気すらあるキツキさんにぼくはいつものように言う。

「まったく、全然、何一つ、恥ずかしくくないですね。むしろ、これで恥ずかしいと思う気持ちがあるならそれこそ恥ずかしいくらいです」

「一瞬、良い言葉に聞こえなくもないけどそれってここで使う言葉かな?」

なにを騒いでいるんだろう? キツキさんは。

「まー、いいや。送り犬自体の解釈的にはおかしくないんだし」

「解釈ですか?」

「送り犬は、そもそも道行く者の守り神という側面もあるしねっ。」

「概に決めつけられないんだよね、逆に遠野っちが護られていたのかもって言うね? あっ、でもでもやばやば監視する存在と言う面もより強いんだけどっ」

「まあ、わからないこともないです。監視と保護は紙一重ですからね、監視って言うんですか? でも、あくまで元になっているのは、狼や野生の犬の話でしょう。護るなんて現実的じゃないですよ」

「そう言うけど、実際狼がいたら他の動物は近寄りたいたいからね?」

それはそうだろうけど納得はいかない。あの何十という目から発

せられる半端じゃない暗い感情……念。

確かにあれは害意ではなかった。ただ害意でもなければ、敵意でもなく、獲物を狙う目ですらなかった。

あれが保護欲から来るものだとなれば、おぞましいにも程があるというものだ。

「でも、そうだねっ。送り犬が憑き物だって言うのは、おもしろい解釈だねっ」

「解釈ねえ」

「うん、あー、遠野っちは違和感在るだろうねー。しょちよーとうちじゃ、考え方が全然違うからねー。魂の存在とか、魔術と魔法の違い、妖怪や怪異の成り立ちとか……ね」

「へえ、そういうのは専門家の中で一致した唯一無二の真実があるんだと思ってみましたよ」

「はははは、ないよ。そんなの。マンガじゃ在るまいし、そもそもうちは専門家じゃないし。どんな分野でも一致した唯一無二の真実はないんだよっ、遠野っち。」

あるのはこういうものにはこういう名前を付けましょっつて言う定義。それとあるかどうかわからない事実という名の記録があるだけ。どちらも、勝手に本人がそういつてるだけで確かなものじゃない。定義なんかそれぞれの専門家や派閥で違うしね。その時々にあった定義や考えを引用して、周囲と自分を納得させてるに過ぎないんだよっ。

人間はね、遠野っち、誰もが魔術と魔法を使ってる。名前を付けると言う手法で魔術を使い、現実という名前で魔法を使ってるんだよ。それが正しいなんて証拠は一切存在しないのに、誰もがそれを信じて疑わない。そんなどんな魔術でも、単体では再現不可能な魔法をねっ。

……例外は数学くらいかな、あれ自体が一つの世界だからね。唯一無二の真実があるのは閉鎖された小さな箱庭の中にだけあるもん

だからねっ。机上の空論なんて、無能な魔術師はそう呼ぶけどさ」「随分と小難しい話ですね、専門外のぼくにはなんとモ」

「魔術や現実を専門にしてる人なんていないよ、遠野っち。まあ、これはうちの考えだけだねっ。ああ、そう言えば最低最悪の魔法、^{げんじつ}幻実って知ってる？」

「興味ないですね、あまり」

「えー、おもしろいのにつ」

「あんまり変な伏線引かないで下さいよ。あるじゃないですか、そう言う話をしてたら、実際に使う敵が現れるみたいなの」

「遠野っちはないと思うけどな、幻実に関しては」

「なら、その話しなくてもいいじゃないですか」

知らなくていいことは知りたくない。

ぼくは普通出来る限りに生きていきたいのだ。

「ふーん。まー、いや。うち、どうでもいいしっ」

「……なら言うなよ、って言うのは野暮なんでしょうね、たぶん」

「わかってん『なら言うなよ』、遠野っち」

「思いがけないくらいに綺麗な切り返しだ!？」

キツキさんにしては、だけど。

「……で、遠野っち。大神アスカちゃんだっけ。こっちの方向であつてんの？」

「ええ、もうすぐのはずです」

「ふうん、よく家知ってたねっ。もしかして友達なの？」

「いえ、違います。ただ同じ学校っただけです」

「……同級生なんじゃないの？」

「ええ、そうですね。それがなにか？」

同じ学校でも同級生でも、クラスメイトでもあまり変わらないと思うけど。

どれも、全部同じだ。たいして関わりなどない。

「いや……なんでもないよ、遠野っち。そういえば、そんな人だったね。遠野っちは」

「は？」

「なんでドッペルゲンガー、自分の家に……いや、自分の目の前に来てるんだと思ってるの？ 遠野っち」

「さあ。たぶん、ぼくになにか言いたいことでもあるんでしょうね……そうだね、遠野っち。きっと、そうだね」

キツキさんが珍しい位に口調に軽やかさがなく、違和感を持ったが、ぼくは特に気にしないことにした。
たいした問題ではないだろう。

「……遠野っち」

「なんです」

「……前言撤回してもいい？」

「はあ、どれに関してですか？」

「二カ所」

キツキさんは大神さんの家に近づくにつれ、なにかを感じているかのようでその雰囲気に変化している。

ただぼくからすれば、それは少々遅い。

「一つは百匹相手でもなぶり殺しにできるから余裕、みたいに言ったこと。あれ、ちょっと厳しいかなって……」

「なぜです？」

「あれ、犬なんてレベルじゃなくなってきたるし」

ああ、見えてるよ。さつきから。

朝日で出来た、濃い影に潜む獣たち。

狼には違いない、だけど……狼ってどこからどこまでか狼なんだろう。何十匹の群が影一ひとつに凝縮されている姿。いったいとなつて、の文字通り一体となつて存在するその形態。

「あれ、百匹なんて目じゃないよね」

それが影という影すべてに存在しているのだ。

百？ ああ、そんな数に収まらないのは最初から、ぼくは承知している。

「ああ、そうですね。で、もう一つは？」

「敵の本拠地に行くわけじゃあるまいし……って部分」

「へえ……」

「だんだんがangan強くなってるんだよね、気配が」

「キツキさん、もう一つ訂正したらどうです」

「……なに」

「ぼくを護る余裕なんてない、ってね。そしたら、勝てるでしょう？ 少なくとも、対抗は容易なはずです」

「そう簡単にはいかないけどね、一理ある。でも、それは言えないよ」

「いや、大丈夫です。間違いないです。ぼくは襲われません」

気付くべきだった。

所長は気付いていたんだろう、いや、たぶんぼくが気付いていると思つてたんだろう。ぼくがこの事態を把握していると勝手に思つたんだろう。

だから、ぼくの安全のためにキツキさんを派遣した。ぼくが絶対

に大神さんに連絡をとるとそう思って。大神さんに必ず会いに行くと判断して。

「所長は案外馬鹿ですね、そうだと知ってたらもう少し慎重に対応しましたって」

あの人自分が頭良いと思ってないから、自分と周りが同じくらい察しがいいとか認識してるみたいだからな。あえて、わかりきっているとって言わなかったな。

「この事件、今の中心地は大神家ですね」

「みたいだねー、どうする遠野っち。引く？」

「キツキさんこそ、ぼくをやっぱ所長の所に連れてくって言わないんですか？」

「いやー、さすがに、ね。今さらかな……って？ それに断ったら、この車から飛び降りるでしょ？」

「ええ、そうですね」

それも時間稼ぎにキツキさんに一撃噛ました挙げ句ですね、間違いない。

「わかんないなー、たいして興味もない相手のためにどうしてそこまでするかなー」

「どうしてって……」

「死ぬかもよ？」

「たかだか死ぬってだけじゃ脅しにもなりませんよ、命賭けるだけなら小学生にも、いや、三歳の子供にだって出来ます。まあ、もし理由があるとすれば」

ずっと、車に乗ってから見え始めていた彼女へとぼくは目線を映

す。

バックミラーに映る、存在感のない彼女を見て。

その存在感を取り戻しつつある彼女を見て。

右腕に巻いた包帯を血に染めた彼女を見て、ぼくは言った。

「女の子だからですかね」

ぼくしか見ていない、もう一人の虚ろな大神アスカを見て。

ぼくしか見えていない、二重身である大神アスカを見て。

ぼくは言った。

「助けるかどうかは置いといて、放ってはおかないでしょう」

それと、もし他に理由があるとすれば、状況を読み間違えた時点で自分が引き返さないことに意味があるのだとしたら、それはたいした理由ではなく。

ずっと、背後に立っていたのに。ぼくは気付かなかった。

ここまで来て、ようやくぼくは気付いた。

「気付かれないのには慣れてるんですけど、気付かれないのには慣れてないからですかね？」

たかだか、存在が薄れたって程度で気付けない。

すこし、自分が腹立たしいからだとそう思う。

「変わらずわっつけわっかんないなあー、遠野っちはっ」

ぼくは笑われた。

犬歯をむき出しにして、嬉しそうに笑われた。

「それに付いてくるキツキさんもたいがいですけどね」

さて、目指すは「」。

今さら下がる退路など、ぼくは知らない。

背景という名の存在感（後書き）

読み返してみると、なんとなく文章全体が見ずらい気がします。

……なにが悪いのかな。なにかいい方法があれば、全体を修正する
かもしれません。

監視という名の過保護（前書き）

どうしようもない物語はさらさら……。。

監視という名の過保護

7 .

わたしにとっての当たり前の日常がいとも簡単に崩れ去った頃。わたしにとっての当たり前が、当たり前でなくなってしまった頃に、わたしは遠野を好きになった。

それまではただの背景でしなかった彼が、いつかのあの娘と同じように、どうしようもないくらいに思い焦がれる対象になってしまった。

なぜか、と聞かれれば困る。

きっかけはいくらでもあるんだろうし、ないと言えまったくない。

誰に対しても分け隔てなく付き合えると言う、わたしの理想によく似ているようで、その実、誰一人付き合えていない彼は、わたしにとって好きになりようがないはずだった。

父やカナのような、誰もが羨む太陽のような人をわたしは好きになるのだと、そう思っていた。

それが、どこをどう間違えてあんな冷たい人を好きになったんだろう。

太陽なんかとは全然違う、かといって月のようでもない。雪のようでもなく、氷のようでもなく、身を切るような寒さでもなく……そう、言うなれば彼は温度がないと言う意味で冷たい人間だった。

間近にある太陽の熱にうなされている人間には心地良い、そんな冷やかさがそこにはあった。それが好きになった理由か、と言えばそれもまた違うわけなんだろうけど。

でも、きつとおそらくそんなものに理屈なんてないに違いない。自分に欠けているものを補う、自分と同じものを求めて、そんな理屈はいくらだって付けられる。でも、そんな理屈になんの意味もない。

わたしは彼が好きになったのだ。

……いや、違う。

好きに なってしまったのだ。

わたしのこの想いがどうしようもなく叶わないものなのは知っていたから、それは仕方のないものとしてわたしは受け止めた。

同時にわたしは諦めようとしても絶対にできない自分に、そこそこ気が付いているほどには賢明であったので、せめてすこしでも彼の傍に居られるように振る舞った。

一秒でもながく隣に。

一言でも多く言葉を。

一瞬でも早くその姿を。

出来るだけ、出来るだけこの目に映せるように。

友達には他の相手を探せと言われた、他の相手に恋をして忘れろと。

わたしはまったくそれを相手にしなかった。

ほかの相手でなんとかなるなら、最初からなんとかしている。どうにもならないから、彼が好きなのだ。どうしようもない相手だが、そんな理屈はいい。彼以外にはわたしはどうにもならないのだ。そこをほかの相手で誤魔化しても無駄だろう。仮に誤魔化せても一時のことだし、だいたい相手にも失礼だとわたしは思う。

そんなことをカナに言ったら、「相変わらず、お堅いね」って笑ってた。

……カナだけが、わたしを止めなかった。

それはなぜかはわたしにはわからないのだけど。

どうしたって、理解はできないのだけど。

少なくとも、わたしはそれが有り難かった。

そもそもわたしは不幸だったわけじゃない、遠野がわたしを好きにならないのは理解していたけど、悲しくはなかった。

寂しくはあつたけど、悲しいとは思わなかった。

どちらかと言えば、幸せだったかもしれない。

なぜ、と言われても困るんだけど。どちらかと言えば、わたしは幸せだったのだ。

だって少なくとも、遠野が他の誰かのものになるなんてことは絶対にありえなかったんだから。

この時には、それがわたしにとって新たな当たり前になっていた。それは高校に上がって早々に崩れることになる。

わたしにとっての二度目の当たり前は、随分と寿命が身近かった。

軋香ハミ……。

学校が始まってしばらくしてから、なぜか来なくなった彼女は……変わった。学校に再び通い始めてからその振る舞いを変えた始めた。まるで別人のように。

クラスで、いや校内でもかなり優秀な成績を持つ彼女は、それ以外の様々な意味で人の目を惹くような彼女が、今度は悪い意味で人の目を惹くようになった。

それだけなら、わたしは別によかった。

よくはないけど、彼女をただ注意したり、あるいは嫌いになるだけだよ。よかった。

でも、そうはならなかった。

彼女はいつも、遠野の隣にいたから。

絶対に人を寄せ付けないはずの彼に、人の目を惹くことのないはずの彼に、どうしようもないくらいに思い焦がれるだけ、誰もがそうだと思ったのに。

わたしの幸せはこの日からなくなった。

彼がそう言う人間だと、わたしが諦めていただけなんじゃないか、本当はあったはずの可能性をわたし自身が勝手に決めつけて消してしまったんじゃないか。わたしはそんな考えに至ってしまった。

わたしにとっての「当たり前」(足場)がまた崩れた。

相変わらず、わたしをろくに認識しない彼を毎日再確認し、軋呑にだけ笑いかけ話しかけ一緒に食事をし、共に連れ立って歩く彼を毎日見て。

すこしでも、彼の傍にいたいわたしは一日に何度もそれを眺めて。なにもかもがどうしようもなくなりそうの中。カナだけがもう、わたしにとっての支えだった。

*

巫月は待っていた。

キツキが遠野を連れて、巫月個人調査事務所へと訪れるのを。

キツキから遠野は無事であるとの連絡を受けてはいたから、その安全については心配してはいない。その上、キツキは間違いなくその安全を確実なものとするために、ここまで遠野を連れてきてくれ

ると言う、信頼もある。

とは言え、巫月はキツキに対して、ここに連れて来いと指示したわけではない。それでも、巫月はキツキが必ずそうすると確信していた。

キツキは狩りを行うことに関しては非協力的だ、キツキは人の都合で怪物とされたモノ達が狩られることを良しとしてはいない。かといって狩りを否定することもないが、常に狩人による一方的な殺戮となるそれを公正フェアでない、とそう感じているようだ。

そう、たいていの場合、狩人は圧倒的なまでに有利だ。

怪物とされるモノ達は絶対的な少数派であり、数の暴力で単純に圧倒される。もし、狩人を撃退してもそれが昼夜問わず、二十四時間交代で毎日襲い掛かってくるのだ。どれだけ強くとも必ずどこかで限界が来る。

また、狩られるモノ達は必ずしも超人的な戦力を有しているわけでもない。むしろ、普通の人間と同等、もしくはそれ以下の力しか有していないのが大半だ。

そして、数少ない力を有するものは、力を有しているが故に勝ち目がない。この長い年月の間に人間は……狩人は自らを超える怪物を、確実に殺せるシステムを完全に確立している。

強ければ強いほどその強さ故に名は知れ渡り、世界にとどろくほどに有名ともなれば、たったその一つの個体を殺すためだけに、魔術や武器、戦術が創作され、それはすぐに最前線で戦える手練の狩人に、時には同じく狩られる立場にすらあつた『獵犬』へと渡される。

いまや人は神に対してですら、時間と手間さえ掛ければ一方的な暴虐が可能なのだ。

神殺したための狩りの手順は、紀元が刻まれる前に確立されたような、遠い昔の出来事なのだから。

そんな不平等な世界のなかで、キツキはなにに対しても公平だ。怪物とされるモノ達の立場を同じ目線で理解し、人間には人間の都合があることを知り、その双方の安全や生存を守ることに現実的な範囲で手を尽くす。

彼女にとってはどちらも同じ……生物だからだ。そこで競争が発生するのは当然だと人ならざる視点で、等しく扱う。それに例外があるのは、彼女個人の好悪と言う感情が入るときぐらいだ。

好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。真に平等な主義であるからこそ、嫌いになることも好きになることにも呵責がない。

人間は可哀想だと言って、生まれた姿境遇が一般と違う者を、まるで嫌ってはならないかのように、好きにならなければならぬかのように扱う。もちろん、その逆もあるわけだが。

彼女にとって、それは差別であり不自然だ。相手がなんであろうとその評価は等しく下される。

好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。それがどんなに一般的に不幸で恵まれない状態であろうとも、彼女は自分に嘘をつくことも相手を可哀想だと哀れみ貶めることもない。

だから、確実なのだ、彼女はその評価を下す前にその命を見捨てはしない。その評価を下す前の存在を護るためなら彼女は信頼出来る。遠野や一般人を護ることに関しては熱心に働き、最善を尽くしてくれる、と。

……少なくとも嫌いになるまでは、だ。

それでも、万が一その瞬間が来てもその公正さで持って、ある程度は安全に対応はしてくれるだろう。

そのためこの時、巫月はまったく焦ることはなかった。遠野の安全が確認された時点で、問題はないそう判断していた。

「……本来なら昨日の時点で、遠野を拘束しておくべきだったんだろっかな」

そう、巫月は呟いた。

むろん、それは独り言に過ぎない。

いや、過ぎな　かった。

「でもお、あの時点ではトオくんが傷つけられる可能性は低かったんだしさあ、仕方ないんじゃないのお？」

「　っ!？」

事務所の扉が開かれると同時に、放たれたのは間延びした声。

「気持ちわかるけどねえ、トオくんは大丈夫だよお。……ヘタにあの『すとーかーども』を刺激しなければ、だけどお」
「……ハミか」

目の前にいるのは、可憐と言うべき一人の少女だった。

どこにでもいる、と言うのははばかられるような容姿ではあった、巫月を知る限りハミほどに可愛い容姿の女の子はそう多くない。

だが、どうしようもなくそんな印象を抱いてしまうのだ。どこにいても目を惹く、しかし矛盾するようにどこにいてもおかしくない少女。

言うなれば、テレビにあらゆるジャンルの番組に出演しても違和感がない、ありふれているようでそう多くはない、有象無象のメン

バーに埋もれてしまうような、特筆した個性のないアイドルのような可愛らしさ。

軋呑ハミはそんな雰囲気を持った少女だった。言い方を変えれば、どこか身近さを感じさせる華やかさがあるとも言える。人に距離をとらせない親しみやすい雰囲気だと。

見た目には何一つ、恐れる要素のないそんな少女だった。

だが、巫月は知っている。それが、錯覚にしか過ぎないことを。ハミ自身が自らのその容姿を完全に擬態として使いこなしていることを。

そもそも、ハミが巫月にまったく気付かれずにここにいることが異常なのだ。

この事務所は二階にあり、ここに来るまでの階段は必ず昇る際に軋む音を立てる。それだけでなく、本来ならここに近づいて来る時点で、巫月に気付かれるはずなのだ。

そのための仕掛けが、この事務所の周囲には張り巡らされている。ここは魔術を含めたあらゆる手法で仕掛けられた、アラート警報による罠が備えられた事実上の小さな要塞だった。ここにある罠はその全てが存在することを不自然でない偽装がなされている。

いや、偽装という言い方が正しくないかもしれない、なぜならその罠はその辺にあるものを、石ころ、空き缶などのゴミ、壁にされた落書き、などを利用して作られているからだ。

仮にこの周辺に罠があると知識があつたモノが侵入しても、それを罠だと認識するどころか存在していることすら見逃しかねない。そして、それは命取りだ。

近辺の標的のその『現在位置』を正確に知るだけで殺せる、そんな手段がもしあるのなら、いつでも単なる警報装置はいつでも死デスを招く罠になりうるのだから。

だが 軋呑ハミはその一切を作動させずに現れた。

「……キミが一人でここに来るなんて、どういう心境の変化だハミ？」

「ん、別にいい。たいしたことじゃなくてえ、ちよつち所長さんに聞きたいことがねえ」

むろん、警報装置とて万能ではない。その全てを突破しうる特性を持ったモノも世界には存在するし、その罠全ても気が付いているのなら、避けることは容易だ。

しかし、絶対に偶然全てを避けて来てしまうことはありえない。あるとすれば、それはよく整備された回転式拳銃リボルバーに弾丸6発詰め込んで、博打射ちをし連続で6回引き金を引いて弾丸が放たれなかった、と言つくらいに馬鹿げた可能性だ。

そこまでいけば……強運なんてレベルではない。少なくとも、机上ではその可能性は零だ。

「とは言えそんな馬鹿げたありえない可能性を、平然と『偶然に』現実にしてしまうような大馬鹿が世の中にはいるんだがなあ」

「……ん？ なんの話い？」

「いや、こつちのことだよ。それよりもキミが聞きたいこととは？」

巫月はへたに話をそちらに向けることなく、彼女の求める本題へと頭を切り替えた。

ハミがその間延びした口調とは相反して、そう気が長くないことを知っていたのだ。彼女は無駄なおしゃべりは嫌いではない、だが自分の言葉が無視されることはひどく嫌がる。

「この一帯でキミが知ることが出来ないことなどそうはあるまい、

そのキミがわからないことなど想像つかないが？」

「まあ、ねえ。でも、世の中には知識がなければ理解できないこと
つてあるからねえ、仮にこの世にある書物すべてを読むことが出来
る立場の人がいたとしてもお、読んで理解できるかどうかは別の話
でしょお？」

「書物か、それは言い得て妙だな。言語の壁もあり、禁断の知識…
…魔術書に至ってはその殆どが暗号化されているからな」

「だいたいハミがわかるのは、今現在なにが起きているのかぐらい
だしねえ。そこから今までなにがあつたのか推測は出来るけどお、
推測は推測にしか過ぎないしい、なにが起きているのかはわかつて
も、それがなんなのが理解できないからねえ」

「それだけ理解できれば十分すぎるだろう」

「まあねえ、お陰でいつどこに誰が何をしているのか、誰と一緒に
いるのかすぐわかるよ？ 知ろうとする限りはねえ」

「ほっ」

要するにハミはこう言いたいのだ。

遠野が今どこでなにをしているのか、誰といるのか、自分はいつ
だつて知っているぞ、と。

「……なにも私に威圧フレッシャーを与える必要もあるまいに」

「なにか言つたあ？」

「いや」

なんだろうか、ハミはキツキを遠野の元へ送つたのが気に入らな
いのか？

巫月はそう疑問に思う。

確かにキツキは遠野に興味を持っている、だがそれは同じように
ハミにもだ。彼女は人間のその一個体に興味が限定されない。

事実、ハミはキツキとはそれなりに打ち解けている、少なくとも

表面上はそう見える。

「あゝ、でも本当にハミも思うよお、所長さんといっしょだよ」

「……なにがだ？」

「いや、さつき言ったじゃん？ トオくんを昨日の時点で拘束しとけばよかったって」

「……ん、ああ、確かに言ったな」

だが、あの時点でそれは逆効果だ。

一度でもそういうことをすれば、その可能性を考慮して今後遠野が動くようになる。今回はよくとも、一度でも警戒させてしまえば次に遠野の安全を確保することが一層困難になるだろう。

それに、あの時点では遠野の危険は少なかった。本当なら送り犬の出現程度、キツキが動くことでもなかったのだ。

万が一の場合でも、遠野に渡した呪具が機能すれば送り犬の攻撃ならばある程度の時間があれば防げる。そして、稼ぐ時間は僅かでもあれば十分なのだから。

……余程のことがない限りは。

「それでも、そうしなかったのは私の甘さなのだろうな」

結局のところ、私は誰一人、ここにいるメンバーを制御できていないのだ。……私自身も含めて。

「ま、仕方ないよ。トオくんの動きが読みにくいのはいつもだし、今回は二重身が二重どころじゃないなんてこともあったからさ」

「……それは可能性として考えられたことだ」

「それでも、だよ。二重身がどう動くかは動いてみないとわからない、人が封じ込めた自分の可能性なんて、無数に存在するんだから

そのうちのどれが出現して、どう動くかなんて予測しようがないよ」

それはその通りだ。

「だけど、まさか……異なる複数の可能性が遠野に執着を見せるなんて。」

「異なるって言うけど、結局は同じ人物の……だからねえ、ある意味当然っちゃ当然なんだけどねえ。まあ、絶対に予測できなかった事態だ、と言えば嘘になるのかなあ」

「……だからこそ、私には遠野の安全を確保する義務があった」

「だから拘束しておけばよかったって？ まあ、そこは同意するんだけどねえ。トオくんだったら無茶するからねえ、本当ならトオくんの両手両足切り落としてえ、大事に二十四時間保護したいくらいだよあ」

「それはもはや拘束とは言わない」

「身動き出来ない状態のトオくんを想像するだけで楽しくなっちゃうなあ、完全に独占状態だよねえ、誰の目にも触れさせないってすごく甘美な響きい」

「誰にも姿を見させないのは共通しているが、明らかに私とは目的が違うよなあ？」

……よく遠野はこのハミを上手く扱えるものだ。

「どう考えても、遠野の最期がありありと想像出来るような、そんな発言しか聞こえてこないように思う。これをどういなししてるんだ、奴は。」

「あ、もちろんアレだよあ？ 切り落とした手足は後でスタッフが美味しくいただきましたあ、みたいなあ？ ……血の一滴たりとも無駄にはしないから安心してねえ、所長さん」

「……心配しているのは間違いない、が少なくともそちらの方では

ない」

いや、遠野は本当に上手く扱えているのか？。

巫月にとつて、もはや二人が日々どんなやりとりを繰り返しているのかは、理解の範疇をはるかに超えていた。

「ま、腕なんか取っちゃったら手も繋げないしい、抱きしめてもくれないしい、足なかつたらお姫様だっこも出来ないしねえ」
「……と思つたらなんとなく見えてきた気がするな」

意外と柔軟に柔らかく対応しているらしい、もしかしたら軟派という意味で柔らかい対応なのかもしれない。とは言つても、実際に実行しているかどうかはまた別の話だろう。

「それで、所長さん。話は戻して質問なんだけどねえ、ちょっと教えて欲しいんだけど」

「答えられる質問なら」

「あ、大丈夫う。全然たいしたことじゃないからあ」

たいしたことではない。

ハミはそう言うが、巫月はこう見えてハミがかなりの知識を有していることを知っている。その知識を有効に行かせるほどにその能力が高いことも。

そのハミが質問することなど限られている。ハミの知識にないこと、巫月に聞かなければ、知りようのないこと。

それは……怪異か魔術に関することぐらいだ。

「あのねえ、大神アスカのことなんだけどねえ」

……やはりか。

「ああ、なにが聞きたい？」

巫月はその質問の内容をある程度想定しながら、その質問に耳を傾ける。

が。

「どうやって………えるの？」

「………なんだって？」

「いや、だからあ、どうやって………おせるの？」

別に聞こえなかったわけではない、意味が理解できなかったわけでもない。

聞こえたからこそ、理解できたからこそ、巫月は聞き返したのだ。

「いやあさ、どうにも自信がなくてさあ、だんだん増えてくるしい、いまいちね手応えがなくてえ。どうせやるなら確実にやるときたくてさあ。別に全部やつちゃってもいいんだけどお、それでおっけーなのかどうか確認をねえ」

「確認？」

「そう、所長さんに聞けば確実にしょ。だから教えて」

ハミは再び、言う。

次に聞き返すことは巫月には出来ない。

「ねえ、どうやってたら大神アスカを殺せるの？」

軋香ハミは巫月に頼んでいるのではない。

ハミは遠野のためならなんでもする。だからこそ、自分に拒否を許そうとしないのを巫月は知っていた。

監視という名の過保護（後書き）

愛されてるなあ、遠野。って話。

言葉という名の鉛の弾丸（前書き）

ようやくまた書き始められそうです。
すこし長めに書いてみました。

言葉という名の鉛の弾丸

8 .

わたしにとつての『カナ』と言う存在を言葉で説明すること。それはとても難しいことだ。

憧れ……まあ、そうだろう。

嫉妬……しなかったわけじゃない。

恩人……そうであつて、そうじゃない。

親友や友達……間違いなくそうだけど、それだけじゃ間違いだ。

わたしにとつての『カナ』は、あるべきだったわたし自身だ。憎しみがなかったと言えば嘘になる。どうして、あなたがそうなのか、と理不尽な怒りを覚えたこともある。

だれにでも好かれ、だれもが味方だった父。だれよりも頼られ、だれにとつても味方だった父。

性別も雰囲気も違うけど、その父のように生きているカナ。父の娘のようなカナ。

本当はわたしが持つていくべきものを持つていて、いるべき場所に彼女はいた。事実はどうあれ、わたしはそう理屈なんか関係なく感じてしまったのは事実だったから。

でも、それ以上にわたしは『カナ』が大切だった。

もう手に入らないものを持つていくカナは、なによりまぶしくて、その輝きの近くにあるだけで、わたしは暖かい気持ちになれた。

もしもどうしようもないくらいに憎んでいたとしても、負の感情

があつたとしても、人は太陽ひかりを求めずにはいられない。その暖かさを必要をせずにはいられない。

なによりもわたしはその輝きが失われてほしくないと、そう思つてしまつたから。

自分にとつて絶対に手に入らないからこそ、それがどんなに希少で異色とも言うべきほどにありえなく、奇跡的なまでに希有なものであるのか。

多くの人間がその生き方を渴望しているはずだ、現実とその理想がどれだけの距離があつたとしても、それが果てしなくどこまでも手が届かないと知つてもなお、死に物狂いでその手を伸ばしてしまふほどに。

わたしはそれを、そんなものだと思つてしまつているから。

壊したいかと思う前に、羨んでしまつたから。嫉妬してしまつた、けどその前に憧れてしまつていたから。見ていたい、触れていたい、傍にいたいと思つてしまつたから。

本人達はそれを決して素晴らしいものとも、輝かしい生き方だとも、ましてやなんら特別なものだとは思つていないに違ひなかつたけど。

でも、それは当然のことかもしれない。

そういう生き方をしている人には、その生き方なりの苦しみもあるんだろうし、ましてや現実に生きている以上、はたから見えてどうだつたとしても、綺麗なだけの考え方や心ではいられない。

自分の生き方が当たり前である以前に、どんな生き方をしている人になつて、かなえられない願いやたくさん不満があるのだろう。わたしにはわからないだけで、誰にも言えないようなおぞましい部分があつてもおかしくない。

それは頭ではわたしもわかっている。
あくまで頭では、だけど。

……そんなカナにとってわたしがどんな存在だったかはわからない。
い。

きつと、ひどいくらいに重い足かせになっていたんだろう、とは思
思う。

そう思っていたけど、わたしは彼女から離れることはなかった。

だってカナは、わたしのとって大切な『居場所』だったから。
生きていくためにカナが必要だったんじゃない、カナが自身がわ
たしにとつての生きる場所、生活の……いや、生存の場だったん
だから。

わたしはカナと言う名前の世界に、すがって生きているようなも
のだった。

だから、嬉しかった。

カナがわたしを選んでくれたことに喜びを感じずにはいられな
かった。

カナが好きだといっていた、あの人が死んだとき。

カナが初めてわたしに「たすけて」と言ったとき。

電話越しの、あの消えてしまいそうな儚さを感じてしまう、切な
い声を聞いたとき。

あの人が死んだのだと、カナがわたしに告げたとき。

わたしは間違いなく、嬉しいと……。

数多くいる友達の中で、エキストラその他大勢の中で、自分が一カナ<ヒロ
イン>に選ばれた。その事実に対してわたしは……どこか心地よさ
をかんじてしまっていたのだ。

そう、わたしは嬉しかったんだ。

*

広々とした庭、車庫と小さな物置らしき建物すらある大神宅を目の前にして、ぼくはキツキさんに言われ、家から持ってきたカバンを抱えて車を降りた。

いや、って言うか。

「敷地内まで入ればいいじゃないですか、玄関の前まで車入れましょうよ」

保護するにしても、建物のすぐ目の前に車があったほうがいいと思うし、なによりも早く安全だと思う。屋内に入るわけじゃないんだから、それはキツキさんにも可能なはずだけど。

「いやー、でもさっ、アレだよ。あの送り犬は影のある場所に依存してるでしょ、その性質を考えると車の中すら安全じゃないしさっ。どっちにしたって車ごと襲われたら動きようがないよ?」

「なるほど」

まあ、確かに今さっき襲われたら相手が有利だった……とは思う。

「でも、送り犬って建物の中まで襲ってくる怪異じゃないですよ。車の中にまで、………当時は牛車か馬車になるんですか? とにかく、そこまで入ってくる記録もないわけですよね?」

「………そうだけど」

「じゃ、内部に問答無用で侵入ってことはない訳ですね」

おそらく自分の家は他者にとってはある程度の結界を果たす、と

言う理屈は車の中でも通用するはず。

もちろん強力な結界とはならないだろう、でも、なにかの術や呪具の補助があれば結界の影響を受けやすい悪霊ゴーストとかなら対応できる。

「車ごと襲われたらって言いますが、そこそこキツキさんの能力なら対応できますよね?」

戦車には勝てなくても、トラックを轢き殺す……なんて戯けた真似すら、この中古車でキツキさんは出来ると思うけど。

「いや……そこまではちょっと」

「出来ますよね?」

「……まあ、送り犬が簡単には破壊できない程度には」

「ええ、でしょうね。それで?」

「……それでつてなに?」

「いや、だから。本当の理由はって聞いてるんですよ」

そんな目に見えてしょげたようにしなくてもいいんだけど。

別に怒ってるわけじゃないし、車降りないって言ってるわけじゃないんだから。

……もう、既にこうして降りてるわけだし。

「あー、怒らない?」

「ぼくはそうそう怒ったりしないですよ」

たぶん。

自分で言うのもなんだが、今時の若者にしてはあまりキレないタイプだと思う。

そう、ぼくは心が広い人間だった、なんて。

「車傷ついて欲しくないんだよね」

「は？」

「車傷ついて欲しくないんだよね」

「は？」

「いや、だから。車傷ついて欲しくないんだよね」

「は？」

「……………いや、ね」

今なんか聴こえた？

いや、聴こえてるんだけどね。普通に全部聴き取れてるんだけどね。

と、思ってたら思いっきり胸を膨らますかのようにして、深くキツキさんが息を吸い込んだ。

「だから、車傷ついて欲しくないんだよねっ！」

「うるさいわっ！ 大声で堂々となに吹かしてんだ！」

そんな大声で言わんでも聞こえとるわ！

「えー、そう言われても」

「と言うか、なに4回もほざいてんですか！」

「なんでと言われても!？」

「つて言うか、命と車どっちが大切なんですか？」

「んー、どっちって言われてもなあ」

「あのね、車はお金で買えますけど、命はお金じゃ買えないんですよ?？」

一般論だけどね、もちろん。ぼくがそう思ってるかは別として。

いや、自分の命のためならお金は惜しくないんだけどね。でも世

の中、お金ないと死ぬからね。

「でもさっ、死んだ人にはもう直らないからお金は要らないけどっ、死んだ車にはお金掛かるよね？」

「途端に生き生きと話し出さないでください！」

「それに初めてきちんと言金して買った車だからさ、愛着もあるんだよっ。ぶっちゃけ、見知らぬ女の子よりは大事だよねっ」

「車なら同じの何台もあるじゃないですか！ 人と同じレベルで見ないでくださいよ！」

「なに言ってるの、うちの子だってそうだよっ！ 唯一無二の存在だよっ、この広い世界にたった一つだよっ、うちの愛しい愛しいアドリゲス！」

「アドリゲス！ なんですかソレ、もしかして車の名前！？」

「使い古された車と言えど、うちのたった一台の愛車だからねっ。

もうキミ以外愛せない！」

「テンション高っ！ 敵の巢かもって言う緊迫ムードぶち壊した！」

「……でもアレだねっ。中古車が愛車って、擬人化するとすごくエロいよねっ、やらしいよねっ、ぐっとくるシチュエーションだよねっ！」

「同意を求めんなっ！」

「もう、アレだよ。うち、アドリゲスに一目惚れだったんだけど、擬人化すると『駄目だよ、キツキ。だってわたし……もう』みたいなのアレだよ。『うちはそれでも愛してるから』みたいなアレだよ！」

「あー、アレだよ！ あんたは十分アレだよっ！」

って言うか、アドリゲスは女の子なのか？

いや、車の性別を問うのもどうかとは思っけど、どっという視点で世界を見ているんだろっ。きつとぼくとは見えているものがまるで違っに違いない。

「あー、まさかこんな展開になるなんて。擬人化には無限の可能性があるね？」

「本当にこんな展開とは思わなかったですよ」

まさか、キツキさん来るたびにこんな会話しないといけないのか。いやだぞそれは、断じて嫌だ。

阿呆は存在していてもかまわないけど、そこから発生するアホ展開、アホ会話にぼくを混ぜるんじゃない。ぼくは断じてそちら側にはいかないからなっ！

でも、まあ、キツキさんがどんな風に見ているにしろ、この会話から再確認できることはある。

キツキさんは嘘や冗談でこんなことを言っているわけじゃない。実際、キツキさんにとっては車の方が見ず知らずの女の子より優先順位が高いのだ。

勘違いしてはいけない、キツキさんは正義の味方でもないし、ましてや人間に無条件の善意を抱いているわけでもない。

キツキさんはぼくを守ることに關しては、ぼくがキツキさんを完全に敵に回すようなことをしない限り、まずやり遂げられるだろう。巫月所長との約束している以上、最後までそれは果たされる。

しかし、それはなによりも優先されるわけでもない。自分が死んでまで果たそうとするかは別だし、ぼくの安全を守ることを最優先にしているのなら、事務所になにがなんでも向かっていなければならぬはずだ。

自分の趣味や主義を可能な限り通すと言う、よく言えば柔軟な、悪く言えばいい加減な、性格ゆえに成り立っている状況。決して、女の子を守ることに正義を見出しているのではなく、たまたま自分

の興味を引いているから同行しているだけなのだ。

それでも矛盾するようだが、彼女にとって約束と言うのは重いものには変わりない。なによりも最優先されることはなくとも、積極的に破られることはまずない。

なぜなら彼女はそういうモノだからだ。一定の規則に従って存在する存在、そうである以上、約束すらも一時的な規則として追加されるはずなのだ。より上位の規則を破ることにならない限り。

……それでも約束の穴について、ないがしろにすることはあるけど。

でも今回の……大神さんに関する件はまるで別問題だ。

キツキさんは、とある女の子の安全を確保する、ということに関しては認めてくれたけど、認めただけに過ぎない。一切、その女の子を守るということは言っていないし、その結果に約束もしてない。少なくとも、キツキさん自身が命を犠牲にしてまで、例えば身を挺して庇うなんてことは絶対にならない、とそう断言できる。

殺すしかない、と言う状況になれば、キツキさんがそう判断すれば迷わず大神アス力を殺すだろう。

ま、キツキさんの手助けなんて元々、ないものだと思ってたから別にいいんだけどね。

ぼくは気分を切り替えて、カバンを背中に担ぐようにして大神宅に向き直る。

「じゃ、行きますか」

車の件に関してはこれ以上なにか言っても無駄だろうし。

それになによりも時間が惜しい。

「その割りにめちやくちゃ雑談してたけどねっ」

「……誰がそこまで発展させたと思ってるんですか」

「話上手なうちのおかげっ」

……本当にうざったいなあ。

ぼくはキツキさんを無視して、敷地内へと一步を踏み出した。

ぼくの反応を予測していたのだろう、見事にぴったりと合せるようにして同様にキツキさんも一步を踏み出す。

その途端に、目の前に現れる。

「なるほど、敷地内は相手の領土。よって、支配権と優位性は向こうにあるってことですね」

現れた、と言うしかない。

ぼくは間違いなく、大神宅をその目にまっすぐに写し、一步を踏み込んだ。玄関へとたどり着くまでの広い空間は全て、視界に入っている。

だが、そこになにかが現れる予兆など一切存在しなかった。それなのにも関わらず、犬の集合体とも言うべき異形の群れが、敷地内を埋め尽くしている。

まるで、粗悪な合成映像でも見ているようだった。不自然極まりない、素人が作ったかのような何もない場所の画に、いきなり異形の群れをつぎはぎしたかのような一切のセンスが感じられない演出。

「B級映画のスタッフだってもうちょい真面目ですよね」

「ずいぶんと余裕だね……」

「いや、正直見たことないんですけど、もしかしてB級映画のスタッフはB級映画と言うジャンルで真面目に作ってるんですかね？」

「本当に余裕だよねっ!？」

余裕、とキツキさんは言ってくれているが、十分に見えているはずだ。

さつきから、足の震えが止まらない。

ぼくは自分自身が攻撃されない、そう考えてはいる。

だけど、そんな理屈など関係なく、本能に訴えかけてくる原始的な恐怖が目の前に存在する。

向こうがその気になれば、ぼくはゴミのようなものだ。

逃げようもない、どこにぼくがいようが精確に向こうはぼくを追跡できる。その上、ぼくは相手の攻撃を回避できる能力もない。

ぼくはカバンの持ち手を握り締めた、手のひらに汗をかいていることを自覚する。

「ぼくとは相性悪すぎですよ、送り犬って言うのは」

「送り犬、なんて代物じゃなくなってるけどね。明らかに」

「ま、逃げる気はないですけど。気をつけてください、キツキさん」

ぼくたぶん、アレに襲われたら3回以上一撃で死ぬる自信がある。
ワンポイントキル

一撃必殺どころじゃない、普通に一過剰殺傷<オーバーキル>だ。

天国の向こう側まで見に行けるだろう。ちょっとした小旅行だ。

帰ってこれないのが残念だね、本当にあるかどうか見てみたいのに。

「……………天国の向こう側、か」

異形の群れの中から、声が聞こえた。

聞き覚えのあるその声は、どこか穏やかさすら感じられる。

「遠野らしいっちゃ、らしい言い回し……………かな」

異形の一匹が前へと歩みだす。
その目には理性的な光。

「やあ、二度目かな。会うのは」

「それは違うよ、遠野。わたしはずっと前から、あなたの目の前にいたし見ていたし、話したいと思ってた。今はそれがこうして形になっただけ」

「あくまで、大神アスカの一部と言いたいのかな？」

その異形はぼくの言葉に答えることなく、瞬く間にその姿を変貌させていく、巨大な身体を収縮させ獣の頭を内側へと取り込み、毛皮を全く別の日常的な私服へ、皮の下から現れるのは人間的な肌。皮を裂くようにして、伸びていく手足。

獣の姿を脱ぎ捨てるかのように、悪の魔女に掛けられた呪いを解いたお姫様のように、あるいは旅人を騙して喰らう魔物のように、彼女は姿を変える。

それはどこか艶かしく、色気すら感じさせる情景。

異形が人間へと変貌していくその過程に、どこか心を動かされてしまっているぼくは異常なのだろうか。許されがたい背徳感すら感じたが、それを含めてぼくはその感情を切り捨てた。

「キミが犬だったとは知らなかったな」

ぼくはその現れた女の子に、なるべく軽い口調で話しかけた。
幸い、もう震えは止まっている。

ぼくの目の前に、遮るようにしてキツキさんが立つ。
大神アスカと瓜二つの、その女の子の間に。

「そう、知らなかったの？ わたしは結構浅ましい女だよ、犬みた

いにね」

浅ましい……ね、人間らしくないありさま、だったけ。なるほど、確かに人間らしさは捨てている。獣に身を墮としてしているわけだからね。

それとも身を墮としたのではなく……？

「それでその女は誰？」

なぜか、前方からの威圧感が増す。なんだ？

「うちかいっ？　うちは……あー、まあ、遠野っちの護衛みたいなものかなっ」

「ふうん、護衛ね。とりあえず、あなた達ふたりはここから出て行ってもらえるかな。今忙しくて」

「って、あのお嬢、あんなこと言ってますぜ？　遠野っちの旦那っ」

なぜぼくに話を振るかな、キツキさん。

「って言うか、だれが旦那ですか。もちろん聞く気は零ですけど？」

「って訳だから、ごめんねっ」

そう言っつて、なぜかなれなれしくぼくの肩を抱くキツキさん。

いや、ますます威圧感が増してるんですけど、肩を離すついでにその理由を説明してもらえませんか、キツキさん？

って、にやにやしなから腰に手回すな！

いや、お願いだから首筋に顔を近づけないで！　頼みますからやめてください、息当たってますから、いやいや、そのままキスしようとしないで！　ホントマジでお願いします！？

ぼくが必死に抵抗していると、漫画だったら二、三本青筋立てそうな様子で、怒りに満ちた声が響いてきた。もちろん目の前の女の子からだ。

「なら、実力行使しかないよね。……残念ながら」

全然、残念そうにじやなさそうですねですけど？

かなり望むところだ、つぼくみえるんですけど!？

その声を合図に何十と言う犬の混合物である異形の、その群れが襲い掛かる。

だが、キツキさんは。

楽しそうに華やかな表情で、犬歯を見せるように、魅せるようにして笑みを浮かべ。

襲い掛かるうとした怪物の目の前へと、トンと軽く地面を蹴って一足で距離を詰め。

その右腕を乱暴に薙ぎ払う形で、異形を引き破った。

斬るのでもなく、殴るのでもなく。

一撃でその身体をもぎ取るように、千切ちぎるようにして、腕を振るったのだ。

ただ腕を振るっただけで、その異形をただの肉塊へと変えて見せた。

そして、それを見ているぼくらが表情を変える前に……今度は、左足だけで右から迫っていた異形へと距離を詰め、同じように解体していく。

それが終われば次の異形へと、次々に、その腕だけでバラバラに等分していく、一つの大きな塊が、三つ四つの小さな不揃いの肉の

塊へと、爆発するような勢いで血煙を撒き散らしながら。
なにかが破裂するような音を奏で続ける。

その間一切の、身動きを犬の異形はとれていない。
群れとして攻撃しようとした瞬間に、機先を制されたのだ。混乱し、一切の思考を停止している。

ただ自分の仲間が血飛沫と肉片を撒き散らすと言う、盛大で悪趣グロテ味な花火をあげていく、その光景を自分の番が来るまでただ見ている。

まるで、自分が処刑されるのを、屠殺されるのを待ち望んでいるかのように。

さらにもう一匹、地面へと異形が沈んでいく。

その目にとても上機嫌な笑みを浮かべた白衣の女性を最後に映し。なんら獰猛さも剣呑さもない、一切の真剣さの見られないその輝かしい無邪気な表情を焼き付けて。

真っ赤な花を裂かせ散らすようにして沈んでいく。

「アレは……なに？」

目の前の、肩まで髪を切り揃えた女の子が、呆然とそう呟く。

「『猟犬』だよ、うちの事務所でも最強のね」

今は力の大半……どこるか殆どを制限されているけれど、彼女が本当に本気で戦えば、おそらく一人で戦争と言う名のお祭りができる。実に楽しそうに、やっつて魅せるだろう。

狩人と怪物、そして彼女との三つ巴でこの街を壊滅させてもなお、絶対に止まらない戦いを起こして魅せるだろう。

それでも勝つのは人類だろうけど、……恐ろしいことに。

そのぼくの声で正気を取り戻したのか、大神アスカと瓜二つの彼女は嘔然していた顔を、引き締めキツキさんを睨み付ける。

恐らく、全ての犬とその意思が繋がっているのだろう。解体作業を待つだけだった異形たちに変化が起きた。

彼らは異形の姿から分かれるようにして、元の犬の姿に戻り、その膨大な数と巨体では発揮しきれない高い敏捷性を使って、キツキさんを翻弄しようとした。

しようとした、だけだ。

腕の一振りで、一匹づつ殺されたのが、まとめて何匹か潰されるようになっただけだ。

いや、それでも何匹かは不意を打つようにして、その背後に回り……。

回し蹴りで同じように鮮血を撒き散らした。

よく見てみれば、キツキさんの白衣……真っ赤に血肉に塗れたそれは、袖を斧か鉈のように金属の硬度と光沢、鈍い叩き割るために使用できる程度の鋭利さを持った凶器へと変えていた。

さらに幾ばくかの攻防の中、何十もの犬を囮とし、ようやく隙を突いて一匹の犬が腕に噛み付く、……それも違う。

キツキさんは腕でその襲撃を防いだ、その牙は全くその白衣に齒が立たない。その腕に犬を噛み付かせたまま、ほかの襲撃してきた犬の群れに叩きつけ、気がつけばそれもまた肉塊へと変わった。

さて、ぼくはこのまま見学してもいいんだが、そうもいかない。このまま戦えば、一見優勢に見えていても最終的にはキツキさんがジリ貧だ。

強力な力を持っているが、残念ながらそのエネルギーを維持し続けることができるほどには、実はキツキさんには余裕がない。

ここでこの間に大神宅に侵入を試みることも出来るが、どうみてもそれが出来る様子もない。

そう、問題はまったく送り犬の数が減っていないことなのだ。確実に倒してはいる、だけど、基本的に実体のない存在しないはずの怪異なのだ。単純に殴り叩き殺すだけでは、殺しきれない。消滅させられない。

……殲滅の可能性は低い。

なので、ぼくに出来そうなことをしてみることにする。ぼくに出来る援護を。

幸いなことに、送り犬を指揮しているのは会話が出来る相手だ。

その上、向こうはこちらにリミットがあることを知らない。

さて、始めようか。そして撃とう。吐こう。

輝きはしない、錆びた鉛の弾丸を。

ぼくに出来る、最低の援護射撃を。

9 .

「……あまりいい光景じゃないな、そうは思わない？」

ぼくはいつものように話しかける。

いや、アレかいつもは話しかけないんだし。

話しかけられた女の子はぼくを驚いた表情で見る、うんだらうね、ぼくが誰かに自分から話しかけるなんて、あまり君は見たことがないだらうね。

本当はわりとしょっちゅうなんだけど。

「この光景を起こしたのはそっちだと思うけど？」

「ま、ね。ぼくが頼んだんだし。でも手を出したのはそっちが先だから」

彼女の視線はあくまでキツキさんへと向かっている。

不思議とあわだたしいこの状況でも会話に困らないのは、彼女の性質と関係あるんだろうか。

「でも驚いたな、君が犬好きだったなんて。いつもこんな感じで連れて歩いているの？」

すこしイラついたのか、彼女はムツとした表情を見せる。

「……そういう遠野はいつも女の子をそばに連れてくるよね」

それ今、関係ある？

って言うか、この状況でそれを言うの？

いや、ぼくもそこそこ変なこと話してるけどさ。

「誤解だよ、……わりと男子ともいるよ？ 学校じゃ友達いないからアレだけどさ」

「ふうん、わたしも似たようなものかな。本当に友達と呼べる人なんてそうそういないしね」

「本当の友達、ね」

友達に嘘も本当もあるものだろうか。

ハミに言わせれば、友達と言うその言葉自体が有象無象のその他大勢そのものを意味しているらしいけど、一般的にはそこには心の

支えであるとか、自分の居場所であるとか、なみなみならない意味や意義を持って考えられる場合もある。

というより、そういう価値のあるものだ、と社会的に教えられる。だけど、それはそれとして。

本当の友達、嘘の友達、そんなものがあるのだろうか。

ぼくにはどうもこう感じられる。

「あなたは幽霊を信じますか」

「え？」

「いや、本当の友達とか嘘の友達とか。ぼくにはそれと同じレベルに感じられる」

いるものに信じるも信じないもない。

いないものに信じるも信じないもない。

幽霊、妖怪なんてものは定義もあやふやな、一致した見解のないものに過ぎない。正体はなにかと聞かれれば、いまいちそれもピンとこないもの。

人間がいなければほとんど存在しないようなもの……友達という言葉がそれと違うとはぼくには思えないのだ。

「ぼくにとって、友達って言うのは幽霊と変わらないのかもしれない
い」

学校でのぼくが、いるのかどうかもわからない石像のような人間であるように。いてもいなくても同じような幽霊であるかのように。いるのかもしれない、それでも。

……信じるには値しない。

「幽霊なら本物も偽者もない、存在すらあやふやなんだから。それ

なら、本物も偽者もそれは同じものだと言えない？ どちらも見ている人間の主観とあやふやな定義みたいので決め付けているだけなんだし」

「遠野は……そういう人だよな」

「うん、ぼくはそんな人だよ」

いるのかどうか分からないものは、いてもいなくても同じ。いたとしても、ぼくと関わりがあるかどうかなんてわかりはしない。

「わたしも本当は根本的にそうなのかもしれない、本物になりたいと思ってもどこまでもなれない偽者。それでも、わたしは……」
「ぼくはそういう意味で言ってるわけじゃないんだけどね」

大神アスカの二重身である彼女からしたら、色々と考えることはあるんだろうけど。

あくまでぼく自身には、事実としてそう捉えているとすること以上の感情はない。

「……あなたにとって、学校のクラスメートは幽霊と変わらない、そういうことでいいんだよね？」

「そうだね、と言うより学校自体がそうだよ。でも、みんなにとってもぼくはそういう存在でしょう？ 絶対に目に入らない、入っても入ったと気付かない、いてもいなくても損も得もない」

「……わたしは違う」

「そう？」

その言葉は重いな。

ぼくはどんな痛みより、その重みが苦痛だな。

「信頼には責任を持ってこたえるべき、そう思ってしまうのは別に悪いことじゃないんだろっかね？」

「……なんの話？」

「でも、ぼくだって……好きでそう思っているわけじゃない、そういう話。出来るからって、そうしているからって、それが好きなわけじゃないんだ」

ぼくの言葉に彼女が目を見開く。

なにをその言葉で思っているのかはぼくは知らないし、知りようもない。

「したいことをしているわけだけど、しなければならんって言う……なんて言うのかな、強迫観念みたいのがあってさ、どこかでそういう自分に気付いてしまったら、もう自由でもなんでもないような気分になるんだよ」

「いつもそんな風に思っているの？」

「いや、たまに思うだけ。でも、たくさん選択肢があったとしても、自分にその選択が選べないんだったら、そんなものないのと変わらないんだよ」

「自分には選べない選択肢、そうね、確かにそんなのばかりだね」

「だから、もしやり直せたらなんてことに意味はないよ、どうせそれは選べないし、選んだところで後悔はするし、過去は消えない」

「……あなたはなぜそんな風に生きられるの？」

「そんな風？ 言っている意味がわからないけどさ、どんな選択肢を選んでもどうせ後悔するんなら、自分の好きなことをしよう、そう開き直ってるだけ」

例え、それが強迫観念じみた義務感でも。絶対に解決にはならない手段でも。

ぼくはぼくがしたいと思ったからやる。

どんな結末を迎えても、だ。

「ぼくは普通の人間だからね、絶対に成功させるとか、全ての責任を取るとかそんなことが自分には現実的に不可能だって知ってるんだよ。たった一人の人間が出来ることなんて、たかが知れてるからね」

「自分の意思どおりに動いている気がしないのに？」

「そんなものたいたしたことじゃないさ。真正銘一切の不純物の混じりっ気なしに純粹に自分の意思で生きている人間がどれくらいいるって？」

自分はそうだと断言した人間は他人のことを思いやれない馬鹿か、他人の影響力を知らない愚か者だよ。

人間は自分の意思じゃ生きていけない生き物なんだ。もともとそう出来ているといつても過言じゃない、新しく力や物が手に入ったぐらいで揺らぐんだよ。アイデンティティっていうんだっけ？

自分が自分だと思いう意識、それって思い込みじゃなかったらなんだっていうんだ？

ぼくらは勇者でも賢者でも神様でもない、ぼくらはどこまでも高く登りつめなくていい。ささやかにそこそこに生きていければ満足していいんだ。それは悪いことじゃないだろう。それとたまに自分の好きなことが出来れば最高だ。たとえば、それが誰の意思であつても」

大神アスカと瓜二つの彼女は、とうとう殺戮から目を逸らし、ぼくを忌々しげに見た。

初めて見る表情だ、とぼくは思った。忌々しげに見られること自体は初めてじゃない、だけど彼女はそれだけじゃない。

その表情の奥には、どこか羨ましそうな、物欲しそうな子供のような感情が見て取れた。それと、なんだろう。ぼくには理解できないにか。

「わたしはあなたが嫌いなのもかもしれない」
「そうかもね」

今でこそ校内の石像をしているが、もつと幼い頃にはよく憎まれたし疎まれたし嫌われたものだ。まるで親の仇のように、いやそれ以上かな、自分が住んでいる場所の全ての存在の仇のようにぼくはその目で射抜かれてきた。

「あなたは異質だと思う、わたしの世界にあっちゃんいけない。絶対に認めることが出来ない、わたしが望まない答えを持っている。それはきつと全部を壊してしまう、わたしは決してあなたを認めることが出来ない」

「そう」
「わたしは……いつも光を求めてきた。太陽のような眩しい光を、そんな光を持つ人を」

「ぼくは苦手だな、そういう人」
「絶対に手に入らないことがわかってるから、望まずにはいられなかった」

「身体にも心にも合わないから手に入らないんだよ、拒絶反応が出るとどこかでわかってるから」

「そうなのかもしれない、いやきつとそうなんだね。でも、あなたはそれを失くしてしまうんでしょう？ その光を隠して、別のものにしてしまおうんでしょう？」

その目に沸き起こるのは恐れ、それでもなお、なにか常に揺らがない心一つ、彼女は持っている。

それはぼくが絶対に持てないものだ、だからぼくはそれがあることに気付ける。

それは……持っているのがつらく、重いものだ。それをぼくは知

っている。

「仮にそうだとしたら、君はどうするんだ？」

「……でも、そうだとしても。それでも、わたしは……あなたから目が離せない。どうしても」

「……そう」

「ねえ、遠野。あなたはなにをしに来たの。あなたにはなんの危険もない、そうわたしがしてみせる。なら、あなたにはなんの関わりもないことでしょう」

「なるほど、守ってくれてる気だったわけだ」

少なくとも、送り犬のほうの彼女は。

いや、彼女達は……かな？

「見られていると落ち着かないんだよな、ぼく」

「今だけ、……だから。そうすれば」

「……君を助けに来た」

「え？」

彼女の表情の変化は見ていて面白い、そう思う。

自然とぼくは笑みを浮かべる。

「だからね、ぼくは君を助けに来たんだ。勝手に恩着せがましく自己中心的に傲慢にもね、その邪魔は絶対にさせない」

「……なるほどね、大神アス力を助けたいわけ？ あんなろくでもない女を？」

「ろくでもないって……」

「あんな女のどこがいいの？ ろくなことしてない、結局他人に依存して生きてるだけじゃない、しかも、その相手すら食いつぶしてあんなのに生きてる資格なんてない！」

「……勝手に勘違いしないでくれるかな、やる気が削がれる」

なんでいちいち、ぼくの言っていることを曲解するかな。

「いいかい、よく聞いてね？」

ぼくはわかりやすいように言ってる。

ぼくがなぜここにいるのかを。

「ぼくは君を助けに来たと言ったんだ、大神アスカじゃなくて君を」

ぼくはにこり、と笑ってみせる。

彼女が思考を停止する。

そして……。

「チェックメイトだね、ねえ、キツキさん」

その時、敷地内にいた送り犬達が全て消し飛んだ。

言葉という名の鉛の弾丸（後書き）

遠野の言うことは真に受けたらアウトです。
彼は何だって言いますから。

策という名の愚考

10 .

ぼくがキツキさんにとつてもらった作戦は簡単だ。

それは一言で言ってしまうば 陣取り。

キツキさんがぼくの所持している武装や呪具を確認したのは、別に暇つぶしでもなければ戯れでもない。単純に戦力確認だ。

そして、そのことをぼくは十分に理解し、その必要生を即座に省いていた。つまり、ぼくは予めいくつかの呪具をキツキさんに渡していた。

あの時点で想定出来る、戦場や状況、パターン、考えられた中で策定したいくつかの作戦と必要な小道具。

ぼくではなく、キツキさんが持つことでより様々な使いようが出るようになる呪具。

では、ぼくはいつキツキさんに指示を送っていたのか。いつ、ぼくはその策定した作戦を伝えることが出来たのか。

車内であらかじめ伝えてあった？

いや、違う。その全てを言うだけの時間はない。

ましてや言うだけでなく、それを完璧に相手に理解させるのは非常に困難だ。

では、そもそも伝えたのではなく長きに渡る、いや……『永き』に渡る戦闘経験キツキさんに、その実行する作戦を任せただけ？

それも違う、それだとぼくがタイミングを合わせられない。

ぼくがどの作戦を実行するのかを理解していること、それはキツキさんの実行する作戦状況に合わせての援護射撃を効果的にする、そのための大きな要素だ。

いつ、どこで、どれくらい相手の気を削ぐか。

段階的に行う中でそのタイミングが外れることがあってはならない。

キツキさんはその経験が豊富過ぎて、ぼくではその一つ一つに合わせられないのだ。

そして、なによりもキツキさんはそれを『許さない』。

あくまで今回の件はぼくが自ら言い出したものであり、キツキさんは成り行き上それに付き合っているに過ぎない。

ぼくが主体として動かないのであれば、キツキさんはなにもしない。ぼくを連れて事務所へ帰るだけだ。

キツキさんはそういう厳しさを含めて公平なのだ。それは冷徹なまでに、と評することも出来るだろうが、そもそもキツキさんには見知らぬ他人を気に掛ける義理はないのだから、十分に心が広いと言えると思う。

さて、結局その答えはなんなのか、と言えばそれは少々反則的な手段だと言える。

ぼくはそもそも指示を『送っていない』のだ。でも、その意思と意図は伝わっている。

ぼくの意味とは無関係に。

だが、だからこそ、ぼくの援護射撃に的確に合ったタイミングでキツキさんは行動出来たのだ。

そう、それは確かに反則だとも言える。

*

我、今では夕卦キツキを名乗るモノは腕を振るう。

力任せに、一切の技量を必要としないその一撃をぶつける。ただ叩きつけるように、叩き割るようにして、その巨大な獣の塊に向けて撃つ。

それはうちにとって兎戯に等しいものだった。

相手はたかだか、送り犬ごとき。人間の狼への敬意と畏怖、山道での得体の知れない視線と言うありもしない幻想に抱かれた妄想の産物。

あくまで生物と言うものの型にはめられたそれは、不壊でもなければ不死でもない。

ただ、そういうモノの特徴として殺しても、滅することは出来な
いと言うのが問題だった。元が形のないモノであり、ただそれに型
を与えただけである以上、その大元である存在が消えない限りは消
滅しえないのだ。

もつともそれがきちんとした一定の人格を得ているものならば、
それは一度壊わしてしまえば元通り再編することがない。

つまり、もしもこの目の前にいる大神アスカと言う少女を『模し
たモノ』を、我がこの手で破壊してしまえば、二度と同じ人格のモ
ノは現れない。

似たモノが現れてたとしても、それがどんなに類似していても、
それはもう別のモノなのだ。

間違いなく、目の前にいる人の形をしたコレに関して言えば、二
つとない存在なのだった。

例えこのモノがどこかの誰かから分化したモノであっても、どこ

かの誰かの不完全な複製品のようなモノであつても、日の光を浴びた本体から伸びた影のようなモノであつても 全く同様の存在はいない。

だが、私の車が復元できなくなれば新しく買うように。目の前のコレにも替えはあるのだ。同じものはない、けど替えは利く。

この世に存在するモノはだいたいそうだ。
人間も同じものはない、けど替えは利く。

……遠野の面白いところはそれを理解し認め、人間と言う存在に諦めて絶望している癖に、それでもなお人間を辞めていないところだろう。

そう、この者はまだ人間を辞めていない。いつでも辞められるその場所のにいるのにも関わらず、辞めてしまいたいなんて一欠けらも思っていない。

なぜ、ここまで我はそれを断言できるのか。

……今も伝わってくるからだ。

遠野、と言う子供は頭がどこかおかしい。

あの巫月から数多くの呪具を受け取り、さらに自身の手でさらに使える呪物を掻き集め、いくつものそれらを常に保持し、呪具同士の効力が打ち消さぬように計算尽くされた形で使用し、自らの安全を確保し続けているこの人間は異常だ。

そこまでして自分の安全を確保している癖に平然と、自分の命を天秤の上に載せて見せる。賭け札の一枚として使い、たいして価値も見出していない配当金をせしめようとしている。

今この時も、である。

もし、我が殺す気になればこの子供は死ぬのだ。

なにせ、この者の首筋には私の牙が埋め込んであるのだから。

そう、実はこの者が自ら掻き集めた呪物の中には、この『夕卦キツキの牙』すらも含まれているのだ。

遠野は自らが使う道具を、ちっほけな鞆に入れて持ち歩く。その中の一つにこの夕卦キツキの牙はあった。

今、この者はその牙を自ら首筋に抉り込むように埋め突き刺し、その上から絆創膏を貼っていい加減に固定しているのだ。

だからこそ、この者の意思は我に伝わる。この者の『今』考えることと思うこと感じることに、今なにをして、今心臓がどれほど動き血が流れているか、手に取るようにわかる。

そして同時に、我がこの者を操ろうと思えばそれは容易く叶う。ただの人間に過ぎぬ、遠野を操るメリットは置いておいても、それは可能だ。殺すこともまた容易い。

心臓を止めるように念じるだけで、私の牙は遠野の心臓を潰すだろう。

この人間は自分の今あるすべてが他者に暴かれること、その生殺与奪の権利を握られることにほとんど恐怖を抱いていない。

それも人外のモノに、だ。

我を信用している、と言う面がないわけではない。それでも状況によっては、我が自ら敵に回る可能性を認識している。その時には自分が確実に死ぬことも。

いや、仮に信用していたとしても、自分のすべてを他者に知られることに忌避を覚えないのはなんだ？

正直、牙を人間ごときに預けたのは気まぐれだった。

本来、自分の身体の一部を渡すことは、弱みを握らせることに他ならぬ愚策だ。それでも巫月のような者にならまだしも、我がただの人間にそれを渡したところで、問題にならぬと思っただのもまた事

実。

不用意と言えば不用意。

だが、それもおもしろいと思ったのだ。これをこのただの人間がどう利用するのか、それに純粋な興味を抱いた。

実際渡してみれば、おもしろい、どこの話ではない。到底笑えなどせぬ。

たかだか、我に自分の考えを読ませたい、などと言うわけのわからぬ理由でこの者は、自らに牙を打ち込んだのだ。そんな愚かで狂った真似をする人間が他にどこにしよう？

……何の力の持たぬ癖に、狩人に名を連ねるだけのことはある。人の身で、そのちっぽけな個人が人外を狩る身に置くこと自体が、考えるまでもなく愚かにして異常なことで、どこかが狂っていて歪んでいなければ出来ぬことなのだから。

そこまでして、この者が我に示した指示はとても単純明快なものだった。

要は陣取り、なるほどその通りだ。

遠野は我にこの敵の本拠地、巢の敷地内に、言わば敵の保有する結界内に結界を創り出すことを考えたのだ。

車内で与えられた道具は、ダーツのような形をした金属製の鋭く尖った杭、その羽のような部分には水晶が裝飾されている。それに結界を張るための呪符をでたらめにも巻きつけたもの。

本来の一切を一切無視をすることを前提とした呪具。便宜上、遠野はコレを『結界針』と呼んでいるが、コレを敷地の角、四方へと打ち込むことで結界を張るための補助としようと言うのだ。

馬鹿なことを考える、はつきり言って幼稚だ。

しかし、可能。それも成功させればこの送り犬の群れは結果内から除外される。

その本質が領域、結界による影響を受けやすいものなのだ。結界の中に結界を張る、その愚考を我は認め、こうして実行しようとしている。その代わり、一切、遠野の身を護ることは放棄してだ。

遠野の作戦はそれを前提にしなければ成り立たぬ。

我は異形の群れに踊りこむ、我はこの策に乗った。

遠野と言う者の、その価値を見定めるために。

我は結界を張るためのもう一つの策を組み込むべく自ら実行した、それは殺戮を広げる順。時計回りに敵の血肉を自らの足跡として、その形作られる円を自身の領土として主張する。

敵の血で染め上げた地を占有する、それは古来より行われてきたこと。

支配のための一つの作法、作業。

その中で一定の間隔で持って、四隅に結界針を打ち込んでいく。作法を無視した呪具を、むりやり儀式と言う形に整える。

それは死の舞踏を踏むように、同時にそんな繊細さのない荒々しき戦いを表すように。

……遠野は策を実行せずとも、それで殲滅可能ならばそれで良しとしていた。

それが叶わず、と判断して遠野は口を開く。

「……あまりいい光景じゃないな、そうは思わない？」

敵の将に向け、寝惚けているかのようなたわごとを。
怪物を殺せぬ、錆びきった鉛の弾丸を撃ち込むかのように。

私の戦闘稼働時間は短い。

なにせ、私はずつと人の血を直接獲ることほぼ絶っているのだ。
間接に間接を繋げたようなものが、毎日の糧。

だからこそ、全力は出せぬ。
長くは戦えぬ。

最強であつても最大ではない、我に出来ることは我が身に着けて
いるものの、その性質を書き換えることくらいだ。

所有権、支配権を持つ意思持たぬ物体の性質を作り変える。それ
以外は少々、骨が折れる。こうして、なにかの補助がなければ術を
使うことも難しい。

それを知っている、遠野の弾丸は強力。

「あなたは幽霊を信じますか」

「え？」

相手の予期せぬ言葉を選び、作られる思考の空白。

同時に僅かに動きの波に作られる、間隔。

我が境界針を打ち込むのは、その隙間。

我はそのタイミングを事前に知り、合わせる。

行き当たりばつたりのような遠野の会話は、無造作に見えて実は
一定のリズムがある。

その一定のリズムに無理やり相手を引きずり込む、その理解不能
な狂言回し。

「でも、ぼくだって……好きでそう思っているわけじゃない、そう

いう話。出来るからって、そうしているからって、それが好きなわけじゃないんだ」

「自らが信じてもないことを、自身に信じ込ませ、次には忘れてみせる。」

嘘をつくのではなく、真実を言うのでもなく、その場その場で自分の本音を造り出す。

そこには黒も白もなく、灰色と言う色さえもない。明るくも暗くもなく、透明ですらない。

目に見えない、使い古され錆び付いた鉛の弾丸。

相手が何かにすがろうとすればするほどに、それは強力な呪いとなる。

苛烈にして壮絶、百を犠牲にして一を与えようとする、凄まじい攻め。我は大神アスカと言う少女の姿を模した、このモノの力量に内心驚嘆し、賞賛を送っていた。

浮かぶ笑みは自然と湧き上がるもの、強者となりうる器に出会えたことに対する喜び、それとこの時代には物珍しいものに対する興味深さ。それも今はない。

もはや、目の前に群れる狼ども知略と戦術を尽くした戦いは存在しない。

「今だけ、……だから。そうすれば」

「……君を助けに来た」

ほら、また鈍くなる。

それを残念に思うも、もし同じように猛攻が続いていれば、私の力は完全に尽き失われていたに違いない。

敵を軽くないなし、行われる袖に隠された結界針を打ち込むだけの作業。

もう打ち込む終えた、あとは華やかな終幕を飾るだけ。

フィナーレ

その布石を、もう遠野も我も終えている。
退屈な戯曲は終わる。

さあ、今観客は動きを止める。

「いいかい、よく聞いてね？」

遠野がなにを言うのか、それがどんな結果となるのか。

我にはわかる、その言葉がどんなに異常かを。ふざけたものなのかを。

「ぼくは君を助けに来たと言ったんだ、大神アスカじゃなくて君を」

遠野はそう言うのにこり、と笑ってみせる。

周囲を埋め尽くす観客達が、その動きを止め我を仰ぎ見る。
そして……。

「チェックメイトだね、ねえ、キツキさん」

我は儀式を完成させる。

ここに宣言する、ここは我の支配域だと。

「失せろっ、この地は我が貰い受けたりっ！」

それと同時に、敷地内にいた送り犬達が全て消し飛んだ。

*

もう見える範囲に犬は一匹もない。

残っているのは、送り犬を操った本体とも言つべき、彼女が居るだけだ。

犬がいたと言う痕跡、その舞い散った血肉の後すら消えている。

「思ったより簡単にいったねっ?」

そう軽やかにキツキさんが言うのに、ぼくは思わず吹き出す。

「またまた、なに言ってるんですか。実は結構、ギリだったでしょう?」

「ん〜、いやいやうちはもっとキツイと思ってたよっ。遠野っちがなにもしてくれなかったらアウトだったね」

くれなかつたら……って、キツキさんはまた思ってもいないことを。

ぼくの笑いは苦笑へと変化する。

「ぼくはなにもしてませんよ、楽しく愉快におしゃべりしてただけで」

「それが一番のフラインプレーだと思うけどねっ、たぶん他の誰にも出来ないと思うよっ」

ぼくらが会話をしている中で、一歩づつ踏み込んでくる大神アスカの姿をした彼女。

「……なにをしたの?」

その目にあるのは、もはや驚愕の色ではなく敵意と憎しみ。

ぼくはさっきまでと同じように返す。

「ちょっとしたサプライズ。驚いたかな？」

彼女はぼくの言葉を無視する。

「……わたしを騙したの？」

ぼくは上着で隠してあった、首筋の絆創膏を剥がし牙を引き抜いた。

痛みに顔をしかめることなく、ぼくは彼女へと近づきながら、その牙を胸のポケットへとしまう。

牙のそのぞんざいな扱いに、キツキさんが複雑そうな表情をした。

「違うよ。ぼくは大神アスカじゃなくて、君を助けに来たんだよ」

「わけのわからないことを言ってる……わたしは大神アスカでしょう。いいから本当のことを言ったら？」

「そうやって人を疑わずにはいられないのは、君自身が嘘に塗れているからかな」

「……なにを」

「一つ、君は純粋に大神アスカなのか？」

「っ！？」

さっきまでいた、あの犬達。

あれがすべて、大神アスカの一部なのか？

それを操る彼女は大神アスカだけから生まれ出でた存在なのか？

「いったい、あれだけの犬はどこから連れて来たんだろうね？」

「なにを言っているんだい？ 遠野っち、あれは狼に対する恐怖や畏怖と言った感情の産物。歩いている時に、ありもしない監視されているような視線を感じると言う妄想。そんなものの集合物だよ？」

キツキさんがぼくの言葉に反応する。

本気で困惑しているかのような声色、いやいやそれって演技じゃなくてマジなんですかね？

牙でぼくの思考を全部読んでたわけじゃないんですか？

「この時代にそんなものがあるわけないじゃないですか。妖怪や怪異は生きていますよ、時代とともに変化し続けると言う意味ですね。」

この時代に狼へのそんな感情は残ってませんよ、もう絶滅したんですから。そういう感情が化石として残ってて、どこから掘り起こしてきたんならまだしもね」

「じゃあ、遠野つちはアレはなんだって言うのかなっ？」

「さあ？ だからそれを聞いてるんじゃないですか。ねえ、あんな大所帯どこから君は引つ張ってきたの？」

目の前にいる彼女は答えない。

あくまで沈黙を保ち続ける。

「ねえ、遠野つち。この娘、どうするの？」

「いや、だから保護しましょうよ」

「本気でっ!？」

「え？ ……ああ、もちろん大神さんも保護しに行きますけど」

「そうじゃなくてっ!？」

なんだよ、もううるさいな。

……… いったいなにがそんなに気に入らないんだ。

その時、背後から放たれた聞き覚えのある声。

いや、聞き慣れた声。

「おいおい。 …… 無様だな、人狼」

その声はいつものような軽い調子でなく……。
乱暴でぶつきらばうな中に、親しみを感じるものではなく。
それでも、間違いなくその人は……。

「赤霧先輩？」

「あ？ ああ、なんだ。お前か、遠野」

そう、そこには学生服の上から暗緑色のコートを羽織る、赤霧先輩がいた。

その手には、抜き身の魔剣『血汐閑咲』。

眼差しは完全に狩人として、刃を振るう時の眼。

「相変わらず、ひどい顔ですね先輩。今日は誰を狩る気ですか」

いつ現れたのか、わからない。

平然と唐突に現れた、狩人。

「お前みたいな雑魚を相手する気はねえよ、遠野」

「……じゃあ残りは必然的に女の子になりますけど？」

「ふん、よっぽどその方が健康的じゃねえか。もっともどっちも人間じゃねえけどな、なあ人狼？　なあ、吸血鬼？」

そう侮蔑するような口調で、赤霧先輩はキツキさんと『彼女』に向けて言った。

『彼女』からは困惑が、キツキさんからは怒気が伝わってくる。

「ずいぶんでかい口を叩くねっ、出来損ないっ！……言い直すなら今のうちだけど？」

「吸血鬼如きが、調子に乗るな。お前はただの獲物に過ぎない」

キツキさんは赤霧先輩に向かって踏み出す。

そしてぼくは説得を諦める、相手が何であったとしても、もうキツキさんは止まらない。

この誇り高く主観と感情を持つて裁く公平を自らに課す、^{マジック}魔術の^{アバター}化身は決して例外を許さない。

「……二度目だ。死ぬまでの僅かな間だが覚えておくといい、我をこの眼の前で『^{アンデッド}吸血鬼』と呼んだ人間を一人たりとも生かしたことがない」

「血を啜らない吸血鬼が笑わせてくれるな、今のお前にどれほどのことが出来るってんだ。弾丸のない拳銃^{リボルバー}、罪人を処刑しない断頭台^{ギロチン}みたいなもんだろ？」

「使い物にならぬ処刑刀^{エクゼキューション}ほどではないな、穢れた血^{スカイレット}。汚れた朱が我に届くとも」

あの、もうぼくが空気ですね。

どうでもいいんで、専門用語を織り交ぜたっぽい会話はやめてくれませんか。とりあえず通訳を要求します。

ぼくはため息をつく。

「んじゃ、ここは任せますよ、キツキさん」

「ああ、任せてもらっていいよ。すぐに終わらせるけどねっ」

またまた強がっちゃって。

今のキツキさんに赤霧先輩のスペックは無理でしょう？

「援軍は呼んできますよ、一応ね」

「……ハミちゃんかな？」

「そしたら下手すると、ここにいる全員で殺し合いじゃないですか。^{バトルロイヤル}

それはゴメンですね」

「まあ、任せるよ。いらなと思うけどっ」

「ええ、任せられましたよ。一番相応しい相手と呼んでおきます」

それだけを言っただけは彼女は彼女に向き直る。

「で、君はどうするの。ぼくに大人しく付いてきてくれる？」

「それは出来ない、言うまでもないと思うけど？」

「だよねえ、じゃあどうする気」

「遠野は確かにこの敷地内での、『庭』での優位性は得たみたいだけど、でも……」

そう言っただけ彼女は、送り犬へと姿を変える。

(わたしの家の中は変わらず、わたしの領地なんだよ)

走っていく、一匹の犬。

もちろん行き先は、大神家宅。

彼女は玄関の戸をすり抜けるようにして消えていく。

「そりゃ、そうだろうね。そこまではこっちだって所有権を主張で出来ないさ」

「こっちはいわば、相手の城を包囲して兵糧攻めしている間みたいなもんだ。」

優位っちゃ優位。でも、城はまだ落ちてない。

なのに相手には援軍が来てしまったから、戦線の維持は危うい。

「まあ、追っしかないんだけど」

どっちにしても、キツキさんは他人の家に無断で侵入できないんだから、おいていく予定だったし丁度いい。

ぼくは大神家の玄関へと向かう。

鍵は……かかっていない。

ぼくはノブをひねり、扉を開けた。

「遠野っち！」

キツキさんが背中を見せたまま、赤霧先輩に対峙しつつ声をかけてきた。

ぼくは足を止める。

「なんです？」

「最後に一つ」

「はい」

なんだろう、アドバイスだろうか？

「擬人化には無限の可能性がある！ そう、うちは信じてるっ！」

返答の代わりに、ぼくは玄関の扉を叩きつけるようにして閉じた。

……すこしキツキさんは痛い目をみたらいいと思う。

布石という名の置石（前書き）

一ヶ月ぶりの更新になりました。戦闘描写は苦手が好きじゃないのでどうも、筆が遅くなってしまいました。

今回はまたも人外バトルです、いったいどうなることやら。

布石という名の置石

11.

またわたしは繰り返す。

あの時の出来事を。

やり直すことの出来ない、もう既に終わってしまっことを直さないままに、わたしはやり直す。

また彼女は呟いた。

……まるで凍えているかのような、寂しそうな目で。

「あなたがいなければ、気が付かなかったのに」

それがどういう意味なのか、まだ私にはわからない。

ねえ、それはやっぱりそういうことなの？

全部、私のせいでこうなっているってことなんだよね？

私のせいであなは死のうとしている？

私があなたになにかをしたせいで、今あなたはここにいる？
なら私を恨んでいるよね？ あたりまえだよね？

……ねえ、わたしがいなければよかったでしょ？

……ねえ、わたしは傍にいないければよかったんてしょ？

……ねえ、本当はわたしはずっと邪魔だったよね？

……ねえ、わたしは本当に重荷だったでしょ？

……ねえ、答えて。わたしがあなを殺したんてしょ？

ああ、違うか。

わたしはこれからあなたを殺すんだ。

何度も何度も、殺すんだ。

これからずっと殺し続けるんだ。

私はこのあと、何が起こるか、それを知っている。

私は彼女に向けて、一步を踏み出そうとする。

でも、足が動くわけではない。

あの時、私は動かせなかった。事實は揺るがない。

だから、どんなに頑張っても足は動かない。

過去はもう動かない。

彼女は言う、一切の虚構を含まない声で。

「私はアンタを許さない」

そうしてわたしに決別するかのように背を向ける。

もうわたしなんて要らないと、もう背負ってなど行けないと。

おそらくその目が見つめるのは、自分がずっと暮らしてきたこの町。

わたしといたこの町。

ただその目が、どんな風にこの町を映し、どんな想いを抱いてそこに立っているのか、わたしにはわかりようもない。

だから、彼女はここにいます。

わたしが理解出来なかったから、彼女はこれから死ぬ。

わたしが彼女を殺すんだ。

それでも、わたしは。

どんなに罪深くて、何百何千何万やり直しても同じなのだとし

ても。

わたしは。

その時、一步を踏み込もうと僅かに彼女の重心が傾いた。それに気付いたわたしは、頭の中が真っ白になったまま。

『何か』を叫ぶ。

反射的に『何か』を叫ぶ。

それに気付いた、彼女はゆっくりと振り向く。

その表情は見る前から知っている。

「アスカ」

涙が溢れそうな目と、溢れんばかりの感謝と喜びに満ちた笑顔。

わたしが今までで見た中でも、最高だった笑顔。

わたしが今まで見ることの出来なかった、引き出すことの出来なかった本当の。本物の。

止められない。

止められはしない。

私は手を伸ばせない、だってそんな顔をされたら。

まるで、私が……。

彼女は謳うのだ、そう感謝を。

「ありがとね」

そう、自ら心の底から望んでそうするかのように。

初めて鳥が羽ばたくように、もうこの大地になど用はないというように。

力強く一步を踏み出し、そのままの笑顔でゆっくり崩れ落ちていく。

わたしは手を伸ばせない。

彼女を掴むことが出来ない、そうすれば助かったかもしれないのに。

だって、彼女が……。

彼女がっ！

「手を伸ばしてっ！」

え？

「掴むの！ 勇気を出してっ！」

わたしは自分の後ろからそんな叫び声を聞いた。
どこまでも必死な、その声を。

わたしはそれに振り返ることも出来ず、彼女が墜ちていくのを見る。

ああ、また、だ。

また……だ。

そして、またわたしは繰り返す。

あれ？ なにかがおかしい？

なにが、だろう？

でも、わたしは……意識が遠くなるのに身を任せた。

*

ぼくは一步づつ、家の奥へと歩みを進める。

家の窓と言う窓はすべてカーテンによって締め切られ、明かりは何一つ灯されてはいない。朝にもかかわらずかなり暗い室内。

ぼくはその中を、一人……いや、二人で進んだ。

そう、今ぼくは一人じゃない。

ぼくの背後を続くように歩む、女の子。

大神アスカの二重身。

左腕に痛々しい、血の滲んだ包帯を巻いたこの娘。

例え、彼女がぼくの味方でなく仲間でなく、その力が状況になんら変化をもたらさない程に微少だとしても。

ぼくは一人じゃない。

さて、ぼくはどこまでやれるのだろうか。

決して、幸福な結末が想像出来ないけれど。

もし、ぼくたちの未来が明るいものでないのなら、ぼくたちが生きていく価値がないのだろうか。

その答えは、もう出している。ぼくはそれでも今、生きていくという形で。

さあ、悪あがきを始めよう。

残酷な終わりが来る時間を引き延ばそう、この現実には解決なんてないし、今さら全てをなかつたことになんて出来ない。

だいたいぼくは正義の味方じゃない。みんなを幸せになんかしたい。

どこまでもどこまでも先延ばしにして、なにかがどうにもできないぐらいそれで歪んでしまったとしても、それでも生き続けよう。

大丈夫、ぼくはそれでも一人じゃない。

誰も彼もを道連れに、地獄よりも最悪な世界を鼻歌交じりに闊歩しよう。

みんなみんな一緒なら、どんな道のりも悪くない。

ぼくはメールを打ち始める。

どうにもならないこの状況、とりあえずカードを切り始める。切り札はまだ、それはぼくのためにとっておこう。

メールだけで十分のはずだ、通話はしなくていいだろう。
今の状況なら、それだけで食いついてくる。来ないのならそれまでの執着と想いだったってことだ。それなら、ぼくが一緒にいる価値なんてない。

さてさて、まずは運命を変えてみよう。

行き止まりから、崖底にある暗い泥沼へ。

もう先がないレールから、もう少しだけ長く続く未完成のレールへと乗り換えよう。

ふふっ……キツキさん、毎回思うんだけど。

貴女が読んでいると胸を張った、そのぼくの思考はほんとうにそれで全てですか？

だとしたら大笑いです、今あるぼくの全てがその手のひらのうち？
『今ある全て』ならば、それは『全て』には不十分です。

全てというのはね、キツキさん。

現在のだけでなく、過去も未来も含めるんだよ、キツキさん。
これからぼくがなにを考えるか、読んでいるのかな。キツキさん。
これからぼくがなにをするのか、わかっているのかな。キツキさん。

人の全てを総る、なんて不可能なんだよ。思考する存在である以上は。

メールを打ち終え、ぼくはゆっくりと振り返る。

虚ろな闇を眼にぼくを見つめる目。どこまでも付いてくる、共に歩むモノ。

ぼくはそれに笑いかける、その光景を母を慕う幼子を見ているかのように微笑ましく思い。

ぼくは手を伸ばす。
無反応なその女の子。

ぼくは手を伸ばす。
それでも動かない、その血まみれの右腕。

ぼくは手を伸ばす。
光のない漆黒の目は物言わぬ。
なんの想いも感情も伝えてはくれない。

じゃあ、ぼくが話そう。
じゃあ、ぼくが伝えよう。

ぼくがなにを考えて生きているか。
ぼくがなにを想い生きているか。

ただの人間でしかないぼくが、ただの人間のまま、どうやって生きていくのか。

頼りない小さなその手。見ているだけで、痛みを幻覚してしまい
そうな、目を背けつむりたくなくなるようなその手。
それをぼくは握りしめた。
一方的に手を繋いだ。

「一緒に行こう?」

返答はない。
それでもぼくは笑う。
ぼくには道連れが少なくとも一人いる。
なら、どこの地獄も怖くはあるまい。

ぼくは沈黙したままのその娘に語りかけながら、歩みを進めた。

決して離そうとしない固くしつかりと握りしめるその手は、彼女ではなくぼくの方の手だった。

*

有卦キツキは白衣の袖を再び硬化させた。

鋭利には程遠い、鈍く重たい鈍器のように。

鉞か斧、固い物体を勢いで叩き割る物へと、その性質を変化させた。

「それが全力か、マジックアバター魔術の化身」

「これで十分だ、エクセキューション朽ちた処刑刀」

そう言い放ち、有卦キツキは一步を踏み込む。

人の身には成し得ない、遙か遠き一步。

人の十の歩みを、軽々と彼女は二倍三倍と超え、たった一步で踏み込んでみせる。

その距離を移動する勢いのまま、振るわれ叩きつけられる右腕。

「たかだか化け物が、人に勝てると思うなよ」

それをいなす、刃。

まるで金属同士がぶつかったような衝撃音は、キンツと小さく心地よく響いた。

自らが放った大振りの一撃が空撃った感覚に襲われ、上半身を前のめりにバランスを崩す有卦キツキ。

「五分と五分の同じ条件ならば、人間の方が貴様らよりも圧倒的に上だ」

いなした刃は返される。

容赦なくそれはなぎ払われる。

それは昔から行われてきたことの繰り返し。

荒ぶる怪物達に対し、人が容赦を加えたことはない。

目を見開く、有卦キツキ。

反射的に頭を庇うように左で覆うも。

「ぐっ
」

硬化させた袖が僅かに、刃を逸らす。

左手の平と指の肉、そして骨がそがれ。額の肉が刃に削りとられ、遅れて出血する。

有卦キツキにとって、力の源である血が失われる。

「まだだ」

赤霧のどこまでも冷静なその声。

しかし、どこかそれは狂気と熱意に彩られている。

さらに含まれるのは踊るように弾む喜びと……。

ほんの僅かな期待。

有卦キツキは身体を反らし、宙で身体を倒し回転させるように背後へ飛んだ。

それを追う、一閃。

物理強化された白衣はそれに触れるも、ぎりぎり通すことなくその役目を果たした。

有卦キツキの目は捉える。

赤霧 咲斗の目を。

遠野が狩人の目と評した、その冷徹なまなざしを映し返す。

嗤っている。

赤霧咲斗は嗤っている。

化け物である有卦キツキが戦う光景を。

嘲笑しているのだ。

羽をもぎ取られた蛾が羽ばこうとする様を見る。

羽ばたけるはずもなく、それでもなお蠟燭に灯された火を目指そうとするその光景を。

惨たらしい死に向かって、まるでそれが希望であるかのように無意味に足掻く、無知で

白痴な虫けら。

今の有卦キツキに、赤霧咲斗はそれを重ね合わせ見ている。

「巫山戯るなっ！」

穿つような怒声。

宙に回転する一瞬に有卦キツキはそれに至り、同時に反撃した。

その体勢で殴ることなど出来はしない。

そこから射たれるのはつぶて。

左の手から、小さな石のような塊が赤霧咲斗のその目に向かって放たれる。

その塊は先ほどそがれた骨と肉を、自らの筋力によって凝縮した物体。

自らの身体の一部であるが故に、それもまた呪物。

肉は血の塊。

血は我が力の源なり。命なり、祈りなり。

血塊よ、『焼き尽くせ』。

念じられた通りに、有卦キツキの身体の一部はその役割を果たす。全身が魔術の触媒となりうる、彼女だからこそできる技。

その瞬間、血塊は破裂する勢いで自らの敵を焼き尽くす。
はずだった。

「甘い」

振るわれる三度目の刃は。

巨大な烈火の炎を纏い、その寸前につぶてを焼き払い。

そのまま焔は意思ある大蛇の如く、有卦キツキに襲いかかった。

落下の中、右手を地につき怪力によってさらに後方へと飛ぶ。

炎の大蛇をどう退けるか。

その判断は速い、白衣をつかみはぎ取る。

足が着地する前に、術式を描き成立させる発動まで1秒とかならない。

代償は不要、その白衣は既に契約が成立したものの。

身に纏っている物は、全ていつでも自らの身代わりとなりえるようにその準備が成されている。

着地と同時に創り出されるのは、白い魔物。

大きな口と黒目が存在しない、顔だけの怪物。

それは巨大な大蛇をいともたやすく飲み込んだ。

その魔物が燃え出すような気配はない。

思わず感心したような声を漏らす、赤霧咲斗。

「……ほう。思ったよりやるじゃないか、もう終わると思っていたけどな」

「我を舐めるのも大概にするんだな、失敗作」

「だが、その失敗作に随分追い詰められているようだな？」

それを聞いて、有卦キツキは愉快的な冗談だと高笑いを始める。

「お前にはそう見えるか？」

傍らに浮かぶ、顔だけの白い魔物。

鼻がなく、白目と口だけのその存在は自らを創りだした主と共に、空気を震わせることなく笑う。

「次の一手で終わりだ、貴様はその出自に相応しく今度こそ焼却処分らせてもらう」

「なにをする気は知らないが、自らの手の内を晒すなんてな。愚かしいにも程があるぞ、どこまでもお前達は人類の上にいる存在だと思っっているのか？」

「ふん、人類？ 笑わせるな、貴様は人ではあるまい。人でもあらず、化け物となるにもなれない出来損ない。まだ半妖の方が真つ当だ」

その言葉を鼻で笑う、赤霧。

あまりにも場違いだと、そう一笑にふす。

「俺が人間かどうかはどうでもいい話だ、少々特殊なだけの人間。それ以上の力は保有していないと言う事実だけが、闘争において持つべき視点だろ？ その点で言えば、俺はお前らよりも人間と戦う

方がまだおもしろいね」

「なんだと？」

「誕生してから600年の月日が経とうとも、この程度。 実にかつかりだ、人はその間に闇という闇を照らすどころか、焼き付くさん程に研究と研鑽を、その種をあげて重ねてきたというのに、お前達は未だあくまで化け物止まりだ」

「……黙れ」

「お前達はいつまで経っても変わらない、次々に生まれ出でる癖に成長もなくそこで終わる。生まれた時から死んでいるようなもんだ、生きている理由なんざ与えられた性質を全うするだけ。それを生涯を賭けて覆すこともないし、そうしようともしない」

「黙れっ！」

「哀れだよ、化け物。お前達はどこまでも化け物にしかならない。

……人間とは違ってな」

「……イルキントウシユ、殺せっ！」

白い魔物にそう呼びかける有卦キツキ。

主の声に呼応するように、魔物はその姿を瞬く間に変えて見せる。その姿は真っ赤な炎の塊、強大な熱気が風となって周囲に吹き荒れる。そして、獰猛な敵意を両の眼光から叩きつけるように赤霧に浴びせた。

同時に有卦キツキはそのカジユアルな服の性質と形状を変化させ、袖から鎌のような刃を出して見せる。

赤霧咲斗は呆れた、とばかりにため息を吐いて見せた。

「随分とデタラメな能力だ、確かに夜間に勝負を挑めば勝てなかつたかもな」

「今なら勝てると言うのが思い上がりだ、狩り手えっ！」

焰の化身と化した魔物、イルキントウシユと呼ばれたモノ。その

主である有卦キツキは同時に赤霧に向かって駆けた。
さらに有卦キツキは自らの姿を透過させ、その動向を悟られづらくする。

正面から迫る、炎の塊は赤霧が出して見せた大蛇よりも圧倒的な火力を纏っている。先ほどのように、かき消すことは不可能。

影に隠れるように進む、有卦キツキはもし赤霧咲斗がイルキントウシュなんらかの対応を見せたとき、その隙を突くように伏兵としてあつた。

現在、有卦キツキが戦闘を演算した中で出来る最高の火力を持ち得る戦術。どちらの攻撃も直撃すれば、簡単に赤霧を殺せる。

そして、これ以上のことは今の自分には出来ない。と言う限界でもあつた。

「源は魔血解放、役は属性反転・極大解釈、果は烈火炎刃^{フレイムタン}」

赤霧は呟いていく。

自らの親指を、剥き身の日本刀の姿をした魔剣『血汐閑咲』に擦りつけ、自らの出血を促す。

魔術を扱うのに、詠唱が不可欠なわけではない。

だが、詠唱すると言う行為そのものが、自らの成したい事柄、望みを言葉によって形にしてみせると言うことが、儀式として成立しうる。

誰にでもなく、自分への宣誓。

これから自分はこれを現実に見せる、と言う宣言。

それこそが儀式。誰もが行え、また行ってきた言葉という魔術。

「……………行くぜっ!」

迎え撃つ、と言わんばかりに魔物とその主に向かい走り出す赤霧。暗緑色のコートはまるで、マントのようにはためく。

その走りは飛ぶようにと言う形容詞が相応しいほどの凄まじい速度に見えるが、それは一歩間違えれば五体がバラバラになりかねない危ういもの。

あくまで人の身程度の身体能力しかない彼にとって、それ以上の力を振るうことは大きなりスクだった。しかし、そのリスクを負うことを喜びとするようにその表情に浮かぶのは笑み。

今日の前にいる敵を食い破らんとする獣のような笑み。

それに相対する有卦キツキとその従者である魔物が浮かべるのは、自らに愚かにも相対した出来損ないに対する嘲りと入り交じった強烈な怒り。

人にさえなれないモノ如きが、絶対の王者である自分に牙を剥いたと言う事実に対する憤怒。

その両者がぶつかる。

火炎を纏った刃を魔物に赤霧が振るい、赤霧に食らいつくように口を見開いて迫る魔物イルキントウシュ。

影に潜む、有卦キツキは己の勝利を確信した。

「消え失せる（解放しやがれ）」

赤霧の一声。

共に、急速に減退しついに消失するイルキントウシュの焰。

有卦キツキが創りだした魔物、イルキントウシュの能力。

それは自らの許容量を超えない分だけのあらゆるモノを飲み干し、対象の性質を自らのモノにし、さらに予め主によって与えられたエ

ネルギーを上乗せする能力。さらに言えば、その許容範囲は川を飲み干すとも言われる恐るべきモノだ。

しかし、その飲み干せる回数は一度きり。再び、飲み干すには自らが飲んだものをはき出す必要がある。

赤霧のしたことは単純だ。

イルキントウシユの焔を、自分のものであると即見抜き、最も効果的なタイミングでその炎をその源へと……つまり、触媒となった自分の血へと戻したのだ。

ほとんど無力な、元の白い姿になった魔物。

その刹那に、振るわれる刃。

「なっ
」

なんの抵抗もないかのように、その大きなイルキントウシユの身を貫通する猛る炎と刃。

それはそのままの勢いで、有卦キツキへと振り下ろされる。

両腕で刃を振るう赤霧の身体からは、赤い鮮血のような霧状の煙が上がる。

人間には反応し得ないその速度に対し、それが予測出来なかったのにも関わらず、有卦キツキは反射的に両手の鎌と化した刃で護りに入る。

しかし、それもたいした意味をなさない。

言外に密かに激突の間際に発動していた魔術は、オーバーブラッド鮮血沸騰。

その血と引き替えに、人を超える身体エネルギーを得る魔術。

魔術を同時に二重以上で組み、発動する多重術式は本来なら不可能と言われるが、魔術師としては2流、時に3流以下と言われる彼

には可能だった。

赤霧は喉の奥から全身から絞り出すように叫ぶ、空気を震動させる絶叫。

「うるうううあああつ！」

単純な加速と力による一撃と炎の火力。

有卦キツキの華奢な身体は押しつぶされんばかりの勢いで、地面に叩きつけられ、発動していた透過の魔術が解除される。

ブチブチブチツと筋肉の繊維がちぎれる音が、赤霧の両の腕から響く。

同じく奏でられるのは斬撃の音ではなく、地面を揺らすような衝撃。

振り抜かれる刃。

刃を振りぬかれたその瞬間、即座に立ち上がる有卦キツキ。その頭を赤霧の額へと叩きつけカウンターを行う。

身体を灼かれ、両腕を完全に破壊された有卦キツキは、自らの身体をあえて地面に押し込めることによって、その攻撃を凌いだ。

その状況下でもなお、戦う闘志と反撃する思考を忘れない有卦キツキ。

それは長き戦いの歴史とも言っていて、今まで存在してきた経験による反射動作。

「ふざけんなあつ！」

舌打ち混じりに叫ぶ赤霧。

ぶらんと腕が垂れ下がる、有卦キツキはその足を振るう。

血は肉、肉は血なり。

事前に準備された魔術によって、隙なく自らの攻撃によって負った筋肉繊維やダメージを回復しながらも、魔剣を持たぬ左腕でその蹴りを受け止める。

当然のように砕かれる腕。

赤霧は自らの身体を守るために、背骨などの戦闘の続行に重要な骨を守るために、あえて腕の骨だけを砕かせた。

……それに痛みはない、赤霧は魔術を行使するために自らを極度の興奮状態、狂的覚醒^{トランス}させ、常人ではなしえない集中力を得ている。それは痛みなど自分が不必要と判断した感覚を一切麻痺させるものだ。

赤霧は戦うために元から、その肉体を魔術や魔薬^{ポーション}によって改造しているが、それでも扱う魔術による強化には本来痛みを伴うはずなのだ。

場合によっては死にさえ至るような痛みを。

腕を楯にし攻撃を凌ぎ、赤霧が繰り出すのは魔剣『血汐閑咲』の刃。

しかし、その烈刃にはもはや炎はない。

赤霧咲斗に強力な炎を維持する才能は存在しない。

ただ、既に解かれつつある鮮血沸騰^{オーバーブラッド}によって発生した腕力によってのみ振るわれる刃。

剣術そのものに関して、卓越した技術を持つわけではないその剣撃は。

いとも簡単に経験という一点に勝る、有卦キツキが見切り。

自らの足先を蹴り出すように使って、刃の裏を掬うようにして捉えて、その圧倒的な勢いを利用して地面にめり込ませた。

身体を半回転させる有卦キツキ、深く深く、地面に突き刺さる魔

剣。

赤霧咲斗が持つ、唯一の武器らしい武器といえる血汐閑咲の刃は封じられた。

……そう、刃は。

赤霧咲斗は平然と魔剣を手放した。

何一つ、問題ない。

魔術の行使に、魔剣を持つことは重要ではない。魔剣と自分との間に血を付着させたことによって、繋がりと解釈出来る事実だけが重要なのだ。

強いて言うのなら、術者赤霧咲斗と魔剣との関係としての距離が重要なのだ。

相手が得物を失ったのを好機とし、全力で連撃をたたき込もうとする有卦キツキ。

だが、それは足技のみに限定される。

近接した戦いを得意とする赤霧に対し、いくら歴戦と言えどもそれは不足。

足に加速がかかる前に、その足の膝に叩きつけられるのは赤霧の拳。

ただの拳ではない、光を反射しない真つ黒に変色した腕による打撃。

素手の攻撃のはずなのになぜか鈍器のように重く強烈な一撃、それを連続でたたみ込む赤霧。自分が攻撃される前に潰す、怒濤の乱打。

膝を破壊された有卦キツキは、その勢いによって足を戻さざるを得ない。致命的な隙。

嵐のような乱撃にバランスを崩し、その瞬間撃たれた。

ただの左によるストレートに見えた。
それが左胸に向かっただけのよう。
しかし、直撃と同時に火薬がはじけ飛ぶような破裂音。

無様に有卦キツキは転倒し……。
ととう立ち上がることはなかった。

*

朦朧とする意識の中、有卦キツキは赤霧咲斗を見上げる。
回復……は出来そうにない。
左胸に突き刺さる、3つの異物の感触。
それは小さな、杭のようなもの。

時間さえあれば、手足はどうにかなるかもしれない。
今すぐには血が足りないが、時間さえあればどうにかなる。

しかし、自分にはもう無理だ。
杭を抜かない限り、その部分は回復出来ない。
ヒュー、ヒューと呼吸音だけが聞こえる。

(ああ、うちもここまでかなあ……)

地面に刺さる血汐閑咲を平然と抜き、ゆっくりと近づくと赤霧咲斗もつ身体から赤い霧が迸ることはない。

「意外にやられたな、俺も」

そう笑いながら魔剣を鞘に収め、微妙に曲がる左腕を音を立てな

がら強制していく。

「どうした、化け物？ すっかりさっきの勢いがないだろうが」

「……くっ……っ」

「おい、いいからなんか話せよ」

腕を強制し終わった赤霧はなににか丸薬をいくつか口に放り込む。
それをかみ砕くようにして、飲み下し。
有卦キツキの左胸を踏みつける。

「ぐ…… かはっ……」

この状況下でもなお、有卦キツキは誇りをその目から無くさない。
それをまつたく気にせず、足の裏をすりつけるようにして出血する傷口を開きのぞき見る。

血を源にする有卦キツキは、自らの血の状態をある程度を制御出来る。止血は意図しなくてもなされるものだが、死の寸前では違った。

このまま放っておけば、彼女は死ぬだろう。
それに満足がいかない、ように呟く赤霧咲斗。

「ああ、駄目だな。一撃で殺すための技なのに、全然出来てねえ。
マジ、クソだな」

「なに……を……？」

有卦キツキの目に疑問の光が浮かぶのを察する赤霧。
自分の言葉へ返答らしい返答が来たことに笑顔を返す。

「いやな、お前も気になってんだろ、自分がなに喰らったか」

「……あ……」

「さすがにしゃべれねえのか？ まあいいか、俺は今までためえら
みたいな化け物を殺しまくってきたわけだ。その中には当然、吸血
鬼殺アンデしてみたいな技術テクもあんだよ」

「……あえ……お……っ」

「なに言ってるのかわかんねえよ、化け物。……でな、今俺が余興
に見せたのは炸裂杭撃パイルバンカーちつて言う、まあ、遊び半分の技だよ。撃つ
たら、自分の拳も逝くって言う笑える技なんだがな」

パイルバンカー……火薬式の杭打ち機。

……有卦キツキは聞いたことがあった。

吸血鬼への止めである胸への杭打ちを、現在では杭と槌ではなく
効率よく機械で行う場合もあるのだと。

まるで釘打ち機で作業をするかの如く、動きを止めた吸血鬼へ順
番にとどめを刺していく。

抵抗する暇もなく、一方的に虐殺されていった不死者達アンデット。

泣き叫ぶ、女子供の姿と自我を持った不死者を想像して、有卦キ
ツキは怒りを胸に抱いた。フェアでない、ワンサイド一方的な殺しの光景。

「詳細は省くけどよ、俺の人体の部品を生かした理屈でやる『硬化』
と『火薬生成』。んで、同じく俺の隠し武器でもある『金属生成』
の形状指定との組み合わせなんだが……おおざっぱなやり方は今の
は全部同じなんだけどな」

赤霧の右手にある、なにか小さな金属製の塊。

それは杭と言うより、暗器武器である『寸鉄』と言う道具に酷似
していた。

それを見せつけて、説明してみせる。

「とにかくこういうものを作って、持つとくわけだ。んで、指に挟
んで単純に爆発させて、殴る勢いと爆発による推進で撃ち込むと。

簡単だろ？ てめえらみたいなタイプは心臓止められたぐらいで死ぬんだから、まあ、当りや一撃必殺即死ってわけだ」

そこまで説明してばつが悪そうに頭を掻く、赤霧。

つまらない恥を掻いた、と言わんばかりに。

「ただ、その爆発で腕の表面を硬化させていても、中身の方が無事じゃないし？ 今回は拳の骨にひびは入っただけだったから楽だけだよ、肝心の当たりが悪い。

ほら、狙った場所に寸分違わず殴るなんて、フツー出来ねえだろ。俺はカンフー映画の主人公じゃないんだからな、ジャッキーみたくはいかねえさ。しかも、爆発の衝撃で結構、ずれるんだよ。そこまではどうしようもねえ、な」

巫山戯た、事を抜かすガキだ。

有卦キツキはそう毒気づこうとするも、気の抜けた音が口から出るだけなのを確認して、諦める。

「どうやら、もう挑発することも罵声を浴びせることも出来ないらしい。

「さて。さてさてさて？ そろそろ止めと行こうか、俺、よく余計なおおしゃべりをして相手を逃がすんだけどよ、今回はいいだろ。アంతだってもう抵抗どころか身動き一つ出来ないしな」

作りだした、その小さな金属製の杭を指に挟み、持ち直す。

「今度はきつかり殺してやるからよ。なんか言い残すことは？」

ゆったりとした動きで、しゃがみ込む赤霧。

「ああ、しゃべれねえか。うるせえのは嫌いだが寂しいもんだな、
アンタなら余計な命乞いもしないでさっさと覚悟を決めて、殺せっ
て言ってくれんだろ？」

顔を有卦キツキに近づけ。

その目を覗き込む。

「悪くない、まだ俺を殺したいって目だ。……そういうのは嫌いじ
やねえんだ。殺しあいつてのは殺して殺されてなんぼだろ？」

そうすることが当然のように語りかける、赤霧。

「そういう覚悟がない奴とはやりあいたくねえんだよ、興奮めする
からな」

少しでも、動けるのならその鼻を食いちぎり、唾でも吐きかけて
やるのにな。

有卦キツキはそう思いながら、赤霧を睨み付ける。

最後の一瞬まで目をつむるつもりはなかった。

「OKOK、思ったよりは悪くなかった……前座にしてはな。これ
で一人目だ……いや一匹目だな」

そういって、その手を改めて有卦キツキの左胸に添える。

にやにやと笑いながら、赤霧咲斗はもう一度必殺であるべき一撃
を穿つつもりで。

「んじゃ、一名様ごあんなうい。お先にど」

その時だった。

赤霧の目がこぼれ落ちるのではないのか、と言っ程に開かれ。突然、飛び退いてそのマントのような暗緑色のコートを翻し、楯としたのは。

飛び退いた赤霧を追うように現れたのは、真っ赤に猛る大蛇。

「くそっ」

全身を炎に包まれる赤霧は、そのマントで防ぎ。いともたやすく、炎を完全になぎ払った。

足音。

一歩一歩、近づいてくる足音。

有卦キツキはそちらを向こうとするが動けない。

（ 誰だ？）

覚えてはいた、遠野が呼ぶといった援軍。

しかし、期待はしていなかった。巫月が来るはずはない、八三を呼ぶのでなければ後は事務所に戦える人材はいない。

肝心な残りの一人は、今こうして自分と敵として対峙して……。

「おいおい、そのコートまで俺と同じ仕様かよ。狡くねえか？」

この声は……。

いや、そんな馬鹿な。

「まあ、血汐閑咲まで持ってんだから、それくらいの装備は当然か。そっちの方がコピーしやすいだろうし、このコートは別に俺の専売特許じゃねえしな」

視界の端に現れたのは。

暗緑色のコートと、それに合わせた帽子を被る学生服の男。

日本刀の姿をした魔剣、剥き身の『血汐閑咲』を持つ、もう登場あするわはずのない人物。

赤霧咲斗、その人だったのだから。

布石という名の置石（後書き）

色々、連載を抱えてはいますが、出来る限り頑張って執筆するの
で気長に待っていただけると嬉しいです。

仕返しという名の話し方（前書き）

更新待っててくださった方、ほんとうに申し訳ないです！
一ヶ月以上も長らくお待たせしてしまいました。

仕返しという名の話し方

12 .

ぼくは階段を上がっていく。

虚ろな窪みの双眼の、彼女の手を引つ張りながら。

さて、そろそろ援軍は到着しただろうか？

赤霧咲斗に絶対に対抗出来る現在唯一の、保有戦力。

……赤霧咲斗、本人。

たぶん、この時間だと学校にも行かずに事務所にいるんだろう。

最近はずっと夜出歩いていたようだから、日中は動きがあるまで休んでいるんだろうし。

この所、事務所で見るたびにソファでなぜか寝ていた赤霧先輩。その割に、日が暮れる頃にはいなかった。

もし、巫月所長が今までの事件を全てを把握していたとして。その情報を掴み、ぼくの前ではああいう風に装っていただけだとして、ぼくにはあえて情報を流さなかったのだとして。

当然、赤霧先輩がなにも知らない訳がない。むしろ、こんな事態真っ先に嗅ぎつけて、身動き出来ない巫月所長と共に色々やってたんだろう。

言われてみれば、そんな節がなかった訳じゃない。と言うより、あっさりしすぎていたのだ。あの二人が、こんな街全体どころか、世界でも有数の現象が起きているらしき状況で傍観？ ……ありえない。

ドッペルゲンガーがどんなに『ありえない現象』なのか、それを

説明したのは他ならぬ巫月所長だ。その希少性を知っているはずなのに、まったく興味がないなんておかしい。

「知的好奇心を失った時、人は死んでいるのと同義だ」

ぼくは呟く。

この言葉を言った、自分の上司のその顔を思いながら。

しかも、だ。

非生命体ノライフの活動が沈静化し、一区切り付いたタイミングで発生しだしたあるこの事件。

その事件と今回の件がなんの関連性もないと言えるのだろうか。

……次から次へとなんの関係ない事件が、こんな退屈な場所を舞台として起こるのが現実だと。

馬鹿を言っではいけない、それはどこのドラマだって話だ。ぼくたちは名探偵でもなんでもない、ぼくたちを中心に無条件で偶然事件が起こる訳はない。

……今までのこと全てが誰かが画策していた、と言う方が納得がいく。

だとしたら、巫月所長がなにもせずに傍観を選ぶのは不自然だ。

もちろん、これは飛躍した発想なのは自覚してる。

そんな誰かがいると決まった訳ではない、だが、その可能性があるかもしれない、と言う時点で情報を集めるべきなのだ。

先行きが不透明なら、それを知ろうとするのが巫月所長の役割だ。あの人は化け物と人間の境界線に立つ、調停者である人間なのだから。

それを前提に、さっきの赤霧先輩を見た上で考える。

そこから導き出されるもの、赤霧先輩が連日連夜出かけていた理由……それはこの事件の捜査か、あるいは自分の『二重身』を狩るためだったんじゃないか、と。

ぼくは後者の可能性が高いように思う、狩りの対象を探すには空いての活動時間に動くのが手っ取り早い。もちろん、それは相手のアドバンテージが高い危険行為であるわけだけど。

……と言っても、赤霧先輩は本当に『ドッペルゲンガー』に関してはあまり知らなかったんじゃないか。とは思う。あれは演技でもなんでもなく、純粋な反応。

だって、さすがにいくらなんでも、殺したら自分も死ぬって言うのに相手を殺そうなんて馬鹿な真似はしないだろう？

*

俺は目の前の自称、赤霧咲斗を観察する。

なるほど、武装は同じだろう。なぜかありえないことに血汐閑咲までも。

顔は、まあ世間に嫉妬されるほどに良い男だ。ただ惜しいな爽やかさが足りない。俺の次ぐらいの順位に甘んじておけ。

……って、容姿は別にいいんだよ。問題はその実力だ。

万全な状態でないとは言え、マジックアバター魔術の化身であるキツキがここまでやられたつーことは、本気でそこそこやれるんだろうな。

それも、喰らった技は炸裂杭打ち。バイルバンカーこんな趣味丸出しの馬鹿技やるのなんて俺くらいだよなあ。

本気で、こいつは俺のドッペルゲンガーなワケか？

「しかしそれも奇妙だな、自称二重身おれ」

刀の背で軽く、肩を二三度叩きながら俺は言う。問いかけると言うよりは、独り言を呟くように。

自分の思考を言語化し、整理する。

これはいつも俺が冷静であるためにやっていることだ。精神制御のための儀式。だが、冷静であることは、思考が冷却、ようつするに『冷めている』ことを意味しない。

自分自身を見失わず、常に自分であること。すなわち、『覚めている』ってことだ。

「そもそも自分と同じ存在と言うがな、そんなものはありえないだろ。人に限らず、全く同じ物体が座標の違う場所に同時にあるなんてのは絶対的な矛盾だ。前提が論理破綻している。なぜなら、別の身体を持ってしまった時点でそれは異なる時を刻む別人だからだ」

時間は相対的であり、絶対ではない。

その個体の現在位置にすら影響される程に時間ってのは曖昧な存在だ。それも宇宙と地球、なんて規模どころかこの地球のどこにいるか程度のレベルで、だ。何をどうつくろったとところで、環境や個人差、身体的精神的状態ってのも含めればそれぞれの身体が老いる速度はけして同時になりえない。

同じ人間は同時に複数存在できない、存在した時点で別のモノなのだ。

仮にこのドッペルゲンガーの現象が魔術によるものだとしたら、それは成立不可能なモノになる。破綻した魔術は構築した瞬間に崩壊するはずだからだ。

崩壊しながら再構築され続ける魔術式はあっても、崩壊自体は避けられない。

「なら、お前はなんなんだろうな、自称二重身^{おれ}」

俺はもう一人の赤霧^{あせ}咲斗に観察するように、あるいはただのいしころを見るように、足元から頭のとっぺんまで見定める。

それに対して帰ってくるのは挑戦的な眼光。

へえ、こいつ、俺に喧嘩売ってんのか。たかだか、俺から分化しただけの存在の癖して？

……嘗めてんな、マジで。

いいぜ、別に。俺はよ。

同じ条件で戦えるってなら、楽しくやれるだろうさ。

「まあ、アレだぜ。五分と五分の戦いってのはまともなやりやあ滅多にない話だぜ、現実的にはそんな戦闘は存在しない。なあ、ドッペルゲンガーあ？」

俺はそう言いながら、敵に、俺と同じ顔で全く同じ格好をしたヤツに近づく。

俺のドッペルゲンガーと言う言葉にわずかに眼を見開く、キツキ。

おいおい、今気付いたって言うのかよ。ドッペルゲンガーってこと？

いや、俺なんか最近知ったんだけどよ、その単語。

もし、俺と彼奴に違いがあるとすりゃ、俺はコートに合わせた色の帽子を被ってるってトコと、俺はまったくの無傷で相手はそうでもないってトコだ。

俺は表情は勝手に笑みを浮かべ始める。

……おもしろいな、目の前のこいつは消費した血液を回復できていない。なのにも関わらず、俺自身はほとんど血液を消費した状態

にない。

こうなるとドッペルゲンガーが保有するダメージ共有の定義に、血液は含まれていないことになる。

ふむ。なら、失血死は狙えるな。

「でも、めんどいんでその首跳ねるけどな」

地面に寝っ転がってるキツキからの視線がきつくなる。

ああ、コレ。見たことある眼だ、こいつ馬鹿か、みたいな眼だ。なぜわかるかって？ よくこういう目で見られたからだよ！

「なんだよ、キツキ。ここまでされてんだぜ？ こいつ生かしてけないだろ、今すぐ殺そうぜ？」

「……………っ」
「はあ？ どう考えてもオレの方が強いだろうが」

「……………っ！？」
「いやいや、俺。もっといい男だし。こいつより」

「……………？」
「眼悪いにもほどがあるぜ、話にならねえな」

「……………え」
「いいからもう黙れ、さっさとこいつ殺してやるから」
「……………っ」

そんな俺たちの会話を信じられないものをみるかのように、傍観する目の前の二重身。

言ってみれば、絶句って感じの表情だ。

俺はまず浮かべねえな。いや、たぶん。……実は自分でも知らねえけど。

自称二重身は口を開く。

「いやいや。お前等、話になるならないって。そもそもそれで話成り立ってんの？」
「は？」

なに、ぼつっ、見ているかと思えば、なに言ってるんだ？

「見てわからねえのか？」

「わかるかつ！」

「どう見ても会話してるだろうが」

「片方、まともに発声してないけどな！」

「お前、会話が発声だけで成り立つとでも？　　と云うか、言語を必ず必要とするとも思ってるの？」

例えば、日本語が通じない人間相手でもその気になれば会話が出るだろう。言葉の通じない相手でも、ジェスチャーなどがあるし、声真似や指さしで動物や作業を示すことも出来る。表情、雰囲気、時間や場所などと言った状況、そのすべてが会話のための材料だ。

ジェスチャーが会話にならないと云う奴は、別の世界に帰れ、現世じゃやってけねえよお前。つまり『あの世』に帰れ。一言で云うと死ぬ。手話や手旗信号、モールスを全否定か、お前は？

なら、いつそ間に電波やら電気やら挟む現在の通信方法すべてを否定しろ、たわけ。発声ですら、空気振動を媒体にした間接手段だろうが。

てか、言葉が意思疎通のコミュニケーションツールにしかならぬ奴は、みんな死ぬばいと思う。そんなお前は、たぶん、他の奴と気持ち共有できねえよ。一生。

と云うか、人類は誕生から人間外のものと対話するべく、憑依や解釈なんてものをを用いて自分より偉大な存在から知識を得ようとしてきたんだぞ？

自分たちがその先祖の末裔だつて自覚しろ、自称現実主義者。一言で言うと、死に至るほどの馬鹿。つか、死に至れ馬鹿。

「と言うわけで、お前は死ぬ」

「さつきから死ぬ死ねって。俺を殺そうとしかしてねえよな、お前？」

「当たり前だろうが、自分と似たような顔してる奴はおおよそ気に入らん。つか、俺の人生パクンな。そして、その血汐閑咲を俺に寄せ。……え？ なにそれ、買ったの？ 売ってんの？ それとも全部、自分で作ったの？ コスプレかお前、マジ死ぬばいのに」

目の前の自称二重身おれは、何を言われているのか即座に理解して、嫌悪感いっぱい顔色をゆがめた。

なるほど、理解力はあるらしい。

「チツ、てめえみたいのが元々俺だと思つとマジでむかついてくるぜ」

「うっせ、お前が俺の訳ねえだろうが。俺の方が断然いい男だし？」

「顔は同じだ、バカ」

「は？ なに言つてんの、お前」

マジ、くだらない。この程度の奴と俺は戦わなきゃならんのか？

こつこつ時、フツーは中身が違うと言つのだらうが、そんな小さい些細なレベルじゃない。

「どう考えても、お前より断然俺の方が格好いい生き方してるだらうが」

俺は胸を張り誇る。

例え、数多くの俺と言う可能性があつたとしても。それだけ多く

の可能性があり、それがシャドウとして秘められているのだとしても。

断言してみせる、今いる俺がもつとも最高の生き方をしている、とな。

「てめえは俺じゃねえ、俺のしたい欲に食らいついて生まれ出たんだとしても。俺の持てなかつた可能性を秘めているのだとしても、もはやそれは俺じゃねえ。俺のなるかもしれないなかつた可能性？ そんなもん、この世にいる全員がそうだろうが！」

俺の殺してきた奴。

その全員が俺のたどるかもしれないなかつた末路だ、俺はそのすべてを背負つて今ここにいる。

強い奴も弱い奴も、俺がそつちの方の才能を持つて努力したらなるかもしれないなかつた可能性だ。頭のいい奴も悪い奴も、性格のいい奴も、悪い奴も。モテる奴もモテない奴も、俺のそうなるかもしれないなかつた他人という名の可能性だ。

「だけどな、そんなもん関係ねえ！俺は『赤霧咲斗』、俺が『赤霧咲斗』！ てめえは俺と同じ身体と中身と能力を持った、別の可能性と生き方の同姓同名の別人だっ！」

俺はそう言つて日本刀の姿をした魔剣、血汐閑咲を振りかざし、

目の前の相手に叩きつける。

鮮血沸騰オーバーブラッドを併用し、身体能力を遙かに向上させて。

全身からほとばしる、赤い霧。視界を一気に染色する真つ赤な色。俺の視界は完全に赤に染まる、その世界のすべてが……。

「なっ！ お前えっ！」

奴は硬化した両腕を交差させて、魔剣を受け流す。

全身を背後にそらし、掛かる怪力を可能な限り無効化するために、そのまま身体を回転させる形で放たれる蹴り、それは俺の頬をかすめるもダメージにはならない。それでもわずかな怯む隙となり、着地と同時に放たれる斬撃を許す形になる。

許すと言つても、斬撃を放つことそのものだけだ。まともに受けてやる気はまったくくない。

俺はその放たれた刀の横っ腹を、膝をたたきつけて跳ね上げた。

「くっ」

「読みやすいんだよ、馬鹿が」

跳ね上げられた刃が軌道を逸らし俺の肩の肉を削ぐ、かと思いきや、防刃を兼ねるコートが打撃へと変換。違和感はあるものの、戦闘に支障はない。また痛みもない、この状態で痛みという危険信号は邪魔であるために感覚から完全に除外している。

俺はそのまま接近、刀を持つ人間にとっては動きづらいことこの上ない、肉薄する間合いまで詰め寄り。

そのまま突進するように、硬化した肘をその左胸にぶち当てた。

「がはっ」

奴の胸から、バキバキツと言う気味のいい音が響くのと同時に、俺の胸からも似たような音が響き出す。

そのまま奴は無様に転げまった。しかし、それでもなお魔剣をその手から離すことはない。

当然だ、俺との戦いでその剣を手から離せば、勝つどころか逃げられるはずもない。

「おい、立てよ。俺はお前と違って寝てる奴を殺して楽しむ趣味は

ねえよ、さっさと戦え」

さて、コイツは俺のどんな可能性なんだ？

技量そのものはさっきの攻防からして、実質的に差はねえな。当たり前前の話だが、より上の能力を持った自分って訳じゃなさそうだ。

まあ、俺の一番やりやすい動きをしてくるんで読みやすすぎる。

その上、疲労や血液量の関係で俺が上だからこそ、こうして圧倒出来る訳なんだが。

「……なんだ、そりゃ？」

そいつはなんとか立ち上がりながらも、俺に問う。

「お前、見たろ？ わかつたろ？ 俺に今与えたダメージはそっくりそのまま、お前も喰らってるはずだ。アバラが何本かいかれてるだろうが！」

「それがどうした。最初から承知だ」

「承知だと？」

「当たり前だろうが、てめえがキツキとの戦闘で喰らったダメージ。俺も受けてんだ、馬鹿！ 拳は砕けるは、全身の筋肉は死ぬわで、あやうく激痛の余りにショック死するところだったの」

遠野のメールが届いてから、俺がどんなに笑えない目にあつたかわかってんのか。

意味不明だったぞ、なんでこんなに死にそうなッてんだ俺、ってな。

その辺の地面で突然、身体のうちこちから出血かつ複雑骨折しながら、悶える人間が客観的にどう見えてるのかなんて考える余裕すらなかったわ。

出血は即、反射的に止めたけどな。そこは慣れてるんでもう無意

識に出来るレベルだ。

「まあ、アレだ。咄嗟に魔薬使って、強制的に狂的覚醒入って、痛みを解いたから生きてるけどな。フツの人間なら耐えきれなくてそのまま死ぬっつ。そんな理由で俺死んでみ？ お前もシヨック死で死ぬのかって話だっ！」

そりゃ殺意に目覚めるだろ、俺。

いきなりそんなことになったら犯人殺していいレベルだろ、マジで。

「……ああ、そういや、お前が回復すると連動して俺も回復するのかな？ 勝手に身体の傷治り出すから何事かと思った。アレか？ 身体の損傷度だけは共有してるってトコか？」

どこからどこまでが連動してんのか、未だにわかんねえけどよ、ただ、俺が硬化や身体強化使ってもお前がされてないからな、解釈的にはそんなもんだろ、たぶん」

フーことは、俺が今、コイツの首はねたら俺の首も飛ぶのかね。

……微妙なトコだな、仮にそうならその後、俺もわずかな間は生きてるだろうから速効でくっつけたら俺は無事か？ でも、したらアイツも治るのか？ それとも術の対象がいったん死んだ時点で術が解除なのか……いや、そもそも魔術なのか、この現象？

……うん、不明だな。

「ま、どっちでもいいや。どっちにしても俺はお前殺すし、とりあえず」

「……つくづくイカレてやがるな、俺」

「今さらだろ。自称二重身」

「だな、俺がイカレてるのは今始まった事じゃない」

自称二重身おれは、くつくつくと肩を震わせながら小さく笑った。目が変わる、心地良い殺意が籠もった目。ヤツは俺と全く同じ、相対するが故に反対に見える形に魔剣を構える。正式な剣術でない、同じ我流の構えで。

……これでようやく俺を殺す気で来る訳だ。

「そつだ、お前がなんであるかはどうでもいい。お前が俺の可能性シャドウかどうか、なんて知った事じゃない。お前がいる理由も目的すらもどうでもいい。重要なのは……」

「殺し合って面白いかどうかだろ？ 赤霧咲斗。獵獣にとって狩りは食事、つまり生活の一環だが、狩人にとっては……必ずしもそうじゃねえ」

「わかつてんじゃねえか、自称二重身おれ」

武装や術式が同じ、っても異流の鮮血魔術師である俺達が、現在保有する血液量に差があるなんてのは実際かなりのハンディだよな。いや、本来、鮮血魔術師なんて名前すらおこがましい。血液を付着させて、魔剣とこの身体に繋がりを得、その後直接血液を消費して魔術を扱う。亜流どころか、異流の鮮血魔術。人成らざる身、禍ま血がちを持つからこそ使える異能。

フツの鮮血魔術師と違って、技量よりも血液量がその術の効果を左右する。……それは向こうもわかってやがる。

……いやな、そもそも鮮血魔術なんて扱う魔術師がフツじゃな
いって突っ込みは、スルーだけだな。

「ならば……やる手は一つだろ」

俺の言葉を合図にしたかのように、二重身は接近戦は不利と見て

距離をとる。その上で魔術をあえて紡がずに攻撃を仕掛けてきた。それはそうだろう、魔術を紡ぐ間に俺は近接して高速戦を仕掛ける。魔術を一切使わず、鮮血沸騰オーバーフラットを使った上で連撃を叩き込み、どう足掻いても確実に斬殺するだろう。

俺の予測通りの決断だが、それは最善の行動だった。それはその手に握った、小さな金属状の杭を一本投合するだけの攻撃。

ただし、その狙いは俺ではない。

キツキだ。

「そう来るよなっ、やっぱ!」

俺はすぐに斜線上、二重身とキツキへ間に入り、その杭を左手で弾く。魔剣で弾けば、ヤツは必ず攻撃を仕掛けてくる。なにせ、相手は俺と同格の相手だ。油断は出来ない。

その間に、魔術を紡ぐ二重身。それを防ぐために接近するも、キツキへの斜線をふさぐように意識しなければならなかったため、防御や回避もままならない状態と言う無防備な直進。

ヤツはあえて杭を一本づつ投合していた、まとめて強化された膂力で投げれば、俺に手傷を負わせられるだろうに。時間を稼ぐために、俺の一番嫌なポイント、呼吸を計って撃ち込んでくる。

二重身は複数の杭を既に錬成し隠し持っている。それがいくつかなのかもわからないために、どうしても俺の動きは消極的なものにならざるを得ない。しかし、かといってこの状態で相手に接近しなければ、キツキに近づけさせないように牽制が出来ない上、俺が消耗戦を強いられることになる。

……そう、俺はたったそれだけの手で追い詰められていた。

「狡いだろ、お前っ」

相手は答えない。まあ、だろつな、と思う。

俺の言ったのは戯れ言だ、実際返答を期待はしていなかったし。これは狩りだ。決闘じゃない、俺は戦士でなく決闘者でなく兵士でなく、狩り手。ならば、相手の弱点を突くのはなんら卑怯でないだろつ。

俺も相手に護るべき相手がいたら、人質にするなりなんなりするだろつ。キツキを殺すなら日中を狙うに違いない。可能なら、疲弊した状態で。

だが、相手が俺と同じ思考、狩人としての目線にいるのなら……。

「っ！」

またも放たれた杭に気づき。

同じように、左腕で弾く。それは自分の中での最善最速の動き。機械化されたパターン。

しかし、同じ事をされたのではなかった。

飛来する杭の陰に隠された、もう一つの杭。ご丁寧に、より目立たない色合いに調整された状態で。

……性格悪過ぎんだろ、お前っ！ 上手くいつている手を変える必要はない、そんな寝言が命取りなのは俺は知ってたはずなのにっ！？

反射的に身体を逸らそうとして、それを止める。裏にはキツキがいる。いつも通り、勘や反射神経で動くことは許されない。

自分の冷静な思考と、本能的な動作が相反した時、人間は停止するしかない。それは大きすぎる隙だった。

杭はよりにもよって右肩に刺さる、それは計算されたが故に。ともに杭が爆ぜた。砕ける肩の骨と筋肉。神経までもが確実に傷つけられ、俺は衝撃で魔剣を手から離れる。傷を回復させようにも、入

り込んだ破片によって阻害。

その間に咳かれる、術式。唱えずとも紡がれる、しかし、精神集中をより強固なものにするべく詠唱。

「源は魔血解放、役は属性反転・極大解釈・霊獣使役……果は炎蛇サラマ使役」
ンドラ

二重身は左手に握りしめられた魔剣を使い、術を構築。魔剣から現れる、燃えさかる炎蛇を再び使役し始めた。それは俺が一番最初にソイツにたたき込んでやろうとした魔術。

おそらくやられた仕返しのもりだろう、間違いない。なにせ顔が陰険そうだ。

迫り来る大蛇、落とされた魔剣。前回の仕返し。

……わかる、コレでアイツと同じようにコートで防げば俺は死ぬ。いや、殺さないまでも戦闘不能だろう。

なにせ、アイツは俺だ。俺と戦い方が同じなら戦術の組み立て方はアレに近い。

キツネがり
詰め将棋。

手からこぼれ落下していく魔剣を、地面すれすれで蹴り上げる。

空中で回転する刃。それを術を紡ぐのと同時に、袖に仕込んでおいた呪紙を持ち左手で触れ、術式を発動。仕込んだうちの一枚に呪紙は燃え尽きた、触れた勢いでさらに回転を掛け宙に続けて浮かし続ける。

無詠唱で即座に扱う魔術。源は魔血解放、役は属性反転・拡大解

釈・従伏退散。簡易の限定的な耐火魔術、アンチフレイム焔薙ぎの魔術。

ファイアレジスト

炎を扱う魔術師である以上、耐火魔術は基本中の基本。ではあるが、それでも単純に炎そのものを扱えない俺には難易度が高い。だ

からこそ、俺のコートは素材としても魔術的にも耐火に優れているものを使っているのだ。

実際に魔術を使用せねばならない事態では、簡易な魔術に限られるが、予め術をある程度あえて未完成のまま構築しておき、札や紙などに描く。こうして回数が制限される使い捨ての道具ではあるが様々な応用が利く状態にしておくのだ。

そのうち、一枚を焼き捨てる形で俺は術を構築する。

炎薙ぎの術式を発動させた宙を舞う刃は、迫り来る巨大な炎蛇をいとも簡単にバラバラに切り裂く。その回転を続ける魔剣に対し、左腕を翻す形で、仕込んでいたもう一枚の呪紙を掴んだままの形で握る。

入念に防備され、決定的なダメージを与えるのに適さない炎。回避する手段が幾重にも想定されていることが互いにわかっているはずの攻撃手段。

では、なぜ火炎で攻撃を仕掛けたか。簡単な話だ。

放たれた火炎は攻撃ではなく、目くらまし。

炎の大蛇がかき消され、現れるのは投合されたであろう飛来する三本の小さな杭。

そして、それに追いつかんほどの速度で迫る、二重身。

二重どころか、三重の仕留めるための一手。

俺の組み立てる戦術は予測出来ない奇策じゃない。予測されたところでどうしようもない、相手を追い込むための追い詰め続ける次の一手のための攻撃の連続。最後の最後に仕留めるタイミングを計るだけの作業。

それが狩人の戦い方にして……娯楽までの繋ぎ。

必殺技なんて狩りにはいらぬ。炸裂杭撃ちなんてのは、勝ちが決まってからの遊びだ。あれが決まる段階なら、別に魔剣で串刺し

パイルバンカー

にすればいいだけの話。

そう、俺にとって殺し方なんてのはもう遊べる段階のことで。狩りってのはそこまで追い込むまでの戦術と手段をいくつ用意出来て、どんな順番でどう組み合わせるかってことでしかない。

どう殺すか、どう遊ぶか、それを楽しみ凶器に狂気に乗せ、その命の重さを量る。仕留めるまでの苦勞が多ければ多い程、殺す時、嬉しい。苦勞が報われるその一瞬のための努力と作業、思考と苦心の積み重ね。

きつと、なんにでも同じ事が言えるのだろう。仕事でも遊びでも趣味でも。成功や完成した瞬間のために頑張っているとも言えるし、それまでの苦勞が面白いとも言える。俺の場合、それが狩りだっただけだ。

それを実際にやられてみると、ま、笑えないんだけどな。自分との殺しあい、おもしろいかと思いきやつまらない、どう殺しに来てどう殺しに行けばいいのか、まるわかりだ。

「意外と退屈だな……二重身おれ」

「そうだな、俺。だから、さっさと終わらそう」

言葉を交わすことの出来ないはずのわずかな時間。

確かに俺達は意思を疎通出来た、言葉なんて必要なく。刃と刃のぶつかり合いによって。

感覚で判断、今飛んできている杭に炸裂の仕掛けはない。アレはどうやるのか、今の俺には思いつかないが、後で考えれば分かる程度のネタだろう。それでも、おおよそ手間の掛かる仕込みなのは分かる。

右肩が上がらないため、腕一本で出来る対応を強いられる。対応は困難、俺は武道に関しても魔術に関しても天才ではない。ただ異

能に恵まれただけの凡人だ。

では、どうするか。

喰らおう。その攻撃。

呪紙が燃え尽き、同時に思考が加速する、冷たいなにかが頭を流れる。なによりも熱い猛りが全身を支配する。

そう、この世界は……真紅だ。なによりも紅く美しい、それが世界だ。これが俺の生きる戦いと狩りの世界だ。

……俺はおよその目測で杭が当る位置を予測、瞬間的に硬化するかどうか、しかし、当然、それは万全なモノになり得えない、強化された臂力による投合を防ぐ程の強度は生まれない。その案を棄却、次善の策を採用。

きつちり、三発が直撃。ダメージを受けるのを前提に、全身の筋力を増加し弾力性を高めた上で、損傷部位の骨の強度を増加。

ぎりぎり戦闘に支障はない程度に抑える事に成功したと判断し、二重身を迎え撃つ。

視界に入る事実から情報修正。現状の状況は悪化。

高速での思考は相手も行っているだろう、判断は向こうも正確だ。さらに相手の状態が認識よりも良いコンディションにある様子、鮮血沸騰を併用しての身体強化がされている上に、右肩が回復されている。

相手の肩には金属の破片が存在しない、だが一方こちらには破片が刺さったままだ。この状態で相手が回復した場合はこちらが回復が適用されないと言う理屈なのだろう。

よつするに金属の杭での攻撃を多用したのは、相手は回復出来ないが自分は回復出来る、と言う状態を作るための布石。恐らく、その上で増血剤の服用をし持久戦に持ち込んで、短期戦で決めようとするであろう俺をいなして、無力化しようと考えたのだろう。

「まったく……いやらしいことこの上ないな！」

俺は相手の一撃を剣で受け止める。斬ると言うよりは、激突させられる血汐閑咲。さらにそれを全く同じく血汐閑咲で受け止める。

銀色に輝く美しき凶器は、今の俺には紅い血に染まるような刃に見える。

刀匠の長い年月を経て、積み重ねられた歴史ある技の結集。計算され尽くした数百万の魔術の結晶。それがへし折れるんじゃないか、と言う程の衝撃。

定跡としては、背後にその攻撃を受け流すことでその力を霧散させ、押し負けや身体へのダメージを減らしたいところだ。

だが、残念ながら背後には護るべき、有卦キツキがいる。それは不可能だ。

……と、思っているだろうなあ。

俺は避ける、素直に。

力を抜きすぎない程度に、適度に力の流れに任せる。歓喜の鳴き声と共に軋み、火花を咲かす刃達。

見惚れてしまう程に、俺の愛刀達は華々しかった。

それが俺の頬を掠めていく、その刃が肉を攫っていく熱さすら愛おしい。交差する形で、二重身を斬りつける俺の握る魔剣。予測外の動きに、まともに胴体に入っていく刃。

硬化と対怪物クラスの防刃繊維のコート、その相互作用によって切り裂かれることはない。それでも十分に、人を超えた膂力による一撃は斬撃ではなく衝撃という形で、ダメージを与える。

それでも、なお、二重身を行動不能に追いやるには至らず、俺はとうとう積み重なるダメージによって、それを追うことが出来ない

までになった。キツキに迫る、二重身を止められない。

このまま斬り合えば、勝負は未だわからない。全体的な血液の有量としては、依然として俺の方がかなり上だ。損傷は多くとも、使えるエネルギーの総量が大きい以上、逆転はありえる。

撃ち込まれた杭は、俺の作りだしたモノ。それを分解する術もまた、俺は持っているのだから。単純にバラバラとなった細かい破片を、戦闘中という状況では瞬時に取り除くことが出来ないだけのこと。

こういった不確定な状況で俺の取る手は、二つのうちどちらか。確実に勝てるように戦術を組み立て直すか、それが見いだせないなら逃げるかだ。

ここで俺が取る戦術は、まずキツキを人質にする。そして、俺を殺すか、俺が追ってこれない程度にダメージを負わせて逃げるか。この場合、どちらにしてもキツキは殺される。

やばいよな、うん。この状況やばいだろ？

じゃ、お前はこう疑問に持つはずだ。

なぜ、赤霧^{おれ}咲斗がこんな下手を打った、とな。

はい、残念。お前が真実に気付くのは全てを失った後だよ、てめえの敗因は喋りすぎだ、馬鹿。

「ぐげややあああつ」

突然、顔面にとつともない衝撃を受けたような気がして、悲鳴を上げながら地面を転げ回り悶える。幸い、狂的^{トランス}覚醒によって痛みはないが、鼻の音が砕け散ったような音がした。おそらく、頬の骨まで同時にイカれたと思われる。

なんで？ 不思議？

やべえ、鼻血凄い勢いで止まんねえ。涙も鼻水も全然吹き出すよ

うに止まんねえ、なにが起きてんの？ なに、どうした俺？ これ
ってすげえミステリー。

……いや、原因わかってんだけどな。

悶える俺が空を仰ぐようにして、顔を押しさえしていると、空を飛
ぶようにして暗緑色のコートを羽織った誰かが、マントをなびかせ
るようにしてスクリューしながらぶっ飛んだ。

残念ながら、それは俺だった。

……これってマジ、ミステリーー。

いや、なにが起きてんのか、すげえわかってんだけどな。ただ認
めたくないだけでな。

なにかが地面を転げ回った拳げ匂、なにかぶつかる音がした。同
時に俺の頭蓋骨が軋んだ。ひびが入ってなければ幸いだ。

「って、なに顔狙ってんだよ！」

俺は起き上がる……いや、立てなかった。

自分に妥協、這うように見上げる。

もちろん、そこにいたのはマジックアバター魔術の化身こと。

ぎりぎりの状態で、なんとか復活した有卦キツキその人（？）だ
った。

それはそれはもう、輝くように獯猛な笑みで牙を剥き出しにて魅
せ、見せて。

露出の多くなった、結果ややセクシーになってしまった普段着を
身に纏い、殺意満々に、スタボ口雑巾のようになった俺達を見下ろ
していた。

「とりあえず、どちらでもいいからそのムカツク面張ったおそうと

思ってたっ」

「いやいやいや、どっちを殺す気だよ、お前っ！」

「なに言ってるんのっ、赤ちゃんっ^{ベイベー}。どっちでもいいじゃんっ。どっちでもいいから攻撃したら死ぬでしょっ？」

「……だれがベイベーだよ」

相当、怒ってるね？ コイツ。

いやいや、今まで俺お前のこと護ってたんだよ。いや、殺そうとしたのも俺だろうけどさ、この状況見たらみんな混乱するじゃねえかよ。

この状況、かなりすごくやばいくらいにミステリー。

……てか、俺死ぬんじゃね？

*

「えーと、ここは？」

ぼくは辺りを見回した。

恐らく、フツー大神さんの部屋に入ったはず……。

なんだけど、周囲はどこまでも黒くまっ暗な空間。

それは、手を繋いだ状態で背後に続く、大神さんの双眼にもよく似ている。まあ、双眼というかただ窪みなんだけどね。

奇妙なことに、灯りの存在しない暗闇の中にいるはずなのに。自分の姿や、背後の大神さん。

そして、目の前にいる大神アスカと同じ姿をした彼女の姿ははっきりと見えるのだ。

……不思議だねえ。

「あなたはもうここから出られない」

彼女はぼくにそう告げる。

ぼくの意味など、関係ないと言うように。

……ちよつと気に入らないかな。

「えーと、ぼくの質問に答えてはくれないの？」

「あなたの目的はわたしをその会話に組み込んで操ることでしょうか？ 残念だけど、あなたを残してわたしは消えるわ。すこし、忙しいから」

「それは確かに残念、ぼく君と話すの好きなのに」

「わたしも残念……全てが終わってからゆつくりとね」

本気でぼくと話す気などないのだろう。

ゆつくりとその闇に解けるようにして消えていく、彼女。

しかし、ぼくは怖くはない。なにせ独りぼっちではないからね。

ぼくの様子を見て、なにを思ったのか怪訝そうな顔をしたけれども、結局、それ以上口を開かずに消えていった。

ふむ、どうしたものかな。

とりあえず、アレだね。

「彼女、後ろの大神さんに気付いてなかったっばいなあ？」

これはおもしろい発見かもしれない、なるほどなるほど。

ぼくはますますその握っている手が、頼もしくなる。色白で華奢なその手はどう考えても、ぼくを護ってくれるものではないんだけど。

そんなことはどうでもいい、女の子の手を握っている男は強くないやね。せめて気持ちぐらいはさ。

「やて……」

ぼくは周囲を見渡す、完全なる漆黒の世界。

声の響きから、部屋の広さがわかるかと思いきや、そう言った概念が通用する空間ではなさそうだ。音は間違いなく出ているのだが、響いていると言つて感覚が気薄。かといって音がこもっている訳でもない。

こりゃあ、アレだね。例えるなら……。

……うん、それはそれとして。

「 辺りに目印になるもの無し」

では、助けは呼べるかな？

はい、無理です。

携帯の電源、なぜか入ってません。

充電はバツチりだったはずなので、壊れてるんじゃないかなければ純粹にここじゃ使えないんだね。ここに入る前に、赤霧先輩に連絡したしね。高確率でここじゃ使えないと判断。

あー、これじゃ巫月所長呼べないや。ま、いいか。電話したら、まずなぜ危険なことしてるって怒られそうだし。怒られなくなかったから、電話したくなかったんだよね。

うん、非常事態に電話して上手くウヤマヤにしようかと思ったのに。惜しいっ。

ぼくは鞆を漁る。

使えるものはいくつかあった。異空間を脱出出来るような便利アイテムはないけど、異空間に異常事態起こせるぐらいの禍々しい呪

物はいくつかあったはず。上手く使えば、この空間を悪霊でいっぱいにして、空間の持ち主の制御下から突き放すくらいは余裕だろう。なんだったら、キツキさんの牙、また刺せばいいや。助けてくれないかもしれないけど、巫月所長に報告くらいはしてくれらさう。……ありゃ？

「鞆の中身空っぽだねえ？」

中身、どこだ？

全部、鞆の中から出すとやばいものばつかなのに。あえて言うなら、某ホラー映画のビデオテープが触るだけで呪い発動するぐらいのレベルで。

即死しないしね、せいぜい一週間以内に死ぬ程度の呪いだから、そこまでひどくないんだけどね。治すのも簡単だし、きちんと準備してやれば誰かに代わりに呪われてもらえばいいだけって言う程度の呪いだから。

ぼくは空っぽの鞆を空いている手で振り回しながら、考える。

この状況、どう解釈すればいい？ どう考えるべき？

希望や絶望なんてわかりやすいもの、少なくともここには無いよ
うだった。

仕返しという名の話し方（後書き）

基本的に登場人物頭おかしいかも、と思ったりしています。

身近にいたら、反応できないレベル通り越して、認識を拒否するレベルですね。

執筆、お待たせしないように頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2152o/>

銀の弾丸なんてない ~ 紅月編

2011年6月2日13時15分発行